

新薬師寺旧境内

—奈良教育大学構内遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書—

2012

奈良教育大学

序

奈良教育大学には附属小学校及び附属中学校に特別支援学級があり、1960年代に大学構内の東北隅に両校の特別支援学級校舎（木造平屋建）が建設されました。同老朽化に伴って改築することとなり、2008年度に発掘調査を実施しました。

奈良教育大学は1958年に登大路町から米駐留軍キャンプC地区であった現在地に移転しましたが、同地区は1908年に設置された歩兵第53連隊跡地でもあります。大学構内の北西には2002、2003年度に発掘調査された占備塚古墳が位置しています。遺跡分布図で大学敷地のほぼ東半分が8世紀に建立された新薬師寺の旧境内寺域とされていることから、発掘調査によって新薬師寺の遺構が検出される可能性が推定されました。

2008年10月の調査で、基壇外装基底部の延石が確認され、大型基壇建物の存在が明らかになりました。その後も基壇建物の南側において小規模な発掘調査を続けてきましたが、検出された遺構や瓦等の出上遺物から、大型基壇建物は天平19年（747）に聖武天皇の病氣平癒のために光明皇后が建立した新薬師寺の金堂と推定されました。

新薬師寺に関する重要な遺構が検出されたこともあって、特別支援学級校舎は予定地から約100m南南西の位置に建築することとし、大型基壇等の遺構は埋め戻して現地で保存することにいたしました。

新薬師寺には金堂の他に塔や中門等どのような建築物があったのか、回廊の形態はどうであったか、寺域はどこまでの拡がりがあるのか等々、解明されていない事柄が多く残っていますが、このたびを一区切りとして、新薬師寺旧境内調査の記録を報告書として刊行することにいたしました。今後とも機会があれば遺跡の調査を継続するとともに、その成果を後世に伝えていく所存です。

調査および整理にあたって、大型基壇建物の比定、建物の推定復元等々について貴重なご助言をいただきました先生方、その他関係各位に心から敬意と感謝を申し上げる次第です。

2012年3月

国立大学法人

奈良教育大学長 長友恒人

例 言

1. 本書は、奈良県奈良市高畑町に所在する国立大学法人奈良教育大学構内遺跡（新薬師寺旧境内）の発掘調査報告書である。
2. 本書は、2008年度に行った調査の整理経費である遺構学術調査プロジェクト経費を用いて作成した。都合2008年度から2011年までに奈良教育大学が実施した、構内遺跡発掘調査の記録を収めている。
3. 現地調査及び整理作業は、金原正明、西村匡広・島軒満（㈱アコード）が担当し、青木智史（奈良教育大学）、鶴貞美（奈良教育大学大学院生）、千葉瑞穂・三木香緒里（奈良教育大学生）、西野浩一（天理大学学生）、㈱地域文化財が補助した。また現地調査及び整備作業に際しては、本学学生、天理大学、奈良大学、大阪大谷大学などの学生・卒業生諸氏の協力を得た。
4. 遺構については2008年度から2011年調査を取録したが、遺物については主に2008年度出土遺物を中心に掲載した。また2009年度から2011年調査を整理した都合から、古代の遺構・遺物を掲載した。
5. 本書にかかる遺構・遺物写真は航空撮影を除いて各年度の調査担当者が撮影した。
6. 本書にかかる図面・図版作成は、金原、青木、島軒、西村、鶴、千葉、三木が分担して行い、西山美千代、大森容子がこれを補助した。
7. 本書の執筆は、金原、青木、西村、島軒、鶴が分担して行った。編集は金原、島軒、西村が行った。執筆分担は本文目次および文末に明記している。
8. 出土遺物・図面・写真などの全ての記録資料については、奈良教育大学にて一括保管されている。広く利用されることを希望する。
9. 調査及び報告書作成にあたっては、下記の方々・機関から御指導、御助言、御支援を賜った。記して感謝いたします。

新薬師寺、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所、奈良国立博物館、奈良県立橿原考古学研究所、奈良県教育委員会、奈良市教育委員会、財団法人元興寺文化財研究所、奈良女子大学附属図書館、天理大学、奈良大学、西山要一、鈴木嘉吉、宮本長二郎、坪井清足、猪熊兼勝、菅谷文則、森郁夫、上原真人、山岸公基、大山明彦、吉川真司、狭川真一、田辺征夫、和田晴吾、松村恵司、山本忠尚、坪之内徹、中村浩、清水重敦、箱崎和久、中島正、竹谷俊夫、小田木治太郎、宮原晋一、三好美穂、川上洋一、原田憲二郎、平松良雄、清水昭博、岩戸品子、佐藤亜聖、中村毅、大倭殖産株式会社、㈱伊田重機、安西工業㈱、㈱アート、NHKブラネット近畿、㈱アコード、渡辺建設設計事務所、林設備工業㈱

（順不同・所属敬称略）

凡 例

1. 本書における遺跡の地区割り・方位は、国土地院第Ⅵ座標系（世界測地系）の座標北を基準とし設定を行った。標高は東京湾平均海水面（T.P.）で表示した。
2. 本書で使用した地図のうち調査区位置図は、奈良市発行の大和都市計画図（1/2,500）を縮小・加筆して使用した。遺跡分布図は奈良市発行の条坊復元図を縮小・加筆して使用した。
本書で使用した表紙と第59図の「東大寺山堺四至図」（模写本）は奈良女子大学所蔵電子画像集より転載したものである。
3. 遺構番号は種別に関係なく一連の通し番号を付した。ただし、各年度の遺構番号の重複を避けるため、整理・報告書作成段階で、改めて、2008年度：1～499、2009年度：500～599、2010年：600～699、2011年：700～799番を割当て、遺構番号を付した。
4. 調査における遺構の略記号は以下の通りとした。
S A（築地・塀）、S B（建物）、S D（溝・濠）、S E（井戸）、S F（道路）、S K（土坑）、S X（その他）
5. 土壌色の観察は、農林水産省水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖 2006年版」を参考とした。粒状区分は日本地質学会の基準を参考とした。
6. 遺構平面図の縮尺は、遺構全体図が1/500、遺構基本平面図1/200、個別遺構図は1/40と1/80を基本とし、一部に1/30、1/50、1/60、1/100を使用した。
7. 遺物実測図の縮尺は、瓦類：1/4、土器類：1/4、鉄製品・石製品：1/1、1/3で示した。
瓦・瓦器の断面については灰色トーンで示し、土器の断面については土器器は白塗り、須恵器は黒塗りで示した。また釉・朱などの範囲は薄い灰色トーンで示した。
8. 本書で使用した奈良時代の遺物の名称・形式・型式は、一部を除いて、以下の刊行物に準拠した。
軒瓦：奈良国立文化財研究所・奈良市教育委員会「平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧」1996
鬼瓦：毛利光俊彦「日本古代の鬼面文鬼瓦 - 8世紀を中心として -」『研究論集Ⅳ』奈良国立文化財研究所 1980
土器：奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告ⅩⅠ』1982
9. 本書で使用した土器・瓦の年代観については、主に以下の刊行物に準拠した。
古代の土器研究会『古代の土器 都城の土器集成Ⅲ』1994
三好美穂「南都における平安時代前半期の土器の様相」『奈良市埋蔵文化財センター紀要』奈良市教育委員会 1995
小森俊寛『京より出土する土器の編年的研究』京都編集工房 2005
中世土器研究会『概説 中世の土器・陶磁器』2001
奈良国立文化財研究所「平城宮発掘調査報告ⅩⅢ」1991

目 次

序 例言 凡例	
目次 挿図目次	
表目次 写真図版目次	

第I章 序 章

第1節 調査に至る経緯と経過	(金原)	1
第2節 遺跡の位置と歴史的環境	(千葉・三木・金原)	2
第3節 既往の調査と調査経過	(金原・西村・烏軒)	9

第II章 調査の成果

第1節 2008年度調査	(烏軒・西村)	15
第2節 2009年度調査	(西村・金原)	34
第3節 2010年調査	(烏軒)	40
第4節 2011年調査	(烏軒)	44

第III章 遺 物

第1節 瓦埴類	(烏軒・鶴)	49
第2節 土器類	(西村・青木)	67
第3節 金属製品・石製品・その他	(烏軒・金原)	72

第IV章 自然科学的分析

第1節 新薬師寺旧境内出土瓦の熱ルミネッセンス年代測定	(青木)	78
第2節 新薬師寺旧境内出土奈良三彩の蛍光X線分析	(青木・小倉)	84
第3節 新薬師寺旧境内出土の白色上塗り材の分析	(鶴)	89
第4節 新薬師寺旧境内出土の金色薄片状遺物	(青木)	90
第5節 新薬師寺旧境内出土の乾漆像の木屎漆片	(金原)	90
第6節 新薬師寺旧境内出土八角柱の墨線	(金原)	90

第V章 総 括

第1節 新薬師寺旧境内出土の軒瓦	(烏軒)	91
第2節 大形基壇建物(金堂)の構造と調査のまとめ	(金原・西村・烏軒)	96

写真図版 報告書抄録	
奥付	

挿 図 目 次

- 第 1 図 調査地位置図
第 2 図 周辺の遺跡分布図
第 3 図 奈良盆地北部の地形と遺跡分布図
第 4 図 遺跡周辺の地形
第 5 図 近代陸軍レンガ積建物基礎の検出
第 6 図 凝灰岩延石の出現
第 7 図 礎石据付掘形の検出
第 8 図 現地説明会の様子
第 9 図 遺構全体図
第 10 図 09-1 C区NR 503 作業風景
第 11 図 井戸SE 773 出土遺物取上げ作業
第 12 図 壇正積基壇各部の名称
第 13 図 遺構平面図①
第 14 図 08 A区南壁・08 B区西壁土層断面
第 15 図 SB 001 基壇詳細図①
第 16 図 SB 001 基壇詳細図②
第 17 図 階段各部の名称
第 18 図 SB 001 礎石据付掘形平面・断面図
第 19 図 SB 001 礎石据付掘形上層断面図
第 20 図 SD 200・280 平面・断面図
第 21 図 上坑SX 177 平面・断面図
第 22 図 掘立柱建物SB 002・003 平面・断面図
第 23 図 遺構平面図②
第 24 図 SD 280・NR 503 平面・断面図
第 25 図 SB 505 平面・断面図
第 26 図 09-1 次D区、09-2 次A・D・E・F 区上層断面図
第 27 図 遺構平面図③
第 28 図 10 F・G区東壁土層断面図
第 29 図 11 A区北壁土層断面図
第 30 図 SP 775・SP 718・SE 773 平面・断面図
第 31 図 軒丸瓦実測図
第 32 図 軒平瓦実測図①
第 33 図 軒平瓦実測図②
第 34 図 軒平瓦実測図③
第 35 図 丸瓦実測図①
第 36 図 丸瓦実測図②
第 37 図 平瓦実測図①
第 38 図 平瓦実測図②
第 39 図 平瓦実測図③
第 40 図 文字瓦実測図
第 41 図 道具瓦実測図
第 42 図 土器実測図①
第 43 図 土器実測図②
第 44 図 金属製品・石製品実測図
第 45 図 試料 NSY-01-R101 の TL グローカーブ (ED)
第 46 図 試料 NSY-01-R101 の TL 生長曲線 (ED)
第 47 図 評価された TL 年代値と新薬師寺関連の文献記載上の年代観との比較
第 48 図 新薬師寺旧境内出土奈良三彩片と黄冶窯跡出土唐三彩の Rb-Sr 分布図
第 49 図 新薬師寺旧境内出土奈良三彩片と黄冶窯跡出土唐三彩の K-Ca 分布図
第 50 図 新薬師寺旧境内出土奈良三彩片と黄冶窯跡出土唐三彩の Al-Fe 分布図
第 51 図 新薬師寺旧境内出土奈良三彩片と黄冶窯跡出土唐三彩の Sr-Zr 分布図
第 52 図 白色上塗りの施された小片
第 53 図 同上 (断面)
第 54 図 金色薄片状遺物
第 55 図 乾漆像表面破片 (木屎漆片)
第 56 図 SP 502 出土八角柱底面の墨線
第 57 図 新薬師寺金堂地区の軒瓦変遷図
第 58 図 大型基壇建物 (金堂) 推定復元図
第 59 図 東大寺山堺四至図 (模写本)

表 目 次

表1	新薬師寺関連略年表	表8	出土土器観察表 ³⁾
表2	既往の調査地一覧	表9	出土土器観察表 ⁴⁾
表3	08年度出土の平瓦個体数	表10	蓄積線量の評価結果
表4	08年度出土の丸瓦の重量	表11	年間線量の評価結果
表5	出土軒瓦計測表	表12	T L年代測定結果
表6	出土土器観察表 ¹⁾	表13	新薬師寺旧境内出土奈良三彩片の胎土分析結果
表7	出土土器観察表 ²⁾		

写真図版目次

写真図版 1	1	08年度調査区遠景 (航空写真 南から)	2	南面階段延石列 S X 010 (東から)	
	2	08年度調査区全景 (航空写真 真上から)	3	南面階段取付部 (南から)	
写真図版 2	1	08年度調査区遠景 (航空写真 南西から)	4	南面階段築成土 (西から)	
	2	08年度調査区遠景 (航空写真 東から)	5	南面階段南東隅延石 (東から)	
写真図版 3	1	08年度調査区第1面全景 (真上から)	6	基壇地覆石背面の加工(北から)	
	2	08年度調査区第3面全景 (真上から)	7	基壇地覆石背面の工具痕 (北西から)	
写真図版 4	1	08年度調査区全景 (南から)	写真図版 8	1	雨落溝 S D 050 遺物出土状況 (東から)
	2	基壇建物 S B 001 (南西から)		2	雨落溝 S D 050 遺物出土状況 (南東から)
写真図版 5	1	基壇建物 S B 001 (南東から)	3	南面階段築成土・延石裏込土 (北西から)	
	2	基壇建物 S B 001 南面階段 取付部 (南から)	4	雨落溝 S D 050・南面階段延石 列 (東から)	
写真図版 6	1	基壇建物 S B 001 南面階段 取付部 (東から)	写真図版 9	1	基壇西半部の礎石据付掘形 (北東から)
	2	基壇建物 S B 001 延石・地 覆石列 S X 011 (西から)		2	基壇西半部の礎石据付掘形 (西から)
	3	基壇建物 S B 001 南面階段 取付部 (南から)		3	礎石据付掘形 S X 300 壺掘地 業 (北東から)
	4	基壇建物 S B 001 延石・地 覆石列 S X 011 (南から)		4	礎石据付掘形 S X 353 壺掘地 業 (南西から)
写真図版 7	1	南面階段延石列 S X 010 (西から)	写真図版 10	1	東西溝 S D 200 遺物出土状況 (南から)
				2	東西溝 S D 200 遺物出土状況

- 3 東西溝 S D 200 断面 (東から)
- 4 東西溝 S D 200 断面 (西から)
- 写真図版 11 1 東西溝 S D 200 完掘状況 (東から)
- 2 08 A 区南壁土層 (北東から)
- 3 08 A 区南壁土層 (北西から)
- 写真図版 12 1 08 F 区全景 (南から)
- 2 南北溝 S D 280 遺物出土状況 (北から)
- 3 南北溝 S D 280 遺物出土状況 (北西から)
- 4 南北溝 S D 280 遺物出土状況 (北から)
- 写真図版 13 1 掘立柱建物 S B 002・003 (南から)
- 2 掘立柱建物 S B 002 S P 210 断面 (東から)
- 3 掘立柱建物 S B 002 S P 204 断面 (東から)
- 4 瓦溜 S X 256 (北東から)
- 5 S P 245 出土軒平瓦 (南から)
- 写真図版 14 1 08 A 区第 1 面全景 (南西から)
- 2 将校集会所レンガ積建物基礎 (東から)
- 3 レンガ積地下通信ケーブル坑 (南東から)
- 4 将校集会所レンガ積暗渠排水溝 (北東から)
- 5 戦後米軍接收時トイレ浄化槽施設 (南から)
- 写真図版 15 1 09-1 次 C 区 N R 503 遺物出土状況 (南西から)
- 2 09-1 次 C 区 S D 280・N R 503 遺物出土状況 (北から)
- 3 09-1 次 C 区 N R 503 銭貨出土状況 (南東から)
- 4 09-1 次 D 区 N R 504 奈良三彩出土状況 (西から)
- 写真図版 16 1 09-1 次 D 区全景 (東から)
- 2 09-1 次 D 区 S P 502 柱根出土状況 (西から)
- 3 09-1 次 D 区 S P 502 柱根出土状況 (南から)
- 4 09-1 次 D 区 S P 501 柱根出土状況 (南から)
- 写真図版 17 1 09-2 次 E 区全景 (南から)
- 2 09-2 次 E 区断面 (南西から)
- 3 09-2 次 F 区断面 (南から)
- 4 09-2 次 B 区全景 (西から)
- 5 09-2 次 D 区 S K 530 遺物出土 (北から)
- 6 09-2 次 D 区 S K 530 遺物出土 (南から)
- 写真図版 18 1 11- B 区全景 (南から)
- 2 11 C 区 S P 775 断面 (南東から)
- 3 11- B 区井戸 S E 773 断面 (西から)
- 4 11- B 区井戸 S E 773 遺物出土状況 (南から)
- 写真図版 19 軒丸瓦
- 写真図版 20 軒平瓦¹⁾
- 写真図版 21 軒平瓦²⁾
- 写真図版 22 丸瓦
- 写真図版 23 平瓦¹⁾
- 写真図版 24 平瓦²⁾・道具瓦¹⁾
- 写真図版 25 道具瓦²⁾・文字瓦・金属製品¹⁾
- 写真図版 26 上：須恵器瓶子・円面硯 (奈良時代～平安時代)
- 下：井戸 S E 773 出土土器 (鎌倉時代)
- 写真図版 27 上：施釉陶器¹⁾ (奈良時代)
- 下：施釉陶器²⁾ (平安時代)
- 写真図版 28 上：雨落溝 S D 050 出土土器
- 下：土坑 S X 177 出土土器
- 写真図版 29 上：出土土器¹⁾
- 下：出土土器²⁾
- 写真図版 30 上：金属製品¹⁾・石製品
- 下：S P 502 出土柱根 (八角柱)

第I章 序章

第1節 調査に至る経緯と経過

2008年度に奈良教育大学の北東隅の特別支援学級校舎が老朽化のため建替えられることになった。奈良教育大学構内の東半分は「新薬師寺旧境内」という呼称で登録される周知の遺跡であるため、事前の埋蔵文化財調査が必要となった。調査地の状態把握を行うために2008年6月に事前の試掘調査を行なった。試掘調査は教育現場を維持しつつ、建物が建ったまま中庭部分で行った。その結果、近代および中・近世の遺構が確認され、奈良時代の瓦片が出土した。

本調査は2008年8月末から開始した。当初は近代遺構と中・近世の耕作溝跡が検出されるのみで、近代の旧陸軍奈良聯隊の造成により大きく改変されていることが明らかになった。10月に入り、基壇化粧石基部の延石列が検出されるに至り、

事態は一変し、古代の基壇建物跡の存在が明らかになった。基壇は後の削平により最下部が残るのみであったが、東側では基壇地覆石が残り、西側では礎石据付掘形が残存していた。基壇建物跡以外に古代の溝も検出され、瓦を中心に多くの遺物が出土した。発掘区を一部拡張しつつ調査を継続し、範囲内の基壇の大きさを把握するに至った。その結果、基壇建物は類例のない大きさであることが判明した。最終的には遺構保存のため、特別支援学級校舎を移転して改築を行った。

2009年度には連絡路の敷設や遊具の設置のための南側部の調査を行ない、古代の溝と柱跡を検出した。柱は八角形に面取され底面に墨線書きがあった。2010年には再び遊具と埋設管の敷設により、トレンチ調査を行った。南側に溝が検出されたが、建物跡は検出されなかった。(金原)



第1図 調査地位置図

*調査年度は西暦の下2桁で表示

第2節 遺跡の位置と歴史的環境

奈良盆地は北を平城山、東を笠置山地、西を生駒・金剛山地、南を竜門山地によって画され、南北30km、東西15kmの広さをもつ。平城京はその盆地北部に、平城山丘陵を背にして造営される。平城京は東西4.2km、南北4.8kmの長方形の区画が基本となり、その中央北部に平城宮を設ける。平城宮はその東辺に張り出し部をもつが、平城京も同じく左京・右京のほか、左京の東側に外京をもつ。この外京のさらに東側、現在の奈良市高畑町奈良教育大学構内に本遺跡が所在する。

1. 平城遷都以前

古くは旧石器時代の遺物として、現在の奈良市菅原町に所在する菅原寺（喜光寺）の調査や平城京右京一条北辺四坊六坪の調査、同左京二条二坊十四坪の遺跡の調査において、それぞれサヌカイト製の旧石器が出土している。続く縄文時代の遺跡は、奈良盆地内では天理市や桜井市、橿原市、御所市など盆地中・南部に分布しているが、奈良市域にもいくつか遺物散布地がある。その一つである鹿野園町の鹿野園遺跡ではサヌカイト製の石鏃や石屑が発見されている。弥生時代になると遺跡数も著しく増え、高畑町奈良教育大学構内のほか、南紀寺町、大森町大森池周辺、大森町陸橋付近、JR奈良駅西方などをはじめとして各地で土器や石器、あるいは竪穴住居の跡が見つかっている。また、平城宮跡の発掘調査では、奈良時代遺構の下層から弥生時代の集落跡が見つかっている。

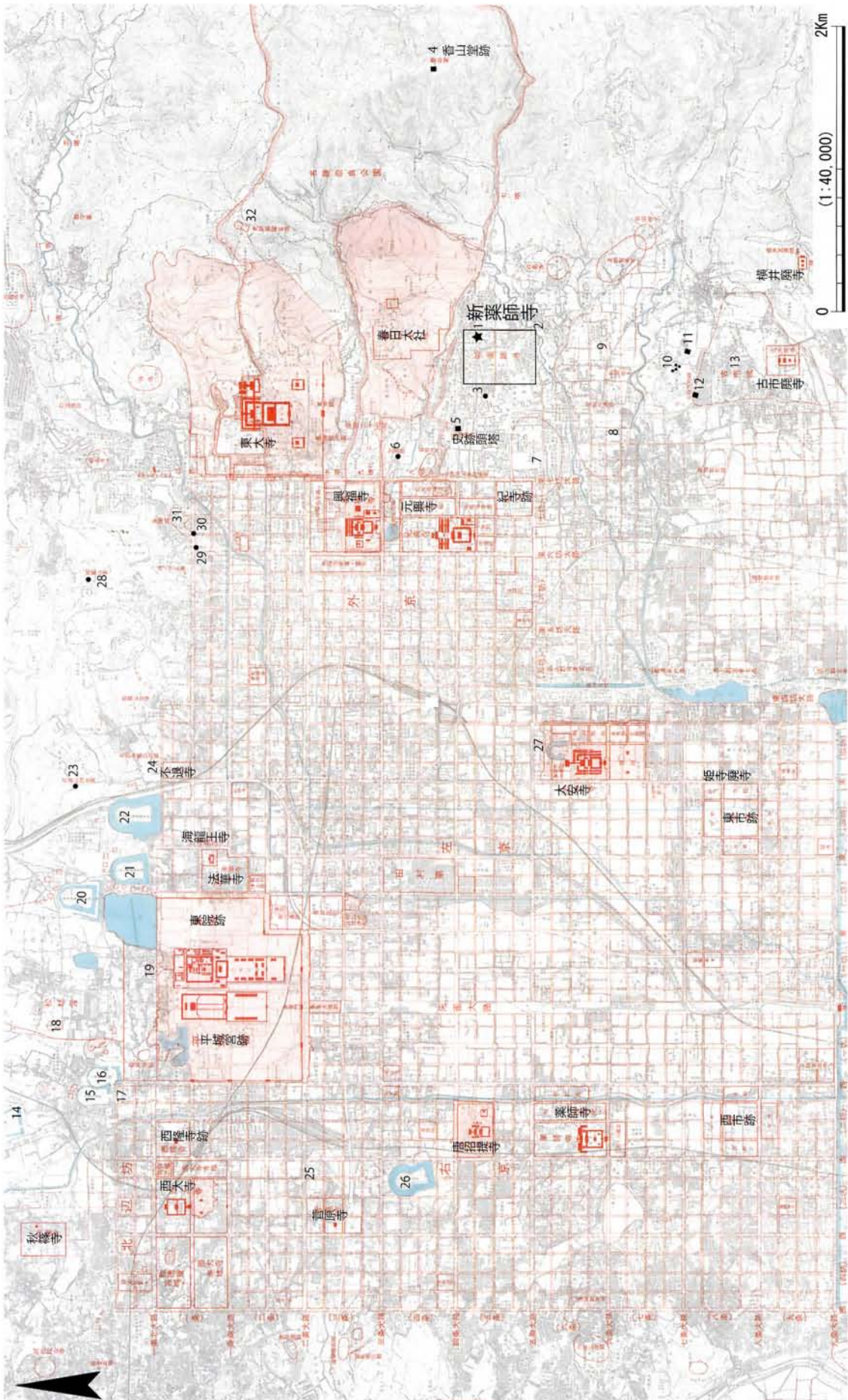
古墳時代に入ると、前期初頭～中頃は盆地の東南部で大古墳がいくつも造営された。前期後半に入ると盆地東南部では大古墳がみられなくなり、盆地北部の奈良市域と西南部の北葛城郡に大型古墳がつくられるようになる。奈良盆地の北端を画す平城山は標高90～100m程度の低丘陵であるが、その山麓地帯に佐紀盾列古墳群がある。東西約3km、南北約1.5kmの範囲に西から五社神古墳、佐紀石塚山古墳、佐紀陵山古墳、市庭古墳、ヒシアゲ古墳、コナベ古墳、ウワナベ古墳など墳長が200mを越すような大前方後円墳が東西に並び、大古墳に付随する陪塚と中規模前方後円墳、

大円墳によって構成されている。市庭古墳は平城宮造営によって前方部が削平を受けている。

盆地東辺北部の若草山の山頂、標高341.8mの高所に墳長103mの前方後円墳である鶯塚古墳がある。これより南へ続く山麓部には岩井川、地藏院川、菩提仙川などの川が西流し、それらに区切られた春日野台地、鹿野園台地、山村丘陵、和爾（東大寺山）丘陵が南北に断続する。

御蓋山の麓、現在飛火野とよばれている地域には、春日古墳群と総称される後期の小円墳群がある。春日大社御料園の西端部の8基、小川をへだてた南の台地に6基の分布が確認されているが、未確認のものや消滅したものをあわせるとかなりの数の古墳が分布していたと考えられる（『奈良市史 通史一』）。春日野台地南部に位置する本学構内にも古備塚古墳とよばれる径17mほどの古墳が知られる。また周辺の紀寺町一帯では削平された小古墳が数カ所で検出されており、奈良時代の土塔である頭塔の下層や白毫寺遺跡からは、発掘調査によって後期古墳の横穴式石室も検出されている。この史跡頭塔は神護景雲元年（767）に良弁僧正の名によって実忠和尚が東大寺の朱雀の末に造立した土塔である。しかしいつの間にか頭塔と呼ばれるようになり、僧玄助の頭塚の伝承が生じるようになった。『七代寺巡礼私記』などにもこの伝承がみえ、平安時代から玄助の頭塔と語り継がれてきたようである（『奈良市史 社寺編』）。

春日野台地の南を流れる能登川と岩井川に挟まれた扇状地に、古墳時代の集落遺跡として南紀寺遺跡がある。この能登川の下流、春日野西南縁辺部には大安寺古墳群ともよぶべき中期古墳が3基存在する。杉山古墳は外堤部周辺で家形埴輪が出土しており、出土埴輪からは古墳時代中期後半の築造とみられる。その東約200m離れて崇山古墳がある。出土した埴輪から杉山古墳よりもやや古く、5世紀中頃の築造とみられる。野上古墳は墳丘がほとんど失われているが、出土遺物は5世紀後半～6世紀初頭の時期とみられる。また、大安寺古墳群のさらに西方、佐保川、岩井川の下流域となる四条大路1丁目や杏町でも近年の発



1. 新薬師寺 2. 新薬師旧境内推定寺域 3. 吉備塚古墳 4. 香山堂跡 5. 史跡頭塔 6. 荒池瓦窯跡 7. 東紀寺遺跡 8. 南紀寺遺跡 (高円神社境内古墳群) 9. 白毫寺遺跡 10. 護国神社境内古墳群 11. 石ヶ平古墳 12. 古市方形墳 13. 古市城跡 14. 五柱神古墳 15. 佐紀石塚山古墳 16. 佐紀磯山古墳 17. 佐紀高塚古墳 18. 塩塚古墳 19. 市庭古墳 20. ヒシアゲ古墳 21. コナベ古墳 22. ウラナベ古墳 23. 奈良山 28 号竪跡 24. 不退寺裏山古墳 25. 菅原東遺跡 26. 宝来山古墳 27. 杉山古墳 28. 那富山墓 29. 佐保山南陵 30. 佐保山東陵 31. 多聞城跡 32. 鷲塚古墳

第 2 図 周辺の遺跡分布図

掘調査により5世紀末から6世紀にかけての削平された小古墳が検出されている。

岩井川の南に広がる鹿野園台地には、中期古墳として古市古墳、あるいは古市方形墳とよばれる古墳がある。近くの護国神社境内には横穴式石室をもつ後期古墳が数基あったが、その多くが破壊された。護国神社古墳群という。古市町西ノ瀬戸の古市狐塚古墳、同町字馬垣にある馬垣内古墳はともに後期古墳である(森下2003)。八島地区では八島町の崇道天皇陵の南に横穴式石室の天井石と思われる巨石が4枚露出している。古墳の封土は失われているが後期古墳と考えてよい(『奈良市史 通史 1』)。その西方の水田中に横穴式石室をもつ径10m以上の円墳があり、地名から帯解狐塚古墳とよばれる。この付近には墳長70mの墳丘をもつベンシヨ塚古墳や円照寺墓山古墳などの中期古墳がある。また円照寺南の谷に後期の群集墳として五ツ塚古墳群、山村丘陵南斜面に終末期古墳として黄金塚古墳が知られる。

以上に見てきたように、奈良盆地北部には旧石器時代より人々の痕跡が残り、特に古墳時代においては佐紀盾列古墳群の大古墳をはじめとして多くの古墳が築かれた。

2. 平城京の造営と遷都

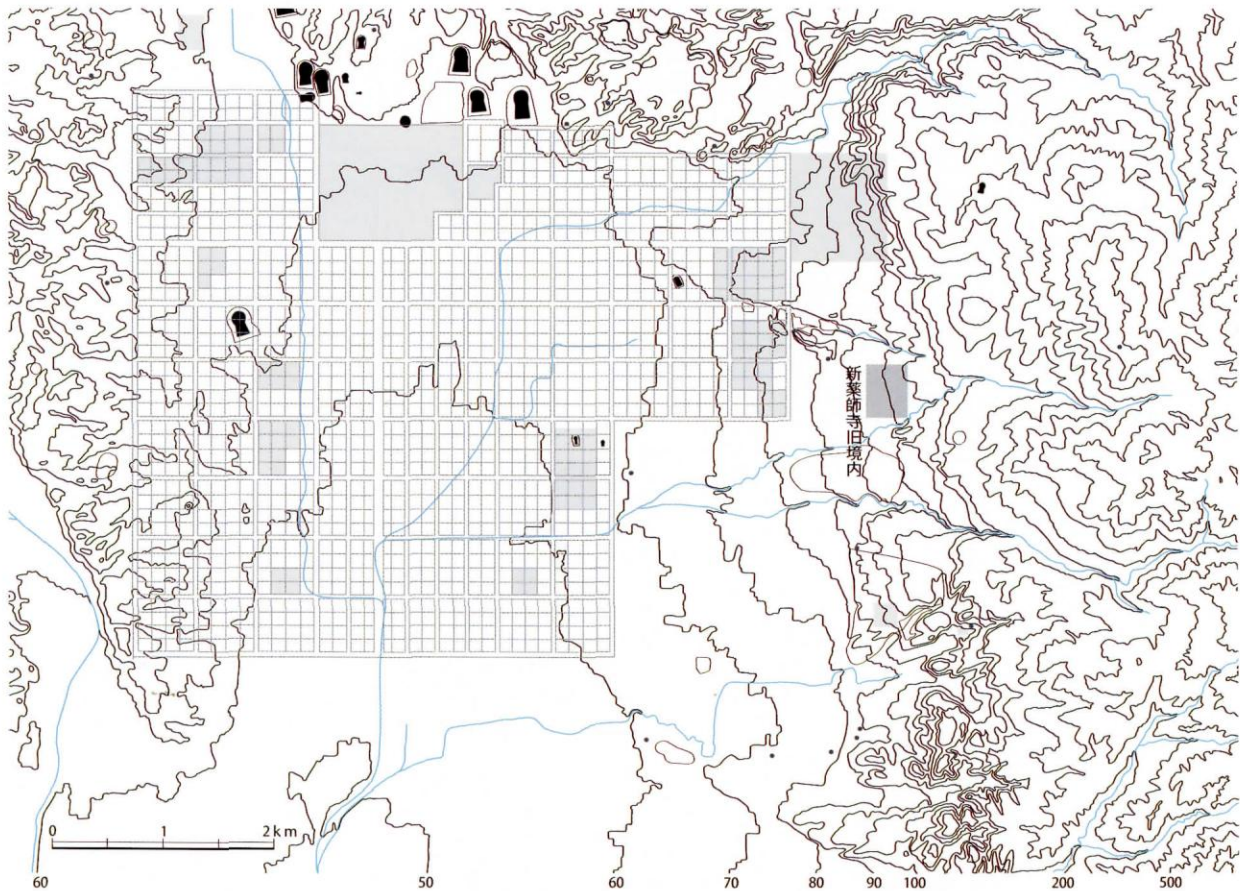
平城遷都の詔は元正天皇即位の翌年、和銅元年(708)に発された。同年11月7日紀には、菅原の地の民九〇余家を遷し、布穀を給うとある。また翌月の5日に平城宮地の地鎮祭を行っていることからして、この記事は宮の予定地に入る所の民家を移したものである。

平城京の造営当初、飛鳥・藤原からいくつかの寺院が移転してきた。興福寺は藤原鎌足の死後に山科に建てられた山階寺に始まるといい、藤原氏の氏寺であったが、飛鳥に移されて厩坂寺となった。平城遷都の際にはいち早く新京に移って外京の高台に寺を建て、名も興福寺と呼ぶようになった。その移転は『興福寺流記』によれば和銅3年(710)のこととなっている。薬師寺は藤原京から移転してきたが、現在の橿原市城殿町に本薬師寺跡が残る。『日本書紀』天武天皇9年(680)11月には皇后の病氣平癒を祈願して建てられた

ことが記されている。本薬師寺が平城京に移ったのは、『薬師寺縁起』によれば養老2年(718)とある。大安寺のおこりについては、寺の縁起や資材帳は聖徳太子御願になる熊凝道場に始まると伝える。その後百済川辺に移って百済大寺となり、さらに高市の地に移されて高市大寺と改め大宮大寺と号した。平城遷都と共にいち早く左京六条四坊の地に移り、現在の大安寺となる。紀寺は紀氏の氏寺として飛鳥の小山に建てられたが、遷都につれて外京五条七坊の東南よりに占地した。北は元興寺に接していたと考えられている(『奈良市史 社寺編』)。その元興寺は現高市郡明日香村の飛鳥寺(別名法興寺・元興寺・本元興寺)が平城遷都に伴って奈良に別院を建立したことに始まり、新元興寺とも称し、興福寺を北寺というのに対して南寺とも呼ばれた。『続日本紀』養老2年(718)9月23日条に「遷法興寺於新京」とあり、興福寺・大安寺より遅れて新京に進出した。

仏教は、国家体制の確立の過程で政治権力と結びつき、国家によって保護されるとともにまた統制され、常に国家の安泰と発展のために尽くすことを使命づけられてきた。そこで平城遷都後、諸大寺をはじめ諸私寺も平城に建てられたが、政争ははげしく、疫病が猛威をふるって多数の死者を出し、干魃、大風、地震などの天災も相次いだ。また争乱も重なって都も安定せず、世情の不安が増大するばかりであったために、天平13年(741)に国家の安寧を念じて諸国に国分寺と国分尼寺を建立すべしとの詔が出された。この国ごとに国分寺を作るという発想には、その前身をなすものがあつた。すなわち天武天皇14年(685)に各国の国府ごとに仏舎を造らせ、大宝2年(703)にはその仏舎で法会を営み、国内の教化につとめ仏教界を統制するための国師が任命されるなど、『金光明経』による鎮護国家の政策が進められていたのである。国分寺設置の詔は、この政策をより徹底し、明確に法定化したものであつた。実際に全国に国分寺が置かれたことは、全国的な調査研究によってほぼ確認されている。

東大寺は聖武天皇の発願により建立されたが、その歴史は神亀5年(728)、聖武天皇の皇太子、



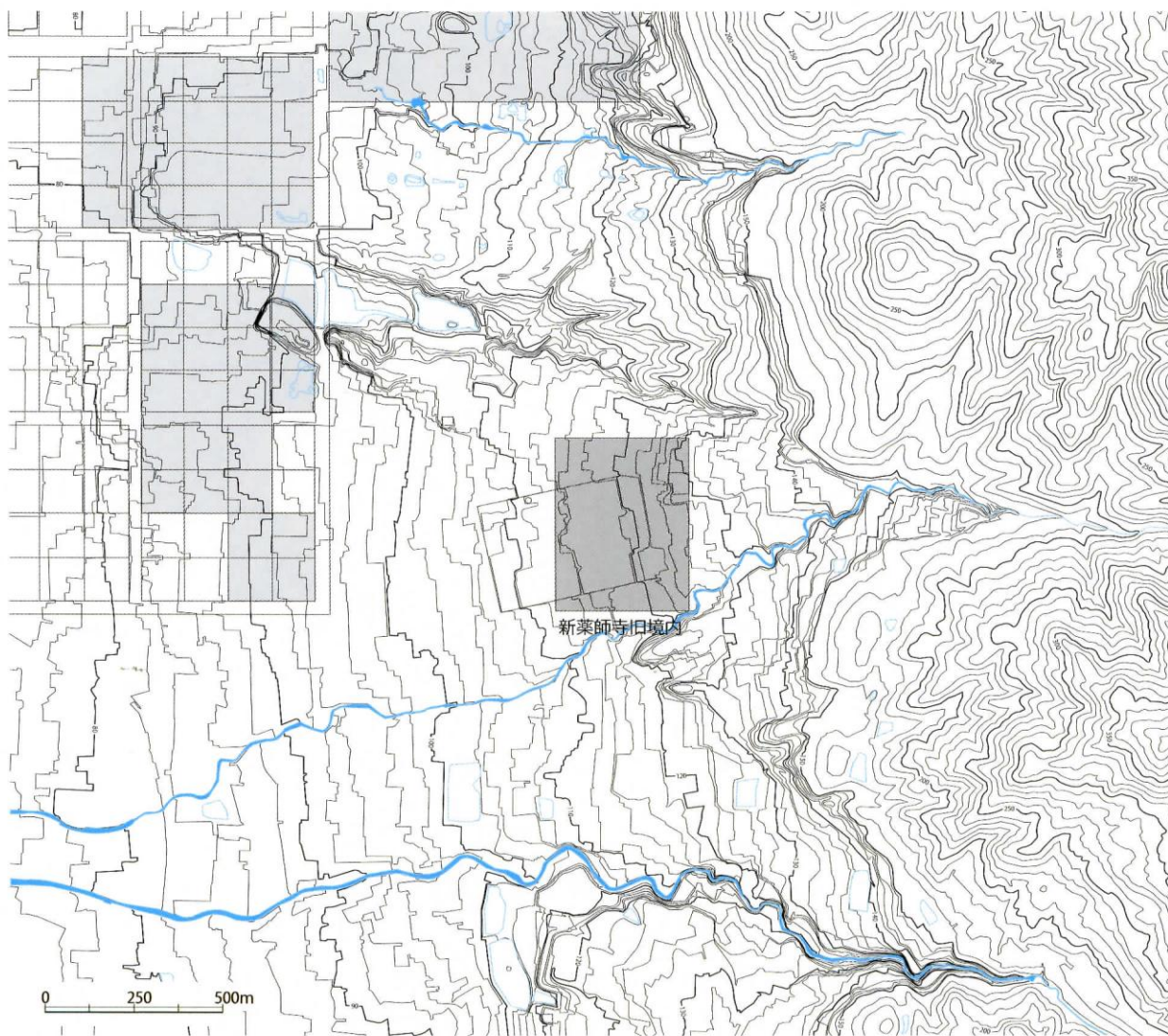
第3図 奈良盆地北部の地形と遺跡分布図

基親王の菩提を弔うため若草山麓に建てられた「山房」にまでさかのぼることができる。この山房がやがて「金鐘（鐘）寺」と称されるようになった。その後、天平13年（741）に国分寺・国分尼寺建立の詔が発せられたのに伴い、この金鐘寺が昇格した大和国金光明寺が東大寺の前身となる。金鐘寺には絹索院や千手堂が存在していたことが記録に残っている。『東大寺要録』によれば、絹索院は天平5年（733）に創立され、良弁僧正は不空絹索観音像を安置した。また巻四の絹索院の項にこの絹索院を金鐘寺と呼び、改めて金光明寺と号した記録がある。絹索院や金鐘寺に関しては従来から諸説あるが、いずれにせよ絹索院、のちの法華堂が金鐘寺の主要な堂であった可能性は高い（『奈良市史 社寺編』）。天平18年（746）、天皇・皇后は行幸になって燃燈供養が行なわれ、その翌年には食封一千戸が施入されたが、この頃から金光明寺を東大寺と呼ぶようになっている。

東大寺の造営は国家的事業であったから、造東大寺司で行なわれた。この機構は大規模な組織で

造仏から写経、荘園の管理まで広般な仕事を行なうもので、財源は主に封戸であり、それは五千戸とされている。寄進された墾田は四千町を限度とされ、東国・北陸地方に多かった。寺地も諸寺とくらべて広大で東西八町余、南北八町弱といわれる。こうして東大寺は総国分寺の立場に立ち、日本古代における国家仏教の象徴としてその威容を誇ることになった。

聖武天皇は天平12年（740）以降5年間にわたり行幸を行い、平城京は天皇不在となった。この5年間の間に聖武天皇の居所は転々とするが、大きくは恭仁京から難波京、さらには紫香樂宮へと変わり、その間にも各地に行幸を行っている。天平16年（744）正月に難波宮に行幸した聖武天皇はそのまま恭仁京には帰還せず、2月には難波宮を「皇都」とすることにした。ついで新京とされた紫香樂宮で天平17年（745）4月には周辺に不審火が相次ぎ、5月に平城宮が再度宮都となる。行幸中の天平15年（743）10月15日、聖武天皇は紫香樂宮で銅造の盧舎那仏造立の詔を



第4図 遺跡周辺の地形

発した。この盧舎那仏（大仏）の造立ははじめ紫香楽甲賀で着手され、天平16年（744）10月にはその体骨柱を立てるところまでは進んだものの、翌年に平城京に還幸した。還幸後は外京の東側の東大寺において大仏が造立された。大仏の鑄造は天平19年（747）9月から始まって天平勝宝元年（749）10月には終了し、像高五丈三尺五寸の盧舎那仏がその姿を見せた。この大仏の開眼会は天平勝宝4年（752）4月9日に催された。

3. 新薬師寺の歴史

光明皇后と関係の深い寺として、新薬師寺とともに春日奥山の香山山房がある。新薬師寺の寺名は右京の薬師寺に対して新造の薬師寺の意と考えられるが、創建の年次を伝える確かな記録はない。しかし、12世紀初頭に編纂された『東大寺要録』巻第一・本願章では、天平19年（747）3月に

光明皇后が聖武天皇の病氣平癒を祈って勅願により九間の金堂と七仏薬師像を造立し、その胎内に仏舍利五粒、天皇宸筆の薬師本願經一卷、法華經一部が納められたと伝えられる。また巻第六・末寺章によると、新薬師寺はまたの名を香薬寺といい、九間の仏殿には七仏浄土七軀が祀られていたという。なお巻第一・本願章に収める「延暦僧録文 仁政皇后菩薩」によると、皇后が金堂と東西楼榭をもつ山寺の香山寺と、香薬寺の九間仏殿・七仏浄土七軀・東西両塔・鐘一口などを造ったことが記されている。末寺章の記述はこれによったものと思われる。巻第一・本願章の天平19年（747）3月光明皇后が天皇病氣平癒祈願のため、勅願により新薬師寺を建立したとの記述以降、同20年7月7日の「經疏奉請帳」（『大日本古文書』10巻285頁）以後は『続日本紀』や「正倉院文書」

奈良時代	708 (和銅元) 年	平城京遷都の詔
	710 (和銅3) 年	3月、平城京に遷都、厩坂寺を平城京に移し、興福寺と号する
	724 (神亀元) 年	2月、聖武天皇即位
	729 (天平元) 年	2月、長屋王の変、8月、光明皇后立后
	740 (天平12) 年	藤原広嗣の乱、恭仁京遷都
	741 (天平13) 年	国分寺・国分尼寺建立の詔
	742 (天平14) 年	紫香樂宮が営まれ、行幸がしばしば繰り返される
	744 (天平16) 年	難波を皇都と定める
	745 (天平17) 年	平城京遷都。聖武天皇不豫にあたり、京師および諸国に高六尺三寸の七仏薬師像の造立を命ずる(『続日本紀』)
	747 (天平19) 年	3月、聖武天皇病氣平癒のため、光明皇后が新薬師寺と七仏薬師像を像立(『東大寺要録』)。9月、大仏鑄造を始める
	749 (天平勝宝元) 年	孝謙天皇即位、藤原仲麻呂(後の恵美押勝に改名)の専横
	750 (天平勝宝2) 年	新薬師寺の寺領を定め、五百町を寄せ、住僧百余人に及ぶ一伽藍となる 七仏薬師像のための朱紗以下顔料、金箔を奉納(『正倉院文書』)
	751 (天平勝宝3) 年	10月、聖武太上天皇不豫により、新薬師寺に四十九人の賢僧を招請し、七日にわたり統命法による設齋行道が修される(『続日本紀』)
	752 (天平勝宝4) 年	大仏開眼供養、淳仁天皇即位
	754 (天平勝宝6) 年	11月、統命法が新薬師寺にて修される
756 (天平勝宝8) 年	聖武太上天皇没、新薬師寺堂(七仏薬師金堂)が描かれる『東大寺山堺四至図』	
762 (天平宝字6) 年	七仏薬師像の白毫、光背など制作(『正倉院文書』)、東大寺造営修理塔寺料一千戸のうち百戸を新薬師寺に施入。塔・仏殿・僧房等の供養修造料に宛てる(『東大寺要録』)	
763 (天平宝字7) 年	新薬師寺七仏薬師像の脇侍菩薩、神王像(十二神将像)造立。この頃、新薬師寺の金堂、壇院(壇所)、薬師悔過所、政所院、温室、造仏所(造丈六像所)の存在が記載される(『正倉院文書』)	
764 (天平宝字8) 年	西塔の存在が知られる(『正倉院文書』)。恵美押勝の乱、称徳天皇垂祚	
772 (宝亀3) 年	新薬師寺総供養。東大寺から資材が貸し出される(『正倉院文書』)	
780 (宝亀11) 年	落雷により新薬師寺西塔が焼失(『続日本紀』) 新薬師寺仏殿九間とあり、西塔以外に金堂・講堂も焼失とあるが(『東大寺要録』)、葛城寺の記事に引かれた可能性あり	
781 (宝亀12) 年	東大寺料封一千戸のうち百戸をさいて新薬師寺修理を行う	
平安時代	794 (延暦13) 年	平安京遷都
	962 (応和2) 年	台風で新薬師寺七仏薬師金堂倒壊。『日本紀略』応和2年8月30日条「今日、大雨風。大和。近江等回宮舎。及び神社仏寺等損壊。東大寺扉三間。力士大門等。興福寺維摩堂一宇。幡一基。新薬師寺七仏薬師堂一宇并数字雑舎。西大寺食堂一宇。調寺講堂一宇。及白余諸寺并人宅等。多以顛倒。京中殊愁」
	963 (応和3) 年	新薬師寺が聖武天皇御願寺との決議に基づき、参議橘好古が勅使となり佐保山南陵(聖武天皇陵)で新薬師寺修理の宣命を奏する
1180 (治承4) 年	平重衡の南都焼打ちで、東大寺・興福寺等焼亡、新薬師寺は難を逃れる	
鎌倉時代以降	鎌倉時代	貞慶上人、一時新薬師寺に住し再興に尽力。東門・南門・鐘楼などを建立
	鎌倉時代中期	興福寺領南都七郷の新薬師寺郷となる
	1602 (慶長7) 年	徳川家康、新薬師寺に百石の寺領を安堵する 将軍綱吉の母桂昌院の尽力で、本尊薬師如来像、十二神将像の修理を行う
	1908 (明治41) 年	現奈良教育大学構内が陸軍歩兵53連隊の駐屯地となる。

表1 新薬師寺関連略年表

中に新薬師寺の名が散見するようになるため、一応天平 19 年頃が創立の年と考えられている（西川 1991）。香山寺は今日春日山の東南の香山に遺跡をとどめ、平城宮出土と同範の奈良時代の古瓦が出土する。

『村上天皇御記』には応和 2 年（962）8 月の大風によって新薬師寺七仏薬師堂が倒壊したことに関連し、翌 3 年に当寺縁起流記帳を勘検したところ、聖武天皇の創建と記されていたと伝えている。天平勝宝 8 年の「東大寺山堺四至図」（第 59 図）に香山堂と参道として山房道、さらに南面して新薬師寺堂の堂宇が描かれている。天平 20 年頃から新薬師寺・香山薬師寺として『続日本紀』にみえ、早く両寺一寺として取扱われたらしい。天平勝宝 3 年 10 月聖武上皇の病全快を祈って、49 人の僧により七々日間続命の法が祈修された。宝亀 11 年（780）正月に落雷で西塔が焼失したが、創建当時の伽藍は七仏薬師像を安置する東西に長い九間の金堂と、東西両塔や講堂・僧坊を備えた七堂伽藍が南面して建立されていた。

聖武天皇が天平 17 年秋頃から引続き病気がちであったことは、『続紀』の記事から推察できるが、同年 9 月 17 日には、その枕席安からざること旬日に及んだため大赦を行い、同月 19 日には、平城・恭仁両京の留守を固めさせ、孫王等を悉く天皇のいた難波宮に集め、使を遣わして平城宮の鈴印を取らせるなどの非常の処置がとられた。また、京師畿内の諸寺および名山浄処をして薬師悔過の法を行わせ、賀茂・松尾等の神社に幣を奉り、諸国の鷹や鶴を放って、3800 人を出家させている。さらに翌 20 日には八幡神社に奉幣し、京師および諸国に大般若経 100 部を書写させ、高さ六尺三寸の薬師像七軀造立、薬師経七卷書写の勅が発せられた。しかし天皇の健康はその後もすぐれず、同 19 年正月朔日の詔には、「朕の寝膳和に違ひ、延いて歳月を経たり」と述べられている。以上の経緯からみて、新薬師寺の創立は、天皇の健康回復を祈る名山浄処での薬師悔過の修法や七仏薬師造立の詔と何らかの関連をもつと見ることができよう。

新薬師寺創建当初の伽藍は、四町四方の広さで、

南大門・中門・金堂・講堂・食堂・鐘楼・鼓楼・三面僧房・東西両塔があったという。宝亀 11 年（780）西塔の一角に落雷、金堂や講堂に延焼したが、太政官符を以て修理費が出されて一応復興した。ところが、応和 2 年（962）8 月の台風で、金堂以下諸堂が倒壊し、本尊七仏薬師像も転倒破損するほどの大きい被害があり、このたびは復興がかなわなかった。治承 4 年（1180）の平重衡の南都焼討では、新薬師寺は本堂および僧坊と近辺の在家がわずかに難を免れた。このころの新薬師寺は現在の本堂が中心になっており寺域も狭くなっていたが、それでも十五大寺や二十大寺の一に数えられていた。

鎌倉時代に入り、解脱上人や明恵上人の力によって伽藍がようやく整備され、本堂に礼堂が付設されたり、東門・南門・地藏堂・鐘楼などがつくられたりし、今日見る新薬師寺の姿となった。そのころから興福寺に属するようになったので、『大乘院寺社雑事記』に新薬師寺に関する記載が多く目につくようになる。

江戸時代になると、元禄 12 年（1699）に護持院の隆光大僧正の肝いりで、將軍綱吉の村桂昌院の助力で本尊薬師如来像や十二神将像の修理が行われ、本尊像内に納められていたいろいろな経巻類や秘仏、仏舍利などが見いだされた。家康は寺領百石二人扶持を与えて、天下の祈願所として重きをなしていたが、その後一時荒廃したこともあった。しかし現在は参拝者も多く盛観をとりもどしつつある。

4. 戦時中および戦後の高畑町

日清・日露戦争後、二つの戦争に勝利して日本の軍事力も大きくなった。従来、奈良は天津連隊区に属していたが、日清戦争後の軍備拡張によって明治 30 年（1897）、京都府下深草村に兵営を置いた第三十八連隊が増設されるとその管下になった。ついで日露戦争後の軍備拡張にともない、連隊の増設が行われることになったが、奈良市では木本源吉らが大いに連隊の誘致をはかり、高畑町に 45,068 坪（14.9ha）の土地を買収して、これを連隊の敷地として寄付した。こうして明治 41 年（1908）奈良市に連隊が設置されることに

なり、翌明治42年、新兵舎に第五十三連隊として転営、奈良衛戍病院も開設された。

奈良市では連隊の創設を祝い、転営の兵士を迎えて祝賀の行事が行われた。明治42年3月21日、22日には、「歩兵第五十三聯隊転営二付、職員児童三条通ニテ歓迎セリ」、また4月2日には「歩兵第53聯隊移転祝賀ノ為メ、市内各小学校児童本日午後一時ヨリ旗行列ヲナシ、兵營ニ至リ万歳ヲ三唱シテ帰校セリ」と当時の小学校の記録にある（奈良市立椿井小学校「学校永代記録」）。

第五十三連隊が奈良にできると、従来、第四師団管下であった奈良は、京都とともに第十六師団管下に属することになった。なお、第一次世界大戦後、世界的に軍備縮小の風潮が高まり、大正14年（1925）、第五十三連隊が廃止されるとともに、京都深草から第三十八連隊が奈良に転営、奈良市に第三十八連隊が常駐することになった。

昭和6年（1931）9月、に起きた満州事変後、15年にわたる日中戦争が開始された。日本軍は翌年2月までに熱河省を除く全満州を占領し、3月には清朝最後の皇帝である溥儀を執政として満州国の建国を宣言した。

それから約2年後の昭和9年4月17日、奈良にあった歩兵第三十八連隊（第十六師団所属）篠原部隊は「建國満州の礎その固きを護るため」

三陣に分かれて奈良駅を出発、大阪から出航して満州に向かい、北部のチチハルに駐屯した。この年11月中国軍と交戦、戦死2人、重軽傷者10人の犠牲を出したという。その後、留守隊要員や除隊兵の帰還、初年兵の渡満など兵員の交替があり部隊長も代わって田路部隊となった。2年有余の任務を終えた田路部隊は、11年6月大阪港に上陸して浪速駅から鉄路奈良に凱旋した。

終戦後、連隊跡は米軍に駐屯地として接收され、米軍キャンプ奈良C地区が置かれた。その後、昭和33年に奈良学芸大学（当時）が登大路町から移転し、昭和41年4月に国立学校設置法の一部を改正する法律（昭和41年法律第48号）によって奈良教育大学と改称、さらに平成16年4月に国立大学法人の公布により国立大学法人奈良教育大学となって現在に至る。（千葉・三木・金原）

第3節 既往の調査と調査経過

1. 新薬師寺の研究

新薬師寺に関する研究は「東大寺山堺四至図」（756）に描かれた「新薬師寺堂」と、その東方山中の「香山堂」に関する寺名（新薬師寺、香山薬師寺、香薬寺、香山寺）及び所在地論争を嚆矢とする。1947年の毛利久の研究は、文献史学のみならず現地踏査や採集瓦の分析を踏まえた先駆的な研究といえ、寺名・所在地論争は未だ決着をみないものの、現状では、香山寺と香山薬師寺は同じ寺院の別称であり、香山寺と新薬師寺は後に合併する、とした毛利の説が有力視されている。

その後の1966年には奈良国立文化財研究所により香山堂跡の発掘調査が行われ、出土した軒瓦から奈良時代前半に創建された寺院と判明した。

先述のように創建当初の新薬師寺には、七仏薬師堂（金堂）以外に、東西両塔、講堂、僧房、食堂、壇院、薬師悔過所、政所院、温室などの諸施設があったとされるが、現状では現本堂（壇院か）以外に当時の伽藍配置が不明な上、土壇状の痕跡も一切残さないこと、また瓦類の採集資料も極めて少ないなどの点から考古学的な研究は遅滞していた。奈良時代の大規模な寺院でありながら、詳細な創建時期が正史に表れないなど、謎に包まれた部分が多い古代寺院の1つと言える。

こうした中1981年に森郁夫が行った旧境内採集瓦（千鳥資料）の分析は、新薬師寺の造営が造東大寺司と密接な関連の下に行われたことを考古学的に裏付けた研究として重要である。また1996年の吉川真司による「東大寺山堺四至図」の研究は、新薬師寺堂（金堂）の位置と寺域を高精度に捉えたもので、その後の寺域の研究や発掘調査を行う際の基礎データとなった。

2. 既往の調査

旧境内における発掘調査は、1987年の奈良市教育委員会による第1次調査以降、奈良県立橿原考古学研究所、本学実施の調査を含めて18次に及ぶ。既往の調査成果については表2にまとめた通りであるが、古代に遡る遺構の検出例は、1995年に奈良市教育委員会による調査で検出された平安時代の溝が唯一の例と言える。検出例が

少ない理由としては、近年の急激な宅地造成による遺構の削平や、中世以降の現本堂周辺の再整備、また近世・近代以降の水田開発による影響が大きいと考えられる。

大学構内では、近代陸軍期の遺構の削平・攪乱が著しく、2003年度調査では近代陸軍建物基礎以外に遺構は一切検出されなかった。しかしながら2008年6月に実施した附属小学校特別支援学級校舎建替に先立つ試掘調査において、古代の遺構が残存している可能性が判明し、必要な諸手続きや調査体制を整えた後、2008年8月28日から発掘調査を実施することとなった。(島軒)

(調査口誌抄)

2008年度調査

2008年8月28日 本日より発掘調査開始。現場の方針を打合せした後、表土をバックホウにて掘削。調査区北東部で現地表下0.4mまで近現代造成土、造成土直下に黄褐色礫土層がみられ、これが地山と考えられる。地山土を用いた幣地層とみられる堆積が認められた。また近代陸軍期のもと思われるレンガ積構造物を検出する。



第5図 近代陸軍レンガ積建物基礎の検出

2008年9月13日 近代陸軍期遺跡施設などを対象に第1回現地説明会を開催。約60名の参集をみた。

2008年9月17日 ラジコンヘリによる空中写真撮影実施。

2008年9月18日 レンガ積構造物の解体作業。基壇の整地土から古代の瓦片がちらほらとみられるようになる。東大寺式部平瓦も1点出土。調査区北西部の高まりを調査。サブトレを入れるが、中世以前の遺物に限られ、周囲に人頭大の礫が散在する。注意を要する。



第6図 凝灰岩延石の出現



第7図 礎石据付掘削形の検出

2008年10月2日 調査区中央から南部地区の水田耕作土の掘り下げを行なう。中央部付近に東西方向の溝状遺構を検出。断面で確認したところ、溝の北側に凝灰岩を使用し、南側は自然礫を使用する雨落溝となる可能性が浮上してきた。今後この遺構の行方の検討を要し、現場も一挙に緊縮した状態に。

2008年10月8日 雨落溝はSD050と命名し調査を続行し、古代の瓦が多量に出土。調査区北西部の礫群は方形を呈し、現時点でSD050との関係が検討課題である。一方、SD050の延長を追求すべく溝の東部、陸軍の土塁付近にトレンチを設定した。このトレンチでも延長がみつかるとは、さらに東へ延びることが判明。このトレンチの東側へさらにもう1本トレンチを設定することに。

2008年10月11日 ついにSD050の屈曲点が見つかる。基壇の南東端部の可能性を考えた。溝からは多量の瓦片とともに多くの縮片化した土師器皿が出土。10世紀代に属する可能性が高い。記録に残る大風による転倒の年代(962年)と近いことから注意を要する。

2008年10月17日 調査区中央部出土のSD050を東側へ拡張して行方を追う。中央部が基壇の礎石と相当する可能性を考慮しての拡張であったが、北側へ屈曲することなく東へと続くようである。基壇中央部を推定する手掛かりは今のところ得られていない。また、調査区南側に検出したSD200はSD050に並行する素掘りの溝。位置関係など検討する課題は多く残されている。

2008年10月20日 調査区北西部の礫群を含む落ち込みみやゆるゆるな掘り地業を行った礎石据付掘削形である可能性が高くなった。西と北へ調査区を拡張すると、同様の方形落ち込みを検出。これらが一定の間隔で並ぶことが判明。この方形落ち込みが地山の露出する東側へと続かないことも、今後の検討課題である。

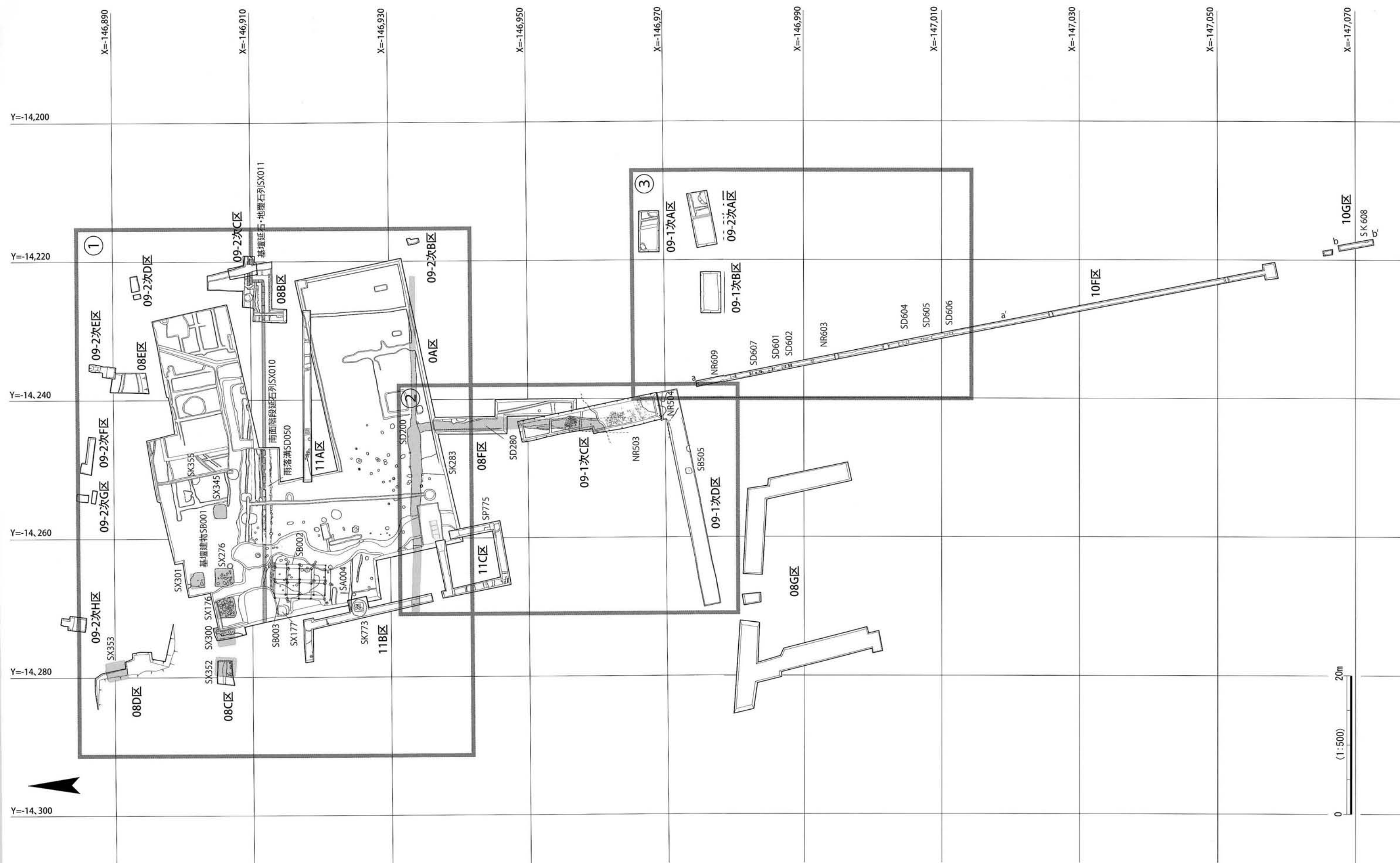
2008年10月23日 本日報道発表。報道関係各社多数来跡。

2008年10月25日 第2回現地説明会開催。約2,300名の参集をみて、盛況のうちに無事終了。

2008年10月28日 ラジコンヘリによる空中写真撮影実施。



第8図 現地説明会の様子



第9图 遺構全体图



第10図 09-1 C区NR 503 作業風景

2008年10月31日 調査区南東部検出のSD050に並行する雨落溝の検出を念頭に調査区を北側へ拡張。北へ7m程広げるものの、対応する雨落溝は検出できなかった。北部では地山標高が高く、SD050底面から1.59m。削平を提案すると1.8m程の高さが見込まれる。回廊の可能性が低くなる一方、長大な基壇に長大な障壁を取り付く可能性が高くなったが、類例のないことであり慎重に判断すべきである。

2008年11月22日 午前中に現地を公開。約2,400名の参加があった。

2008年11月28日 遺構集約に際しては、基壇外装部分に真砂土を入れて入念に養生し、礎石部分掘削検出箇所掘削防止のために土壌積みで保護し上からシート養生した。本日を以て現場作業を終了した。

2009年度調査

2009年6月1日 特別支援学級体育館脇の舗装道路付設と遊具設置に先立ち、発掘調査を本日から開始。3カ所にトレンチを掘削。校庭南東部のA区から着手。B区はA区の南西に設定。C区はB区の北西側に南北トレンチを設定した。

2009年6月9日 昨年度みつかった南北溝SD280の延長とみられる溝とそれと交わる流路を検出。SD280は細片化した瓦の密集する箇所があり、精査する。一方、流路上層から降平永寶、下層から神功開寶が出土。また軒丸瓦(興福寺式)や軒平瓦(東大寺式)などが出土。出土遺物からも別々の遺構である可能性が考えられる。

2009年7月27日 09-1次D区は、近世・近代の擾乱が著しいが、自然経路中で奈良三彩等の奈良時代から平安時代の遺物が多く出土した。また柱礎形の溝溝跡が深いものは削平を免れているようだ。

2009年7月31日 平面隅丸方形の柱礎から断面が方形の柱礎が出土。

2010年2月15日 特別支援学級校庭において遊具設置箇所にて1ヶ所と、陸軍設置土器製の塼が並列する遺構を好角形障壁のためのトレンチを7ヶ所に設定して調査を開始する。

2010年2月24日 4トレンチ検出のSK530は遺構かどうか判断としないが、写真美術館建設に伴う調査で検出されている墓の可能性もある。基壇に関する成果は今回の調査では得られなかった。

2010年調査

2010年8月4日 吉備塚古墳南側に2ヶ所、小學校西側の構内道路沿いに3カ所、計5カ所のトレンチを設定して調査を開始。

2010年8月6日 調査区幅が狭いこともあり、新薬師寺開基遺構の検出には至らなかったが、中世遺物を含むのを確認。切土が及ばない箇所では遺構の残りは高い可能性がある。より平面的な調査に期待。

2010年8月16日 2008年度調査区南側の構内道路沿いに、南北85m、東西0.8mのトレンチを設定して調査を開始。記述的な猛暑。

2010年8月28日 地山の砂礫層が北側に向けて緩やかに下がる。09年度調査区と10年度調査区北半部にかまけて谷状の地形が存在するようである。砂礫層は非常に深く、遺物を含まないことから寺院造営前と判断。新薬師寺開基の新たな堂舎や門前施設は確認できず。



第11図 井戸SE 773 出土遺物取り上げ作業

2011年調査

2011年1月12日 2008年度遺構保存地フェンス設置工事に伴い調査を開始。大型身振遺物検出地とに近接しており、建物の中軸線を示すような遺構の検出に期待する。

2011年1月31日 2008年度検出の掘立柱建物S B 002・003西側で掘立柱建物と同じ期の可能性のある井戸を検出。井戸床取り後の窪みから、13世紀前半代の遺物が遺物整理箱で10箱近く出土。主要伽藍跡縁後の井戸内の土地利用を知る上で貴重。

2011年2月5日 道具集約の揃え完了。本日を以て現地作業を終了する。

(吉原・西村・島津)

《参考文献》

- ・奈良市史編集審議会編『奈良市史 通史一』奈良市 1990
- ・奈良市史編集審議会編『奈良市史 通史四』奈良市 1995
- ・奈良市史編集審議会編『奈良市史 社寺編』奈良市 1985
- ・奈良市史編集審議会編『奈良市史 考古編』奈良市 1968
- ・木村芳一・小泉俊夫『奈良史第3巻 考古』名著出版 1989
- ・岩城隆利・大矢良哲編『奈良史第6巻 寺院』名著出版 1991
- ・森下恵介「奈良盆地北部の古墳」『新近畿日本叢書 大和の考古学第2巻大和の古墳I』泉森政編 22-46 近畿日本鉄道株式会社 2003
- ・西川新次「新薬師寺の歴史」『日本調染史論集』岩波書店 1977
- ・『図書情報録 書誌 第62号』奈良教育大学附属図書館 1982
- ・毛利久「奈良春日山中の香山寺址について」『考古学雑誌 32-7』1942
- ・毛利久『新薬師寺考』近畿古文化選書 河原書店 1947
- ・森轟・牛川喜幸・伊東太作「東大寺山階西谷区について」『奈良国立文化財研究所年報』1967
- ・森部夫「新薬師寺の瓦」『古代研究』22 財団法人興寺文化財研究所 1981
- ・稲木吉一「新薬師寺」『新薬師寺と円照寺・白毫寺』日本の古寺美術 16 保育社 1990
- ・吉川真司「東大寺山階西谷区」『日本古代出土文』1996
- ・廣岡考信「香山堂 跡について」『古陵 89』1995
- ・奈良教育大学『吉備塚古墳の調査』2006
- ・奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』1987
- ・奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』1989
- ・奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』1991
- ・奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』1993
- ・奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』1995
- ・奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』1998
- ・奈良県立橿原考古学研究所『奈良県遺跡調査概報(第1分冊)』1994
- ・奈良県立橿原考古学研究所『奈良県遺跡調査概報(第1分冊)』1995
- ・奈良県立橿原考古学研究所『奈良県遺跡調査概報(第1分冊)』1996

表2 既往の調査地一覧

調査次数・年度	調査期間	所在地	調査機関	内 容
市1次	1987年1月26日～2月6日	高畑町625-1	奈良市教育委員会	遺構：掘立柱建物、素掘溝、土坑 遺物：瓦器類(13世紀後半)、中世以降の土師器、須恵器、瓦、近世信楽焼播鉢
市2次	1988年7月11日～22日	高畑町1338-1	奈良市教育委員会	遺構：中世以降の廃棄土坑、石列、木杭列 遺物：土師器皿・羽釜・高台付皿、瓦器插鉢・火鉢・火舎、国産陶器皿・碗(瀬戸・美濃産) 輸入磁器皿・碗、16世紀後半代の遺物が多量に出土
市3次	1990年1月18日～7月2日	高畑町600-1	奈良市教育委員会	遺構：16～18世紀にかけての土坑・井戸・溝、石組遺構・石敷遺構・石列・地溝、柱穴 遺物：土師器皿・羽釜、瓦器插鉢、盤、国産陶器香炉(瀬戸(茶系)、鉄釘、刀子、五輪塔 銭貨、砥石、瓦は平安時代以降のものか大半、奈良時代の軒瓦(軒丸瓦6236Aが1点、 軒平瓦6661型式種別不明1点、軒平瓦6732Q1点)
市4次	1992年6月22日～29日	高畑町1361-1	奈良市教育委員会	遺構：近世以降の柱掘残、井戸、溝、土坑 遺物：18世紀以降の机製土師器皿など
市5次	1992年9月18日～10月1日	高畑町1319	奈良市教育委員会	遺構：近世～近代にかけての礎石建物、掘立柱建物、溝、土坑、柱礎形 遺物：18世紀後半以降の土器類など
1993	1993年4月3日～6日	高畑町奈良教育大学構内	奈良県立橿原考古学研究所	遺構：中・近世水田遺構、溝、土坑 遺物：中近世の土器散点、奈良時代の瓦散点
市6次	1994年1月6日～19日	高畑町1378	奈良市教育委員会	遺構：鎌倉時代の土坑、江戸時代の土坑、柱穴 遺物：土師器皿・高台付皿・羽釜、須恵器鉢、瓦器類、瓦質土器鉢・石灯、国産陶磁器 巴紋軒丸瓦、丸・平瓦、奈良時代の軒瓦の出土はなし
市7次	1994年8月22日～26日	高畑町1357	奈良市教育委員会	遺構：土坑、小柱穴 遺物：奈良三彩、13世紀中頃の土師器、瓦器、18世紀代の土師器、陶磁器、巴紋軒丸瓦等
1994	1994年12月5日～1995年1月30日	高畑町1352	奈良県立橿原考古学研究所	遺構：明確な遺構は確認できず 遺物：奈良時代の瓦、平安時代の軒丸瓦、鎌倉時代初頭の軒平瓦、中・近世巴紋軒丸瓦等 立会遺物：奈良時代の軒瓦(軒丸瓦62351種、軒平瓦6671型式種別不明)、中・近世の 軒瓦(後奈良草紋軒丸瓦、巴紋軒丸瓦、「新薬師寺」銘軒丸瓦、近世唐草紋軒平瓦)
市8次	1995年1月9日～19日	高畑町1340-1	奈良市教育委員会	遺構：9世紀前半の素掘溝、12世紀中頃の礎石建物2棟と素掘溝、15世紀初頭頃の素掘溝等 遺物：土師器、須恵器、奈良三彩、黒色土器、瓦器、陶磁器、軒丸・軒平瓦、丸・平瓦
1995	1995年8月16日～21日	高畑町奈良教育大学構内	奈良県立橿原考古学研究所	遺構：近代陸軍部隊建物のレンガ積建物基礎、肥溜め、江戸時代の瓦溝、溝(自然流路あり) 遺物：鎌倉時代の瓦、江戸時代の瓦
市9次	1997年12月15日～12月19日	高畑町1358-2他	奈良市教育委員会	遺構：素掘井戸1基、時期不明の柱穴・土坑 遺物：井戸内から近世以降の瓦出上
2003	2003年6月2日～7月5日	高畑町奈良教育大学構内	奈良教育大学	遺構：近代陸軍奈良海隊期の溝状遺構 遺物：近代～戦後にかけての遺物
2008	2008年8月28日～11月28日	高畑町奈良教育大学構内	奈良教育大学	今回報告
2009-1次	2009年6月1日～8月6日	高畑町奈良教育大学構内	奈良教育大学	今回報告
2009-2次	2010年2月15日～2月21日	高畑町奈良教育大学構内	奈良教育大学	今回報告
2010	2010年8月4日～8月20日	高畑町奈良教育大学構内	奈良教育大学	今回報告
2011	2011年1月12日～2月5日	高畑町奈良教育大学構内	奈良教育大学	今回報告

第Ⅱ章 調査の成果

四ヶ年にわたる調査では、新薬師寺旧境内の主要堂舎と考えられる大型基壇建物1棟、これに伴う礎石掘付掘形、南面階段、大型基壇建物に並行する区画溝を検出するなど、既往の調査では未確認であった新薬師寺創建当初の奈良時代の遺構を確認した。また旧境内伽藍廃絶後の中世の土地利用の一端も明らかになるなど、貴重な成果を得た。

検出した遺構は、古代の新薬師寺関連遺構から近代の陸軍奈良聯隊関連遺構に至るまで多岐にわたるが、このうち近世と近代の遺構については、現在整理作業中のためここでは触れず、古代と中世の遺構を中心に述べる。

以下、2008年度調査、2009年度調査、2010年度調査、2011年度調査の順に述べる。なお、調査年度が異なる場合でも、近接した調査区の基本土層については、前年度に一括して記述した。

第1節 2008年度調査

基本土層 調査地は奈良教育大学構内北東部の小字本薬師地内で、天平勝宝8年(756)「東大寺山堺四至図」(第59図)に描かれた七仏薬師堂(金堂)の推定地にあたることから、従来まで未発見であった新薬師寺創建期の主要堂舎の検出が期待された。

現状は特別支援学級校舎跡地で、明治42年の陸軍奈良連隊駐屯以前は水田・畑地であったが、陸軍による大規模な造成・盛土の結果、現在のように周辺が平地化したようである。

平地北縁と東縁には陸軍期の高さ1.5m程の上塁が遮蔽的に巡り、西側は平地が途切れて下段との比高差が2m程の崖面となっている。この崖面も近代以降の改変によるもので、すでに崖面には地山が露出した状態であった。現状では新薬師寺創建当初の礎石はおろか、土壇状の高まりも確認できず、わずかに上塁盛土内に奈良時代の瓦や土器片を確認することで、往時の伽藍を想像するに過ぎない状況であった。

調査は建設予定建物の基礎形状に沿って08A区を設定した後、調査の進展に伴い、調査区を道

加・拡張するなどして、最終的にA～G区の7つの調査区を設定して調査を実施した。

調査区内の基本土層(第14・26・28・29図)は、基壇が段状に残る調査区北半部、大型基壇建物の前庭部ともいうべき調査区南半部、また谷地形が入る09-1B区以南で様相が異なる。

調査区北半部は、近代の上塁が巡る調査区北端と、東端及び調査区北西部が後世の削平による影響が最も少なく、中央部は近代以降の平地造成の際に削り込まれて一段低くなっている。基壇の遺存状況が最も良い09-2D区では、第1層の表土以下、第2層の近代水田耕作土、第3層の近世水田耕作土・床土と続き、現地表下約0.5m、標高121.8mで、削り出し基壇最上面の春日野礫層の地山に至る。相対的に地山が低い西端の08C区では、第3層以下に、第4層の中世遺物包含層、第5層の基壇築成土が続き、標高約119.7～120.2mでにぶい黄褐色シルトの地山に至る。

調査区南半部は、第1層の表土、第2層の近代以降の盛土、第3層の近世・近代水田耕作土、第4層の中・近世水田耕作土以下に、整地層Ⅰ、整地層Ⅱと続き、東端部は標高約120.2mで黄褐色礫混粘質土(春日野礫層)の地山、西端部では標高約120.0mで礫混シルトの地山に至る。整地層Ⅰは調査区全域には認められず、主に南半部と西半部で検出した。13世紀前半代の土師器を含んでおり、廃絶後の片付けに伴う整地層と考えられる。整地層Ⅱは遺物をほとんど含まず精良であることや、大型基壇建物以南に10cm程の均一な厚さで認められることから、創建期整地層と考える。整地層Ⅱの上面の高さは、東端で120.3m、西端で118.8mをはかり、西側に向けて徐々に低くなっている。また整地層ⅡはTK217併行期の須恵器を含んでおり、周辺で円筒埴輪片が採取されていることを踏まえると、寺院造営に伴い周辺の古墳等を削平して造成した可能性が高い。

09-1C・D区は、第1層の表土、第2層の近代以降の盛土、第3層の近世・近代水田耕作土

以下に、瓦を多量に含む洪水堆積層が0.4 m程度の厚さで堆積し、標高約118.4～119.9 mで人頭大の礫を含む地山の砂礫層に至る。09-1 B区と08 G区においては、この砂礫層を地表下約2 mまで確認したが、さらに深くまで連続しており、09-1 B区から10 F区北半部にかけて、谷状の地形が存在するとみられる。なお各調査区内では火災の痕跡を示す焼土層は認められなかった。

検出遺構 検出した主な遺構には、基壇外装に壇正積基壇を有する大型基壇建物S B 001、礎石据付掘形（S X 176・276・300・301・352・353・345）、基壇延石・地覆石列S X 011、南面階段延石列S X 010、雨落溝S D 050、東西溝S D 200、南北溝S D 280、中世掘立柱建物S B 002・003、土坑（S K 283・S X 177）、中・近世素掘小溝群、近代陸軍奈良聯隊建物基礎、戦後米軍接收時トイレ浄化槽施設、レンガ積地下通信ケーブル坑などがある。

以下、古代・中世の遺構を中心に述べる。

(1) 大型基壇建物S X 001（第13・15・16図）

基壇外装は二上山産凝灰岩切石による壇正積基壇で、基壇南面に凝灰岩切石による長大な階段が取付く特異な構造である。基壇は硬質な春日野礫層を削り出す、いわゆる地山削出し基壇で、地形的に低い基壇西半部の地山上に築成土を施す。

築成土は最大で厚さ50cm程確認し、性状の異なる土を厚さ10～20cm単位でほぼ交互に敷き入れ、版築状に固く突き固めている。基壇上に礎石は1点も遺存していなかったが、基壇西半部の基壇築成土上面と地山上面において、礎石据付掘形（壺掘地業）を7基確認した。

建物の平面規模は、検出長で東西約62 m、南北約29 mをはかるが、基壇南端を除く基壇端が調査区外に位置しているため、詳細な平面規模は不明である。基壇高は、雨落溝底面から東端部の基壇最上面まで約1.8 mあり、削平された分を想定すると、本来は2 m近い格別に高い基壇を行っていたと考えられ、七仏薬師金堂と想定される。

基壇延石・地覆石列S X 011（第13・15図）

現状では基壇南東部の凝灰岩延石・地覆石列を残すのみだが、地覆石上面後端部に羽目石を嵌め

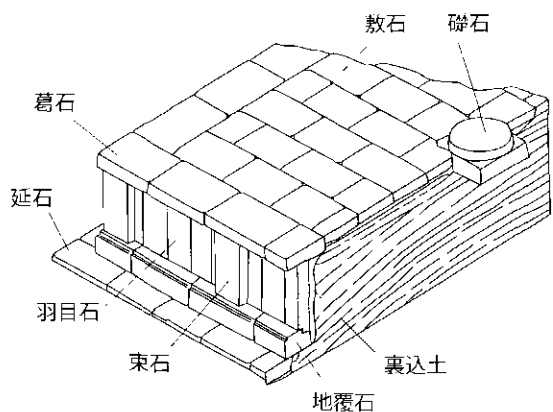
込む仕口を設けることや、地覆石上面に羽目石の破片を残すことから、羽目石とその上部の葛石を併せもつ壇正積基壇であったと考えられる。束石の有無は不明である。残存する基壇延石底面から地覆石上面までは最大で65cmをはかる。

基壇延石は平面長方形の凝灰岩切石を用いており、東西方向で4石確認した。全形が判明する延石は、長さ90cm前後、幅45cm前後、厚さ15cm前後で、地表に露出する上面前端の風化が著しく、地覆石と重複する部分と地中に埋設される下半部は風化を免れている。地覆石も延石と同様に平面長方形の凝灰岩切石で、破片を含めて4石分を確認した。階段取付部の地覆石は、長さ99cm、幅40cm、厚さ30cmで、上面後端部に長さ65cm、幅12cm、深さ約5cmの平面L字形の切り欠きを設けて羽目石との仕口とし、上面前端も平面L字形に切り欠きを施す。東隣の地覆石はやや幅が狭いが、同じく上面後端部に溝状の切り欠きを施し羽目石との仕口を設けている。前端は風化により丸味を帯びる。

羽目石は鎌倉時代にほぼ抜取られたとみられ、地覆石背面にこの際の抜取痕S X 052が溝状に巡る。後述する南面階段の石材も最下段の延石を除いて、ほぼこの時期に抜取られたようである。S X 052から13世紀前半の瓦器が出土した。

基壇外装の石材の据付けは、後述する南面階段が基壇本体と別工程で構築されていることなどから、基壇構築と同時併行に行われたのではなく、基壇本体完成後に据付けられた可能性が高い。

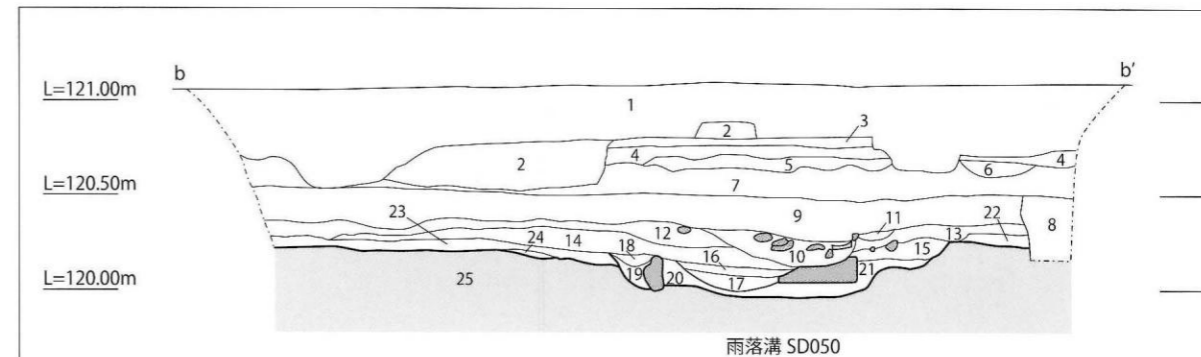
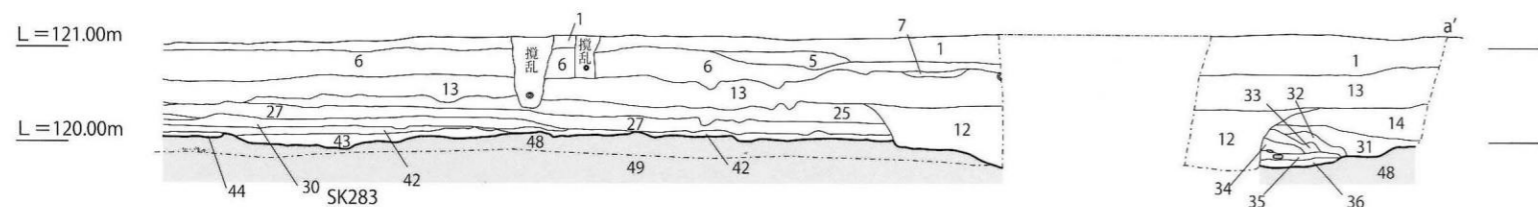
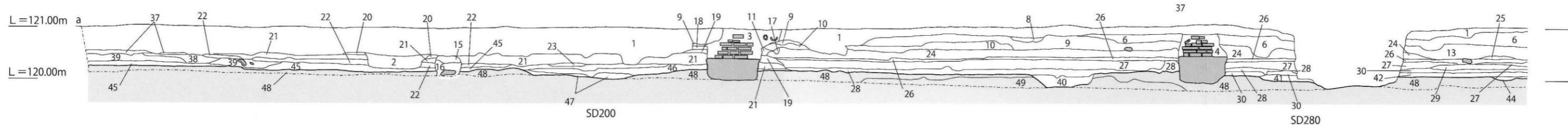
延石は基壇の平面形に沿って溝状に掘形を掘削



第12図 壇正積基壇各部の名称



第13図 遺構平面図①

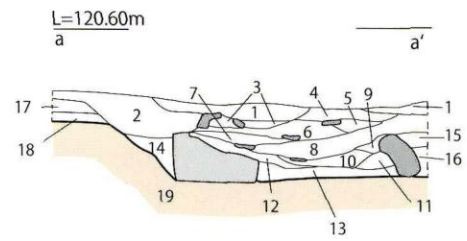


1. 表土・現代造成土
2. 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト, 褐色(10YR4/6)シルトブロック斑入 (直径5cm以下の礫を含む)
3. オリーブ褐色(2.5Y4/3)コンクリート・レンガ積 (近代陸軍期のレンガ積基礎建物布掘基礎)
4. オリーブ褐色(2.5Y4/4)コンクリート・レンガ積 (近代陸軍期のレンガ積基礎建物布掘基礎)
5. 黒色(10YR2/1)砂礫混土 (コークス層)
6. 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルトと黄褐色(10YR5/6)シルトの斑土
7. 灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂 (直径2cm以下のパラスを多く含む)
8. 灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂と明黄褐色(10YR6/6)シルトの斑土
9. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)砂質シルト, オリーブ褐色(2.5Y4/6)シルトブロック 斑入
10. にぶい黄褐色(10YR5/3)シルトと明黄褐色(10YR6/6)シルトの斑土 (近代陸軍期整地土, 締まり非常に強い)
11. 暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒砂 (鉄分の沈着が認められる)
12. オリーブ褐色(2.5Y4/4)細粒砂, 明黄褐色(2.5Y6/8)シルト斑入 (直径5cm以下の礫を底面に敷き詰める, 近代陸軍期の庭園水路)
13. オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質細粒砂 (造成土)
14. 黄褐色(10YR5/6)中粒砂とにぶい黄褐色(10YR5/3)シルトの斑土 (近代陸軍期整地土)
15. オリーブ褐色(2.5Y4/3)砂質シルト (直径10cm以下の礫を多く含む, 暗渠排水溝埋土)
16. 黄褐色(2.5Y5/6)粘質土 (直径10cm以下の礫を多く含む, 暗渠排水溝埋土)
17. 黄褐色(2.5Y5/6)砂礫混粘質土
18. 暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒砂 (炭化物を含む, 水田耕作土)
19. 暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂 (鉄分の沈着が認められる, 水田耕作土)
20. 灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂 (水田耕作土)
21. 褐色(10YR4/4)シルト (鉄分の沈着が認められる, 水田耕作土)
22. にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質シルト
23. 灰黄褐色(10YR5/2)砂質シルト (マンガン斑が認められる)
24. 黄灰色(2.5Y4/1)細粒砂 (直径2cm大の礫を少量含む, 近代水田耕作土)
25. 暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒砂 (水田耕作土)

26. オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂 (水田床土)
27. オリーブ褐色(2.5Y4/4)極細粒砂 (水田耕作土)
28. オリーブ褐色(2.5Y4/3)砂質シルト (水田床土)
29. オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂 (鉄分の沈着が認められる, 炭化物を少量含む)
30. 黄褐色(2.5Y5/4)砂質シルト
31. 灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂 (水田耕作土)
32. 黄褐色(10YR5/6)砂質シルト, 灰黄褐色(10YR4/2)シルト斑入 (直径2cm以下の礫を含む)
33. オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂
34. 黄褐色(10YR5/6)細粒砂, 灰黄褐色(10YR4/2)シルト斑入
35. オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂
36. オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルトと黄褐色(10YR5/6)シルトの斑土
37. 褐色(10YR4/4)シルト (鉄分の沈着が認められる, 土器片・瓦片を多量に包含する, 堂舎倒壊後の整地層)
38. にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルト (締まり強い, 土器・瓦片を多く含む)
39. にぶい黄褐色(10YR5/4)砂礫混粘質土 (直径5cm以下の礫を多く含む, 瓦片を包含する)
40. にぶい黄褐色(10YR5/3)砂礫混粘質土 (土坑埋土)
41. 黄褐色(2.5Y5/4)砂質シルト, オリーブ褐色(2.5Y4/6)中粒砂斑入 (SD280埋土)
42. 明黄褐色(2.5Y6/6)粘質土
43. 明黄褐色(2.5Y6/6)砂礫混粘質土 (直径5cm以下の礫を少量含む, SK283埋土)
44. 黄褐色(2.5Y5/3)砂礫混粘質土
45. 黄褐色(2.5Y5/4)砂質シルト, 褐色(10YR4/4)シルトブロック斑入 (直径5cm以下の礫を含む, 整地層)
46. 黄褐色(10YR5/6)砂質シルト (土器・瓦片を含む, 整地層)
47. にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質シルト (SD200埋土)
48. 黄褐色(2.5Y5/6)礫混シルト (こぶし大の礫多く含む, 春日野礫層, 地山)
49. にぶい黄色(2.5Y6/3)シルト・黄褐色(10YR5/6)極細粒砂互層 (地山)

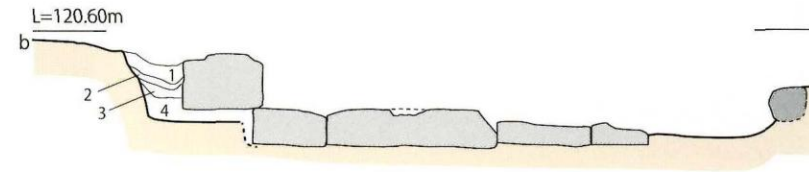
1. 褐色(10YR4/1)礫混粘質土 (こぶし大の礫, レンガ片含む, 現代盛土)
2. 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト, 黄褐色(10YR5/8)シルトブロック斑入 (炭化物多く含む)
3. 黒褐色(2.5Y3/1)砂質土 (直径1~2cm大の礫を含む, コークス層)
4. オリーブ褐色(2.5Y4/3)粘質土 (レンガ片含む)
5. 明黄褐色(2.5Y7/6)シルト, 花崗岩バイラン土 (近代陸軍期整地土)
6. 5と同一層
7. 灰黄褐色(10YR5/2)砂質シルト (旧水田耕作土)
8. にぶい黄褐色(10YR6/4)シルトと灰白色(10YR8/2)シルト斑土
9. 灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルト (旧水田耕作土)
10. にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルト (瓦片を多く含む)
11. にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質シルト
12. 黄褐色(10YR5/6)シルト (よく締まる, 土師器皿小片を多く含む)
13. 褐色(10YR4/4)シルト (こぶし大の礫, 凝灰岩片・粉末含む)
14. 褐色(10YR4/4)砂質シルト (土師器小片多量に含む)
15. にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルト (石材抜き取り後の埋土)
16. 褐色(10YR4/6)砂質シルト (SD050埋土)
17. にぶい黄褐色(10YR5/4)細砂 (SD050埋土)
18. 褐色(10YR4/4)砂質シルト (直径5cm大の礫を含む, 側石裏込土)
19. 黄褐色(10YR5/6)シルト (側石裏込土)
20. 褐色(10YR4/6)砂質シルト(側石裏込土・置土)
21. にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト, 黄褐色(10YR5/6)シルト斑土 (花崗岩バイラン土, 延石置土・裏込土)
22. にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土 (階段築成土)
23. 黄褐色(10YR5/6)シルト(整地層)
24. にぶい黄褐色(10YR6/4)粘質土(整地層)
25. 黄褐色(10YR5/6)礫混粘質土 (春日野礫層, 地山)

第14図 08A区南壁・08B区西壁土層断面図

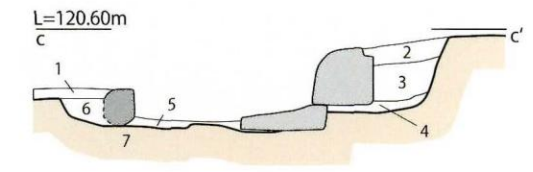


1. にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト
2. 褐色(10YR4/4)砂混粘土質シルト (踏石抜取後埋土)
3. 黄褐色(10YR5/6)シルト (凝灰岩細片含む)
4. 褐色(10YR4/6)シルト, 灰黄褐色(10YR5/2)砂質土斑入
5. 褐色(10YR4/4)シルト (雨落溝SD050埋土)
6. 褐色(10YR4/4)砂礫混シルト (雨落溝SD050埋土)

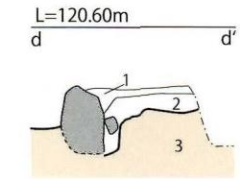
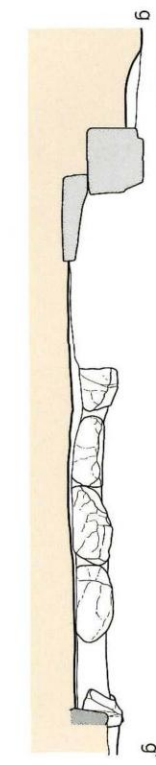
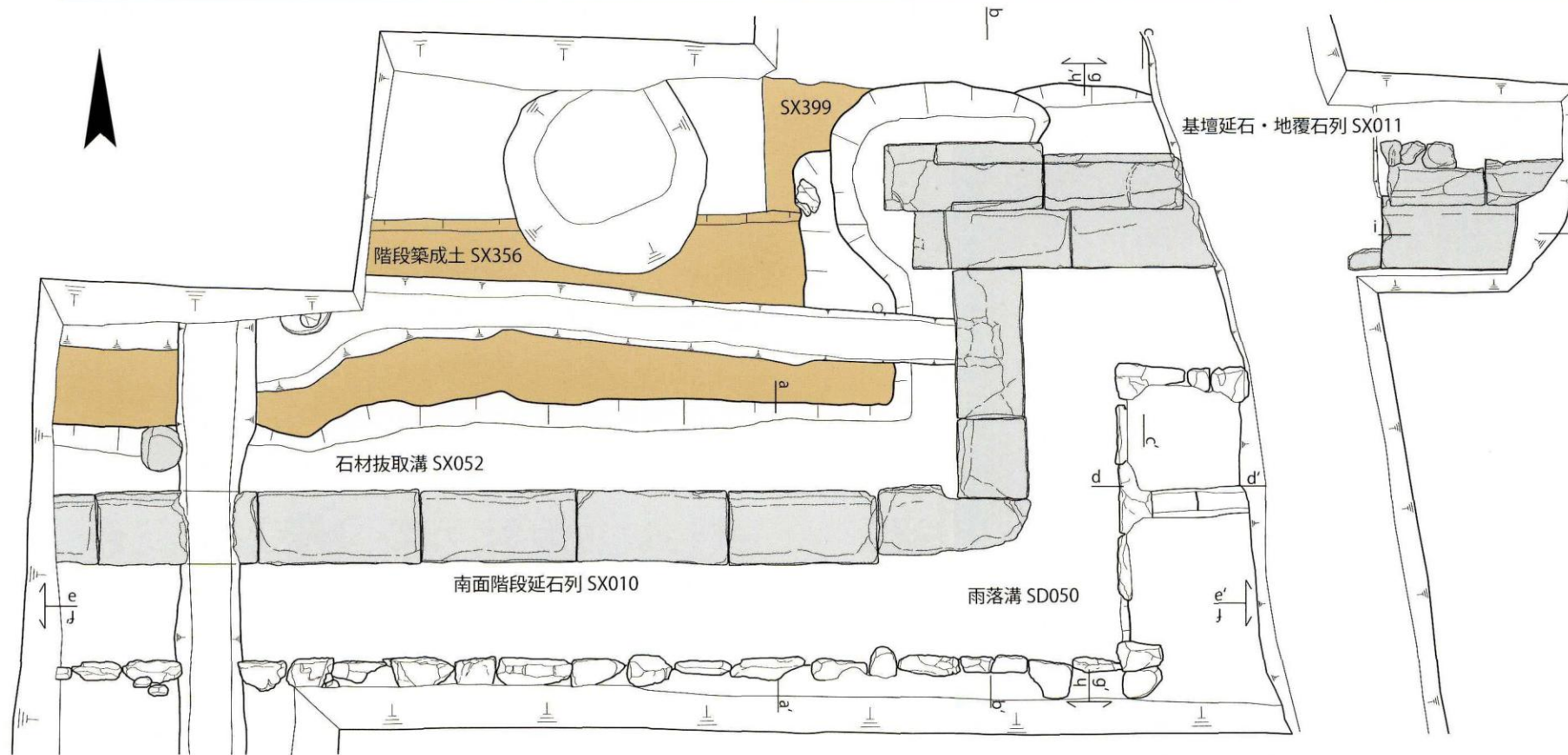
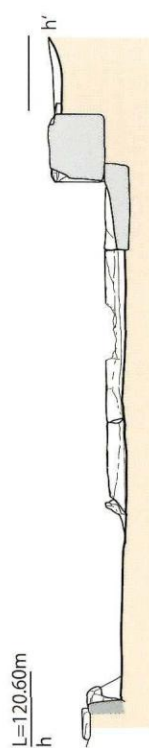
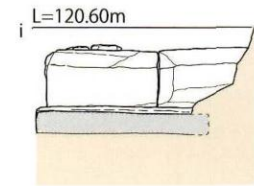
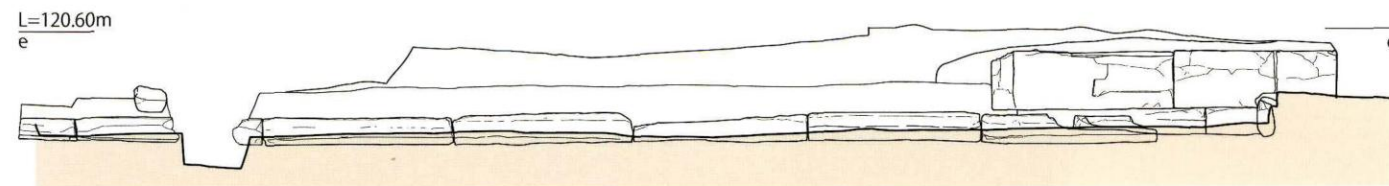
7. 褐色(10YR4/6)シルト 灰黄褐色(10YR5/6)シルト斑入 (雨落溝SD050埋土)
8. にぶい黄褐色(10YR4/3)礫混粘土質 (雨落溝SD050埋土)
9. にぶい黄褐色(10YR5/3)細粒砂 (雨落溝SD050埋土)
10. 黄褐色(10YR5/6)細粒砂, 灰黄褐色(10YR5/2)シルト斑入 (雨落溝SD050埋土)
11. 褐色(10YR4/4)細粒砂, 灰黄褐色(10YR5/2)シルト斑入 (雨落溝SD050埋土)
12. 黄褐色(10YR5/6)砂質シルト (雨落溝SD050埋土)
13. 黄褐色(2.5Y5/4)粘土質シルト (締め強い 置土)
14. オリーブ褐色(2.5Y4/6)シルトと暗灰黄色(2.5Y5/2)シルトの斑土 (延石裏込土)
15. 黄褐色(2.5Y5/4)砂礫混粘土質シルト (側石裏込土)
16. にぶい黄色(2.5Y6/4)シルト (側石裏込土)
17. にぶい黄褐色(10YR4/3)砂礫混粘土質 (凝灰岩粉末含む 階段築成土)
18. 黄褐色(10YR5/6)粘質土 (締め強い 階段築成土)
19. 黄褐色(10YR5/6)砂礫混粘土質 (春日野礫層 地山)



1. 灰黄褐色(10YR4/2)シルト (羽目石抜取後の埋土)
2. にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質シルト (羽目石抜取後の埋土)
3. にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルト (羽目石抜取後の埋土)
4. 黄褐色(2.5Y5/6)砂礫混粘土質 (地覆石裏込土・地覆石底面置土)

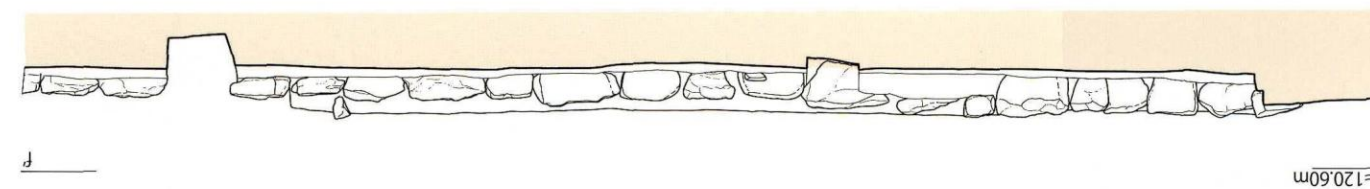


1. 褐色(10YR4/4)中粒砂, 暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト斑入 (整地層)
2. 褐色(10YR4/6)シルト (羽目石抜取後の埋土)
3. オリーブ褐色(2.5Y4/4)細粒砂, 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト斑入 (凝灰岩粉末多く含む 地覆石裏込土)
4. 黄褐色(2.5Y5/6)粘質土, 黄灰色(2.5Y6/1)細粒砂斑入 (凝灰岩粉末多く含む 地覆石底面の置土)
5. 黄褐色(2.5Y5/3)砂礫混粘土質 (延石底面の置土)
6. オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂 灰白色(2.5Y7/1)シルトブロック斑入 (側石裏込土)
7. 黄褐色(10YR5/6)礫混粘土質 (春日野礫層 地山)



1. 褐色(10YR4/4)砂質シルト (整地層)
2. にぶい黄褐色(10YR5/4)礫混粘土質 (側石裏込土)
3. 黄褐色(10YR5/6)礫混粘土質 (春日野礫層 地山)

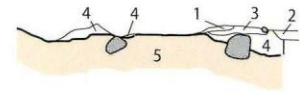
■ : 凝灰岩
■ : 階段築成土・裏込土



第15図 SB001 基壇詳細図①

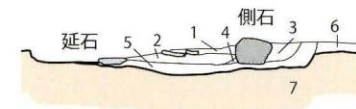
0 (1:40) 2m

L=120.60m
j j'



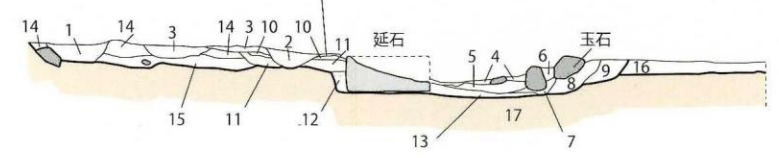
1. にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質シルト (SD050側石採取後埋土)
2. 褐色(10YR4/4)粘土質シルト (SX256埋土)
3. 黄褐色(10YR5/6)粘質土 (凝灰岩粉末片多量に入る、側石裏込土)
4. 黄褐色(10YR5/6)粘質土 (創建時整地層)
5. 黄褐色(2.5Y5/6)礫混シルト (地山)

L=120.60m
k k'



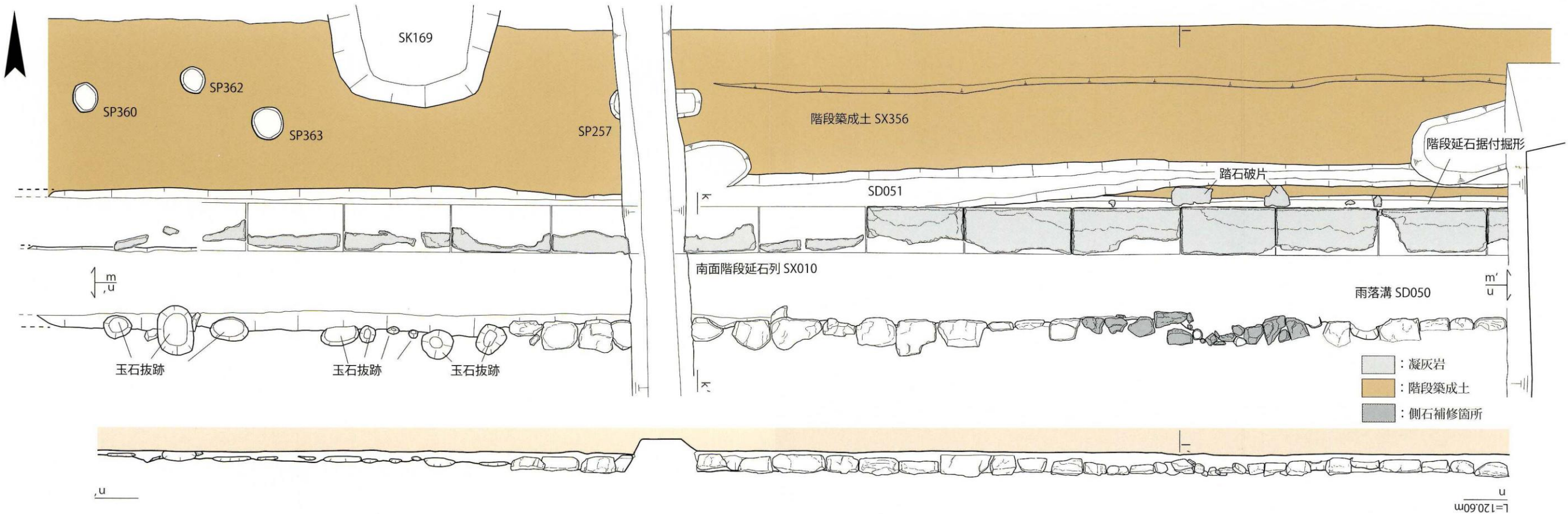
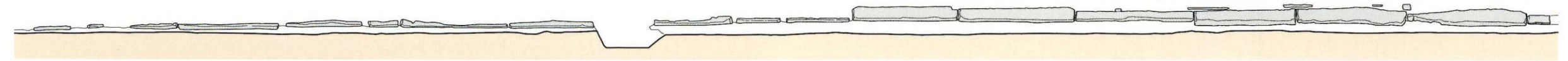
1. 褐色(10YR4/4)シルト (直径1.0cm以下の砂礫含む SD050埋土)
2. にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質極細粒砂 (SD050埋土)
3. 褐色(10YR4/4)粘質土 (側石裏込土)
4. 褐色(10YR4/6)粘質土・灰黄褐色(10YR4/2)シルト (側石前面おさえ土)
5. 黄褐色(10YR5/6)砂礫混粘質土 (置土)
6. 黄褐色(10YR5/8)粘質土、黄褐色(10YR5/8)礫混粘質土ブロックを含む (整地層)
7. 黄褐色(10YR5/8)礫混粘質土 (地山)

L=120.60m
l l'



1. にぶい黄褐色(10YR4/3)砂礫混粘質土 (地山ブロック斑入、素掘小溝)
2. にぶい黄褐色(10YR4/3)砂礫混粘質土 (凝灰岩粉末多量を含む SD051埋土)
3. 褐色(10YR4/6)極細粒砂 (平安時代以降の土師器細片含む SB001鹿絶後の砂層)
4. 褐色(10YR4/4)砂礫混シルト
5. にぶい黄褐色(10YR5/4)極細粒砂 (SD050埋土)
6. オリーブ褐色(2.5Y4/6)シルト (修築後側石裏込土)
7. 黄褐色(10YR5/6)細粒砂、灰黄褐色(10YR5/2)細粒砂含む (修築後の側石裏込土)
8. 褐色(10YR4/6)砂礫混粘質土 (凝灰岩粉末少量含む 修築後の側石裏込土)
9. 褐色(10YR4/4)砂礫混粘質土シルト (創建期の側石裏込土)
10. にぶい黄褐色(10YR4/3)砂礫混粘質土 (凝灰岩粉末多量を含む)
11. 褐色(10YR4/4)砂礫混粘質土 (凝灰岩粉末多く含む)
12. 黄褐色(10YR5/6)粘質土 (地山ブロック斑入 凝灰岩粉末少量含む 延石裏込土)
13. 黄褐色(10YR5/6)粘質土 (凝灰岩粉末少量含む 延石下置土)
14. 褐色(10YR4/4)砂礫混粘質土 (階段築成土)
15. にぶい黄褐色(10YR5/4)砂礫混粘質土 (地山ブロック斑入 階段築成土)
16. オリーブ褐色(2.5Y4/6)シルト (整地層)
17. オリーブ褐色(2.5Y4/6)砂礫混シルト (地山)

L=120.60m
m



第16図 SB001 基壇詳細図②

した後、底面に置土して据付けている。裏込は厚さ約5～10cm単位で版築状に硬く突き固めている。地覆石の据付けは、基壇裾を断面L字状に削り込み、延石上面レベルまで置土した後に据付けており、裏込土は延石同様に版築状に固く突き固められている。裏込土には、凝灰岩粉末や10cm未満の凝灰岩片が多く含まれるが、これらは石材据付け時の最終調整で生じた加工屑とみられる。地覆石背面は風化を免れており、ノミ状の工具痕が遺存していた。工具痕の幅は約3cm程度で、断面形から判断して平ノミと推定される。

南面階段延石列 S X 010（第15・16図） 検出当初はそのあまりの長さ故に、S X 010を基壇本体の延石列と考え、これに取付くS X 011を調査区東側に延びる回廊基壇と推測したが、調査が進むにつれ、① S X 011の基壇高が1.8m以上あり、これを回廊基壇とするには高すぎると判断されたこと、② S X 010の築成土の範囲が、階段の張出しと階段の幅に一致すること、③ 基壇延石側面にS X 010が従属的に取付くこと、④ 基壇本体の裏込土を切り込んでS X 010の築成が行われていること、などの理由から、最終的にS X 011が基壇本体で、一方のS X 010は基壇南辺に取付く階段施設との判断に至った。最下段の踏石が部分的に残るが、耳石は失われていた。

階段の張出し幅は、基壇地覆石前面から階段の延石前面まで2.16mあり、風化を免れた階段延石上面後端部分から階段地覆石前面のラインを推定すると、基壇地覆石前面からちょうど1.8m(6尺)となる。階段幅は、階段南東隅の延石側面から、08 B区内で検出幅6.1m、途中未調査区を挟み、雨落溝が途切れる調査区西端まで検出幅で20.2

mあり、さらに西側に連続するとみられる。未調査区にも同様の延石列が連続するとすれば、階段幅は50mを超えることになり、国内では類をみない長大な階段になることが予想される。

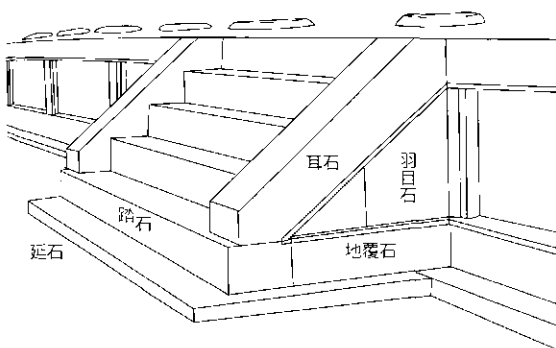
階段延石は凝灰岩切石の外面を揃えて並べたもので、東西で21石、南北で2石確認した。基壇延石の石材とほぼ同規格で、地表に露出する上面前端の風化が著しく、踏石と重複する部分及び地中に埋設される下半部は風化を免れていた。階段南東隅の延石は、背面を長さ55cm、幅7cmの平面L字形に切り欠き、階段取付部から延びる延石を嵌め込んでいる。嵌め込む側の延石は、階段の張出し幅に合わせて半分程度の長さに切り揃えられている。なお階段南東隅の延石は隅部が丸味を帯びているが、当初からのものではなく、風化によるものである。

階段踏石はほぼ全て失われているが、最下段の踏石が延石上面後端にモナカの皮のように薄く残っていた。これにより階段延石と最下段の踏石との重複幅は3cm前後とわかる。

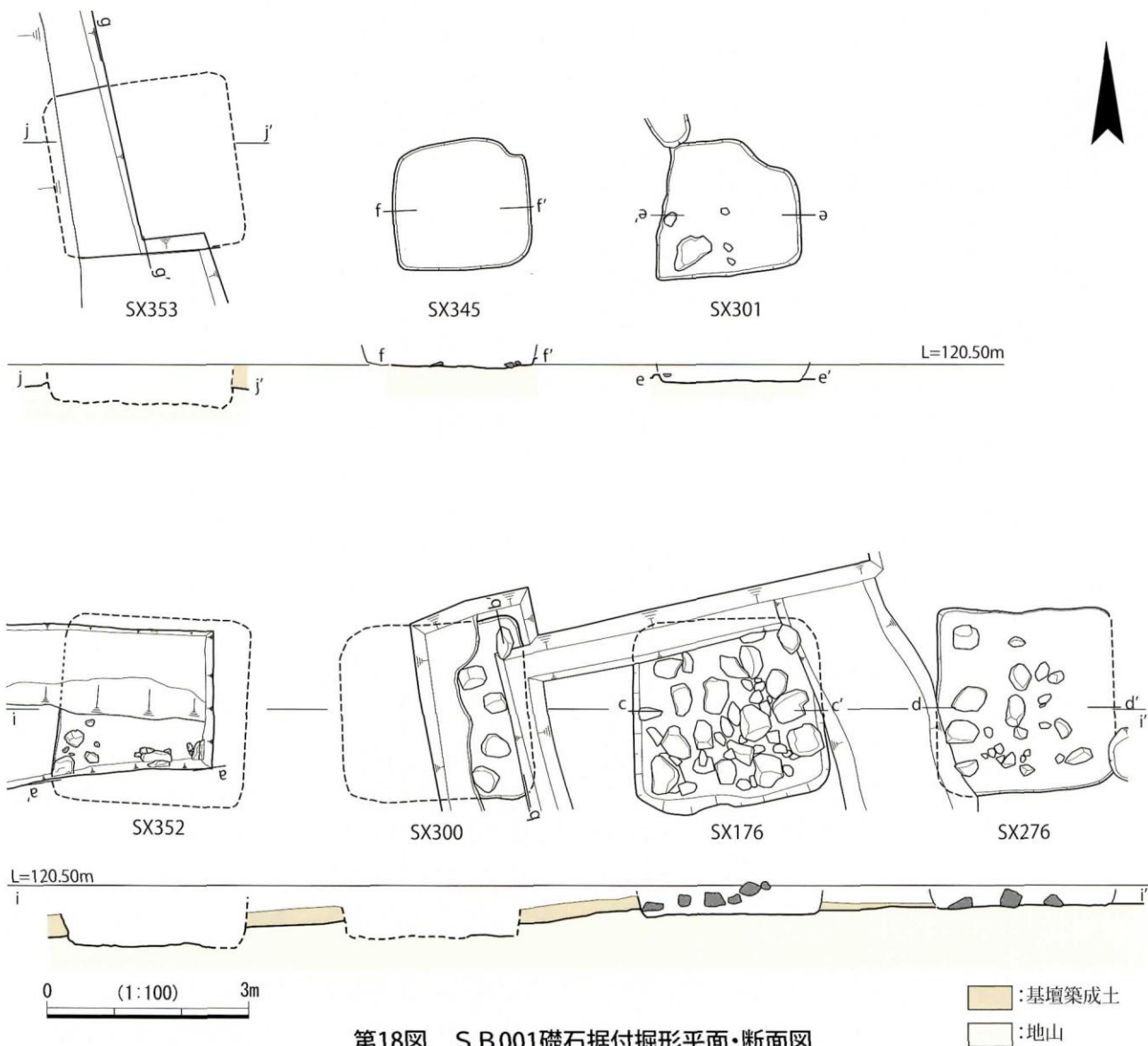
階段延石の据付けは、先述のように基壇延石据付け後に行われており、基壇延石側面に階段延石の小口が直角に取付く。基壇延石、階段延石、雨落溝側石の据付けは、ほぼ一連の作業で行われたとみられる。階段築成土が基壇本体地覆石の裏込土を切り込むことから、階段の構築は基壇本体の基壇外装がほぼ完成した段階で行われたと考えられる。また先述のように、階段築成土の範囲が階段の張出し幅と階段の幅に一致すること、地山削出しの段部が確認できないことから、階段の段部は地山削出しでなく、基底部から上部まで築成土で構築したと想定される。

階段築成土は、性状の異なる4種類程の土を、厚さ3～5cm単位でほぼ交互に敷き入れて固く突き固めており、丁寧な版築によるものである。

今回検出した基壇延石・地覆石、また南面階段延石には、据え直した形跡は確認できないことから、創建当初の原位置を保っていると考えられる。ただ基壇外装の裏込土や階段築成土、礎石据付掘形内からは大型基壇建物の創建時期を特定し得る遺物は出土しなかった。



第17図 階段各部の名称



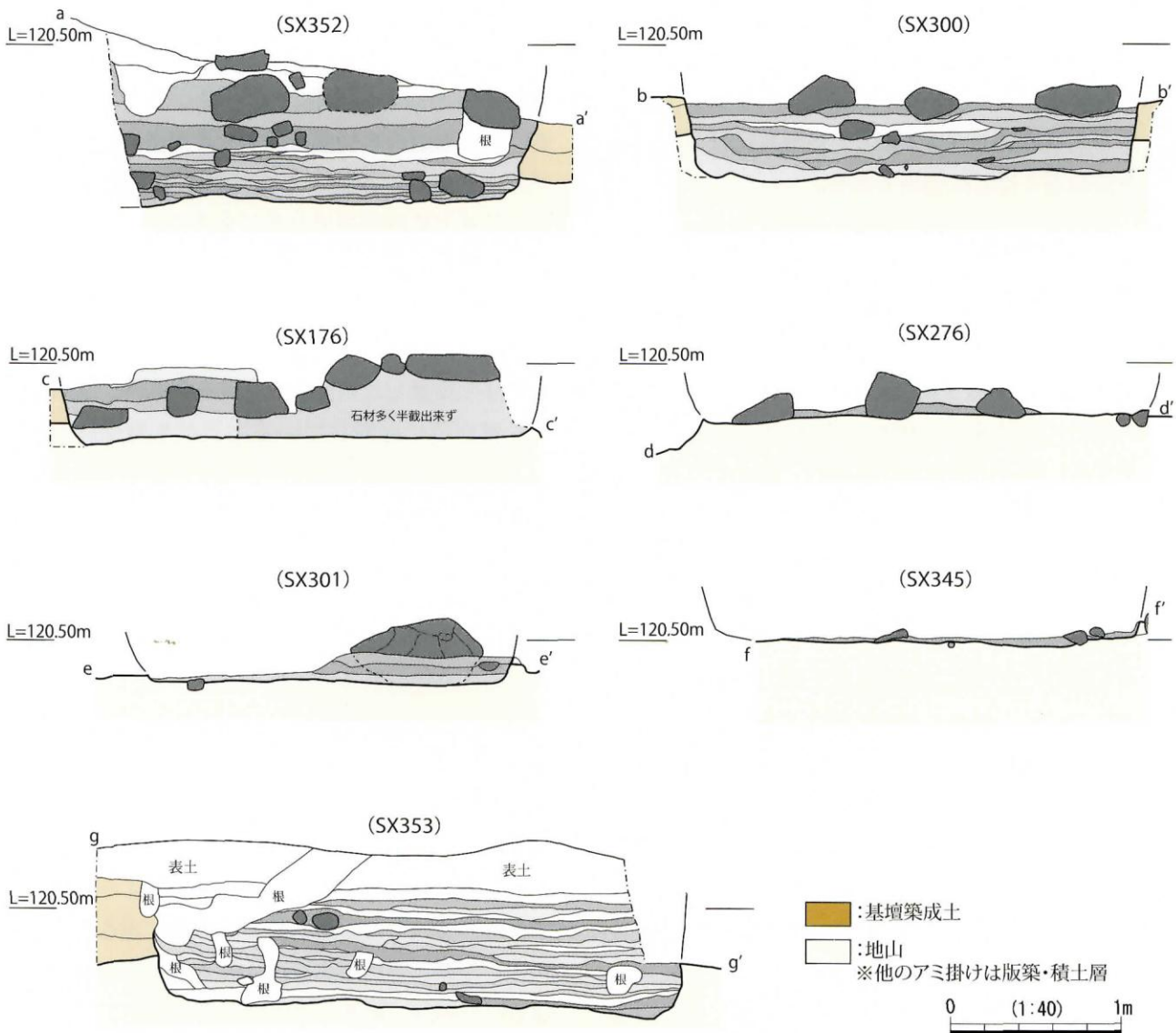
第18図 S B001礎石据付掘形平面・断面図

雨落溝 S D 050 (第 15・16 図) 基壇本体と階段周囲を巡る雨落溝である。調査区東側の遺存状況は良好だが、西側は中・近世の水田耕作に伴う削平や、近代陸軍奈良聯隊期の攪乱で、玉石の抜穴と溝底付近を残すのみである。

溝幅は約 60cm、深さ約 15cm で、側石に自然石の玉石を据え、溝底面は玉石を敷かず、地山あるいは整地土を直接底面としている。溝底のレベルは東端で 119.9 m、西端で 119.6 m をはかり、西側が 30cm 程低いことから、雨水は東から西に流れたと考えられる。側石の裏込土は版築を伴わないが固く締まる。側石は階段南東隅から西に 26 m 付近で、幅 2 m にわたり補修しており、玉石の抜けた箇所に小礫と粘土を充填していた。補修箇所は大型基壇建物の推定中軸線上に位置する

ため、側石に荷重がかかる施設、たとえば雨落溝に横架する通路状の施設を想定して周辺を入念に精査したが、その痕跡は確認出来なかった。遺物は出土していないため、補修の時期は不明である。

雨落溝からは、奈良時代から平安時代にかけての施釉陶器 (奈良三彩、緑釉陶器)、土師器、須恵器、瓦、乾漆像表面の破片とみられる木屎漆片、金属製品など数多くの遺物が出土した。このうちのほとんどが 5 mm 程度に細片化した土師器の皿、須恵器、瓦類で、土師器皿は微細ながらも遺物整理箱で 20 箱分も出土した。土師器皿・須恵器は 10 世紀中頃を下限としており、この頃に雨落溝は機能を失ったと想定される。瓦類は建物の屋根から落下・反転した状況を示すとまでは言えず、廃絶後の片付けに伴い掻き出された可能性も



第19図 S B001礎石据付掘形土層断面図

あるが、出土位置・層位からみて、廃絶直前まで基壇建物の屋根を飾っていた瓦とみて誤りないであろう。奈良時代中頃から後半に位置付けられる。

ところで『日本紀略』応和2年(962)八月条に「今日。大風雨。大和。(中略)新薬師寺七仏薬師堂一字并数字雑舎(中略)多以顛倒。京中殊愁」とあり、この際の大風で新薬師寺金堂をはじめ、東大寺南大門などの京内の多くの堂舎が倒壊したという¹⁾。季節的にみて台風であろう。雨落溝SD050と後述の東西溝SD200はともに10世紀中頃に機能を停止するとみられ、文献資料にみる新薬師寺の罹災時期に見事に一致する。

礎石据付掘形 SX176・276・300・301・345・352・353 (第18・19図) 礎石据付掘形は基壇西半部の基壇築成土上面及び地山上面で7基礎

認した。いずれも礎石下部を平面隅丸方形に壺掘りし、版築による壺地業(地盤改良)を行っている。掘形の平面規模は一辺2~3mで、SX301・345が他に比べて小さい。掘形規模の違いは、建物内の柱位置や礎石の大きさに起因するのかもしれない。掘形底面のレベルは東から西に向かうにつれて徐々に深くなるが、これは地山が堅固な基壇東半部で地盤改良を行う必要がなく、やや軟弱な地盤の西半部において、より深いレベルから地盤改良を行う必要があったためと考える。基壇東半部の同一遺構検出面上において、礎石据付掘形が検出されなかったのはこの理由による。掘形底面から30~70cm程上部までは、厚さ3~5cm単位の丁寧な版築を施し、それより上部は人頭大の地固めの礫を交えながら、10~20cm

単位でやや厚めの版築状に締め固めている。版築は明黄褐色粘質土、褐色粘質土、褐灰白色シルト、灰色砂質シルトの性状の異なる土を、ほぼ交互に敷き入れて突き固めており、乾燥時にはツルハシを跳ね返すほどに堅固である。

礎石据付掘形間の柱間は、桁行で4.2～4.5 m (14～15尺)、梁行は3.9～4.2 m (13～14尺)をはかる。建物の復元は第V章で述べる。(島軒)

(2) 大型基壇建物以南の遺構

東西溝 S D 200 (第20図) 東西方向の素掘りの溝で、雨落溝 S D 050 から南20mに位置し併走する。調査区を東西に貫通し、検出した長さは36mに達する。2011年調査でその延長を検出しており、そこまでを含めると44mとなる。さらに東西に延びるものと考えられる。溝は幅が0.65～1.95mをはかるものの、基本土層の項においても触れたように、耕地化した際の削平や近代陸軍期に大きく地形の改変を受けており、溝自体もある程度削平を受けているものと考えられる。このため本来はさらなる深さと幅が見込まれる。おそらく2mほどの幅があったものと推定される。遺構の断面形は皿状を呈し、検出面からの深さは0.10～0.25mをはかる。溝は主要伽藍廃絶後の整地上を除去した面で検出した。寺院造営時の整地土を切って溝を掘削するようである。この点は雨落溝 S D 050 と同様の状況を示す。

溝の堆積状況であるが、流水を示すような堆積や、滞水したような堆積は認められず、自然に埋没したと考えられる。埋土中に人頭大の礫が若干含まれていたが、原位置を保たない状態であった。また凝灰岩も埋土からは出土していない。これらのことからこの溝には S D 050 と同様の凝灰岩延行や側石などの施設は伴わない可能性が高いと思われるが、一定の削平を受けていたため、すでに抜取られている可能性も否定できない。

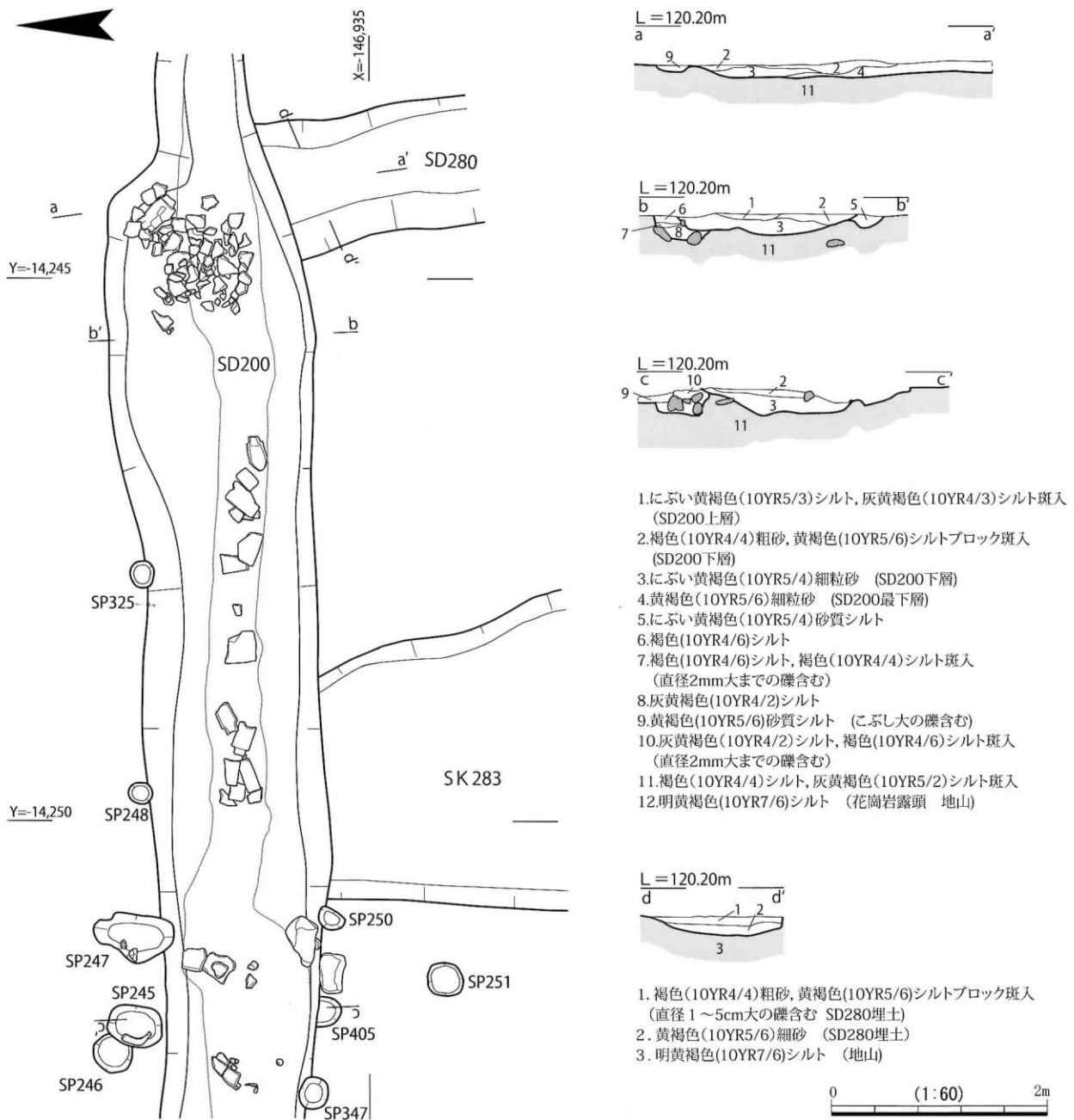
溝底の高低差であるが、一定の傾斜があるというものではなく、地点によって微妙な高低差がある。溝の機能時からの状態なのかどうか判然としないが、中央部分が東西両端に比べ若干低い。底面の標高は溝の東端で120.00 m、2011年度調査で検出した西端で119.75 mをはかることから

その比高差0.25 m、全体的には地形どおり東から西へ緩やかに傾斜を持つようである。

溝の各地点から遺物がまとまって出土している。中でも溝の中央部付近で瓦片が密集する地点が認められる。後述する南北溝 S D 280 との合流点付近とその西側で丸瓦が東西方向に列をなすように出土している。前者は破損した瓦が廃棄された状態で出土しており、溝の機能停止後に片付けられた可能性が考えられる。後者については前者同様に廃棄した可能性も考えられるが、丸瓦のみを意図的に配置しているようにも見受けられる。出土状況からは屋根の軒先から落下したような状態を示すものではないと思われるが、配置からは意図的な行為とも考えられよう。瓦以外の出土遺物としては須恵器小壺や奈良三彩などが認められる。これらの遺物は瓦も含め、出土状況から主要伽藍廃絶時あるいは廃絶後に、周辺の整地に伴うぼみなどに片付けられたものとみなされる。

溝の性格としては大型基壇建物と併行することや空間的位置関係などから、互いに密接な関係をもつ寺院に関わる遺構として理解できよう。調査できた範囲内では東西方向に直線的に走ることが判明したが、それが調査区外へどのような形で延びていくのか、あるいはいずれかの地点で屈曲するのか、これについては現時点では不明といわざるを得ない。寺院造営のどの段階に掘削された溝なのか、あるいは大型基壇建物との厳密な意味での時間差については、互いに遺構構築時を示す遺物の出土が認められないため不明である。位置関係からは綿密な計画のもとに配置された溝である可能性が高いものと考えられる。溝の堆積状況からは、廃絶するまでの間は常に浚渫され、清浄な状態を保っていたと考えられる。

南北溝 S D 280 (第20・23・24図) 東西溝 S D 200 に「T」の字状に合流する南北方向の溝である。S D 200 検出段階で南に別の遺構があることが判明しており、その部分にトレンチ(08 F区)を設定して調査を行なった。このため溝の行方は把握できたものの、トレンチ幅いっぱい遺構が認められるため、遺構の肩はさらに広



第20図 SD200・280平面・断面図

がる可能性もある。検出できた遺構の規模は、幅が1.2～2.0 m、長さは13 mをはかる。長さについては2009年度調査区にも延長部が検出できており、それを含めると27 m。さらに続く可能性があるものの、SD280は交差するNR503に切られているため、調査区内では行方を確かめることができなかった。溝は凝灰岩などの出土がみられなかったことから、SD200同様素掘りであると考えられる。遺構の断面形は皿状を呈する。検出面からの深さは0.18～0.32 mをはかり、北側が高く南側に傾斜をもつ。溝の堆積状況は細

砂から粗砂の堆積が認められ、SD200付近はその埋土とも共通の特徴を示す。つまり溝の埋没が同時期という可能性が高い。

溝の検出面であるが、2008年度調査時はSD200と同一面で検出したが、2009年度調査では狭いトレンチ内での調査であったため、厳密にはわからないが、同一遺構検出面と考える。

東西溝SD200との関係であるが、平面的に直交しないこと、埋土が共通することなどから同時に存在した遺構であると考えられる。これと併行して西側5.5 mの位置に溝状の落ち込みが認め

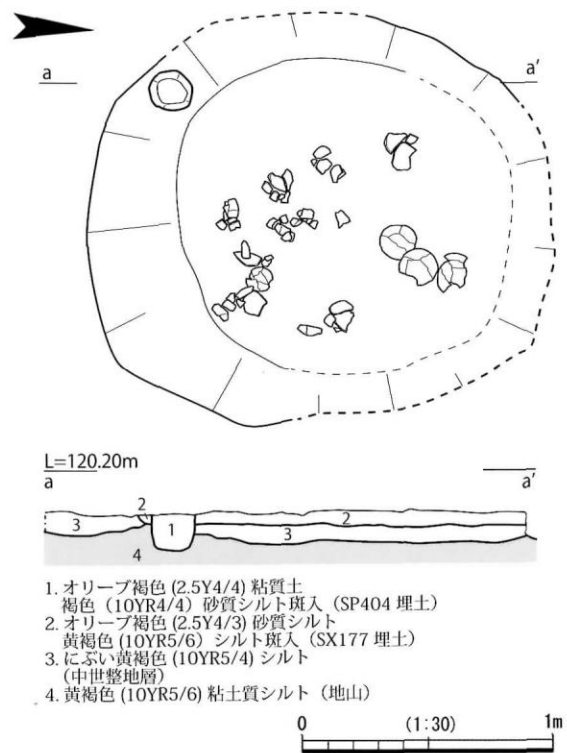
られる。これをS K 283として調査した。これらの遺構は大型基壇建物の推定中軸線付近に存在することから、併走するならば重要な意味を持つてくることになるが、調査範囲が狭く、厳密にはこれらの遺構の関係について結論は出せない。

S D 280からは瓦片を中心に遺物の密集するところが各所で認められた。2009年度調査区の遺物出土状況も含めてここで述べることにする。

08F区のほぼ全域からと、09-1C区から多量の遺物が出土しており、軒丸瓦や軒平瓦を含む瓦類が認められた。出土状況が乱雑であることから、廃棄されたものと推定される。意図的な配置を示すような状況ではなかった。S D 200に比べ軒丸瓦や軒平瓦が目立つことも特徴といえる。また、S D 200でも多数出土した須恵器小壺がこの遺構からも一定量出土した。一部には自立した状態での出土も認められたが、その場に埋納するような積極的な証拠は認められない。なお、出土した瓦が燻されたような印象を受けたが、被熱して変色したり、変形したような瓦は認められなかった。

出土遺物は先に触れたS D 050、S D 200と共通するものが多く、遺物からも遺構の埋没が同時期であると推定される。溝の掘削時期を示すような遺物の出土はなく、また滞水するような堆積が認められなかったことから、溝が機能していた段階では、常時清浄に保たれていたと推定される。**土坑S K 283**(第20図) 南北溝S D 280の西5.5 mに位置する溝状の遺構であるが、検出できた範囲が狭く全容は不明である。検出できた規模は東西2.9 m、南北3.0 mで、東西溝S D 200と切り合う形となるが、この溝の存在を認識したのがS D 200掘削後で、S D 200の南側の肩にかかっていることが判明したため、厳密にはその前後関係は不明である。S D 280と同じように切り合わずに同時に存在した可能性も考えられる。遺構の断面形は皿状を呈し、検出面からの深さは0.2 mと浅い。なお溝底の高さはS D 200・280と近似値を示していることから、これらと関連する溝の可能性は高いものと考えられよう。

この遺構からは時期の判明する遺物が出土していないため、出土遺物から遺構の年代を判断でき



第21図 S X177平面・断面図

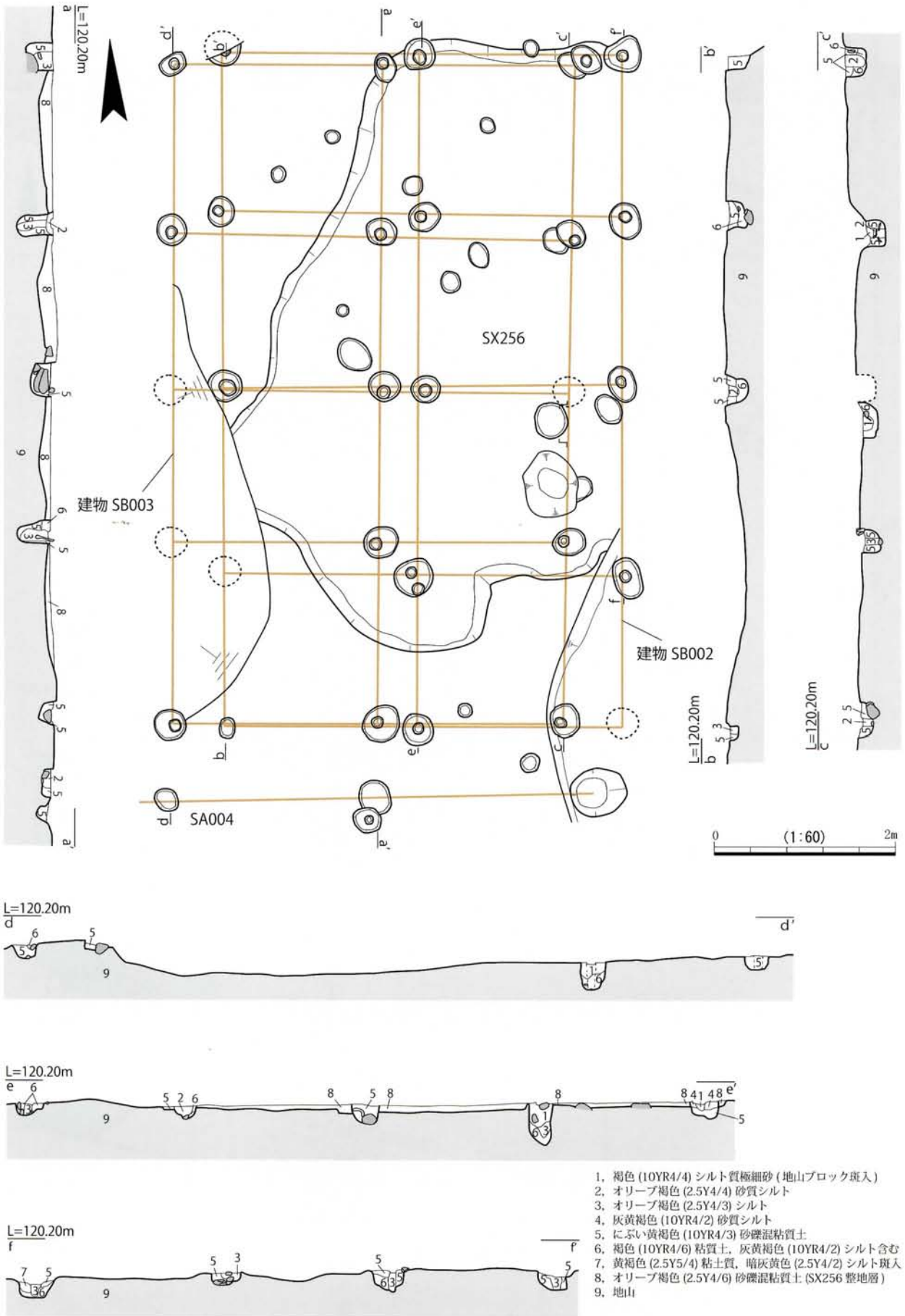
ないが、先述した理由からS D 200・280と同時期の遺構の可能性があると推測される。

(3) **中世の遺構** 雨落溝S D 050から東西溝S D 200までの広い空間には、中世に属するとみられる掘立柱建物のほか、小規模な土坑やピットと思われる小穴が多数検出できた。

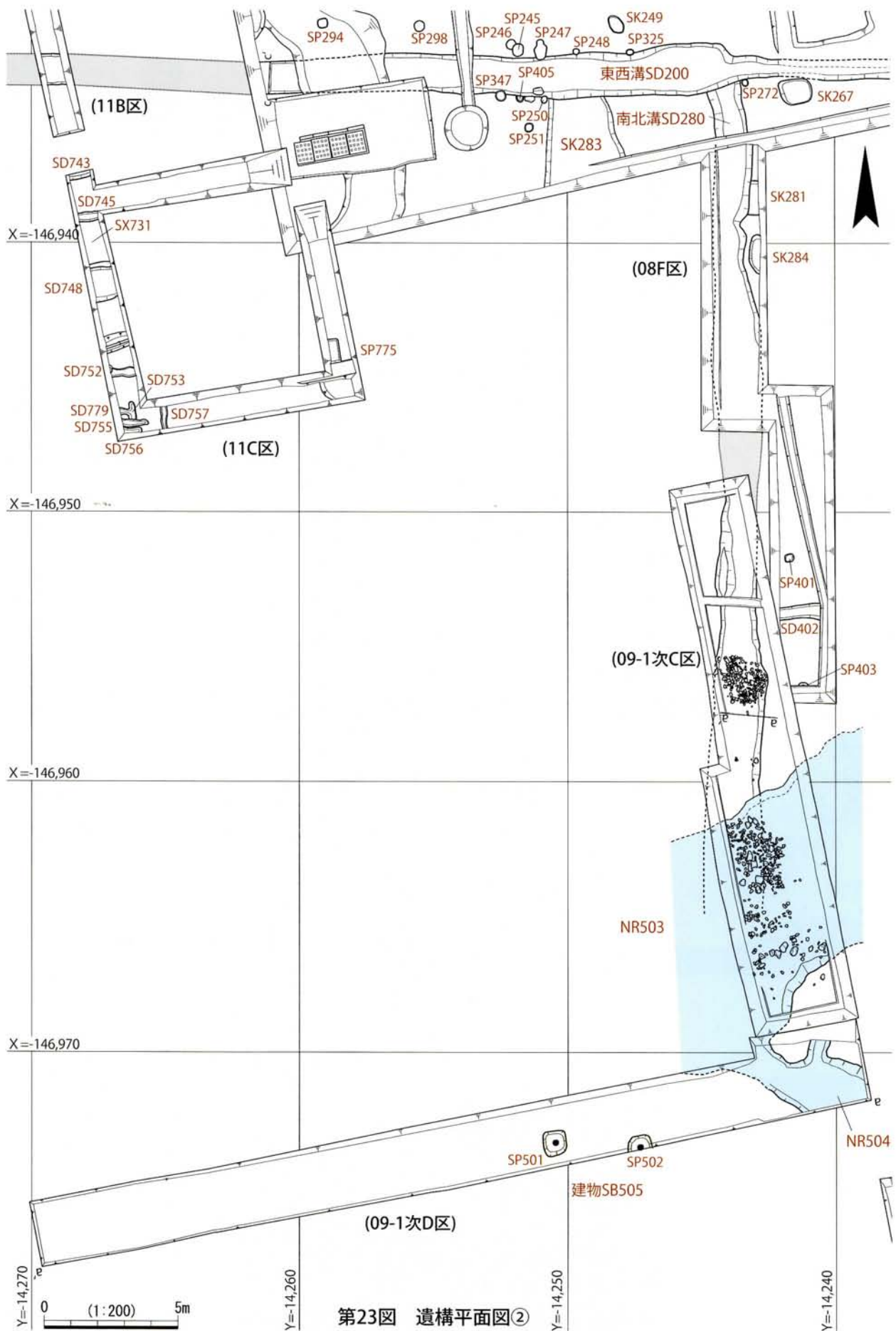
調査区西側では掘立柱建物S B 002・003と土坑S X 177を検出した。調査区中央部から西側には若干の遺構のまとまりがみえるものの、調査区東側では顕著な遺構はみつかっていない。ここでは代表的なもののいくつかに説明を加えることにする。

土坑S X 177(第21図) 雨落溝S D 050の南、調査区西端部で検出した浅い土坑状の遺構である。遺構底面付近まで削平を受けているため、厳密な遺構の平面プランは不明確ながらも、ほぼ円形を呈するものと考えられる。遺構の規模は東西1.8 m、南北1.6 mをはかる。検出面から遺構底面までの深さは0.15 mをはかる。遺構底面から13世紀前半の土師器皿がまとまって出土した。

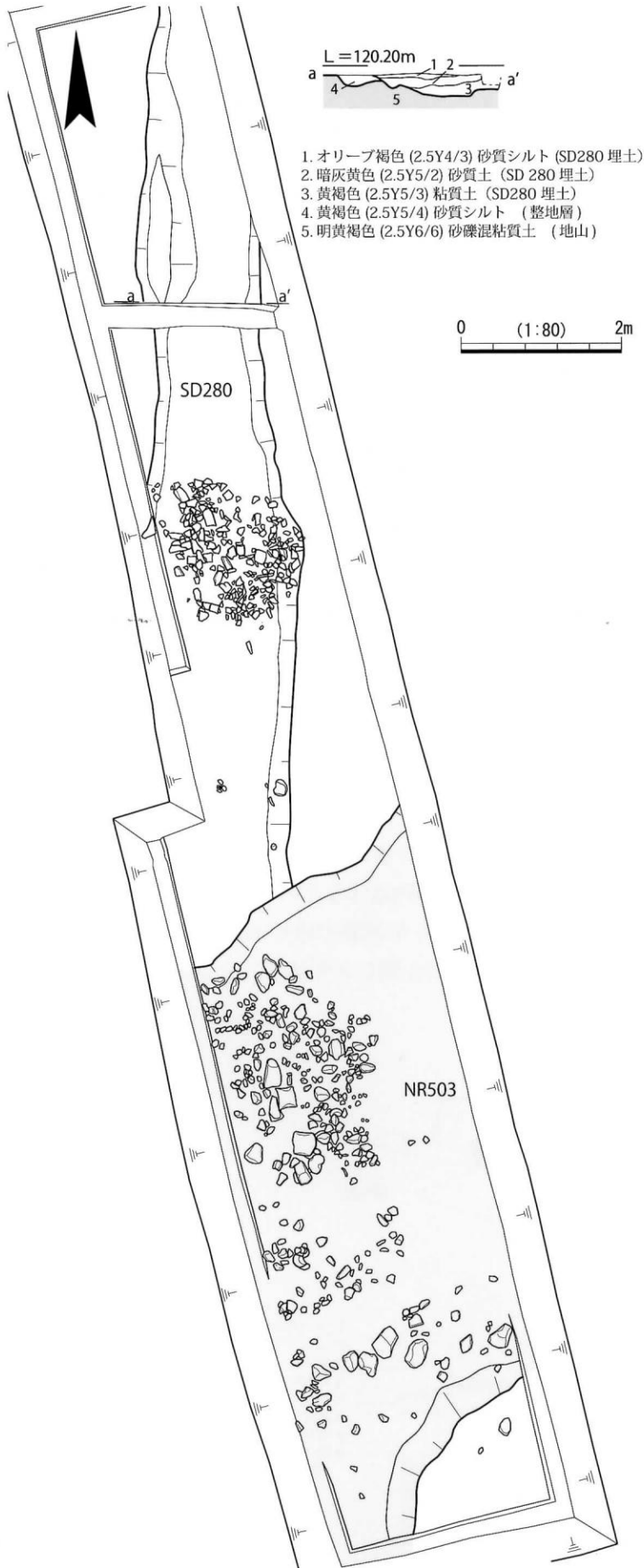
掘立柱建物S B 002・003(第22図) S X 177の東に位置する掘立柱建物で、桁行4間、梁行2間の南北棟である。建物の構造は検出した柱穴の



第22図 掘立柱建物 SB002・003 平面・断面図



第23図 遺構平面図②



第24図 SD280・NR503平面・断面図

配置からみて総柱建物と考えられる。また、2棟は重複するが、先後関係については柱穴どうしの切り合いが認められないため不明である。建物の南側に柵と考えられる柱列 S A 004 を伴う可能性がある。建物の主軸は南北に置き、 $N 2^{\circ} E$ と北でやや東に振れをもつ。これに対し S A 004 は $E 1^{\circ} S$ とわずかな振れをもつ。建物の規模は桁行が 7.4 m、梁行が 4.4 m をはかる。柱間寸法は桁行で 1.50 ~ 2.00 m、梁行で 2.05 ~ 2.30 m と不揃いである。S A 004 の柱間は 2.30 ~ 2.40 m となる。S B 003 とは柱筋の通りが良い。検出した柱穴は円形ないしは楕円形を呈し、0.30 m ~ 0.50 m ほどの規模を有する。検出面からの深さは 0.15 ~ 0.50 m、柱穴底面のレベルは不揃いである。後世の攪乱により想定する位置に柱穴が存在しない箇所も認められるが、検出できた柱穴すべてに柱痕跡が確認できた。柱の直径は 0.10 m 前後となる。

ところで建物は基盤となる一部に整地を施しており平坦地を確保している。この範囲を S X 256 として認識した。S X 256 は平面形が不整長方形を呈する。S X 256 からは軒瓦をはじめとし多量の瓦類が出土した。出土遺物に 13 世紀前半代とみられる土師器皿が出土していることから、掘立柱建物が建てられた時期は、13 世紀前半以降という年代が考えられよう。

土坑 S K 284 (第 23 図) F 区の東壁際、南北溝 S D 280 の東側に検出した土坑である。遺構の一部を検出したのみで調査区外へと続く。遺構の規模は南北 1.5 m、東西は 0.4 m 以上となろう。15 世紀代とみられる瓦質土器播鉢や土師器皿などが出土していることから、遺構の年代は 15 世紀代と

考えられる。

先述の掘立柱建物 S B 002・003 や S X 177 など 13 世紀代の遺構は一定の広がりをもせ分布しているが、15 世紀代まで降る遺構は現時点でこの遺構に限られる。遺構の性格については一部を調査できたのみであるため、今のところ不明である。

今後、未調査区域にこの時期に属する遺構が発見される可能性は残されている。この時期の土地利用については得られた情報が少ないため、今後解明すべき課題の一つと言える。(西村)

第 2 節 2009 年度

1. 第 1 次調査 (第 23・26・27 図)

基本層序 調査は附属小学校特別支援学級校庭において遊具施設設置工事に先立ち、2カ所でトレンチ調査を行なった。また体育館脇の通路工事に伴い逆 L 字形の調査トレンチを設定して調査を行なった。計 4 地区の調査面積は 185㎡である。なお C 区と D 区は工事の工程に沿って時期をずらして調査を行った。このため便宜的に 2 地区に別のトレンチ名を付与して調査を行なった。加えて C・D 区は大型基壇建物の推定中軸線付近に位置し、基壇建物に関連した遺構の検出が期待された。

各トレンチの基本層序であるが、A・B 区に関しては第 1 層の表土 (0.20 m)、第 2 層の米軍接

収時と思われる盛土 (0.15 m)、第 3 層は近代陸軍のレンガ積基壇整地土 (0.10 m)、第 4 層がこぶし大礫を多量に含む河川堆積層 (0.10 m)、第 5 層は河川堆積層 (0.40 m 以上) で、第 4 層よりも礫の大きさが比較的大きくなる。この第 4・5 層は地山の無遺物層である。

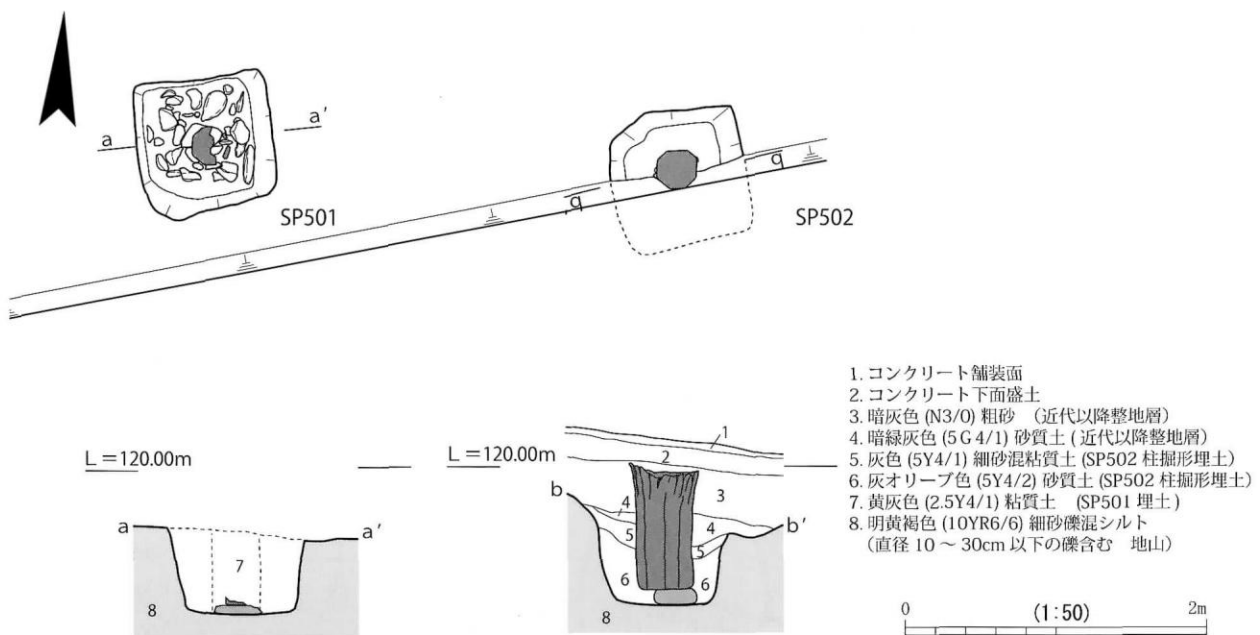
C 区に関しては 2008 年度調査の基本層序の項ですでに触れたため、ここでは説明を省略する。

検出遺構 ここでは 4 地区において検出した遺構のうち主要な遺構について述べることにする。

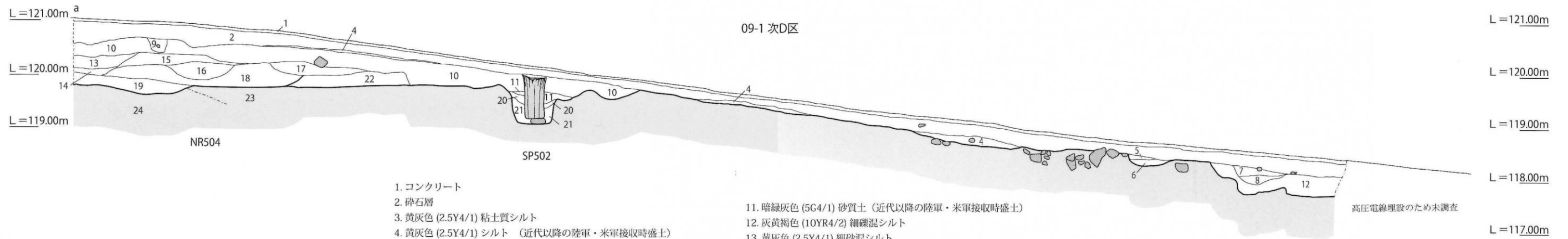
流路 N R 503 (第 23・24 図) C 区南部で検出した流路跡と推定される遺構である。切り合い関係にある南北溝 S D 280 は 2008 年度調査の項ですでに述べたので、ここでは説明を省略する。

調査区南部を東西に貫流し、狭い範囲での確認であるため、本来の形状は推測の域をでるものではないが、北東から南西方向へと蛇行しつつ広がるものと推定される。流路の直上には近世・近代と考えられる耕作土が存在し、これにより削平を受けているものと考えられる。

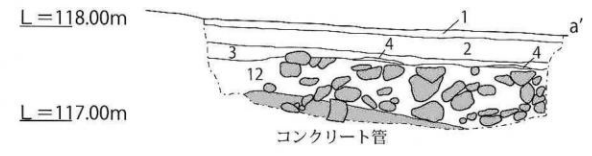
埋土の状況は上層が灰色の粗い砂層で、人頭大までの礫を多く含む。また瓦片や土器片などが出土し、植物遺体などの有機物も層中に含まれる。また 796 年初鑄の隆平永寶が 1 点出土した。遺物は第 24 図に示す通り、トレンチの西壁寄り



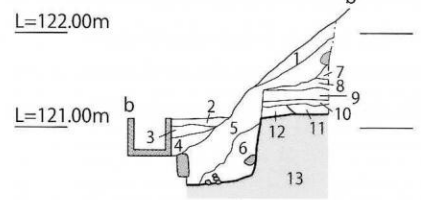
第 25 図 SB505 平面・断面図



- 1. コンクリート
- 2. 碎石層
- 3. 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘土質シルト
- 4. 黄灰色 (2.5Y4/1) シルト (近代以降の陸軍・米軍接收時盛土)
- 5. 暗灰色 (N3/0) 粗砂 (近代以降の陸軍・米軍接收時盛土)
- 6. 黄灰色 (2.5Y4/1) 粗砂混シルト (近代以降の陸軍・米軍接收時盛土)
- 7. 灰黄褐色 (10YR4/2) 細礫混シルト (近代以降の陸軍・米軍接收時盛土)
- 8. 黄灰色 (2.5Y4/1) 粗砂混シルト (近代以降の陸軍・米軍接收時盛土)
- 9. 黄灰色 (2.5Y4/1) 粗砂混シルト
- 10. 灰黄褐色 (10YR4/2) 細礫混シルト (近代以降の陸軍・米軍接收時盛土)
- 11. 暗緑灰色 (5G4/1) 砂質土 (近代以降の陸軍・米軍接收時盛土)
- 12. 灰黄褐色 (10YR4/2) 細礫混シルト
- 13. 黄灰色 (2.5Y4/1) 細砂混シルト
- 14. 暗緑灰色 (5G4/1) 粘土質シルト
- 15. 灰黄褐色 (10YR4/2) 細砂混シルト (水田耕作土)
- 16. 暗緑灰色 (10GY4/1) 細砂混粘土質シルト
- 17. 黒褐色 (2.5Y3/2) 細砂混シルト
- 18. 灰色 (5Y4/1) 砂礫混シルト (瓦片を含む, NR504 埋土)
- 19. 青灰色 (10BG5/1) 粘質土 (NR504 埋土)
- 20. 灰色 (5Y4/1) 細砂混粘質土 (SP502 掘形埋土)
- 21. 灰オリーブ色 (5Y4/2) 砂質土 (SP502 掘形埋土)
- 22. 黄灰色 (2.5Y4/1) シルト (直径 10cm 大の礫含む)
- 23. 明黄褐色 (10YR6/6) 細礫混シルト (直径 10~30cm 大の礫含む, 地山)
- 24. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘土質シルト (地山)

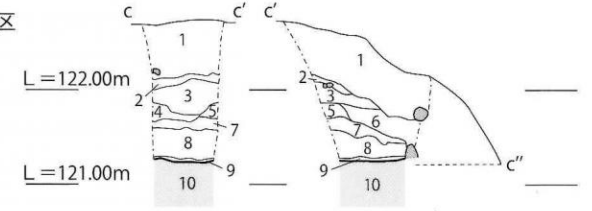


09-2 次F区



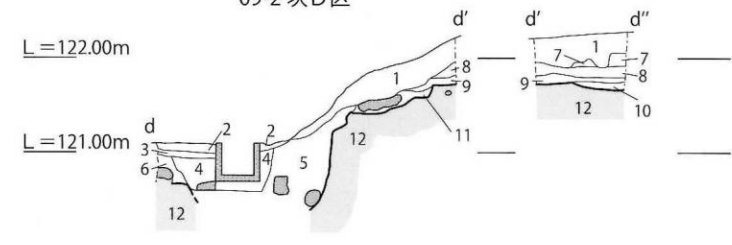
- 1. 表土
- 2. 真砂土 (グラウンド土)
- 3. 碎石層
- 4. 黒褐色 (10YR3/2) シルト (側溝裏込土)
- 5. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土, 黄褐色 (10YR5/6) シルトブロックを少量含む (陸軍土塁盛土)
- 6. 褐色 (10YR4/6) 砂質シルト, 明黄褐色 (10YR6/8) シルトブロックを含む (こぶし大までの礫を含む, 近代以降陸軍側溝裏込土)
- 7. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト (水田耕作土)
- 8. 黄灰色 (2.5Y4/1) シルト (鉄分の沈着が認められる, 水田耕作土)
- 9. 灰色 (5Y4/1) シルト (水田耕作土)
- 10. 褐色 (7.5YR4/4) シルト (鉄分の沈着が顕著に認められる, 水田床土)
- 11. 褐灰色 (10YR4/1) 砂質土 (近世以降の染付磁器含む)
- 12. 褐色 (10YR4/4) シルト (マンガン斑・鉄分の沈着が認められる, 古代の瓦片を少量含む, 基壇築成土か)
- 13. 黄褐色 (10YR5/6) シルトと灰白色 (10YR8/2) 砂質シルトの互層

09-2 次E区



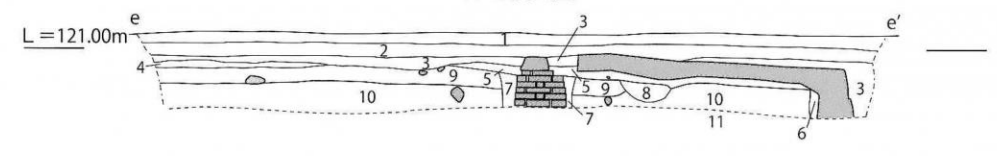
- 1. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土, 明黄褐色 (10YR4/6) 砂質土ブロックを含む (瓦片, こぶし大までの礫を含む, 近代以降陸軍による土塁盛土)
- 2. 灰黄褐色 (10YR4/2) シルト・黄褐色 (10YR5/6) シルト・灰黄色 (2.5Y6/2) シルトの斑土 (陸軍による土塁盛土)
- 3. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質シルト, 黄褐色 (10YR5/6) シルト・灰黄色 (2.5Y6/2) シルト斑入 (陸軍による土塁盛土)
- 4. 灰黄褐色 (10YR4/2) シルトと黄褐色 (10YR5/6) シルトの斑土 (近代以降陸軍による土塁盛土)
- 5. 灰黄褐色 (10YR4/2) シルト, 黄褐色 (10YR5/6) シルト斑入 (近代以降陸軍による土塁盛土)
- 6. 褐色 (10YR4/4) 砂質土, 灰黄色 (2.5Y6/2) シルト斑入 (近代以降陸軍による土塁盛土)
- 7. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂質シルト, 黄褐色 (10YR5/6) シルト斑入 (鉄分の沈着が顕著である, 水田耕作土)
- 8. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト (水田耕作土)
- 9. にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト (鉄分の沈着が認められる, 水田床土)
- 10. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 礫混シルト (こぶし大の礫を含む, 締まり強い, 地山, 春日野礫層)

09-2 次D区

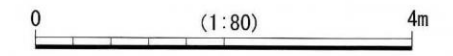


- 1. 表土
- 2. 真砂土 (グラウンド土)
- 3. 黒褐色 (10YR3/1) シルト (旧表土)
- 4. 黒褐色 (10YR3/2) シルト (こぶし大の礫含む, 側溝裏込土)
- 5. 暗褐色 (10YR3/3) シルト, 褐色シルト (10YR4/4) シルトブロック混入 (近代以降陸軍側溝裏込土)
- 6. 暗褐色 (10YR3/3) シルト, 褐色 (10YR4/4) シルトブロック斑入 (炭化物・レンガ片等を含む)
- 7. 灰黄褐色 (10YR4/2) シルト (水田耕作土)
- 8. にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト (鉄分の沈着が認められる, 水田耕作土)
- 9. 褐色 (10YR4/4) シルト (鉄分の沈着が認められる, マンガン斑が認められる, 水田床土)
- 10. 灰黄褐色 (10YR4/2) シルト (中世土師製羽釜, 瀬戸美濃陶器含む, SK530 埋土)
- 11. 黄褐色 (10YR5/6) シルト, にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト斑入 (こぶし大の花崗岩風化礫含む, 遺構埋土か)
- 12. 黄褐色 (10YR5/6) 礫混シルト (こぶし大から人頭大の礫を多く含む, 締まり強い, 春日野礫層, 地山)

09-2 次A区



- 1. 真砂土 (グラウンド土)
- 2. 碎石層
- 3. 青灰色 (5B5/1) 砂質土 (最大径 5cm の礫を含む, 締まり強い, グライ化する, 米軍接收時盛土か)
- 4. 灰赤色 (2.5YR5/2) 砂礫 (明治期のセメント, 2cm 大の玉砂利充填)
- 5. 灰黄褐色 (10YR5/2) 砂質土 (近代瓦含む, レンガ積基壇整地土)
- 6. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質土 (コンクリート土間裏込土)
- 7. 黄灰色 (2.5Y4/1) 粗砂 (レンガ積基壇裏込土)
- 8. 黄灰色 (2.5Y4/1) 粗砂 (土管抜き)
- 9. 黄灰色 (2.5Y5/1) 粗砂 (こぶし大の礫を多く含む, 河川堆積層)
- 10. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粗砂 (こぶし大~人頭大の礫を多く含む, 河川堆積層)
- 11. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粗砂 (こぶし大~人頭大の礫を多く含む, 河川堆積層)



第26図 09-1次D,09-2次A・D・E・F区土層断面図

まとまって出土した。軒丸瓦や軒平瓦を含むが、大半が細片化している。下層は灰色の粘質土でこぶし大の礫とともに若干の瓦片が含まれるが、同様に細片化したものが多い。なお、瓦片などとともに、765年初鋳の神功開寶が1点出土している。

この流路の延長部をD区で検出しているが、北東から南西へと指向しつつ、南東から北西へとつづく流路N R 504に連続するようである。これらの流路はB区や10 F区においても同方向のものが確認されており、幾度かにわたって土石流が発生した可能性が考えられる。しかしながら、N R 503とこれらの流路とでは含まれる礫の粒径が異なる。B区検出の流路は人頭大の礫を多量に含む砂礫が堆積し、瓦片をはじめとして一切の遺物を含まないことから、寺院創建以前の流路と考えられる。N R 503出土遺物は、出土状況からみて主要伽藍廃絶後に東方より流れ込んだ可能性が高いと推測される。

掘立柱列 S B 505 (第25図) D区中央東寄りで検出した掘立柱列である。検出できたのが柱穴2基分のみであるため、建物の規模・構造は不明である。S P 501の西には連続しないようである。S P 502は南壁にかかっており、一部は調査区外になる。東側と北側は未調査であるため、北あるいは東へ連続する可能性は残されている。

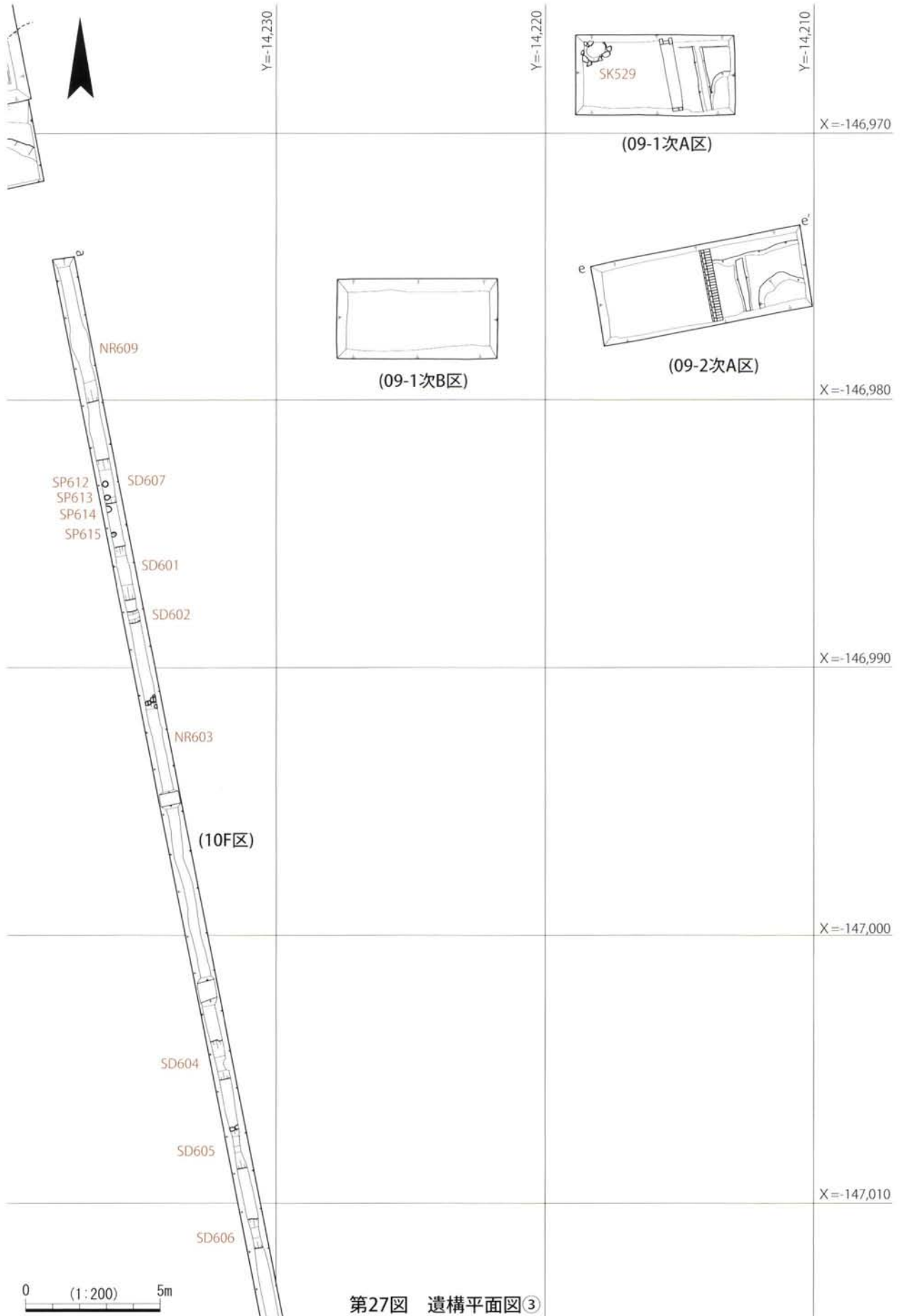
柱穴検出面直上まで近世・近代の盛土が及んでいるものの、S P 502では柱根が極めて良好な状態で遺存していた。柱穴掘形は平面方形を呈し、規模の判明するS P 501は東西0.92 m、南北0.88 mをはかる。遺構の深さは残りのよかったS P 502で掘形検出面から底部まで0.73 m、柱根検出面から遺構底面まで0.95 mをはかる。柱根の下部には地山礫を用いた根石を敷く。S P 501は柱根がわずかに残存する。こちら根石を検出しており、S P 502と同様の構造となる。柱間寸法は柱の芯々で2.85 mをはかる。柱穴間の主軸は東西に置く。振れに関しては1間分のみ検出であるため、今後周辺で連続する柱穴が検出された際には訂正する必要がでてくるが、現時点でE 2° Nとなる。雨落溝S D 050や東西溝S D 200とは若干の誤差が認められる。

遺存したS P 502の柱根は残存長0.75 m、柱底面の対辺角距離は0.31 m、柱上面は腐食が著しく、やせており0.27 mほどである。底面にはチョウナとみられる加工痕が明瞭にのこる。柱の断面形が正八角形となり、一辺が0.127 ~ 0.133 m、平均値は0.13 mとなる。柱は芯持材で、樹種はヒノキである。底面中央部には十字の直線が、また縁辺の八角頂点付近には円形の墨跡が残存している。これは柱を正八角形に加工するために施された基準線であると推定される。

土坑 S K 529 (第27図) A区北西隅で検出した石組みを伴う土坑で、削平を受けているため残りが良くないが、井戸の可能性も考えられる。平面形は楕円形を呈する。瓦器碗が出土していることから、鎌倉時代の遺構と考えられる。

小結 今年度における調査成果は以上であるが、狭い調査区にもかかわらず、一定の成果を得ることができた。ここで今年度の調査成果を簡潔にまとめて、今後の見通しを考えてみたい。2008年度調査で検出した東西溝S D 200に合流する南北溝S D 280の延長部をC区において検出し、東西方向の流路N R 503がこれを切ることが判明した。南北溝S D 280からは、2008年度同様多量の瓦片が出土した。これらは主要伽藍の廃絶後に片付けられたものと推定される。また溝の傾斜もこれまでの調査成果を追認するように、北から南へとゆるやかに傾斜することが判明した。この南北溝は大型基壇建物の推定中軸線付近を南北に走るが、その位置付けについては難解である。調査範囲が狭く、この溝が単独で南北に走るのか、あるいは併走する未発見の溝が存在するのか、現状では明確な回答は得られていない。先述したように、2008年度調査でS D 280の西に溝状の落ち込みS K 283を検出したが、これとて検出した範囲が狭く、これをもって併走する溝と結論付けるのは尚早である。この点は周辺の調査を行なうことで結論がでるものと思われる。

次に南北溝S D 280を切る流路N R 503についてである。切り合い関係は本文中に述べた通りで、S D 280が機能停止後に東方から多量の礫とともに瓦片などが流れ込んでおり、含まれる礫



第27図 遺構平面図③

はこぶし大から人頭大までの大きさで、かなり大規模な十石流であったことは想像に難くない。礫とともに含まれる瓦片は比較的残りのよいものが多く、主要伽藍廃絶後の片付けられた瓦類が十石流などにより運び込まれたものと考えられる。

顕著な遺構がなかったので触れなかったが、A区で検出した地山の標高が注意される。検出した地山の標高は120.7 mで、これは大型基壇建物の雨落溝S D 050の溝底の標高が119.9 mであることから相当の高低差が認められる。地形的には北から南へと傾斜するにもかかわらず、この付近が地形的に高いことは当初の予想を裏切るものであった。このことは何か重要なことを示唆するものであろうが、調査結果からははっきりしたことはわからない。この地山の高い区域を越えてすぐ南側は谷状の地形が入り込むようである。主要伽藍が存続していた時期にどのような地形であったのか、現時点でははっきりしないが、大型基壇建物の区画とともに、今後の調査で明らかにすべき課題であると考えられる。

最後にD区で検出した掘立柱列である。狭い調査区内に柱穴を2基検出したにすぎず、この柱穴の属する建物がどのような構造で、どのくらいの規模を有するのかが推測の域を出るものではない。年代を決める出土遺物がないため、大型基壇建物をはじめ東西溝なども同時期に存在していた根拠がみあたらない。大型基壇建物の中軸線付近に位置することは確かではあるが、掘立柱列と大型基壇建物及び東西溝との軸線の振れに若干の誤差が認められること（大型基壇建物や東西溝はほぼ方位に沿うに対し、掘立柱列は東西に対し若干の振れをもつ）からも同時期のものであることに戸惑いを覚える。これに関しても今の段階で決定付けるのは時期尚早と思われ、今後の周辺における調査に期待するところである。

(西村・金原)

2. 第2次調査（第13・26・27図）

第2次調査は既設用水路周辺における遺構の損傷を調査するためのトレンチに加え、大学構内縁辺を巡る近代陸軍による土塁に対してトレンチを設定して調査を行なった。既設用水路周辺にお

ける調査区は近代陸軍期の東側土塁付近にB～D区の3箇所、北側土塁付近にE～H区の4箇所を設定して調査を行なった。また併行して附属小学校特別支援学級校庭砂場設置に先立ち、1ヶ所にトレンチを設定して調査を行なった。これをA区とした。合計8ヶ所の小規模なトレンチを設定して調査した。調査面積は59㎡である。なお既設用水路周辺における調査では、大型基壇建物の基壇外装の凝灰岩列に目立った損傷箇所は認められなかった。

調査においては調査範囲が狭いこともあり顕著な遺構がほとんどみられなかった。ここではトレンチごとの調査概要を以下に述べることとする。

(1) 09-2 A区

基本層序 この地区は09-1 B区の東隣になる。基本層序は西隣の09-1 B区と同一であるためここでは省略する。遺構検出は第4層の河川堆積層上面で行なったが、顕著な遺構は認められなかった。なお、この河川堆積層から遺物は出土しなかった。

(2) 09-2 B・C区

基本層序 09-2 B区は08 A区南東部に位置し、既設用水路集水机設置箇所の遺構損傷の有無を確認するために2.8 m×0.5 mの小規模なトレンチを設定して調査を実施した。トレンチ内の基本層序は集水机設置時にすでに地山面まで破壊を受けていたため、トレンチ内では用水路裏込土が断面で確認できたにとどまる。

09-2 C区は大型基壇建物階段取付部の東側から近代陸軍土塁にかけて設定したトレンチで、主に凝灰岩基壇の損傷の有無を確認するための目的で調査を実施した。結果的には凝灰岩基壇は破壊を免れていた。基本層序は2008年度調査と重複するため省略する。

(3) 09-2 D区

基本層序 既設用水路をはさんで近代陸軍期の東縁土塁の北東部にトレンチを設定した。位置的には大型基壇建物内となる。また大型基壇建物の階段南東隅を北に延ばした位置にあり、建物礎石などの検出が期待された。このトレンチの基本層序もすでに触れたのでここでは省略する。

土坑 S K 530 (第 13 図) 中世後半に属すると考えられる浅い土坑を 1 基検出した。遺構は地山である黄褐色礫混粘質土(春日野礫層)上で検出した。埋土から土師質の羽釜と瀬戸美濃焼の陶器が出土した。市教委第 3 次調査においてみつがっている墓と同様の性格をもつ遺構の可能性もある。調査範囲が狭く、確かなことは言えないが、礎石などの抜き穴のくぼみを墓等に利用した可能性も考えられる。

(4) 09 E・F 区

基本層序 構内北辺部の既設水路をはさんだ北縁土塁にトレンチを設定して調査を行なった。近代陸軍土塁盛上下に近世・近代とみられる水田耕作土が認められ、それを除去して地山に至る。地山面上で遺構検出を試みたが、顕著な遺構はみつからなかった。

小結 第 2 次調査は以上のような結果であったが、最後に調査のまとめを行なうこととする。

A 区の調査成果としては河川堆積層が検出されており、これは 09-1B 区、08G 区で検出した流路と同様のものと考えられる。この流路状の谷地形は現地形にも遺存しており、現在の新薬師寺境内南の段丘崖の西側延長部がこれに相当する可能性がある。

次に大型基壇建物北部と東部に設定した調査区であるが、北部に相当する E 区と F 区からは顕著な遺構はみつからなかった。ともに地山上に近世・近代の水田耕作土がみられ、耕地化した際に基壇自体を削平している可能性がある。瓦など建物に関連する遺物の出土もなかった。

一方東部に設定した D 区においてはいくつかの問題点が浮上した。このトレンチは大型基壇建物の階段南東隅のラインを北に延長した位置にあり、建物柱筋の想定位置にあたる。近代陸軍期の土塁盛土をはずすと、近世・近代と思われる耕作土がみられた。この耕作土の下に地山が露出し、この標高がかなり高く 121.8 m をはかる。位置的には基壇建物内に相当し、雨落溝 S D 050 底面からの比高差は 1.8 m 以上となる。このことから大型基壇建物は少なくとも 1.8 m 以上の高さを持っていたことがわかる。

次に中世後半に属すると考えている S K 530 についてである。調査できた範囲が狭いため、不明な部分が多いが、これまで述べてきたように墓の可能性もある。大型基壇建物の柱筋の位置にあたることから、礎石抜き穴のくぼみを墓として利用した可能性も考えられる。遺構の性格については不明確であるが、これらから出土した遺物が礎石を抜き取った年代を示す可能性があるため、注意が必要である。

以上が今年度調査の成果であるが、調査範囲が狭かったこともあり、検出した遺構に関しても性格や年代などを明らかにし得ないものがあった。小規模なトレンチ調査では得られる情報が限られているため、満足のいく成果が得られたとは言えない。いわば消化不良のままのものが多いのも否めない。今後は点ではなく面的な調査を行なう機会があることを期待する。(西村)

第 3 節 2010 年調査

調査は構内給水管改修工事に伴い、構内北西部の古備塚古墳の南側に 2 カ所、附属小学校西側の構内道路沿いに 3 カ所、09-1 次 D 区南側の構内道路沿いに 2 ケ所、計 7 カ所のトレンチを設定して調査を実施した。調査面積は約 82㎡である。

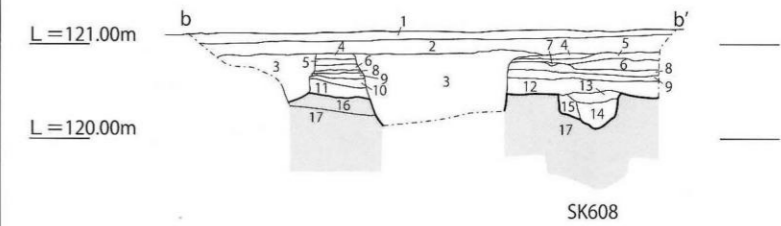
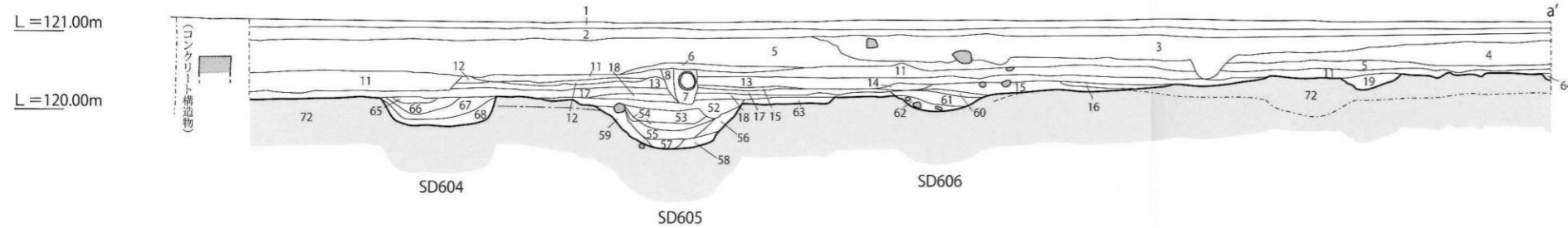
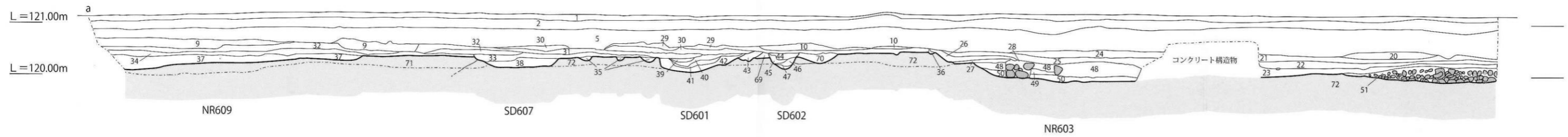
(1) 10 A・B 区 (第 1 図)

基本層序 調査地は古備塚古墳南側の松林内で、東から西に向けて傾斜した地形となっている。古備塚古墳は近代以降の大規模な削平を免れており、調査地周辺も比較的旧状を留めていることが予想された。

調査区内の基本層序は、第 1 層の表土、第 2 層の近代以降盛土層 (0.7 m)、第 3 層の近世・近代水田耕作土 (0.3 m)、第 4 層の無遺物の洪水堆積層 (0.5 m) が続き、現地表下約 1.8 m、標高約 108.2 m で段丘礫層の地山に至る。

検出遺構 遺構は第 4 層上面で近世の素掘小溝を数条確認したのみで、地山上面で遺構は確認できなかった。遺物は近世・近代水田耕作土内から、18 世紀後半以降の陶磁器と古備塚古墳のものと思われる円筒埴輪片が数点出土したのみである。

今回の調査区では、新薬師寺関連の遺構や古墳に関する遺構は検出されなかった。古代から中世



- | | | | |
|---|---|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> 1. アスファルト 2. 灰白色 (2.5Y7/1) バラス (直径 5cm 以下の礫多く含む, 砂礫層) 3. オリーブ褐色 (2.5Y4/4) シルト (炭化物含む, 造成土) 4. 黒褐色 (10YR3/1) シルト (直径 3cm 以下の砂礫少量含む, 造成土) 5. 黄褐色 (2.5Y5/3) 砂礫混粘質土 (近代陸軍期盛土層) 6. オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 砂質シルト (鉄分の沈着が認められる) 7. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂礫混シルト (土管掘形埋土) 8. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂礫混粘質土 (土管掘形埋土) 9. 黄灰色 (2.5Y4/1) 砂礫混シルト (近代以降の攪乱) 10. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粘質土 11. 黒褐色 (10YR3/1) シルト (近代水田耕作土) 12. オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト (鉄分の沈着が認められる, 水田床土層) 13. オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 粘質土 (水田耕作土) 14. オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト質極細粒砂 (洪水砂) 15. 黄褐色 (2.5Y5/3) 細粒砂 (ラミナの形成認められる, 洪水砂) 16. オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 細粒砂 (洪水砂) 17. 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質シルト (水田耕作土) 18. オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト (水田耕作土) 19. オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 細粒砂混シルト (素掘溝) 20. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト (近代水田耕作土) 21. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質シルト (近代水田耕作土) 22. 黄灰色 (2.5Y4/1) シルト (近代水田耕作土) 23. 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質シルト (水田床土) 24. 黒褐色 (10YR3/1) 砂礫混シルト (水田耕作土) 25. オリーブ黒色 (5Y3/2) 砂質シルト (水田耕作土) | <ul style="list-style-type: none"> 26. 黒褐色 (2.5Y3/1) シルト (幕末~近代, 水田耕作土) 27. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト (幕末~近代, 水田耕作土) 28. 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質シルト (鉄斑が認められる, 幕末~近代, 石組暗渠排水溝) 29. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂礫混シルト (水田耕作土) 30. オリーブ黒色 (5Y3/1) 砂質土 31. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト (水田耕作土) 32. 灰色 (5Y4/1) 砂礫混シルト (地山ブロック混じる) 33. オリーブ黒色 (5Y3/1) 細粒混シルト (水田耕作土) 34. 黒褐色 (2.5Y3/2) シルト (鉄分の沈着が認められる, 水田床土) 35. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) シルト (素掘溝) 36. 灰色 (5Y4/1) 粗砂 37. 灰色 (5Y4/1) 砂礫 (直径 3cm 以下の砂礫を多く含む, 瓦片含む, NR609 埋土) 38. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粗砂 (SD607 埋土) 39. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粗砂 (直径 5cm 以下の砂礫含む, 瓦片含む, SD601 埋土) 40. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 中粒砂 (SD601 埋土) 41. 黄灰色 (2.5Y6/1) 中粒砂 (SD601 埋土) 42. にぶい黄褐色 (10YR7/2) 粗砂 (SD601 埋土) 43. 灰色 (5Y4/1) シルト混粗砂 (土師器細片含む) 44. オリーブ黒色 (5Y3/1) 砂質シルトと暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質シルトの斑土 (SD602 埋土) 45. 黒褐色 (2.5Y3/1) シルト (SD602 埋土) 46. 黒色オリーブ (5Y3/1) シルト, 地山ブロック混入 (SD602 埋土) 47. オリーブ黒色 (5Y3/2) 砂質シルト (SD602 埋土) 48. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 中粒砂~粗砂 (NR603 埋土) 49. 褐灰色 (10YR6/1) 粗砂 (直径 15cm 以下の砂礫含む, NR603 埋土) | <ul style="list-style-type: none"> 50. 黄色 (2.5Y5/1) シルト (NR603 埋土) 51. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質シルト (NR603 埋土) 52. 黄褐色 (2.5Y5/3) シルト質極細粒砂 (直径 5cm 以下の砂礫少量含む, SD605 埋土) 53. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 極細粒砂, オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト含む (SD605 埋土) 54. 褐灰色 (10YR4/1) 砂質シルト (SD605 埋土) 55. 灰黄褐色 (10YR5/2) 細粒砂 (SD605 埋土) 56. 褐灰色 (10YR5/1) 砂質シルト (SD605 埋土) 57. 灰黄褐色 (10YR4/2) シルト質極細粒砂 (SD605 埋土) 58. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂質シルト (SD605 埋土) 59. にぶい黄褐色 (10YR5/3) 砂礫混シルト 60. 褐色 (10YR4/4) 砂質シルト (鉄分の沈着が認められる, SD606 埋土) 61. にぶい黄褐色 (10Y5/3) 砂質シルト (SD606 埋土) 62. 灰黄褐色 (10YR5/2) シルト混砂礫 (直径 15cm 以下の礫多く含む, SD606 埋土) 63. オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト (鉄分沈着が認められる, 洪水砂) 64. オリーブ褐色 (2.5Y4/4) シルト混砂礫 (直径 15cm 以下の砂礫多量に含む) 65. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 中粒砂 (SD604 埋土) 66. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 細砂~中粒砂 (SD604 埋土) 67. 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質シルト (SD604 埋土) 68. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質シルト (SD604 埋土) 69. 灰色 (5Y4/1) 粗砂混シルト 70. 灰色 (5Y4/1) 粗砂~シルト質極細砂 71. オリーブ褐色 (2.5Y4/4) シルト混砂礫 (直径 15cm 以下の礫多量に含む, 地山) 72. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質シルト~砂礫混シルト (地山) | <ul style="list-style-type: none"> 1. アスファルト 2. 黄褐色 (2.5Y5/4) 砂礫 (現代バラス層) 3. 黒色 (2.5Y2/1) 砂礫混粘質土 (現代攪乱) 4. 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) シルト (近代水田耕作土, グライ化層) 5. 黒褐色 (2.5Y3/1) 粘土質シルト (近世水田耕作土, グライ化層) 6. オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト (近世水田耕作土) 7. オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト (素掘溝) 8. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 細砂 (洪水堆積層) 9. オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト (水田耕作土) 10. 褐色 (10YR4/4) 砂質シルト (鉄分の沈着が認められる, 9層の床土層) 11. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂礫混砂質シルト (洪水堆積層) 12. オリーブ褐色 (2.5Y4/4) シルトと灰黄褐色 (10YR5/2) 細粒砂の互層 (ラミナの形成が認められる, 洪水堆積層) 13. 灰黄褐色 (10YR4/2) 極細粒砂 (SK608 埋土) 14. 灰黄褐色 (10YR4/2) 極細粒砂 (SK608 埋土) 15. 灰黄褐色 (10YR6/2) 砂礫 (SK608 埋土) 16. オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 砂礫混シルト 17. 暗褐色 (10YR3/4) 細砂~砂礫 (直径 5cm 以下の砂礫多く含む) |
|---|---|--|--|



第 28 図 10F・G 区東壁土層断面図

にかけての遺構は、近世水田耕作時にすでに削平された可能性がある。なお、田状を留めると思われた地形は、近代以降の盛土により形成されたことが分かった。

(2) 10 C・D・E区 (第1図)

基本層序 調査区内の基本層序は、第1層の表土、第2層の近代以降の盛土層(0.3～0.6m)、第3層の近世・近代水田耕作土、第4層の洪水堆積層、第5層の中・近世水田耕作土(0.3m)、第6層の中世遺物包含層と続き、現地地表下約1.2～1.5mで黄褐色礫混粘質土の存日野礫層の地山に至る。地山の標高は、C区が116.1m、D区が115.8m、E区が116.0mで、C区とE区の地山の標高がわずかに高く、D区に向けて徐々に低くなるようである。

検出遺構 遺構は第6層上面で中・近世の素掘り小溝を数条確認したが、調査面積が限られたこともあり、地山面で遺構は確認出来なかった。

遺物は中・近世水田耕作土及び遺物包含層から、細片化した中世の土師器皿と、18世紀後半以降の陶磁器が数点出土したにとどまる。

今回の調査区では、地山面が現地地表下1.2～1.5mと比較的深く、部分的ではあるが中世の遺物包含層も残存していることが分かった。地形の改変が著しいとされる構内においても、大規模な切土を免れた箇所では、未だ古代・中世の遺構が残存している可能性が高いと言える。今後は調査区周辺における平面的な調査に期待したい。

(3) 10 F・G区 (第9・27・28図)

基本層序 大型基壇建物地区の南側に位置し、大型基壇建物の推定中軸線上に近接することから、門・回廊などの区画施設の検出が期待された。

調査区内の基本層序は、第1層の表土以下、第2層の近代以降の盛土層(0.5m)、第3層の近世・近代水田耕作土と続き、部分的に洪水堆積層を挟み、現地地表下約0.7～1.1mで、シルト混砂礫～砂礫混シルトの地山に至る。地山の標高は、F区北端が120.0m、中央部とG区が約120.5mで、北側に向けて徐々に低くなっている。地山の砂礫層の広がりからみて、09-1Bから10F区北半部にかけて谷状の地形が存在するとみられる。

検出遺構 検出した遺構は、自然流路2条、素掘り溝5条、ピット4基、土坑1基である。

東西溝S D 601 10F区北半部で検出した東西方向の素掘りの溝で、幅1.5m、深さ約0.3mを測る。埋土は流水による堆積を示す。細片化した土師器や瓦片を含むが、詳細な時期は不明。

東西溝S D 602 10F区北半部で検出した東西方向の素掘りの溝で、幅0.6m、深さ約0.3mを測る。埋土は地山ブロックを斑状に含み、人為的に埋め戻された可能性が高い。細片化した土師器を含むが、詳細な時期は不明である。

流路N R 603 10F区北半部の地山上面で検出した東西方向の自然流路で、検出幅約11m、深さ0.5m以上をはかる。埋土に土師器細片を含むが、時期は不明である。近世末から近代にかけて流路上面の窪みを利用して水田耕作を営んでおり、畦際に土留めの自然石を並べ、人頭大の礫を詰めた石詰めの暗渠排水溝を設けている。

東西溝S D 604 10F区北半部の地山上面で検出した東西方向の素掘りの溝で、幅1.5m、深さ約0.4mをはかる。埋土は流水による堆積を示す。細片化した土師器を含むが時期不明。

東西溝S D 605 10F区北半部の洪水堆積層上で検出した東西方向の素掘りの溝で、幅2.1m、深さ約0.6mをはかる。他の溝群に比べて深く、断面は椀状を呈する。一度掘り直しているようである。細片化した土師器を含むが時期は不明。

東西溝S D 606 10F区北半部の近世水田耕作土上で検出した素掘りの溝で、幅1.2m、深さ0.3mをはかる。遺物は出土しなかった。

東西溝S D 607 10F区北半部の近世水田耕作土床上上面で検出した素掘りの溝で、幅0.8m、深さ0.2mをはかる。遺物は出土しなかった。

土坑S K 608 G区南端の地山上面で検出した土坑で、検出長0.7m、幅0.4m、深さ0.4mをはかる。遺物は出土しておらず時期は不明である。

流路N R 609 F区北端の地山上面で検出した自然流路で、幅約5.0m、深さ0.5m以上をはかる。掘削途中に壁面が崩壊する危険性が生じたため、検出面から0.5m下に掘削した段階で掘削作業を中止した。

前年度 09-1 D区で検出した N R 504 に連続する自然流路と思われ、上層部のみ検出した。上層は瓦・土師器を含む灰色砂礫で埋まる。

S P 612・613・614・615 10 F 区北半部の地山上面で検出した遺構で、直径約 0.2 m、深さ 0.05 mをはかる。底面の凹凸が著しく、素掘小溝の底面の窪みを誤ってピット状に掘削した可能性がある。遺物は出土しておらず、時期は不明である。
小結 今回の調査区は近世・近代水田耕作土直下で地山が露出するため、耕作に伴い掘削深度の浅い遺構はすでに削平された可能性が高い。

時期がある程度判明する遺構は S D 606・607 のみで、いずれも近世末から近代にかけての水田耕作に伴う溝の可能性が高い。他に自然流路、素掘りの溝があるが、調査面積が狭く時期・性格ともに不明である。

今回は目的とした新薬師寺関連の門・回廊などの区画施設や新たな建物跡などは確認できなかった。ただし 09-1 D区で検出した S P 501・502 のように、検出面直上まで削平・攪乱を受けていても、掘削深度の深い柱穴は残存しており、10 F・G区周辺においても、掘削深度の深い古代・中世遺構が検出される可能性は十分考えられる。今後、より平面的な調査に期待したい。

第 4 節 2011 年調査(第 13・23・29・30 図)

基本層序 調査は 08 年度 A 調査区に近接した箇所、基壇建物遺構保存地のフェンス設置工事に伴い、08 年度に未調査部分であった大型基壇建物の南側と 08 A 区西側において、フェンスの基礎形状に沿ったトレンチを設定して調査を実施した。11 A 区は大型基壇建物の推定中軸線上に位置しており、基壇建物の中軸線を示唆するような遺構の検出が期待された。なお基本土層については 08 年度調査において一括して述べたので、ここでは触れない。

検出遺構 検出した遺構には、東西溝 S D 200 の西側延長部、大型の掘立柱穴 S P 775、平安時代から鎌倉時代にかけての掘立柱穴、鎌倉時代の井戸 S E 773、中・近世素掘小溝群、近代陸軍奈良聯隊将校集会所レンガ積建物基礎などがある。

以下、古代と中世の主要な遺構について述べる。なお東西溝 S D 200 については、2008 年度調査で述べたので、ここでは触れない。

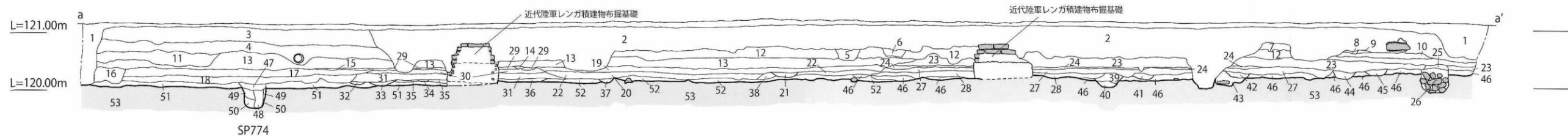
掘立柱穴 S P 775 11 C 区の地山上面で検出した平面隅丸方形の掘立柱穴で、南北 0.75 m、東西 0.4 m以上、深さ 0.55 mをはかる。柱痕跡は直径 0.3 mをはかる。柱は抜取られていない。建物になるのか独立した柱穴になるかは不明である。遺物は出土しておらず詳細な時期は不明だが、埋上や掘形の平面形からみて古代の遺構と考えられる。ただ、創建期整地層との切り合い関係が不明であり、下層遺構になる可能性も考えられるため、より慎重に検討を行う必要がある。

掘立柱穴群 S P 718・719・720 11 B 区北半部の中世整地層上面で検出した柱穴群である。調査面積が狭く、建物としてはまとまらない。掘形の平面形は円形で、直径約 0.25 m、深さは 0.2～0.25 mをはかる。埋上の特徴からみて、中世の掘立柱建物 S B 002・003 と同時期の柱穴群になると思われる。S P 720 の掘形底面には、直径 20cm 程の扁平な根石を置く。

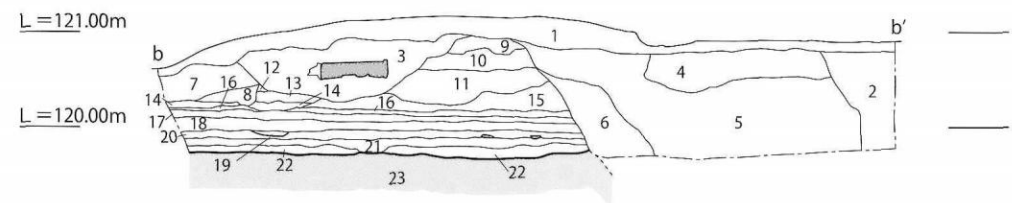
掘立柱穴群 S P 762～767・774 11 A 区西側の創建期整地層上面で検出した柱穴群である。建物としてはまとまらない。掘形の平面形は隅丸方形ないしは円形を呈する。掘形の平面規模は直径 0.3～0.4 mで、深さは 0.2～0.35 mある。S P 767 の掘形内から、9 世紀中頃～後半にかけての上師器が出土した。

井戸 S E 773 11 B 区中央部の中世整地上上面で検出した平面隅丸方形の井戸である。掘形の平面規模は一辺約 1.4 m、深さは 1.35 mをはかる。井戸枠は全て抜取られており遺存していなかった。掘形南西に幅狭い平場を設けており、掘形掘削時あるいは井戸枠抜取り時の作業用足場かもしれない。井戸枠抜取り後に 10～40cm 大の礫を多量に詰め込んで埋戻しており、抜取り後の窪みに土器類を一括して投棄していた。

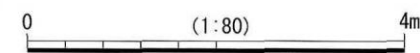
S E 773 下層からは、奈良時代の瓦類、鎌倉時代の瓦器、花崗岩製礎石片などが出土し、抜取り後の落ち込みからは、鎌倉時代の上師皿・羽釜・瓦器椀・瓦器皿・輸入陶磁器(白磁碗・青磁碗)



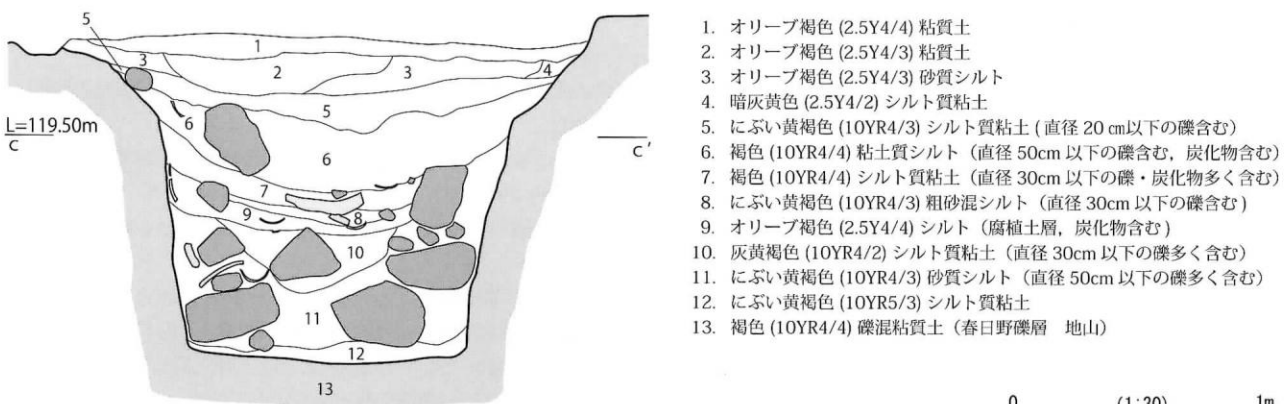
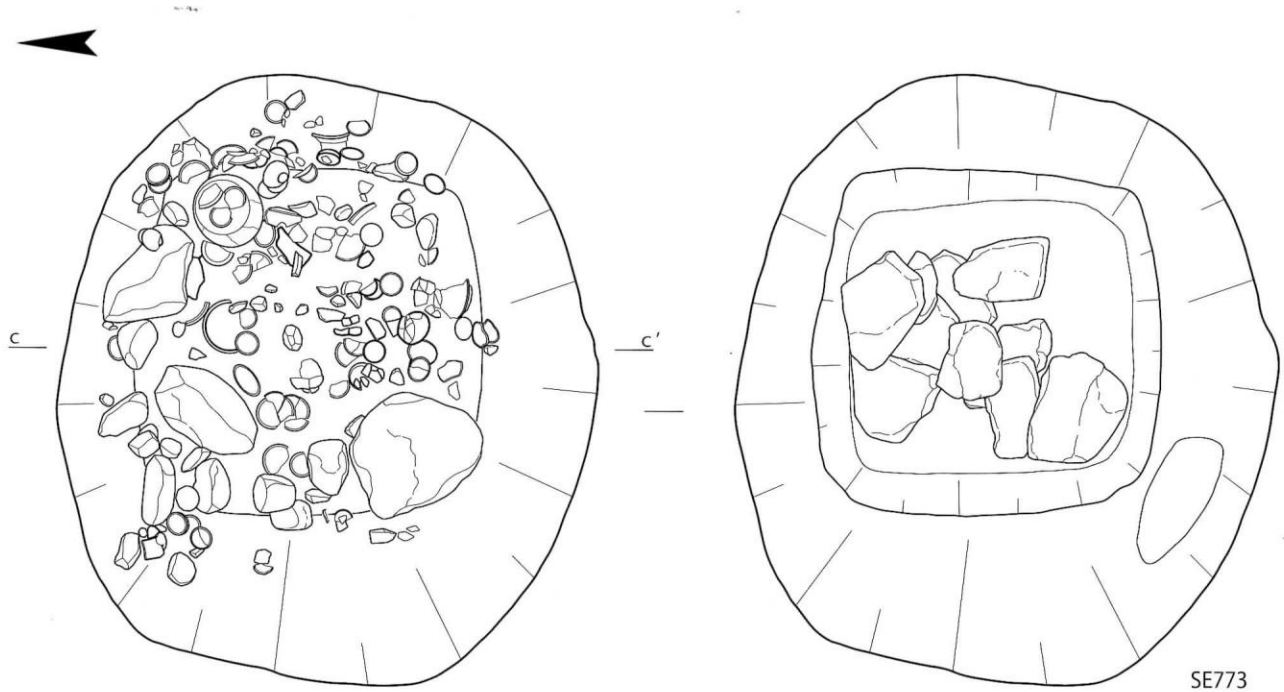
- | | | |
|--|---|--|
| <p>1. 表土・08年度調査埋戻し土</p> <p>2. オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト, 試掘調査時埋戻し土</p> <p>3. アスファルト</p> <p>4. 砕石層</p> <p>5. にぶい黄褐色(10YR4/3)礫混粘土質シルト (地山ブロック多く含む, 近代陸軍期建物束柱掘形)</p> <p>6. にぶい黄褐色(10YR4/3)礫混粘土質 (地山ブロック多く含む, 近代陸軍期建物束柱掘形)</p> <p>7. 灰色(5Y4/1)シルト質粘土</p> <p>8. 灰オリーブ色(5Y4/2)シルト</p> <p>9. にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質粘土</p> <p>10. 灰黄褐色(10YR4/2)シルト質粘土</p> <p>11. 黄褐色(10YR5/6)粘質土, 灰黄褐色(10YR4/2)シルト斑入 (近代陸軍期盛土層)</p> <p>12. 黄褐色(10YR5/6)粘質土 (近代陸軍期の盛土層)</p> <p>13. 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質粘土 (近世後半~幕末の水田耕作土)</p> <p>14. 灰黄褐色(10YR4/2)粘質土 (瓦・土器細片含む, 素掘小溝)</p> <p>15. オリーブ褐色(2.5Y4/4)粘質土 (鉄分の沈着が認められる, 水田床土層)</p> <p>16. 灰黄褐色(10YR4/2)シルト質粘土</p> <p>17. 灰色(5Y4/1)シルト質粘土 (近世水田耕作土)</p> <p>18. 灰色(5Y4/1)シルト質粘土 (17に比べて砂質強い, 近世水田耕作土)</p> | <p>19. 灰黄褐色(10YR4/2)シルト質粘土 (近世水田耕作土)</p> <p>20. オリーブ褐色(2.5Y4/3)砂礫混粘質土 (近世水田耕作土)</p> <p>21. 褐色(10YR4/6)粘質土, 灰黄褐色(10YR4/2)粘質土含む (素掘小溝)</p> <p>22. 灰黄褐色(10YR4/2)シルト質粘土 (水田耕作土)</p> <p>23. 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質粘土 (水田耕作土)</p> <p>24. オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質粘土 (水田床土層)</p> <p>25. 黄褐色(10YR5/6)粘質土 (幕末~近代, 石組暗渠排水溝)</p> <p>26. 褐灰色(10YR4/1)砂礫 (幕末~近代, 石組暗渠排水溝)</p> <p>27. 灰黄褐色(10YR4/2)シルト質粘土 (中世~近世水田耕作土)</p> <p>28. 灰黄褐色(10YR4/2)シルト質粘土 (27に比べてやや明るい, 中世~近世水田耕作土)</p> <p>29. 褐色(10YR4/4)粘質土 (水田床土層)</p> <p>30. 灰黄褐色(10YR4/2)粘土質シルト (鉄斑が認められる, 中世~近世水田耕作土)</p> <p>31. 灰黄褐色(10YR4/2)粘土質シルト (鉄斑が認められる, 30に比べてやや明るい, 中世~近世水田耕作土)</p> <p>32. 灰黄褐色(10YR4/2)粘質土 (瓦・土器細片含む, 中・近世素掘小溝)</p> <p>33. 褐色(10YR4/4)粘質土 (瓦・土器細片含む, 中・近世素掘小溝)</p> <p>34. 褐色(10YR4/4)粘土質シルト (瓦・土器細片含む, 中・近世素掘小溝)</p> <p>35. オリーブ褐色(2.5Y4/6)粘質土, 暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質土含む (瓦・土器細片多く含む)</p> <p>36. 灰黄褐色(10YR4/2)粘土質シルト (中・近世素掘小溝)</p> | <p>37. オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂 (直径5cm以下の砂礫少量含む)</p> <p>38. 灰黄褐色(10YR4/2)粘質土 (水田畦畔)</p> <p>39. オリーブ褐色(2.5Y4/4)粘質土 (瓦・炭化物・土器細片多く入る, 素掘溝)</p> <p>40. オリーブ褐色(2.5Y4/6)粘質土, 暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質土斑入 (素掘溝)</p> <p>41. にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質土 (中・近世素掘小溝)</p> <p>42. にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質土 (中・近世素掘小溝)</p> <p>43. オリーブ褐色(2.5Y4/4)粘質土 (中・近世素掘小溝)</p> <p>44. にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質土 (中・近世素掘小溝)</p> <p>45. にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土質シルト (中・近世素掘小溝)</p> <p>46. にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質粘土 (瓦・土器片・炭化物多く含む, 中世整地層: 整地層I)</p> <p>47. オリーブ褐色(2.5Y4/6)粘質土 (SP774埋土)</p> <p>48. オリーブ褐色(2.5Y4/6)粘質土, オリーブ褐色(2.5Y4/3)粘質土含む (SP774柱痕跡)</p> <p>49. オリーブ褐色(2.5Y4/6)粘質土 (48に比べてしまり強い, SP774掘形埋土)</p> <p>50. オリーブ褐色(2.5Y4/4)粘質土, 地山ブロック斑入 (SP774掘形埋土)</p> <p>51. オリーブ褐色(2.5Y4/6)粘質土, 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質粘土含む (整地層)</p> <p>52. オリーブ褐色(2.5Y4/6)粘質土, 地山ブロック多く含む (創建期整地層: 整地層II)</p> <p>53. 地山</p> |
|--|---|--|



- | | |
|--|--|
| <p>1. 表土</p> <p>2. 08A区埋戻し土</p> <p>3. オリーブ褐色(2.5Y4/3)粘質土 (砂礫多く含む, 現代攪乱)</p> <p>4. にぶい黄褐色(10YR4/3)砂礫混シルト (コンクリート片入る, 現代攪乱)</p> <p>5. 灰黄褐色(10YR4/2)砂礫混粘質土, 地山ブロック斑入 (コンクリート片入る, 現代攪乱)</p> <p>6. にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質土, 地山ブロック斑入 (コンクリート片入る, 現代攪乱)</p> <p>7. オリーブ褐色(2.5Y4/3)粘質土</p> <p>8. オリーブ褐色(2.5Y4/3)粘質土, 黄褐色(2.5Y5/6)粘質土斑入</p> <p>9. 黄褐色(2.5Y5/6)粘質土, オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト斑入 (戦後米軍接收時盛土)</p> <p>10. オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質粘土, 耕作土ブロック多く含む (戦後米軍接收時盛土)</p> <p>11. 黄褐色(10YR5/6)粘質土, 灰黄褐色(10YR4/2)シルト斑入 (近代以降陸軍盛土)</p> <p>12. オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質粘土, 黄褐色(2.5Y5/6)粘質土少量含む</p> <p>13. 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂礫混粘質土</p> | <p>14. 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂礫混粘質土</p> <p>15. 灰黄褐色(10YR4/2)シルト質粘土 (近世~幕末, 水田耕作土)</p> <p>16. 褐色(10YR4/4)粘質土 (鉄分の沈着・マンガン斑が顕著に認められる, 水田床土層)</p> <p>17. 灰黄褐色(10YR4/2)粘土質シルト (鉄斑が認められる, 中世~近世水田耕作土)</p> <p>18. 灰黄褐色(10YR4/2)粘土質シルト (鉄斑が認められる, 中世~近世水田耕作土)</p> <p>19. にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質土 (中・近世素掘小溝)</p> <p>20. オリーブ褐色(2.5Y4/3)砂礫混粘質土 (瓦・土器片等多く含む, 締め強い, 中世整地層: 整地層I)</p> <p>21. 褐色(10YR4/6)粘質土, 灰黄褐色(10YR4/2)粘質土斑入 (創建期整地層か)</p> <p>22. 暗褐色(10YR3/3)砂礫混粘質土 (創建期整地層: 整地層II)</p> <p>23. 明黄褐色(10YR6/6)砂礫混粘質土 (地山)</p> |
|--|--|



第29図 11A区北壁土層断面図



第30図 SP775・SP718・SE773 平面・断面図

などの多数の遺物が出土し、遺物整理箱で約 10 箱分に及ぶ。

出土遺物は奈良時代に属する瓦類を除けば、いずれも 13 世紀前半におさまる一括性の高いものである。なお花崗岩製礎石片は、直径約 60cm に復元できる削り出しによる円形の柱座を設けており、新薬師寺旧境内のいずれかの堂舎で使用された礎石と推察する。

小結 今回の調査では、目的とした大型基壇建物の中軸線を示唆する遺構は確認できなかったが、東西溝 S D 200 の西側延長部と、詳細な時期は不明ながら大型の掘立柱穴 S P 775、また 13 世紀前半代の遺物を含む井戸 S E 773 などを検出した。以下、補足を加えて今回の調査成果についてまとめておく。

東西溝 S D 200 の延長部がさらに西側に延びることは 2008 年度調査の項で述べた。また溝内に凝灰岩や側石を抜取った形跡が確認できないことも 2008 年度の調査所見と同様である。ただ今回、S D 200 検出箇所から南に約 8 m の地山直上において、S D 200 に並行する東西溝 S D 748 を検出した（第 23 図）。今後 S D 200 との関連が認められる可能性もあるため、ここで若干触れておく。

東西溝 S D 748 は、検出幅 1.2 m、南北幅 1.1 m、深さ 0.1 m をはかる素掘りの溝で、溝底の標高は 119.82 m である。遺物は出土しなかった。溝が東西方向に連続するとすれば、S P 775 北側と 08 F 区付近に検出されるはずだが、S P 775 北側は近代以降の攪乱で遺構面が大きく削平されており、また 08 F 区内も中世遺構や S D 280 の埋土が錯綜しているため、溝が連続するかどうかは現段階では不明である。ただし S D 748 は上部が水田耕作により削平を受けているものの、埋土の状況や溝幅からみて、中・近世遺構とは考えにくく、今後 S D 200 の走向の把握とともに追及すべき遺構と言える。

大型基壇建物廃絶後の遺構には、2008 年度調査時の中世整地層、瓦溜 S X 256、掘立柱建物 S B 002・003、土坑 S X 177、また今回検出した井戸 S E 773、掘立柱穴群などの 13 世紀前半

代を中心とした遺構がある。またやや時期が降るが 15 世紀代の遺物が出土した S K 284 と 09-2 D 次区で検出した中世後半に属するとみられる S K 530 があるが、大型基壇建物廃絶後の 10 世紀中頃以降から 12 世紀後半までと、その後の 13 世紀後半から 14 世紀代にかけての遺構・遺物は極端に少なく、この間調査区周辺では積極的な土地利用は行われなかったものと推測する。

大型基壇建物廃絶後に遺構・遺物が最も多く認められる 13 世紀前半は、現新薬師寺本堂の化粧天井の設置や組物など部材全般にわたる大修理、また寺域内に新たな堂舎である釈迦堂を建立するなど、寺域の再整備が活発に行われた時期にあたる²⁾。本調査区内においても、これに伴う形で旧境内を含む寺域の再整備が行われた可能性があり、今後は周辺の調査成果を踏まえて、中世新薬師寺旧境内の土地利用を復元していく作業が必要であろう。

(島軒)

《参考文献》

- ・独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所 古代の瓦溜遺跡Ⅰ遺構編 2003
- ・奈良国立文化財研究所 興福寺 第 1 期境内整備事業にともなう発掘調査概報Ⅰ 興福寺 1999
- ・独立行政法人文化財研究所 興福寺 第 1 期境内整備事業にともなう発掘調査概報Ⅱ 興福寺 2002
- ・奈良県教育委員会 東大寺防犯施設工事・発掘調査報告書 発掘調査篇 東大寺 2000
- ・奈良国立文化財研究所 西隆寺発掘調査報告書 奈良県教育委員会 1993
- ・奈良県教育委員会事務局文化財保存事務所編 西隆寺金堂修理工事報告書 瓦調査・発掘調査編 奈良県教育委員会 2009
- ・奈良県教育委員会 唐提寺防犯施設工事・発掘調査報告書 1995
- ・奈良国立文化財研究所 薬師寺発掘調査報告書 奈良国立文化財研究所資料第 45 冊 1987
- ・奈良県教育委員会 奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成 10 年度 2000
- ・奈良県教育委員会 奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成 12 年度 2002
- ・山崎堂「凝灰岩と石工」年報 都城 2 財団法人山崎埋蔵文化財センター 1990
- ・奈良県立自然考古学研究所 奈良県瓦溜調査概報(第一分冊) 2005

《註》

- 1) 西川新次「新薬師寺」大和古寺大観 第 476、1977
- 2) 西川新次「新薬師寺」大和古寺大観 第四卷 1977
「新薬師寺縁起」によると釈迦堂は、建仁 3 年(1202) 解脫上人の建立とされ、堂内に迦葉作の釈迦如来像が祀られていたという。

第三章 出土遺物

四カ年におよぶ構内調査で出土した遺物は、遺物整理箱で約 200 箱に及ぶ。そのうちの約 9 割が瓦埴類で、他に土器類・鉄製品・石製品などが 1 割程ある。特筆すべき遺物として、乾漆像の破片とみられる木屎漆片や堂内荘厳具あるいは仏像表面を覆っていた金箔片、堂内の壁上片などの微細遺物がある。

以下、瓦埴類、土器類、金属製品・石製品・その他の遺物の順に述べる。

第 1 節 瓦埴類

瓦埴類は遺物整理箱で約 170 箱出土した。その大半が丸・平瓦で、他に軒丸瓦、軒平瓦、鬼瓦、隅木蓋瓦、塼が 20 箱程ある。内訳は、軒丸瓦が 51 点、軒平瓦が 70 点、鬼瓦が 2 点、隅木蓋瓦が 1 点、塼が 23 点である。熨斗瓦・面戸瓦と判断できる資料は確認できなかった。

(1) 軒丸瓦

型式が判明した奈良時代の軒丸瓦は 5 型式 5 種 37 点あり、細片のため型式不明のものが 12 点、平安時代以降のものが 2 点ある。

6301 型式 I 種 (第 31 図-1・2) いわゆる興福寺式の複弁八弁蓮華紋軒丸瓦で、外区内縁に大振りの珠紋を配する。外区外縁には線鋸歯紋が巡る。中房の蓮子は 1-5+10 である。接合する丸瓦広端部凹面側を片刃状に削る。丸瓦の接合線は凹弧状を呈し、内面接合部を横方向にナデつける。瓦当裏面から丸瓦接合部にかけては縦ナデ、瓦当裏面はユビオサエしたのち不定方向のユビナデ、瓦当裏面下半部は周縁に沿ってヘラケズリする。瓦当裏面に布目圧痕は認められない。丸瓦部凸面は丁寧に縦ヘラケズリする。側面に範端痕を残す。範型に 2 層から 3 層に分けて粘土を詰め込んでおり、紋様面が薄く剥離した資料が多くみられる。焼成硬緻で青灰色を呈するものと、やや軟質で灰色～灰黄色を呈するものがあり、後者が多い。胎土はいずれも緻密である。全体的に非常に丁寧に作りの軒丸瓦である。雨落溝 S D 050 か

ら 13 点、S D 280 から 2 点、N R 503 から 2 点、耕作土その他から 3 点、計 20 点出土した。

同範品が東大寺¹⁾、興福寺²⁾、法華寺³⁾、荒池瓦窯⁴⁾で出土している。

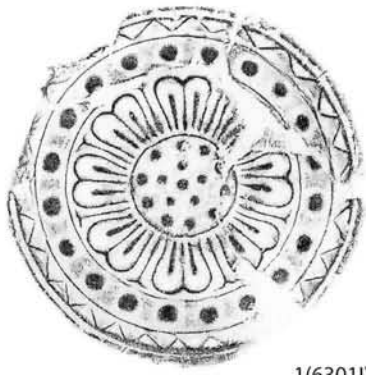
6235 型式 G 種 (第 31 図-3) いわゆる東大寺式の複弁八弁蓮華紋軒丸瓦である。間弁は独立せず、弁端は蓮弁端と接して圏線状に巡る。中房に 1+6 の蓮子を配する。内面接合部から瓦当裏面にかけて粗く縦方向にナデつける。接合する丸瓦広端部凹面側を片刃状に削る。焼成はやや軟質で暗灰色を呈し、胎土は砂粒を少量含むものの精良である。雨落溝 S D 050 から 4 点、井戸 S E 773 から 1 点、計 5 点出土した。

同範品が東大寺⁵⁾、平城京左京三条二坊十・十五坪⁶⁾で出土している。

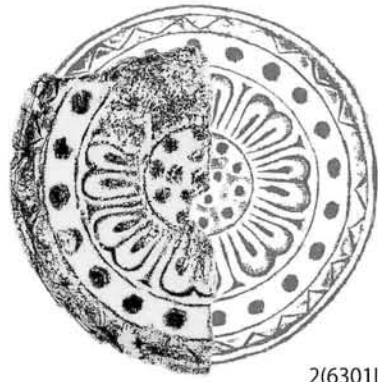
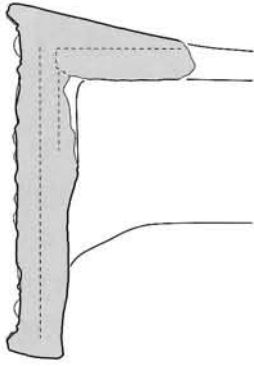
6235 型式 M 種 (第 31 図-4) いわゆる東大寺式の複弁八弁蓮華紋軒丸瓦で、間弁は T 字状を呈する。中房に 1+6 の蓮子を配する。丸瓦部凸面は縦ヘラケズリする。破片のため他の部位の調整は不明である。焼成は硬緻で灰白色を呈し、胎土は緻密である。S D 280 から 1 点出土した。現物照合の結果、M a 種の可能性が高い。

6235 型式 M 種は、東大寺⁷⁾、頭塔⁸⁾、荒池瓦窯⁹⁾、京都府木津川市七人ヶ平遺跡¹⁰⁾で出土している。なお M a 種の瓦当範彫直し後の M b 種軒丸瓦は、6732 型式 F a 種軒平瓦とセット関係になる頭塔所用瓦である。新薬師寺出土資料が 1 点のみであるため、今後資料数が増加すれば、あるいは M b 種も確認されるかもしれない。

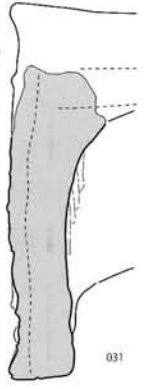
6234 型式 A 種 (第 31 図-5) 複弁八弁蓮華紋軒丸瓦で、間弁がなく弁が菊花状を呈する。中房に 1+6 の大振りの蓮子を配する。拓本に外区外圏線が表されていないが、低いながらも外区外圏線は残る。磨滅が著しいが、現物照合の結果、弁を高く盛り上げる A b とは異なり、改範前の A a 種の可能性が高い。丸瓦接合線は凹弧状を呈し、接合する丸瓦広端部の凹面側を片刃状に削る。側面に範端痕を残す。磨滅が著しく調整は不明で



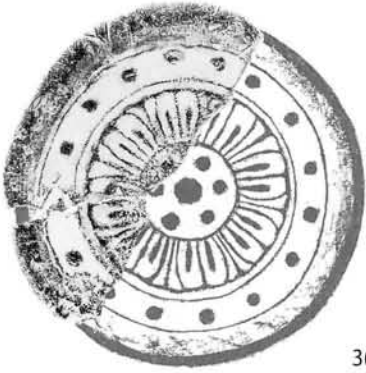
1(6301I)



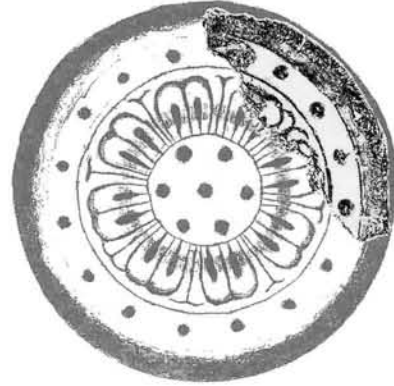
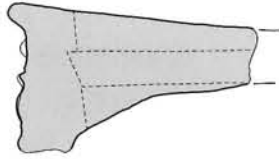
2(6301I)



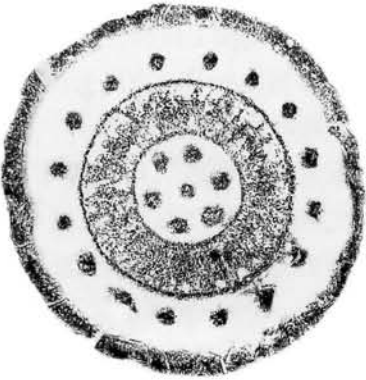
031



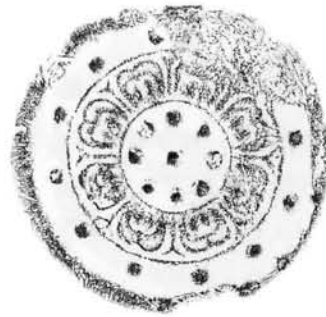
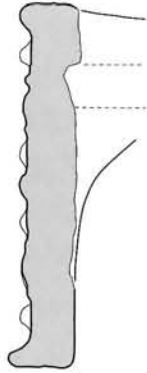
3(6235G)



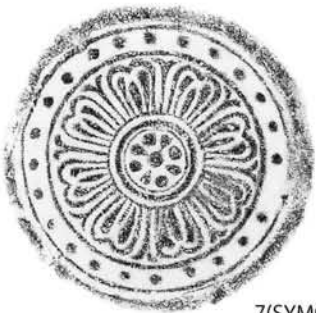
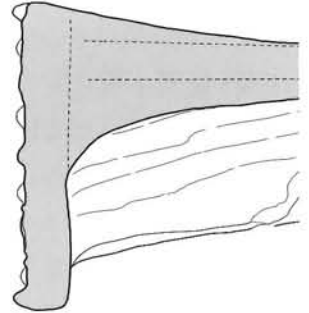
4(6235M)



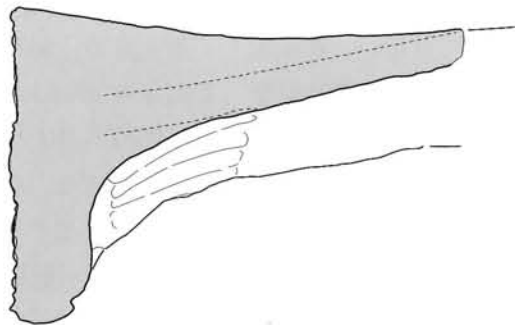
5(6234A)



6(6236E)



7(SYM01)



8(SYM02)

0 (1:4) 10cm

第 31 图 軒丸瓦実測図

ある。焼成はやや軟質で灰色～灰黄色を呈する。胎土は砂粒を含みやや粗い。雨落溝 S D 050 内から 2 点出土した。

同範品のうち A a 種軒丸瓦は現新薬師寺境内¹³⁾の他、東大寺¹²⁾、興福寺¹⁴⁾で出土している。

6236 型式 E 種 (第 31 図-6) 唐招提寺創建瓦と同範の軒丸瓦である。複弁八弁蓮華紋軒丸瓦で、中房にやや大振りな蓮子を 1+8 配する。丸瓦広端部の凹面側を片刃状に削る。丸瓦の接合に際しては、内面接合部から瓦当裏面にかけて粗く縦方向にナデつける。磨滅が著しく他の部位の調整は不明である。外縁上端に範端痕を残す。焼成はやや軟質で灰色～灰黄色を呈する。胎土は砂粒を含みやや粗い。南北溝 S D 280 から 3 点、耕作土・その他から 3 点、計 6 点出土した。

同範品が唐招提寺¹⁴⁾、西隆寺¹⁵⁾、東大寺¹⁶⁾で出土している。なお全ての資料を実見したわけではないが、唐招提寺出土例に比べて範傷が進んでおらず、唐招提寺に供給される以前に新薬師寺に供給された可能性が高いと思われる。

S Y M 01 型式 (第 31 図-7) 中房を囲む圏線が二重に巡る複弁八弁蓮華紋軒丸瓦で、やや低い半球状の中房に 1+8 の蓮子を配する。丸瓦部凸面は粗く縦ヘラケズリしたのち縦ナデする。丸瓦の接合位置は低く、接合線は円弧状を呈する。丸瓦接合部は瓦当裏面から内面接合部にかけて、縦方向に粗くナデつける。外縁上端に範端痕を残す。丸瓦内外面の補足粘土が多いためか、丸瓦接合部にヒビ割れが生じており、焼成前に粘土を充填して補修している。瓦当厚は 4 cm 以上で厚い。焼成硬緻で暗灰色を呈するものと、やや軟質で茶褐色を呈するものがある。胎土は砂粒を多く含む粗い。南北溝 S D 280 から 1 点、N R 503 から 1 点、他 1 点の計 3 点出土した。

現在までのところ他遺跡で同範品の出土を聞かないが、既往の調査で同範品とみられる資料が 1 点出土している¹⁷⁾。間弁を除いた紋様構成は 6316 U に類似する。外縁形態は直立縁 II で、中房圏線を二重に巡らせるなど、奈良時代後半でも後出的な要素を備えており¹⁸⁾、奈良時代末から平安時代初頭頃の軒丸瓦と推測する。

S Y M 02 型式 (第 31 図-8) 奈良時代の軒丸瓦と考えられるが、細片のため型式固定するのが困難である。盛り上がりの強い蓮弁を有する。焼成硬緻で灰色を呈し、胎土は精良である。S D 050 から 1 点出土した。

平安時代後期以降の軒丸瓦 細片のため図示しなかったが、中・近世耕作土内から外縁部のみ破片が 2 点出土した。小型の巴紋軒丸瓦になるかと思われるが、詳細は不明である。いずれも平安時代後期から鎌倉時代初頭頃と思われる。

(2) 軒平瓦

軒平瓦は 70 点出土した。型式が判明した奈良時代の軒平瓦は 4 型式 6 種 45 点あり、細片のため型式不明のものが 19 点。新型式と見られるものが 4 点、平安時代後期以降のものが 2 点ある。

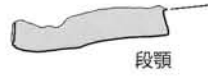
6671 型式 J 種 (第 32 図-9～11) いわゆる興福寺式の三回反転均整唐草紋軒平瓦である。中心飾は分離した下向き C 字形の中心葉の中に、紡錘形の小葉を配したもので、C 字形中心葉の向って左側の中心葉が大振りに表現されるのが特徴的である。上外区と左右脇区に楕円形珠紋、下外区に線鋸歯紋を配する。外縁上面に範端痕を残す。段顎と曲線顎の 2 種が出土した。段顎は 1 点のみで、他は全て曲線顎である。

9 は顎部長 8.5cm で顎部を横ヘラケズリしたのち横ナデ、段部は横ナデする。顎の剥離面に糸切痕を残すことから、粘土板顎貼付け式の段顎である。破片のため他の部位の調整及び平瓦部の状況は不明である。曲線顎の軒平瓦の平瓦部は、桶巻作り平瓦の特徴である模骨痕、粘土板糸切り痕を残すことから、粘土板桶巻き作りで製作された平瓦である。平瓦部凸面と側面は縦ヘラケズリしたのち縦ナデし、側縁部を面取りする。平瓦部凹面は瓦当寄りを横ヘラケズリし、一部縦ナデで布目圧痕をスリ消す。焼成は硬緻で青灰色を呈するものと、やや軟質で灰色～灰黄色を呈するものがあり、後者が多い。胎土は少量の砂礫を含むが精良である。雨落溝 S D 050 から 6 点、S D 280 から 2 点、N R 503 から 1 点、S X 256 から 1 点、耕作土その他から 5 点、計 15 点出土した。

同範品が東大寺¹⁹⁾、荒池瓦窯²⁰⁾で出土してい



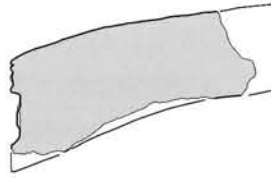
9(6671J)



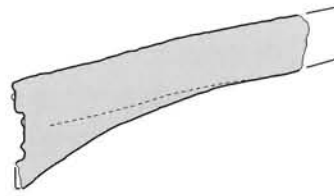
段顎



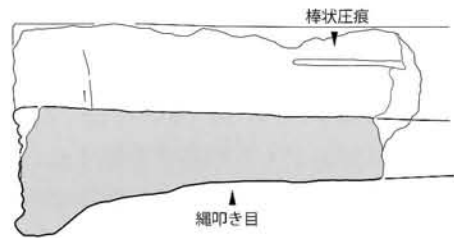
10(6671J)



11(6671J)

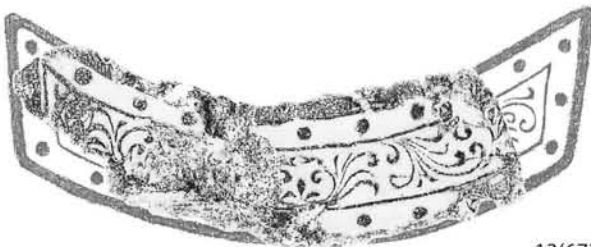


12(6732A)

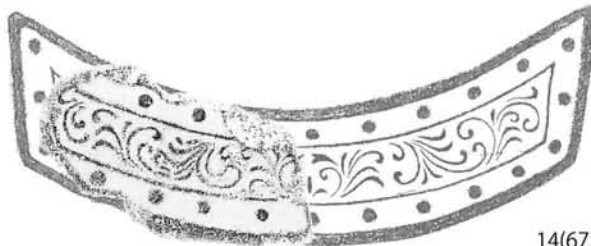
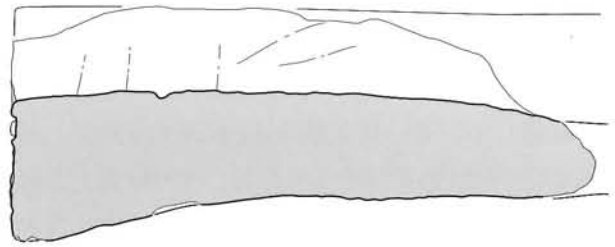


棒状圧痕

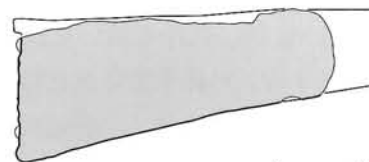
縄叩き目



13(6732D)



14(6732D)



0 (1:4) 10cm

第 32 図 軒平瓦実測図①

るほか、興福寺に採集品がある²¹⁾。

6732 型式 A 種 (第 32 図 - 12) いわゆる東大寺式の軒平瓦である。6732 型式軒平瓦は平城宮・京内で 20 種類以上の范型が確認されており、奈良時代の軒平瓦の中では最も范型の種類が多い。

三回反転均整唐草紋軒平瓦で、中心飾は対葉花紋の中に下から派生した三葉紋を配する。顎形態は曲線顎Ⅱで、平瓦部凸面を縦縄叩きしたのち、顎部やや後方の幅 5 cm 程度を横縄叩きするのが特徴的である。顎部は横ナデする。平瓦部凹面は瓦当寄りを横ヘラケズリしたのち横ナデし、以下は未調整で布目圧痕を残す。焼成硬緻で灰色を呈する。胎土はマーブル状を呈し、少量の砂粒を含むが精良である。NR 503 から 1 点出土した。

同范品が平城宮²²⁾、西隆寺²³⁾、檜隈寺²⁴⁾、京都府木津川市市坂瓦窯²⁵⁾で出土している。

6732 型式 D 種 (第 32 図 - 13・14) いわゆる東大寺式の軒平瓦で顎形態は直線顎である。平瓦部凸面は縦ヘラケズリし、凸面狭端側の一部に布目圧痕を残す。いわゆる凸面布目押圧技法により製作された軒平瓦である。平瓦部凹面は瓦当寄りを横ナデ、以下を縦ヘラケズリのち縦ナデ、側面は縦ヘラケズリする。平瓦部の 1/2 程度を欠損するが、重さはすでに 8 Kg を超えており非常に重い。焼成は硬緻で青灰色を呈するものと、やや軟質で灰色を呈するものがある。胎土は砂礫を多く含み粗い。13 は紋様面の一部が潰れているが、失敗品として廃棄されず、製品として供給された点で、当時の造瓦所の慌ただしさを感じさせる軒平瓦と言えよう。NR 503 から 1 点、他 1 点の計 2 点出土した。

同范品が東大寺で出土している²⁶⁾。

6732 型式 F 種 (第 33 図・第 34 図 - 16・17)

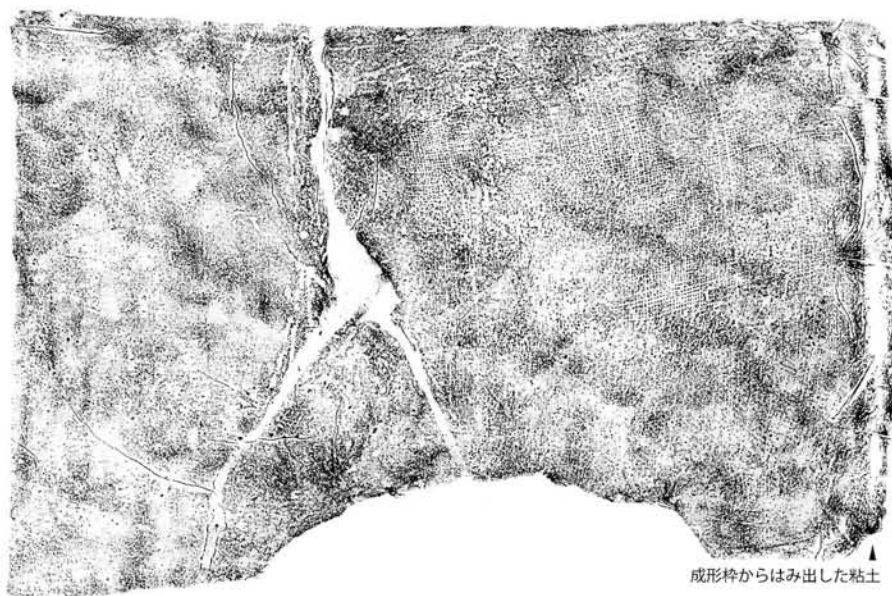
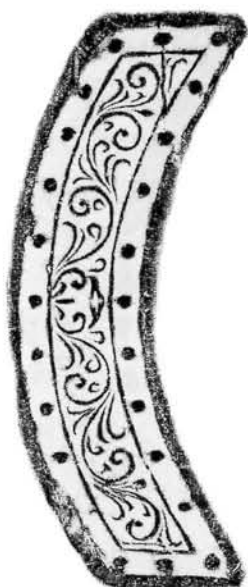
いわゆる東大寺式軒平瓦である。6732 型式 F 種は改范前の F a 種と、范型を彫り直して当初より珠紋や唐草紋などが太くなる F b 種の 2 種があり、今回出土したもので種別が判明する資料は F b 種である。ただし採集資料や周辺の既往の調査では F a 種の出土もある²⁷⁾。顎形態は曲線顎である。製作技法が判明するものは全て凸面布目押圧技法で製作された軒平瓦で、縄目叩きを残す

ものは確認できない。平瓦部凸面には、凹面側から連続した布目圧痕が残り、狭端面には成形台からはみだしたとみられる粘土が段状に残る。段の高さは約 1.5cm である。凸面狭端側には成形時の掌圧痕が狭端縁に沿って確認できる。凸面側は縦ヘラケズリする。平瓦部凹面は、瓦当寄りの幅 15cm 程度を横ヘラケズリする。側面は縦ヘラケズリし、側縁に面取りを行う。17 は平瓦部凸面に朱が付着しており、軒瓦を載せる瓦座を塗装した際にはみだした朱が付着したと考えられる。これにより軒平瓦の瓦座からの出が 15cm 前後とわかる。

凸面押圧技法による軒平瓦の成形台としては、平瓦部狭端側に立ちあがりを用意した型枠状の凸型台が推定されている²⁸⁾。本資料にも狭端面に高さ 1.5cm 程度の段がみられ、狭端部に立ちあがりを有した型枠状の成形台の使用が推定できる。焼成はやや軟質で暗灰色を呈するものと、灰色～灰黄色を呈するものがある。胎土は砂礫を多く含むが概ね精良である。雨落溝 S D 050 で 2 点、S D 200 で 1 点、S D 280 で 5 点、NR 503 で 2 点、他 15 点の計 25 点出土した。

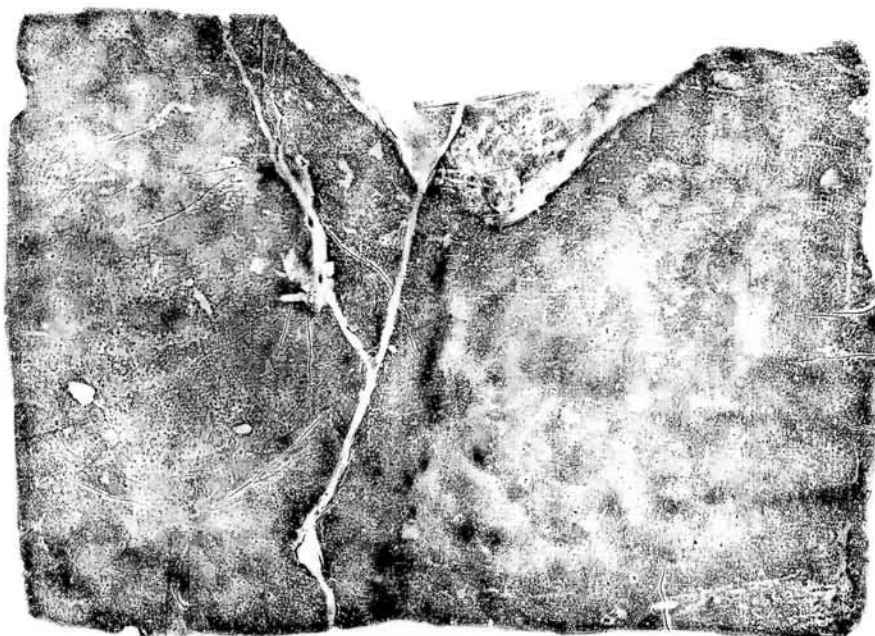
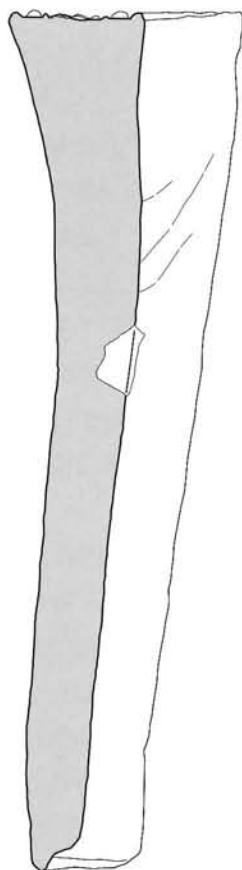
同范品のうち F a 種は、東大寺²⁹⁾、頭塔³⁰⁾、西大寺³¹⁾から出土しており、F b 種は東大寺の他に、京都府木津川市五領池東瓦窯 1・2 号窯から出土している³²⁾。五領池東瓦窯出土品は 1・2 号窯の製品ではなく、焚口構築材として他から転用されたものである。なお同窯出土軒平瓦の顎形態は曲線顎Ⅱで、平瓦部凸面を縄叩きしており、新薬師寺出土資料とは顎形態や製作技法が異なる。

SYH 01 (第 34 図 - 18) 紋様面は范による施紋ではなく手彫りで製作されている点が特徴的であり、紋様の陰陽が逆転したかのような印象を受ける。均整唐草紋軒平瓦で、左右が欠損しており三回反転の唐草紋になるかは不明。中心飾は対葉花紋の中に三葉紋を配する。対葉花紋の基部が長く伸びて、中心飾を包み込むように配される。外区に小振りな珠紋を配する。平瓦部凸面は縦ヘラケズリ、平瓦部凹面は瓦当寄りを横ヘラケズリまたは横ナデする。以下は未調整で粗い布目圧痕



成形枠からはみ出した粘土 ▲

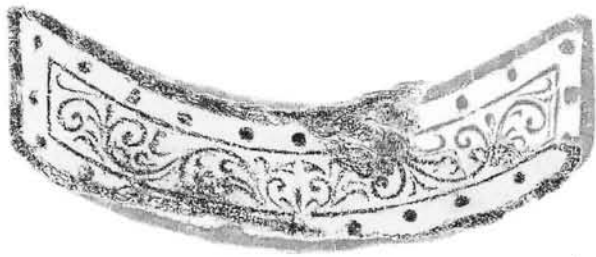
15 (6732F)



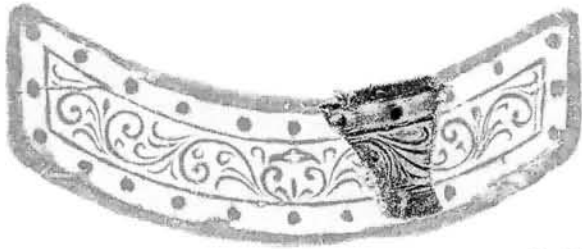
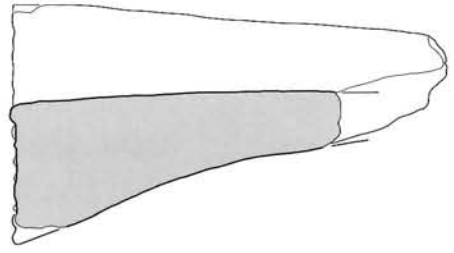
凸面側に回り込んだ布目圧痕
と掌圧痕 ▲

0 (1:4) 10cm

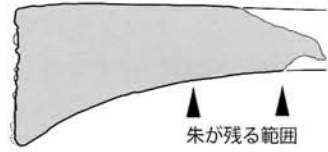
第 33 図 軒平瓦実測図②



16 (6732F)



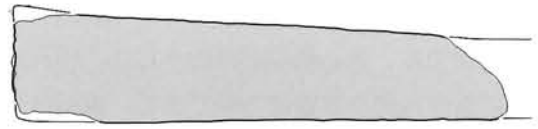
17 (6732F)



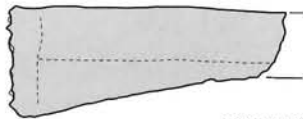
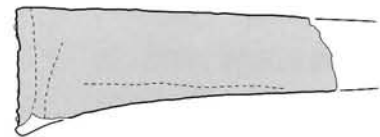
朱が残る範囲



18 (SYH01)



19(SYH02)



20(SYH02)



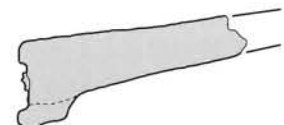
21(6663 型式)



23 (連珠紋)



22 (6801 A)



24 (宝相華唐草紋)

0 (1:4) 10cm

第 34 図 軒平瓦実測図③

が残る。凹面には乾燥時についた爪形の圧痕が左右2カ所に残る。焼成はやや軟質で灰色を呈し、胎土はやや粗い。井戸SE 773から1点出土。

紋様構成をみると、中心飾の対葉花紋の基部が長く伸びて中心葉を包み込むように表現されること、また外区に小振りな珠紋を配するなどの点で、6732型式軒平瓦をモデルとするとみられる6733型式軒平瓦に紋様構成が近い。6733型式軒平瓦は平城宮軒瓦編年第Ⅴ期から平安時代初頭に比定されており³⁴⁾、このうち対葉花紋の基部が短いものを古式に位置づけている点に注目すると、本資料は上記編年でも後半に近い時期のものと推察する。範型の破損あるいは不足に伴い急遽手彫りで製作されたのであろう。

6801 型式A種 (第34図-22) 飛雲紋軒平瓦である。中心飾は上向きC字形中心葉の中に「修」字を配する。中心飾部のみ出土した。小片のため顎形態や各部の調整は不明である。焼成はやや軟質で灰白色を呈する。胎土は精良である。「修理司」に関わると考えられている軒平瓦である。SD 050から1点のみ出土した。

同範品が平城宮³⁵⁾、西大寺³⁵⁾で出土している。

6663 型式種別不明 (第34図-21) 三回反転均整唐草紋軒平瓦で外区界線が二重に巡る。小片のため種別の同定が困難だが、現物比較ではA種の可能性が高い。小片のため顎形態や各部の調整は不明である。焼成はやや軟質で灰色を呈し、胎土は精良である。中・近世耕作土内から1点出土。

6663型式A種は平城宮³⁶⁾、平城京³⁷⁾、法華寺³⁸⁾などで同範品が出土している。なお同型式は香山堂跡でも出土している³⁹⁾。他、新薬師寺旧境内採集資料にも6663型式とみられる資料が紹介されている⁴⁰⁾。実見していないため、本資料との同範関係は不明である。

SYH 02 (第34図-19・20) 均整唐草紋軒平瓦である。下外区界線を基部とする巻きの強い蕨手状の唐草を左右に配する。中心飾りは残存していない。上下外区及び左右脇区に小振りな珠紋を配する。平瓦部凸面は縦ヘラケズリ、凹面は瓦当寄りを横ヘラケズリのち横ナデ、以下は縦ナデする。19の平瓦部凸面には朱が付着しており、

軒瓦を載せる瓦座を塗装した際に、はみだした朱が凸面部に付着したと考えられる。これにより軒平瓦の瓦座からの出が15cm程度とわかる。焼成は硬質なものやや軟質なものがあり、いずれも灰色を呈する。胎土は砂粒を多く含むが概ね精良である。SD 050から1点、SX 256から1点、耕作土内から1点、計3点出土した。

現在までのところ他遺跡で同範品の出土は確認できないが、千鳥資料中(森郁夫氏紹介資料)に同範品と見られる軒平瓦が紹介されており、この資料には中心飾が残存する。

平安時代後期以降の軒平瓦 (第34図-23・24)

23は連珠紋軒平瓦で顎形態は段顎である。小片のため顎部の成形技法や調整は不明である。焼成はやや軟質で胎土は緻密である。耕作土内から1点出土した。平安時代後期から鎌倉時代前期にかけての製品と思われる。

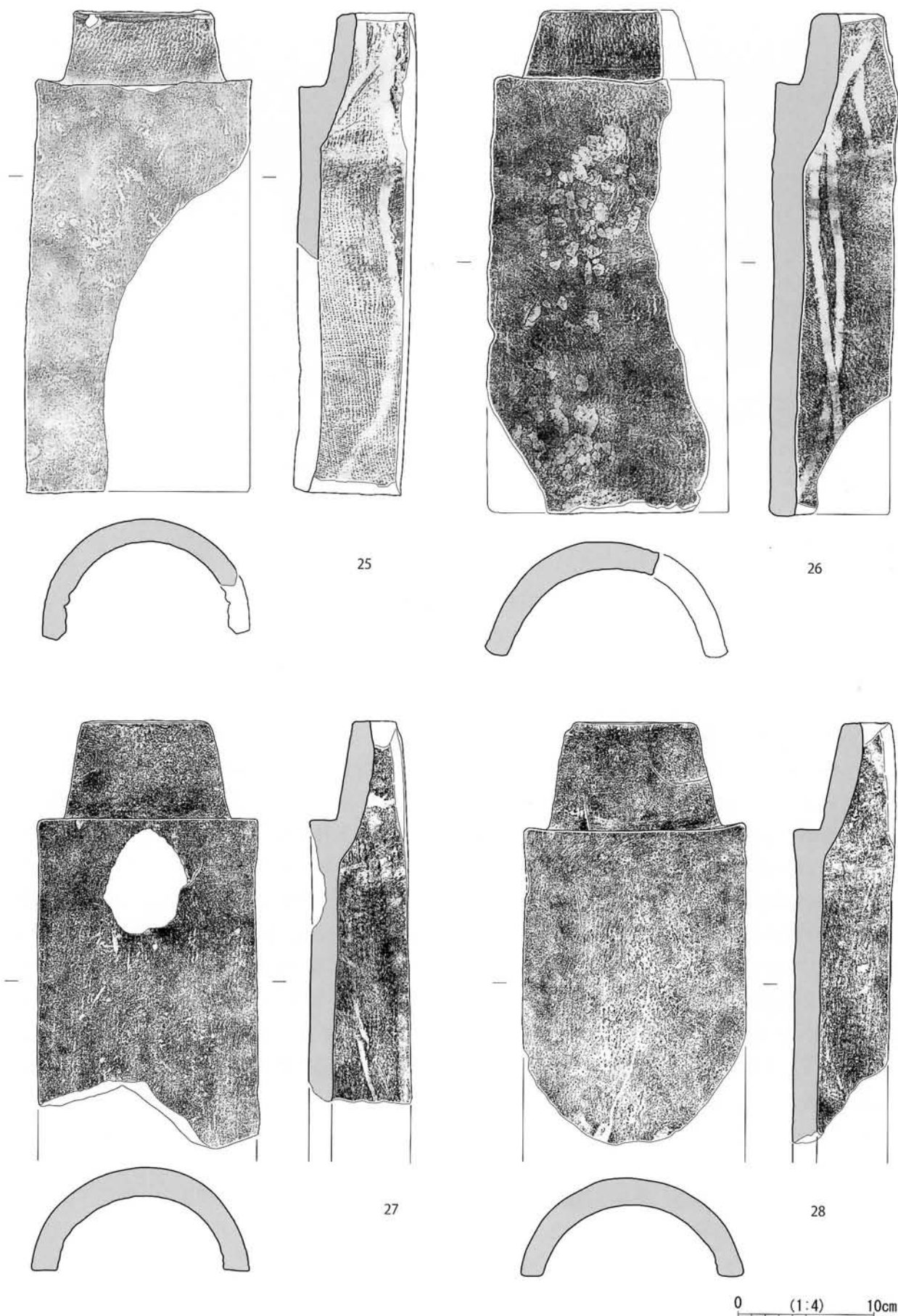
24は宝相華唐草紋軒平瓦で顎貼付け式の段顎である。平瓦部凸面は縦ナデ、顎下面と顎裏面は横ナデする。平瓦部凹面は瓦当寄りを横ヘラケズリし、以下は未調整で布目圧痕が残る。側面は縦ヘラケズリし側縁に面取りを行う。焼成は硬緻で灰色を呈する。胎土は砂粒を多く含むが、概ね精良である。近代暗渠排水溝から1点出土した。

同範確認は行っていないが、紋様構成の近いものが興福寺大湯屋⁴¹⁾、春日東西塔⁴²⁾などで出土している。平安時代後期から末頃の製品と思われる。

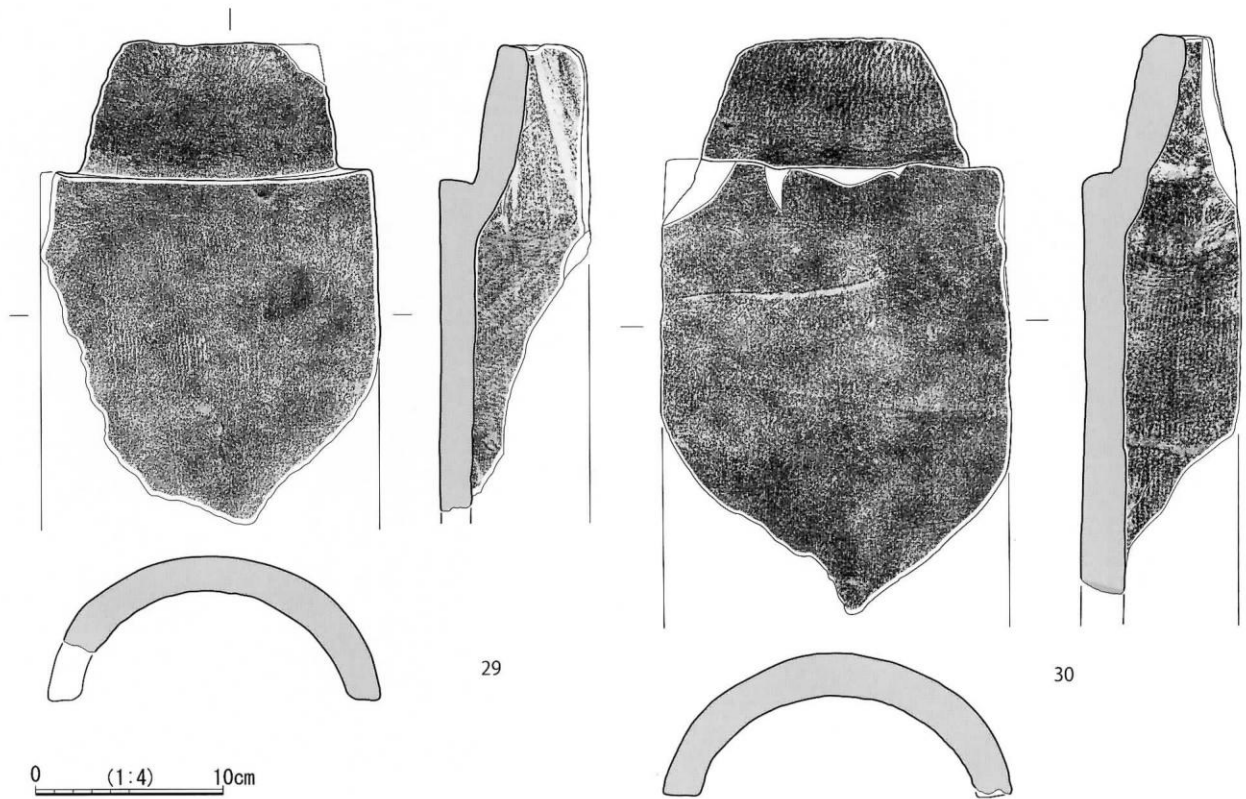
(3) 丸瓦

出土した丸・平瓦は遺物整理箱で約150箱を占め、瓦類全体の約9割を占める。これらはいずれも細片化したものが多く、現段階では全てを整理・分析するまでには至っていない。今後、より継続的な遺物整理が進めば、形式的にさらに細分化される可能性はあるが、今回は比較的残りのよい資料と特徴的な資料を中心に分類を行う。

丸瓦は完形品が1点もないが、確認できる丸瓦はいずれも胴部狭端側にジョイント用の段部を有する、いわゆる玉縁式の丸瓦である。法量のある程度判明する資料と丸瓦各部の調整手法の特徴から、以下のⅠ～Ⅲ類に分類できる。



第 35 図 丸瓦実測図①



第36図 丸瓦実測図②

丸瓦Ⅰ類 (第35図-25・26) 玉縁式丸瓦である。胴部凸面は、縦縄叩きのち横ナデで縄目をスリ消す。横ナデしたのち縦ナデを加えるものもある。玉縁部凸面は縦縄叩きのち段部との境を横ナデして縄目をスリ消す。玉縁部凸面は狭端縁と両側縁を面取りするのを基本とするが、狭端縁の面取りを省略するものもある。胴部凹面は布目圧痕と布綴じ合わせ痕を残す。側面はヘラケズリし、胴部凹面の両側縁と広端縁を面取りする。玉縁部凹面は両側縁と狭端縁を面取りするのを基本とし、加えて側面と段部との境に面取りするものもある。焼成は硬緻で青灰色を呈するものと、やや軟質で灰白色・黄灰色・灰色を呈するものがある。胎土はいずれも精良である。非常に丁寧な作りの丸瓦である。S D 050・200からの出土が目立つ。

25は全長35.2cm、胴部長29.5cm、胴部狭端幅15.7cm、玉縁長5.7cm、玉縁幅12.0cm、玉縁の段差は1.8cmである。焼成・色調・胎土からみて、軒丸瓦6301I、軒平瓦6671J、平瓦Ⅰ類に組み合う丸瓦と考えられる。Ⅰ類は丸瓦の中では最も出土量が多い。

丸瓦Ⅱ類 (第35図-27・28) 玉縁式丸瓦であ

る。胴部凸面と玉縁部凸面は縦縄叩きするが、基本的に二次的調整は施さない。胴部凹面は布目圧痕と布綴じ合わせ痕を残し、側面をヘラケズリする他は、広端縁・両側縁ともに二次的調整は施さない。玉縁部凹面は側面をヘラケズリしたのち、凹面両側縁と狭端縁を面取りする。二次的調整は最小限にとどまる。焼成はやや軟質で暗灰色を呈するものと灰色を呈するものがある。胎土は砂粒を含みやや粗い。27は残存長31.3cm、胴部狭端幅16.2cm、玉縁長7.1cm、玉縁幅12.3cm、玉縁の段差は1.9cmである。焼成・色調・胎土から軒丸瓦6235Gと軒平瓦6732F種に組み合うと考えられる。平瓦との組み合わせは出土点数が少ないため、現段階では不明である。丸瓦Ⅱ類はⅠ類に次いで出土量が多い丸瓦である。

丸瓦Ⅲ類 (第36図-29) 玉縁式丸瓦である。Ⅰ・Ⅱ類に比べやや大振りな点が特徴的である。胴部凸面と玉縁部凸面は縦縄叩きし、横ナデで縄目をスリ消す。段部は横ナデする。凸面全体に離れ砂が付着するものがある。胴部凹面及び玉縁部凹面には布目圧痕と布綴じ合わせ痕を残す。欠損する広端部の調整が不明だが、胴部凹面・玉縁部凹面

ともに両側面をヘラケズりする他は、二次的調整は施さない。焼成はやや軟質で暗灰色を呈するものと灰色を呈するものがある。胎土は砂粒を含みやや粗い。29は残存長24.7cm、胴部狭端幅17.9cm、玉縁長7.3cm、玉縁幅13.7cm、玉縁の段差は1.8cmである。

出土点数が少なく、これに組み合う軒瓦・平瓦は不明である。

丸瓦IV類（第36図-30）玉縁式丸瓦である。胴部凸面は縦縄叩きのち横ナデで縄目をスリ消す。玉縁部凸面は縦縄叩きのち横ナデで縄目をスリ消す。段部との境には横ナデを施す。胴部凹面には布目圧痕を残す。両側縁に面取りする。広端側は残存する資料がなく調整は不明である。玉縁部凹面は両側縁を面取りする。玉縁先端の面取りは凹凸両面ともに行わない。30は残存長30.3cm、胴部狭端幅18.1cm、玉縁長6.8cm、玉縁幅14.1cm、玉縁の段差は2cmである。

IV類は出土数が数点程度にとどまる。焼成はやや軟質で暗灰色を呈する。胎土は砂粒を多く含みやや粗い。焼成具合からみて中世以降の丸瓦の可能性はあるが、これについては出土数の増加をまって再度検証したい。

（4）平瓦

平瓦は細片化したものを含めて総重量約250kg分が出土した。完形品は1点もないが、製作技法に基づいて、桶巻き作りによるI類と一枚作りによるII類に大別可能で、さらに凹・凸面の調整手法の特徴から、以下のように分類する。

平瓦I a類（第37図-31・32）桶巻き作り平瓦である。凸面全面に縦縄叩きし、凸面の狭端側四分の一あるいは三分の一程度を横ナデして縄目をスリ消す。凹面全面に模骨痕と布目圧痕を残し、一部縦ナデにより布目をスリ消す。模骨痕の幅は1.8～2.2cmを測る。左右両側面と端面はヘラケズリし、凹面両側縁に面取りするのが基本だが、加えて凸面側側縁に面取りするものもある。狭端・広端縁に面取りは行わない。焼成は硬緻で青灰色を呈するものと、やや軟質で灰白色・黄灰色・灰色を呈するものがある。胎土はいずれも精良である。全体的に非常に丁寧な作りである。

31は全長36.0cm、広端幅26.0cm、推定狭端幅23.0cm、厚さ2.3cm前後、32は全長36.0cm、推定広端幅26.0cm、狭端幅22.8cm、厚さは2.3cm前後ある。

凸面の狭端側を横ナデして縄目をスリ消す調整手法は、恭仁宮、東大寺、奈良市荒池瓦窯、京都府木津川市梅谷瓦窯出土平瓦に酷似しており、東大寺系瓦工人による製作と考えられる。

平瓦I b類（第38図-33・34）桶巻き作り平瓦で、完形に復元できる資料はない。凸面全面に縦縄叩きし、凹面に模骨痕と布目圧痕を残す。確認できる資料で凸面に二次的調整を加えるものはない。模骨痕の幅は1.8～2.3cmを測る。側面・端面はヘラケズりするが、凹面両側縁と狭端・広端縁に面取りは行わない。焼成はやや軟質で灰色、暗灰色を呈する。胎土はI a類に比べやや粗い。

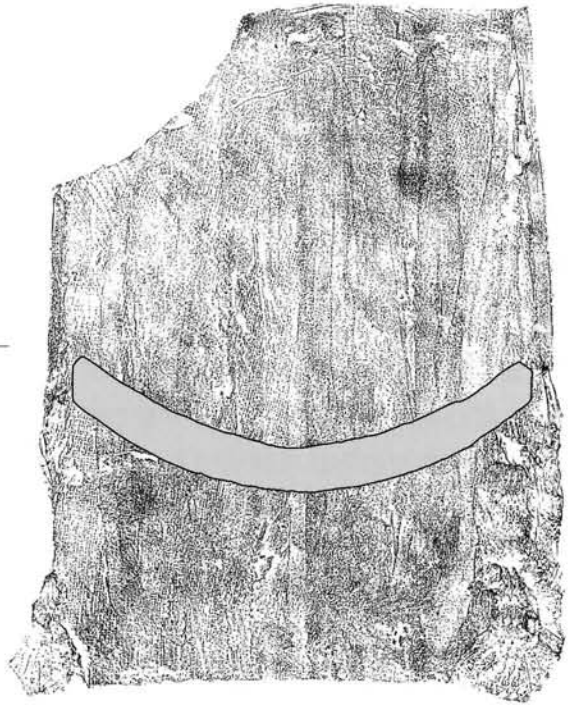
33は残存長20.5cm、残存広端幅17.5cm、厚さ2.3cm前後で、凹面に粘土板合わせ目痕を残す。34は残存長21.5cm、残存広端幅は15.0cm、厚さ2.3cm前後で、凹面には粘土板糸切痕を残す。

平瓦II a類（第38図-35・36）一枚作り平瓦で現段階で完形に復元できる資料はない。凸面は縦縄叩きし二次的調整は施さない。凹面に布目圧痕を残す。側面・端面はヘラケズりする。両側縁と狭端・広端縁ともに面取りを行わないのが基本だが、一部側縁に面取りするものもある。

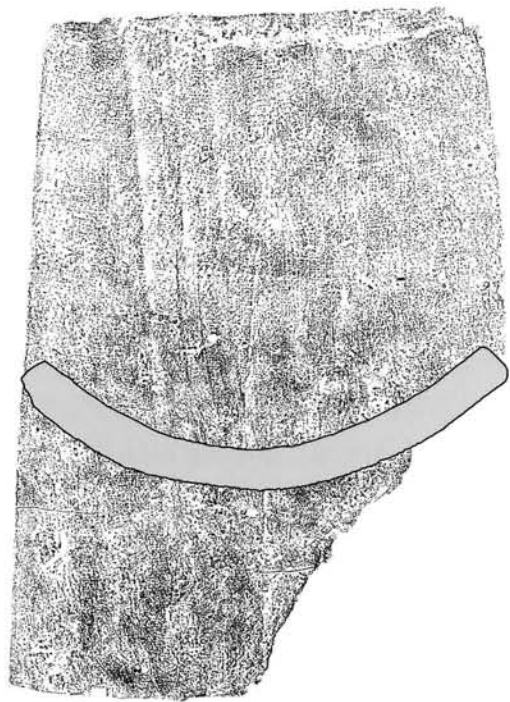
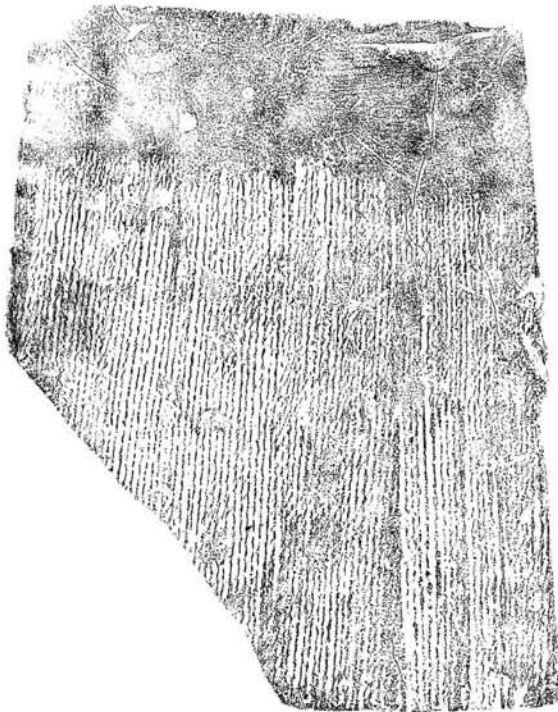
35は残存長19.5cm、残存広端幅17.0cm、厚さ2.0cm前後で、凹面広端縁に布目圧痕を残す。焼成は良好で灰黄色を呈し、胎土は精良である。

平瓦II b類（第39図-37）II a同様に完形に復元できる資料はない。凸面にやや粗い縦縄叩きを施し二次的な調整は施さない。凹面に布目圧痕を残す。側面・端面はヘラケズリし、側縁を面取りする。37は残存長19.0cm、残存狭端幅6.8cm、厚さ2.0cm前後である。焼成はやや軟質で暗灰色を呈し、胎土はやや粗い。

平瓦II c類（第39図-38）一枚作り平瓦。38は凹面の布目が粗いのが特徴的である。凸面は縦縄叩きし、凸面に離れ砂が付着する。凹面に布目圧痕を残す。確認できる側面・広端面には



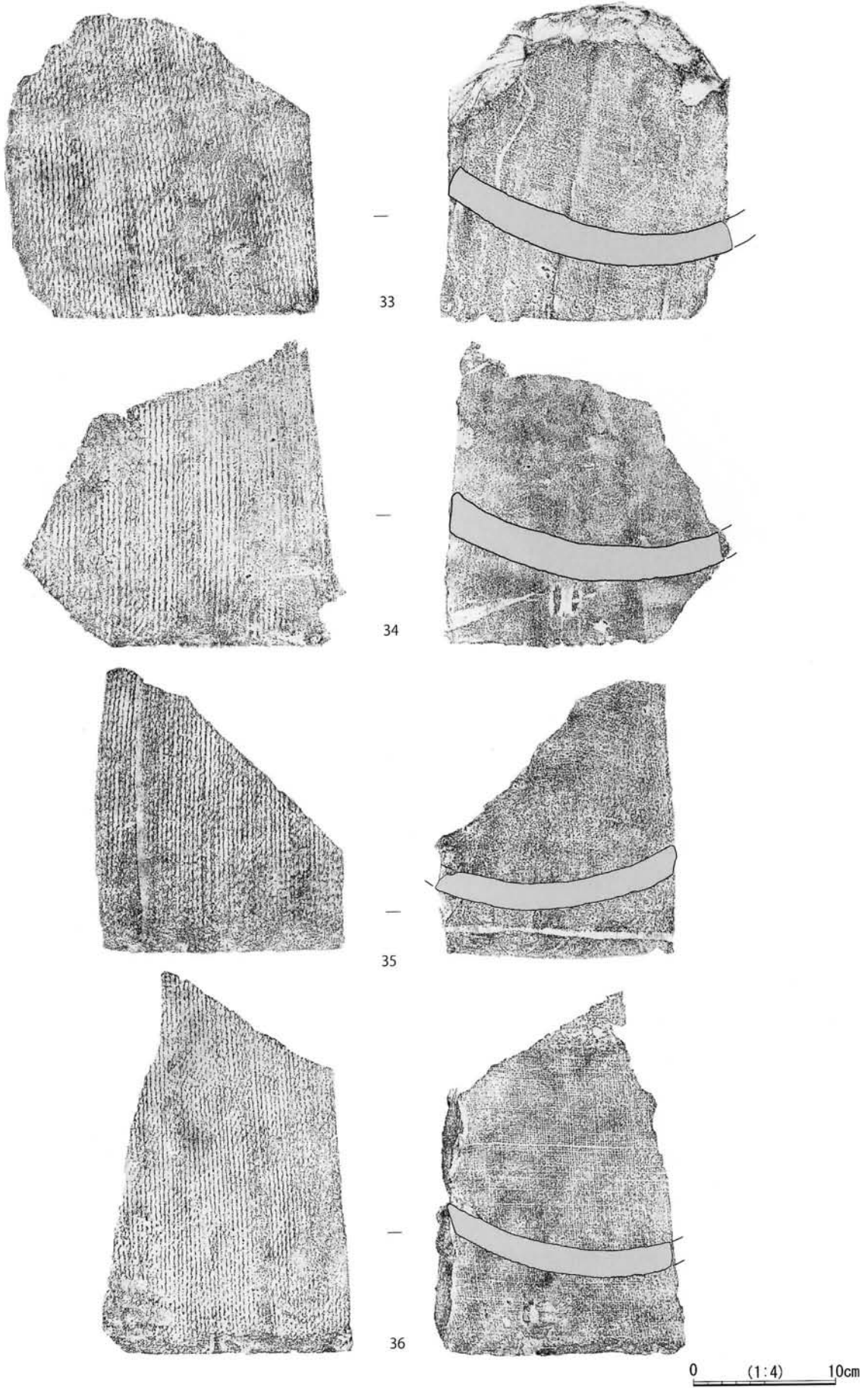
31



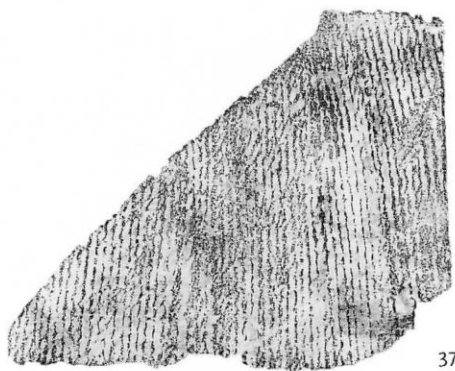
32

0 (1:4) 10cm

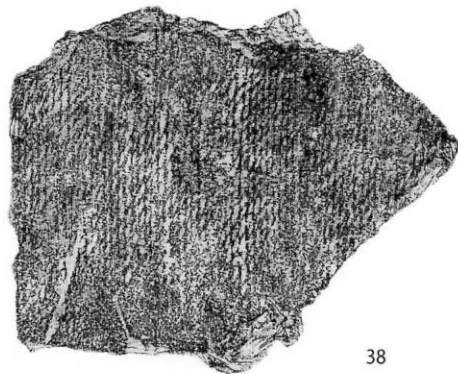
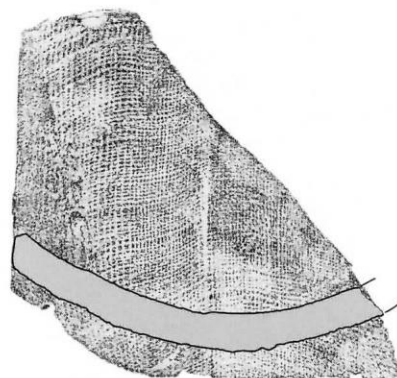
第 37 图 平瓦実測图①



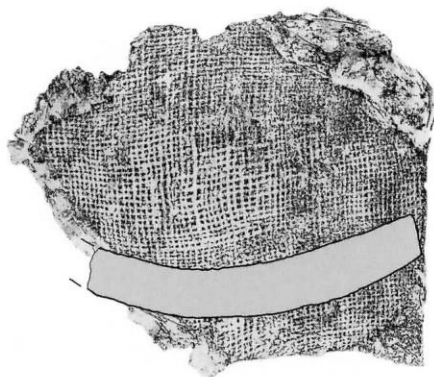
第 38 図 平瓦実測図②



37



38



0 (1:4) 10cm

第 39 図 平瓦実測図③

ヘラケズリを施し、面取りは行わない。残存長 18.5cm、残存広端幅 11.0cm で、厚さ 2.5cm 前後でやや厚手である。焼成はやや軟質で暗黄灰色を呈し、胎土はやや粗い。

(島軒)

偶数計算法による平瓦の分類

08 年度調査で出土した平瓦は桶巻作りや一枚作りの痕跡をそれぞれ残すものや、縄叩き圧痕、布目圧痕を残すものが多数存在していることから、それぞれの分類及び個体数の算出を行った。

瓦の個体数の換算には瓦の隅部を含む破片を数え、4 で割り総個体数を求める偶数計算法や、瓦の総重量を完形品の重量で割る重量計測法、瓦の総側面長を完形品の側面長で割る側面長計測法などがある。しかし新薬師寺旧境内から出土した瓦の多くは細かい破片であり、全形を推定できる資料はほとんど出土していない。このため、重量計測法や側面長計測法において標準となる瓦資料を得ることは困難であり、よって偶数計算法を用いて個体数を求めることとした。また、同時に隅部を含む瓦片を前述した I a、I b、II a、II b、II c に分類し、平瓦全体の傾向を導きだした。そ

の結果を表 3 に示す。

08 年度調査で出土した平瓦の偶数は 1098 であり、これを 4 で割った数は 275 であった。よって出土した平瓦は約 275 枚であったと推定することができる。ただし、瓦の隅の部分は欠失しやすいことから偶数計算法で求められる瓦数は本来の総個体数よりも少ない数値であるとされる。

平瓦のうち、桶巻作りである I 類は全体の 86.8%、一枚作りのである II 類は全体の 13.1% であった。桶巻作りの中で I a として分類されるものは約 175 枚であったと推定され、これは全体の 63.6% で、I b として分類されるものは約 64 枚、全体の 23.2% に当たる。一枚作りの瓦は桶巻作りに比べて少なく、II a、II b に相当する瓦数は 17 枚で全体の 6.1%、II c は 19 枚で全体の 7.0% であった。一枚作りの瓦は II a、II b、II c の三つに大きく分類できるが、出土した資料の多くが細片であり摩耗が激しく、特に II a と II b の分類が困難であることから、この 2 種類については合算した値を記載した。

以上から、I a に相当する瓦が多数であり、次

表3 08年度出土の平瓦個体数

	平瓦偶数	偶数÷4	割合	重量 (kg)
Ia	698	175	63.60%	157.36
Ib	257	64	23.20%	49.08
II a, b	68	17	6.10%	29.15
II c	75	19	7.00%	18.87
合計	1098	275	99.90%	254.46

(偶数の小数点以下四捨五入、割合は小数点第二位以下四捨五入)

表4 08年度出土の丸瓦の重量

	丸瓦重量 (kg)	割合
平瓦 Iaに対応	192.08	61.70%
平瓦 Ibに対応	95.32	30.60%
平瓦 II に対応	24.01	7.70%
合計	311.41	100%

(割合は小数点第二位以下四捨五入)

いで Ibが多いことが判明した。一枚作りである II類についてはいずれも個体数が少なく、全体の2割にも満たない。このことから、08年度調査で出土した平瓦については、桶巻き作りのものが主であったと言える。

丸瓦の重量比による出土割合

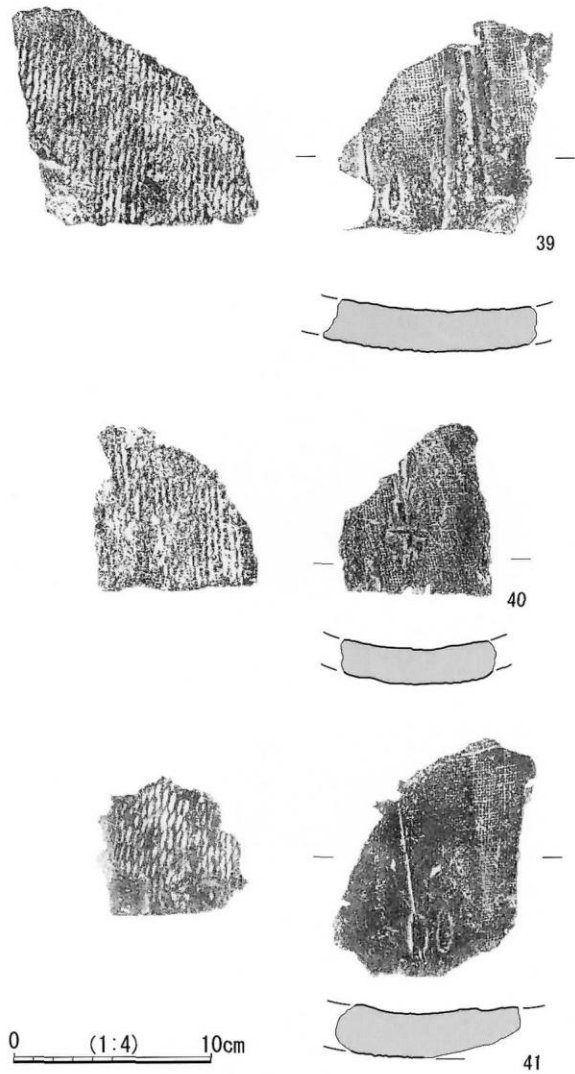
丸瓦は平瓦に比べ出土数が少なく隅部のみで分類を行うことが困難であった為、全ての丸瓦を分類した上でそれぞれの重量を量り、その割合を導き出した。その結果を表4に示す。

重量のみで算出される割合は精度が低いが、平瓦 Iaに対応する丸瓦 I類は61.7%で、Ibに対応する丸瓦は30.6%であった。また平瓦 II に対応する瓦は非常に少なく、7.7%であった。よって桶巻き作りの平瓦 I類に対応する瓦は合計で92.3%であり、一枚作りである平瓦 II類と対応する丸瓦は7.7%である。この結果から桶巻き作りに対応する丸瓦が多数であると言える。

これらの結果は軒丸・軒平瓦の分類とも一致しており、矛盾は生じない。(鶴)

(5) 文字瓦 (第38図-34, 第40図-39~41) 平瓦の凹面広端寄りに、文字や文字風の記号を打刻しており、確認できるものは全て桶巻作りの平瓦である。判読不能なものが多いが、下駄状の「||」や「八」、また、「大」の2画目下半あるいは「六」の三画目を欠いたような「𠂔」がある。出土点数としては「||」が多い。

このうち「八」・「𠂔」は平瓦製作後に打刻した可能性が高いが、「||」は別個体でも同一箇所に

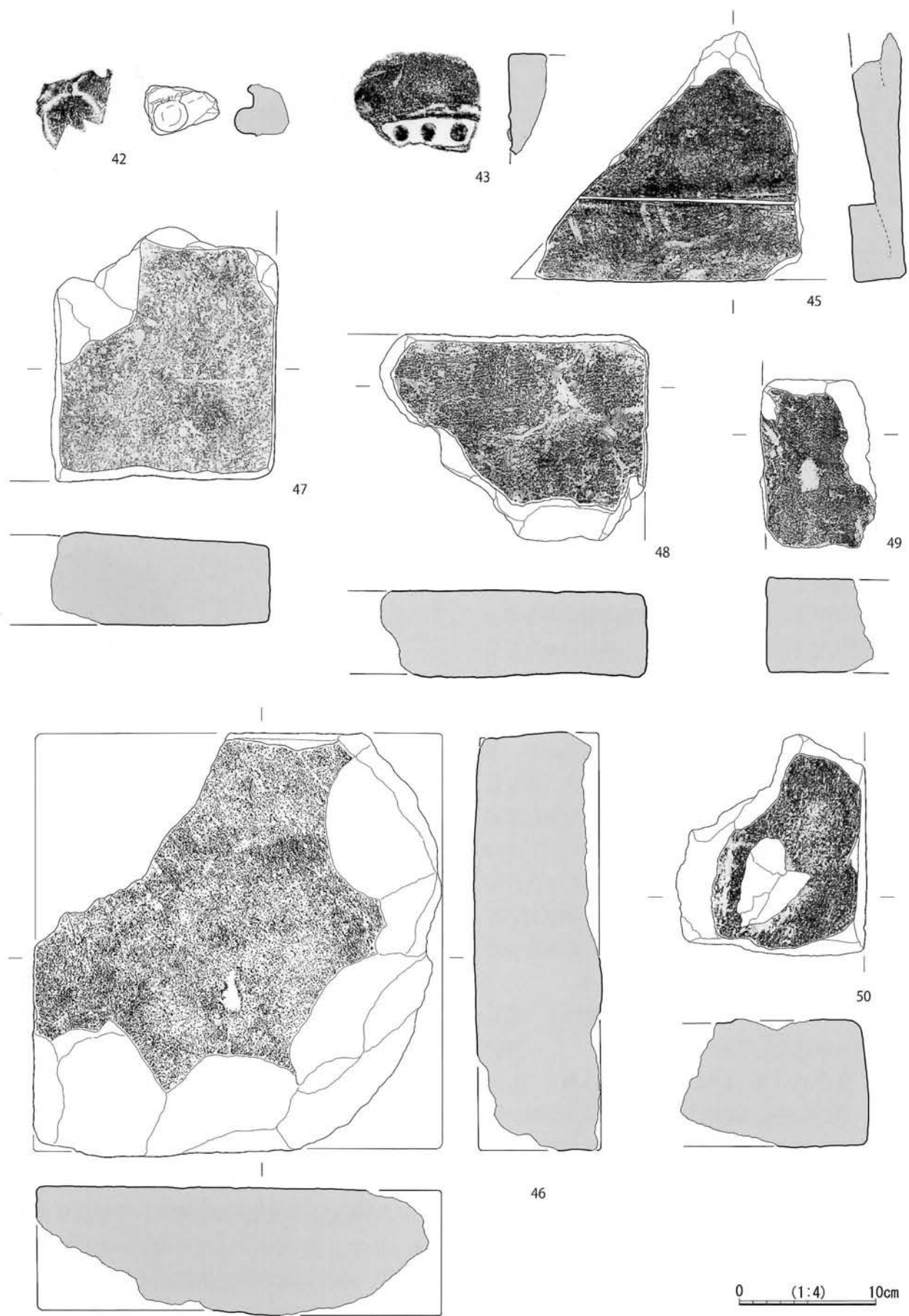


第40図 文字瓦実測図

表れるものがあり、当初から模骨本体に陰刻されていた可能性もある。この点については平瓦の整理作業をまって再度検証したい。

(6) 道具瓦 道具瓦には鬼瓦、塼、隅木蓋瓦がある。内訳は鬼瓦が2点、隅木蓋瓦が1点、塼が23点である。なお、熨斗瓦、面戸瓦と認識できるものは確認できなかった。

鬼瓦 (第41図-42・43) 42は鬼面紋鬼瓦の眼の部分の破片である。切れ長の眼上部に大きな范傷が確認できる。焼成は良好で灰白色を呈する。胎土は精良である。小破片であるが、眼の特徴からみて南都七大寺式鬼瓦ではなく、平城宮II式A2あるいは、やや小型のII式B鬼瓦の紋様構成に近い⁴³⁾。細片のため同范認定は困難である。43は外区に珠紋帯を巡らした鬼瓦で、外縁がなく珠紋帯外側にやや幅の広い無紋帯を巡らせるのが特



第41图 道具瓦実測図

微的である。磨滅が著しく各部の調整は不明である。焼成はやや軟質で灰色を呈し、胎土は精良である。紋様構成や無紋帯の特徴からみて、南都七大寺Ⅰ式の鬼面紋鬼瓦の可能性が高い。

現在までに新薬師寺旧境内で出土した鬼瓦は、今回出土した2点のほかに、旧境内採集資料（千鳥資料）の南都七大寺ⅣA式の鬼面紋鬼瓦がある¹¹⁾。ちなみに香山堂跡出土鬼瓦に平城宮Ⅲ式の鬼面紋鬼瓦が知られているが¹²⁾、今回出土した2点はいずれの鬼瓦とも異筈と考えられる。

隅木蓋瓦（第41図-45） 全体の1/2程度を欠損する。内面の側縁沿いに幅5.5cm、高さ約2cmの帯状の突帯を貼付ける。本体の断面形は頂部付近が厚い扁平な二等辺三角形状を呈する。側面の一部を斜めに切り欠いており、本来はV字状の切り欠みを入れていたと思われる。磨滅が著しいため各部の調整は不明である。焼成はやや軟質で、色調は暗灰色を呈する。焼成・色調・胎土が6732F種軒平瓦に酷似するため、奈良時代に属すると考えられる。

入母屋造・寄棟造屋根の隅木先端部を雨水から保護するための隅木蓋瓦と思われる。付近に他の瓦葺建物が確認できないことや、出土位置からみて、大型基壇建物に使用された隅木蓋瓦と思われ、大型基壇建物が入母屋造あるいは寄棟造り屋根であったことを示す遺物として重要である。

磚 確認できる資料は全て無文の磚で、古代に属すると考えられる。細片化しており法量の判明する資料はごくわずかであるが、各部の法量の違いによりⅠ類とⅡ類に分類できる。

磚Ⅰ類（第41図-46・50） 一辺30cm前後、厚さ9.0cm前後に復元できる方形磚である。上面及び側面は板状工具によるナデを施し、下面は未調整である。断面観察から、型枠状の容器に粘土を数度に分けて詰め込み成形したと考えられる。焼成はやや軟質で黒灰色を呈するものと、やや軟質で茶褐色を呈するものがある。胎土はやや粗い。出土点数は少ないが、大型基壇建物に近接した箇所でも出土しており、堂内の敷磚として使用されたか、あるいは基壇外装の一部に使用された可能性もある。

磚Ⅱ類（第41図-47～49） 全形に復元できる資料はないが、厚さ6.0cm前後の長方磚になると思われる。上面及び側面は板状工具によるナデ、下面は基本的に未調整である。Ⅰ類同様、型枠状の容器に粘土を数度に分けて詰め込み成形したと考えられる。47は残存長18.5cm、残存幅16.4cm、厚さ6.5cmを測る。焼成はやや軟質で灰色を呈し、胎土はやや砂粒を含むが精良である。48は残存長19.5cm、残存幅14.9cm、厚さ6.0cm前後を測る。焼成硬緻で灰色を呈する。胎土はやや砂粒を含むが精良である。

（7）軒瓦の組み合わせについて

大型基壇建物（金堂）の創建期所用瓦は、出土割合、焼成、色調、胎土、法量などの諸特徴から、興福寺式の軒丸瓦6301型式Ⅰ種と軒平瓦6671型式Ⅱ種、また丸瓦Ⅰ類、平瓦Ⅰ類の組み合わせが用いられたと考えられる。これらは焼成、色調、胎土が一致しており、同一の瓦屋で生産された製品とみて誤りないものとする。平城宮軒瓦編年¹⁶⁾第Ⅱ期末から第Ⅲ期前半（天平17年～天平年間）の製作時期が想定される。

これに続く軒丸の組み合わせとしては、東大寺式の軒丸瓦6235型式G種と軒平瓦6732型式F種、丸瓦Ⅱ類がある。以上の軒瓦は伽藍整備期に用いられた組み合わせと考えられ、平城宮軒瓦編年第Ⅲ期後半（天平勝宝元年～天平勝宝年間）から第Ⅳ期前半頃（天平宝字元年～天平神護年間）に位置づけられる。

この他の軒瓦は出土点数が数点にとどまり、焼成、色調、胎土にばらつきが見られるため、組み合わせ関係は不明である。これらの軒瓦は補完的に用いられたか、あるいは補修に伴い用いられた軒瓦と思われる。平城宮軒瓦編年第Ⅳ期（天平宝字元年～神護景雲年間）、第Ⅴ期（宝龜元年～延暦三年）、平安時代初頭までのものがある。

主要伽藍廃絶後の軒瓦としては、平安時代後期から鎌倉時代前期の連珠文軒平瓦、宝相華唐草紋軒平瓦がある。金堂地区における軒瓦の組み合わせや製作時期については、補足を加えて第Ⅴ章の総括において述べる。

（島軒）

表5 出土軒瓦計測表

型式・種	直 径	内 区				外 区					外 縁 形 態	全 長	08 年 度 調 査 区	09 年 度 調 査 区	10 年 調 査 区	11 年 調 査 区	出 土 割 合	出 土 数
		中 房 径	蓮 子 数	弁 区 径	弁 数	内 縁		外 縁										
						幅	文様	幅	高	文様								
63011	186	56	1+5+10	126	F8	16	S20	14	7	LV	傾斜縁	-	15	5	0	0	0.53	20
6235G	180	-	-	-	F8	18	S	12	9	-	傾斜縁	-	4	0	0	1	0.13	5
6236E	163	57	1+8	112	F8	12	S12	12	7	-	直立縁	-	5	1	0	0	0.16	6
6234A	182	58	1+6	110	F8	20	S16	15	10	-	直立縁	-	2	0	0	0	0.05	2
6235M	-	-	-	-	-	17	S	12	7	-	傾斜縁	-	0	1	0	0	0.02	1
SYM01	166	44	1+8	112	F8	13	S24	10	3	-	直立縁	-	2	1	0	0	0.08	3
SYM02	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	0	0	0	0.02	1
軒丸瓦（巴紋か）	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	直立縁	-	2	0	0	0	-	2
型式不明軒丸瓦	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7	4	0	0	-	11
													38	12	0	1		51

型式・種	瓦 当 面										顎 形 態	全 長	08 年 度 調 査 区	09 年 度 調 査 区	10 年 調 査 区	11 年 調 査 区	出 土 割 合	出 土 数
	最 大 幅	厚 さ	内 区 厚	内 区 文 様	上 外 区 厚	上 外 区 文 様	下 外 区 厚	下 外 区 文 様	脇 区 幅	脇 区 文 様								
6671J	-	-	26	KK	14	GS	10	LV	12	GS3	段・曲線	-	11	4	0	0	0.31	15
6732A	-	72	28	KK	11	S	12	S	-	S	曲線顎Ⅱ	-	0	1	0	0	0.02	1
6732D	-	73	32	KK	12	S	14	S	15	S	曲線顎	-	0	2	0	0	0.04	2
6732F	295	60	33	KK	13	S9	12	S9	12	S3	曲線顎	45	16	8	0	1	0.51	25
6663A?	-	-	-	KK	-	-	8	K	8	K	-	-	0	1	0	0	0.02	1
6801A	-	-	-	-	11	-	-	-	-	-	-	-	1	0	0	0	0.02	1
SYH01	-	-	56	KK	6	S	-	S	-	-	直線顎	-	0	0	0	1	0.02	1
SYH02	-	67	41	KK	9	S	10	S	11	S3	曲線顎	-	3	0	0	0	0.06	3
連珠紋軒平瓦	-	37	19	S	7	-	-	-	11	-	段顎	-	1	0	0	0	-	1
宝相花唐草紋軒平瓦	-	40	23	KK	11	-	8	-	-	-	段顎	-	1	0	0	0	-	1
型式不明軒平瓦	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	16	3	0	0	-	19
													49	19	0	2	-	70

※T-単弁 F-複弁、KK-均整唐草文 S-珠文 GS-杏仁形珠門文 K-圈縁・界縁 LV-凸縁鋸歯文 内区幅は平均値または一方の値

※出土割合は平安時代後期以降の軒瓦と型式不明の軒瓦を除いた値。小数点以下は四捨五入した値を表示。

第2節 土器類

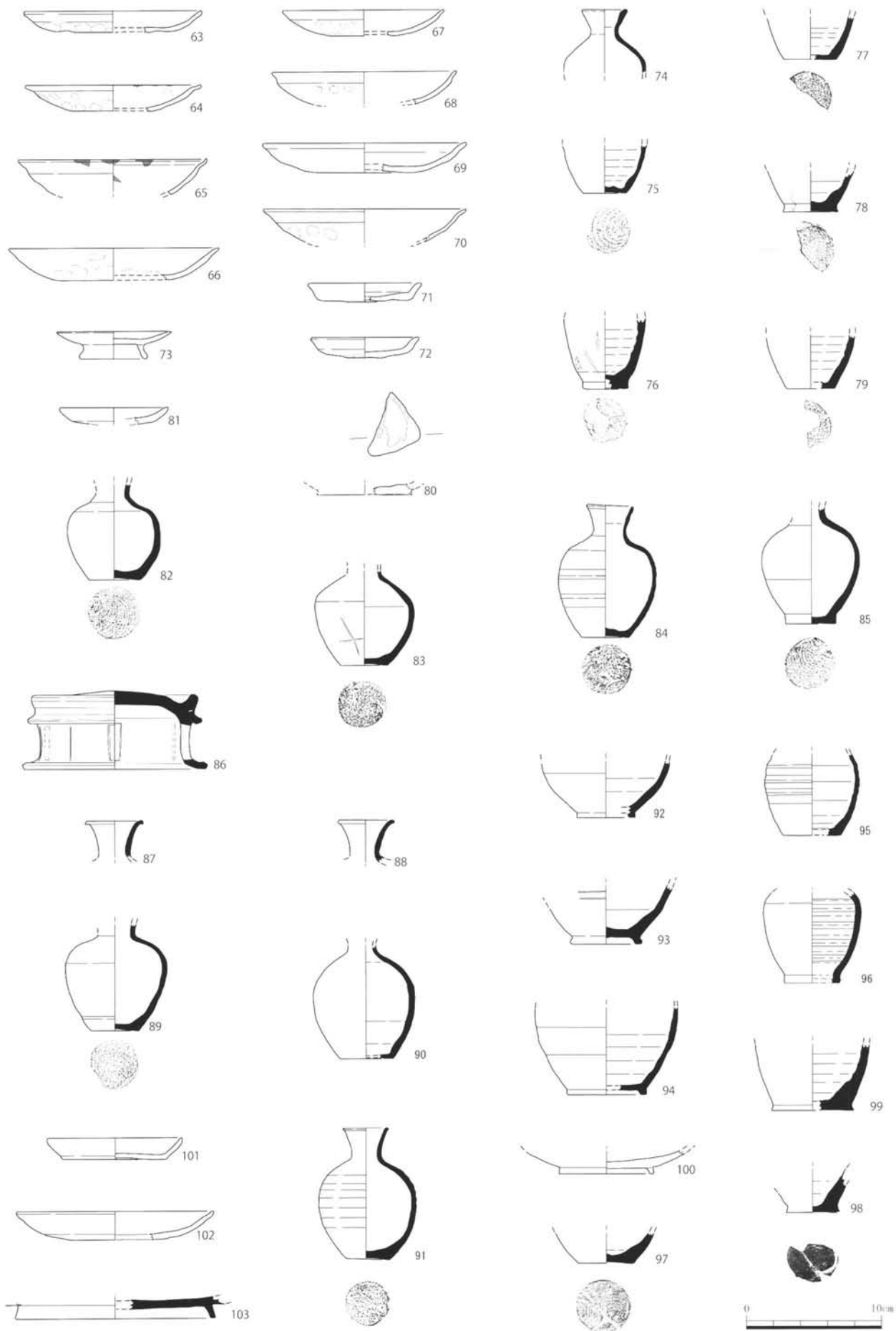
08年度から11年までの調査を通じて約30箱程度の土器が出土した。瓦類については前節すでに述べたので、ここでは遺構出土土器を中心に図示し、説明を加えることとする。

出土土器のうち、まず奈良三彩と緑釉陶器について説明し、次にその他の土器類についての説明を行う。なお、図示していない遺物でも写真のみを掲載した遺物もあり、これについても合わせて説明することとする。

(1) 奈良三彩(写真図版27～51～62) 奈良教育大学構内新薬師寺旧境内で出土した奈良三彩はいずれも破片であり、すべて緑釉と白釉(透明釉)の所謂三彩である。これまでのところ、褐釉の施された器は出土していない。新薬師寺の金堂および周辺施設で使用された什器であったと考えられる。新薬師寺旧境内で出土した奈良三彩は、法量が比較的大きいことがその特徴としてあげられる。胴径20cm以下の小形の器は確認されていない。三彩のみしか確認されていない点や、緑釉の透明度が比較的高く所謂「ゴマ」があまり見られない点、奈良時代後半から平安時代前期前半の諸遺跡(京都市梅ヶ畑祭祀遺跡など)から出土した奈良三彩との類似性が認められる点などから、正倉院三彩よりもやや時代の下る8世紀後半中頃以降の製品と推定される。以下に個別の検討結果を示す。

51は大形の瓶または壺の高台部分の破片であると考えられる。硬く焼き締められている点と、緑釉が非常に濃い釉色を示している点が特徴的である。口縁部の可能性も考えられる形状であるが、底部とみなされる面に一様に淡緑釉が施されており、表面の濃緑釉と白釉の三彩とは異なった釉調を示している。奈良三彩では見えない部分には淡緑釉のみを施す場合が多く、これまでの正倉院三彩や出土例から考えても口縁部である可能性は低い。また、釉垂れの方も底部であったことを示唆している。破片であるため正確な推定は難しいが、底径32～34cm程度の非常に大形の器であると考えられる。また、底面にはロクロ痕が見られる。同程度の法量の三彩陶器が京都市梅ヶ畑祭

祀遺跡から出土しており、近似した特徴も確認できるため注目される。52は壺または瓶の肩部の破片と考えられる。内面は無釉であり、ロクロ痕が認められる。53は瓶の胴から肩にかけての部位と考えられる。剥落が激しいものの表面には緑釉と白釉が残存しており、内面は無釉である。釉は斜格子状に施されていた可能性がある。胎上は砂粒を僅かに含み雲母が多く認められ、後述の61と近似した特徴を有している。肩部には陰刻の圏線がめぐらされている。また、内面にはナデ痕が認められる。胴径25cm程度の大形の瓶と考えられ、枚方市禁野本町遺跡出土の瓶や正倉院南倉に伝来する高さ41.7cmの瓶に近似する法量であると推定される。54は多口瓶の胴部の破片と考えられる。破片上部に小口頸部または注口部の下端が残存しており、肩部に口部を有する器形であったことがわかる。網目状に施された緑釉の描かれ方は福島県七ツ池遺跡出土の三彩浄瓶に近似するが、残存部から推定される胴径は24cmを超えると考えられ浄瓶としては大形過ぎるため、多口瓶の断片であろう。内面は無釉であり、ロクロ痕が見られる。胎上は特徴的に白い。ほぼ同程度の大きさで施釉法の類似した三彩多口瓶が京都市梅ヶ畑祭祀遺跡から出土している。55・58・59は、鉢または壺の胴部の破片であると考えられる。いずれも、胴径が22～24cm程度の大きさの器であったと考えられる。これらは胎上、釉薬、器体の厚さなど、多くの点で共通しており、同一の個体であった可能性がある。59は内面に一部白釉が施されており、瓶ではなく口縁部の開いた器形であったと考えられる。また、内面にロクロ痕が残る。60は鉢の破片であると考えられる。破片上部と下部では曲率が異なっており、鉄鉢形となる可能性が高い。他の三彩と異なり、胎上がザックリとしており、硬く焼き締まっているのが特徴である。また、器の内面側に白釉が一面に施されている。残存部から推定される器の胴径は、およそ24cm程度と推定され、正倉院南倉に伝世している鉄鉢形の三彩および三彩の鉢に近似した値となる。56・57・61・62は、いずれも小片であり詳細は不明である。56・57は、表



第 42 图 土器実測图①

面に緑釉が残り、57の内面には白釉が施されている。61は緑釉とともに一部に白釉が確認できる。釉や胎土の特徴は53と近似しており、同一個体であった可能性もある。62は表面に緑釉が確認でき、裏面にも一部緑釉が付着している。板状の平坦な形であることから、壺などの蓋の断片である可能性がある。雨落溝S D 050から2点、整地土から1点、NR 504から1点、他は09 C・D区から出土した。出土位置・層位は表6にまとめた通りである。

(2) 緑釉陶器(第42図-80) 80は緑釉陶器碗底部の破片であろう。緑釉は明るい淡緑色を呈し、高台内にも釉が施されている。高台は裾部の大半が失われているが、根本部分が僅かに残存しており外に拡がる高台裾であったことがわかる。残存高台部より高台径7cm程度であったと考えられる。9世紀前半のものであろう。雨落溝S D 050から出土した。(青木)

(3) 遺構その他から出土した土器

雨落溝S D 050出土土器(第42図-63~79)

63~72は上師器皿である。65は08A区大型基壇建物階段正面付近の出土である。65以外の上師器皿・須恵器壺・黒色土器台付皿はいずれも08B区階段南東隅部の出土で、雨落溝の機能停止後の堆積層に含まれる。63は口縁部をヨコナデ仕上げし、外端部に面をもつ。外面にユビオサエが顕著である。9世紀末から10世紀前半の特徴を示す。64・65は口縁部で外反し端部をつまみ上げる。ともに口縁部付近に炭素が付着し、灯明皿として使用されたものとみられる。10世紀中頃のものであろう。67はやや小振りの皿で口径11.8cm。口縁部をヨコナデし端部はすぼまる。外面にユビオサエが顕著である。71・72は上師器小皿で口縁部をヨコナデする。いずれも9世紀代に属すると思われる。73は黒色土器B類台付皿で、浅い小皿にやや外方へ開き気味の高台をもつ。11世紀前半頃の所産と考えられる。74~79は須恵器壺Mである。全形をうかがえる資料はないが、出土数の目立つ形態である。74は口縁部から胴部まで遺存し、胴部以下を欠く。口縁部は斜外方へ直線的に開き、端部は内側へ肥厚

する。胴部はややなで肩である。75から79は胴部から底部までの資料でいずれも糸切り底である。底部から直接立ち上がるもの(75・77・79)とベタ高台のような底部から立ち上がるもの(76・78)に細分が可能である。76の外面には縦方向にヘラ描きが認められる。他に図示していないが、5mm程度の細片化した上師器皿が多量に含まれ、遺物整理箱で約20箱出土した。また前述の緑釉陶器碗もこの溝からの出土である。以上の土器は、おおむね9世紀代から10世紀中頃までの遺物が目立つ。

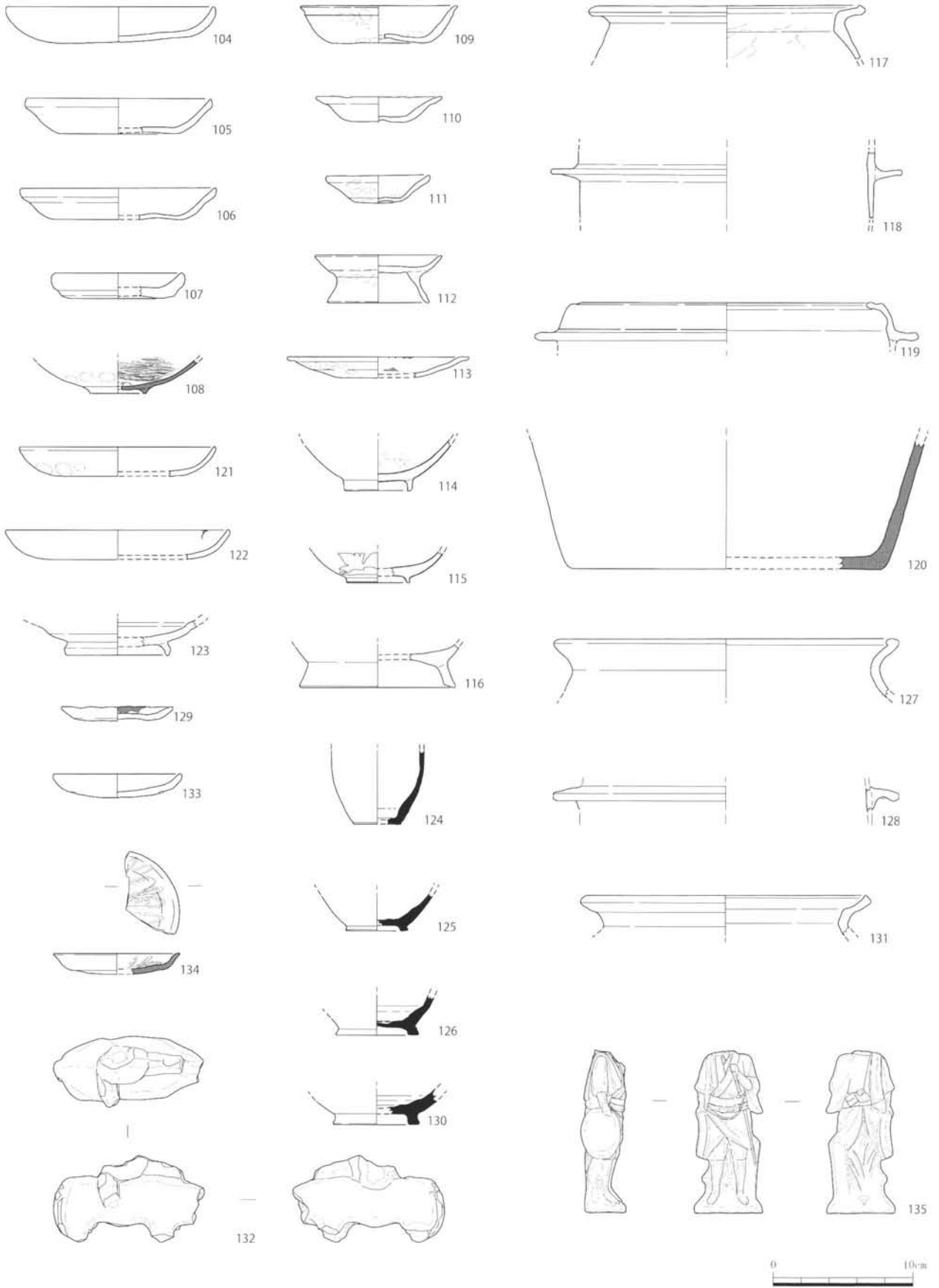
東西溝S D 200出土土器(第42図-81~86)

81は上師器の小皿である。残り具合が悪いが、口縁部をヨコナデ仕上げする。82~85は須恵器壺Mである。いずれも糸切り痕を底部に残す。84はほぼ完形である。やや肩の張る球形胴部をもつ82・83と肩の張りのゆるやかな84・85がある。83の胴部外面には「×」というヘラ描きが認められる。85はベタ高台のようなプロポーシオンである。86は円面甎である。小型品で脚部は直線的に立ち上がる。脚部は外方へ開き、端部を丸く収める。残りが悪いが、脚部に縦長長方形のスカシ孔を配し、中間にヘラ状の直線の装飾を施す。なおこれは貫通しない。脚部の付根に突帯を貼付ける。甎面には墨痕などはみられない。陸部には使用痕が認められる。

出土遺物は少ないが、雨落溝S D 050のものと同時期の須恵器壺Mが多量に含まれることが特徴的である。なお、微細片であるため図示していないが、奈良三彩も1点出土している。

南北溝S D 280出土土器(第42図-87~91)

須恵器壺Mが出土している。87・88は口縁部の資料で、87は外端部に面をもつ。88は端部を丸く収める。89・90は口縁部を欠く資料で89は肩の張る胴部を有する。90はなで肩気味の胴部である。91はほぼ完形で器高が9.7cmをはかる。口縁部は外方へ開き、端部は外反し丸く収める。胴部にロクロ目を顕著に残す。89~91は底部に糸切り痕を残す。この遺構からも図示したように須恵器壺Mの出土が目立つ。他にも土器が出土しているものの、細片化したものが多く図化



第 43 图 土器实测图②

に耐えるものはほとんどなかった。

N R 503 出土土器 (第 42 図- 92 ~ 95) 須恵器壺 M が出土している。92・94・95 はこれまで S D 050 や S D 200 などと触れてきた壺 M よりも大型で、糸切り底に貼り付け高台をもつ点がそれと異なる。上部の形態については胴部中位以上を欠くため不明であるが、胴部径も大きく、別の形態をもつものと思われる。93 はやや軟質な焼きである。なお 94 の胴部外面には黒色を呈する付着物が認められる。黒漆の可能性が考えられる。95 は壺 M である。資料が小さく底径についてはやや難があるものの、胴部のわりに底径が大きいことが特徴である。やや寸胴なイメージである。93・94 は上層、92・95 は下層からの出土である。

南北溝 S D 280・N R 503 合流点付近出土土器 (第 42 図- 97・98) いずれも須恵器壺 M である。底部の資料とともに糸切り底である。胴部より上位を欠く。

整地土出土土器 (第 42 図- 101 ~ 102) 101・102 は土師器皿である。101 は斜外方へ立ち上がり、端部はすぼまる。13 世紀前半に属する。102 はゆるやかに立ち上がり、端部をわずかにつまみ上げる。外面へラケズリ。9 世紀後半以降であると考えられる。

整地土 S X 256 出土土器 (第 42 図- 100)

100 は灰釉陶器碗あるいは皿になると思われ、体部より上位を欠く。底部はへら切りで、断面四角形の低い高台を貼り付ける。10 世紀中頃の所産と思われる。掘立柱建物 S B 002・003 が切り込む整地土層から出土した。

08 B 区検出面出土土器 (第 42 図- 99) 須恵器壺で、底部から厚手の胴部までの資料である。

08 C 区トレンチ出土土器 (第 42 図- 103) 須恵器盤である。底部のみ遺存する。底径 14.8cm をはかる。底部はへら切り後、高台貼り付け。

土坑 S X 177 出土土器 (第 43 図- 104 ~ 108)

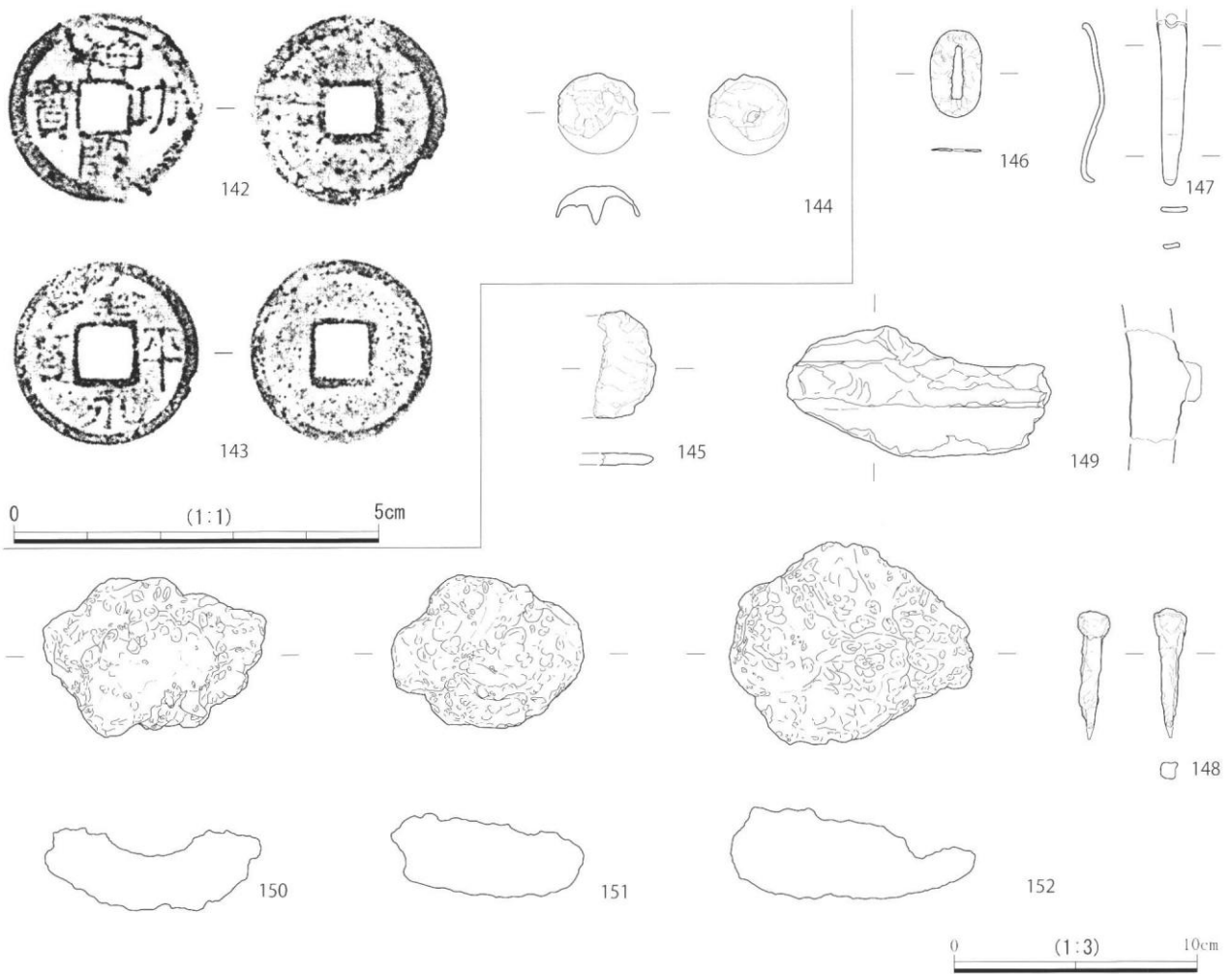
104 から 107 は土師器皿である。104 から 106 は斜外方へ立ち上がり、口縁部外面を面取りする。107 はコースター型の皿。器壁が分厚く、やや上げ底気味になる。口径 9.0cm をはかる。108 は瓦器碗である。三月月高台貼り付け。

胴部外面のヘラミガキは省略が進む。内面見込部に連結輪状暗文が認められる。これらの土器群はおおむね 13 世紀前半に帰属する。

包含層出土土器 (第 43 図- 109 ~ 120) 109 は深めの器高をもつ土師皿で、口縁部内外面を横ナデする。底部はやや上げ底気味になる。14 世紀後半代。110 は口縁部で強く横ナデして外反する。15 世紀後半から 16 世紀代。111 はヘソ皿で、16 世紀前半に属する。112 は台付皿。斜外方へ開き、端部はすぼまる。「ハ」の字に開く高台を貼り付ける。15 世紀後半 ~ 16 世紀前半。113 は土師器皿で口縁部付近に炭素が付着する。灯明皿としての使用が考えられる。細片のため法量に難があるが、外反して端部を上方へつまみ上げる。10 世紀中頃の所産と考えられる。114 は肥前系陶器碗である。内外面に浅黄色の釉がかかる。貼り付け高台の端部は種ハギである。115 は伊万里焼の染付碗。18 世紀代と考えられる。116 は占瀬戸の花瓶である。底部の資料で「ハ」の字に開く高台を貼付ける。中世後期。117 は土師質の鍋である。胴部以下を欠く。口縁部は水平気味に外方へ開き、丸く収める。端部を折り返す。118・119 は土師器羽釜で、118 は罎部の資料である。水平に延びる罎部を貼付ける。15 世紀代のもの。119 は口縁部から罎部まで遺存する。15 世紀後半から 16 世紀前半に帰属する。いわゆる姥口の羽釜である。罎部はほぼ水平に突出する。120 は瓦質土器深鉢。摩耗が著しく、器表面が荒れる。底径 22.0cm 前後をはかる。

耕作土出土土器 (第 43 図- 121 ~ 128) 121・122 は土師器皿。121 は外面にユビオサエを残す。13 世紀前半のもの。123 は灰釉陶器段皿。内湾気味に開く高台を貼り付ける。内面に灰釉が認められる。底径 7.3cm をはかる。124 ~ 126 は須恵器壺である。124 は壺 M。底部糸切り。125・126 は糸切り後高台貼り付け。126 の内外面に黒色を呈する付着物が認められる。漆の可能性がある。127 は土師器の饗口縁部。内湾気味に外反して丸く収める。端部は折り返す。128 は鍋の胴部で、罎部を貼付ける。16 世紀に属する。

暗渠排水溝 S D 021 出土土器 (第 43 図- 129



第44図 金属製品・石製品実測図

～132) 129は土師器小皿。口縁部内面に炭素が付着する。灯明皿として使用される。16世紀後半の所産。130は壺。しっかりした断面方形の高台を貼り付ける。131は土師器鍋と思われる。頸部から内湾気味に外反して口縁部に至り、端部をつまみ上げる。132は陶器の置物であろう。4本足の動物に尾が付く。足はいずれも先端を欠く。また頭部も欠失するため、何かは不明である。背に人が乗るようであるが、これも大半を欠くため、本来の形状はわからない。中空である。近代に属する排水溝からの出土である。

近代レンガ積建物内出土土器 (第43図 - 133～135) 133は土師器小皿。13世紀前半に帰属。134は瓦器皿。内面見込部に平行直線暗文が観察できる。135は陶器の置物で旅姿の人形である。頭部を欠く以外は完存する。右手に三度笠、左腰

に太刀を身に付ける。背面下部に扇型のスタンプが押される。中空である。(西村)

第3節 金属製品・石製品・その他

金属製品には、銭貨、鉄釘、不明鉄製品、鉄滓があり、石製品には滑石製石鍋、花崗岩製礎石片がある。またその他の遺物として、乾漆像表面の破片とみられる木屎漆片、堂内壁土の可能性のある白色上塗り材、仏像やその荘嚴具、建物装飾などに用いられたと思われる金箔片がある。

(1) **金属製品** (第44図 - 142～148・150～152) 142は奈良時代の銅銭「神功開寶」(初鑄765年)で、功の旁を「力」字に、また開を「開」につくる。直径2.6cm、厚さ0.2cm、重さ2.83gである。NR503から1点出土した。143は平安時代初頭の銅銭「隆平永寶」(初鑄796年)である。直径2.9cm、厚さ0.2cm、重さ3.10gである。

N R 503 から 1 点出土した。144 は鋏留金具風の青銅製品である。復元径 1.2cm を測る。堂内荘嚴具の類であろうか。S D 050 から 1 点出土した。145 は幅 4.3cm、厚さ 0.45cm の不明鉄製品である。全体の 1/2 程を欠失している。近代整地層から出土した。146 は真鍮製の刀の切羽で、長さ 3.5cm、幅 2.1cm、厚さ 0.15cm をはかる。近代以降陸軍期整地層から出土しており、近代以降の軍刀に伴う切羽かと思われる。147 は残存長 6.5cm、最大幅 1.2cm の用途不明の鉄製品である。近代以降のものと同推察する。148 は長さ 4.5cm をはかる方頭鉄釘である。150 ~ 152 は碗形鉄滓で、主に上部に多量の炭化物を含む。いずれも厚さは約 3cm をはかる。S D 050 上層から出土した。

(2) 石製品 (第 44 図- 149) 149 は滑石製の石鍋で 13 世紀代の製品と考えられる。なお図示しなかったが、この他の石製品として花崗岩製の礎石片がある。礎石は各部が破損しており全形は不明であるが、上面に復元径約 60cm の円形の削り出しによる柱座を設けている。柱座の上面は平滑に仕上げられている。井戸 S E 773 から 1 点出土した。旧境内のいずれかの堂舎で用いられた礎石であろう。

(3) その他の遺物 その他の遺物として、乾漆像の破片と見られる木屎漆片や金箔片などがあるがこれらについては第四章で述べる。(島軒)

《註》

1) 奈良教育委員会「東大寺防災施設工事・発掘調査報告書」発掘調査報告書 東大寺 2000
 2) 奈良県立藤原考古学研究所「興福寺境内」『奈良県文化財調査報告書』第 78 集 2003
 3) 奈良県教育委員会「法華寺の瓦」『重要文化財法華寺本堂南門障壁修理工事報告書』1956
 4) 渡辺和正「名勝奈良公園・常世堂跡の発掘調査成果と出土瓦」第 12 回シンポジウム「8 世紀の法とづくり」『大宮大寺式・興福寺式・源氏物語の瓦の発掘発表要旨』奈良文化財研究所 2012
 5) 1) に同じ。
 6) 奈良文化財研究所・奈良市教育委員会「平城京・藤原京出土土瓦型式 概」1996
 7) 1) に同じ。
 8) 奈良国立文化財研究所「史跡興福寺発掘調査報告書」奈良国立文化財研究所報知 第 62 冊 2001
 9) 抜中百福樹「興福寺と常世堂の瓦」『MUSEUM』593 号 東

京国立博物館 2004
 10) (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター「土人ヶ平遺跡」『京都府埋蔵文化財調査報告書』第 15 冊 1991
 11) 奈良県立藤原考古学研究所「奈良県遺跡調査概報」1994
 12) 1) に同じ。
 13) 9) に同じ。
 14) 奈良県教育委員会「唐招提寺防災施設工事・発掘調査報告書」1995 奈良県教育委員会「唐招提寺金堂修理工事報告書」瓦調査・発掘調査編 2009
 15) 奈良国立文化財研究所「唐隆寺発掘調査報告書」奈良県教育委員会 1993
 16) 1) に同じ。
 17) 奈良県教育委員会「2. 新薬師寺境内の調査(3) 第 8 次調査」『奈良県埋蔵文化財調査概要報告書』平成 6 年度 1995
 18) 西宮緑丘は平城京跡に隣接する第 1 期出現すると考えられている。19) 1) に同じ。
 20) 4) に同じ。
 21) 軒平瓦 6671 J の採集品が 1 点知られる。
 22) 奈良文化財研究所・奈良市教育委員会「平城京・藤原京出土土瓦型式 概」1996
 23) 15) に同じ。
 24) 22) に同じ。
 25) 京都府埋蔵文化財調査研究センター「奈良山丘発掘遺跡」『京都府埋蔵文化財調査報告書』第 27 冊 1999
 26) 1) に同じ。
 27) 森郁夫「新薬師寺の瓦」『古代研究』22 (財) 元興寺文化財研究所 1981
 28) 奈良国立文化財研究所「西大寺防災施設工事・発掘調査報告書」西大寺 1990
 29) 1) に同じ。
 30) 8) に同じ。
 31) 28) に同じ。
 32) (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター「3 石鏡山(東山)発掘遺跡」『京都府埋蔵文化財調査概要』第 27 冊 1997
 33) 奈良国立文化財研究所「平城京発掘調査報告書Ⅲ」1991
 34) 22) に同じ。
 35) 28) に同じ。
 36) 22) に同じ。
 37) 奈良文化財研究所瓦データベース参照
 38) 奈良文化財研究所瓦データベース参照
 39) 森郁夫・牛川喜幸・伊東太作「東大寺(西大寺)の瓦について」『奈良国立文化財研究所年報』1967
 40) 毛利久「新薬師寺考」『近畿古文化叢書』河原島書 1947
 41) 抜中百福樹「平安時代に於ける興福寺の造営と瓦」『仏教芸術』194 号 佛敎芸術學會 毎日新聞社 1991
 42) 41) に同じ。
 43) 若井 晶子「奈良時代の泉面文鬼瓦」『史林』84 卷 3 号 2001 毛利光俊彦「日本古代の鬼面文鬼瓦」『研究叢集』VI (奈良国立文化財研究所報 37 冊) 奈良国立文化財研究所 1980
 44) 27) に同じ。
 45) 39) に同じ。
 46) 33) に同じ。

表6 出土土器観察表①

遺物番号	出土遺構・層位	器種・器形	法量(cm)	胎土	焼成	色調	成形・調整・文様などの特徴
51	08B区 SD050上層	奈良三彩(二彩) 大形瓶または 壺	残存長 2.9 残存幅 2.9	密	良好	素地 10YR8/4浅黄橙色	内・外面は緑釉・白釉。底面にロクロ痕。
52	09D区 NR504上層	奈良三彩(二彩) 壺または瓶	残存長 5.3 残存幅 3.0	密	良好	素地2.5Y8/2灰白色	外面は緑釉・白釉、内面無釉。内面ロクロ痕。
53	08B区拡張区 整地上	奈良三彩(二彩) 瓶	残存長 7.9 残存幅 6.1	密	良好	素地10YR8/3浅黄橙色	外面は緑釉・白釉、内面無釉。内面ナデ。
54	08B区拡張区 SD050下層	奈良三彩(二彩) 多口瓶	残存長 5.6 残存幅 3.6	密	良好	素地2.5Y8/2灰白色	外面は緑釉・白釉、内面無釉。内面ロクロ痕。
55	09D区 包含層	奈良三彩(二彩) 鉢または壺	残存長 5.3 残存幅 3.4	密	良好	素地2.5Y8/2灰白色	外面は緑釉・白釉、内面無釉。
56	09D区 包含層	奈良三彩(二彩) 器種不明	残存長 5.1 残存幅 2.2	密	良好	素地 2.5Y8/2灰白色	外面に緑釉残存。
57	09D区 包含層	奈良三彩(二彩) 器種不明	残存長 3.5 残存幅 2.0	密	良好	素地2.5Y8/2灰白色	外面に緑釉残存、内面に白釉。
58	09D区 包含層	奈良三彩(二彩) 鉢または壺	残存長 4.8 残存幅 2.7	密	良好	素地 2.5Y8/2灰白色	外面は緑釉・白釉、内面無釉。
59	09D区 包含層	奈良三彩(二彩) 鉢または壺	残存長 7.3 残存幅 4.3	密	良好	素地 2.5Y8/2灰白色	外面は緑釉・白釉、内面の一部に白釉。内面ロクロ痕。
60	09D区 包含層	奈良三彩(二彩) 鉢	残存長 7.8 残存幅 7.7	密	良好	素地2.5Y8/3浅黄色	外面は緑釉・白釉、内面は白釉。
61	09C区 近代耕作土	奈良三彩(二彩) 器種不明	残存長 5.9 残存幅 3.5	密	良好	素地2.5Y8/3浅黄色	外面は緑釉・白釉。
62	09C区 近代耕作土	奈良三彩(二彩) 壺などの蓋の 可能性有	残存長 4.4 残存幅 3.5	密	良好	素地 10YR7/4にぶい黄橙色	内・外面に緑釉残存。
63	08B区 SD050中層瓦溜り	土師器 皿	口径 (13.0) 底径 (5.6) 器高 1.6	密	良好	内外 5YR5/6 明赤褐色	口縁部はヨコナデ。外面にユビオサエ。
64	08B区 SD050中層瓦溜り	土師器 皿(灯明皿)	口径 (12.8) 底径 (6.0) 器高 1.9	密	良好	内外 2.5Y8/1 灰白色～ 7.5YR7/4 にぶい橙色	口縁部内外面ヨコナデ。内外面にユビオサエ。口縁部内面の一部に規が付着。「て」の字状口縁。
65	08B区 SD050下層	土師器 皿	口径 (14.0) 残存高 2.6	密	良好	内外 5YR6/6 橙色	口縁部内外面ヨコナデ。外面にユビオサエ。口縁部内外面に規が付着。
66	08A区 SD050中層瓦溜り	土師器 皿	口径 (15.4) 底径 (8.0) 器高 2.4	密	良好	内 2.5Y7/2 灰黄色 外 7.5YR7/3 にぶい橙色	全体的に摩滅するが内外面共にユビオサエ。
67	08B区 SD050下層	土師器 皿	口径 (11.8) 底径 (4.4) 器高 1.9	密	良好	内 5YR5/6 明赤褐色 外 2.5YR6/6 橙色	全体的に摩滅するが口縁部はヨコナデ、外面体部にユビオサエ。
68	08B区 SD050下層	土師器 皿	口径 (13.5) 残存高 2.4	密	良好	内外 5YR6/6 橙色	口縁部内外面ヨコナデ。外面にユビオサエ。
69	08B区 SD050下層	土師器 皿	口径 (15.0) 底径 (7.0) 器高 2.2	密	良好	内 7.5YR7/3 にぶい橙色 外 5YR6/6 橙色	内面は摩滅する。口縁部はヨコナデ。外面に接合痕とユビオサエ。

表7 出土土器観察表②

遺物番号	出土遺構・層位	器種・器形	法量(cm)	胎土	焼成	色調	成形・調整・文様などの特徴
70	08B区 SD050下層	土師器 皿	口径 残存高 (14.8) 2.4	密	良好	内 10YR7/3 にぶい黄褐色 外 10YR8/3 浅黄褐色	全体的に摩滅するが、口縁部はヨコナデ、胴部外面にユビオサエ。
71	08B区 SD050下層	土師器 皿	口径 底径 器高 (8.3) (6.8) 1.4	密	良好	内外 5YR6/6 橙色	内面は摩滅するが、口縁部はヨコナデ。底部外面は未調整。
72	08B区 SD050	土師器 皿	口径 底径 器高 (8.0) (2.8) 1.5	密	良好	内 7.5YR7/6 橙色 外 7.5YR8/4 浅黄褐色	内面は摩滅するが、一方のナデ?口縁部はヨコナデ。底部外面にユビオサエ。
73	08B区 SD050中層瓦溜り	黒色土器 台付皿	口径 底径 器高 (8.4) (4.9) 2.0	密	良好	内外 N1.5/0 黒色	内面はヘラミガキ(直線)。外面底部にヘラミガキ(弧状)。高台貼り付け。
74	08B区 SD050下層	須恵器 壺	口径 残存高 3.3 4.6	密	良好	内 N7/0 灰白色 外 N6/0 灰色	内外面共に回転ナデ。頸部内面は斜め方向のナデ。
75	08B区 SD050下層	須恵器 壺	底径 残存高 (3.1) 3.5	密	良好	内外 N6/0 灰色	内外面共に回転ナデ。底部回転系切り。内外面に鉄分が付着。
76	08B区 SD050フレイガケ	須恵器 壺	底径 残存高 (3.3) 5.2	密	良好	内外 N6/0 灰色	内面は回転ナデ。胴部外面は回転ヘラケズリ。胴部外面に斜め方向と縦方向のヘラ描き。底部回転系切り。
77	08B区 SD050下層	須恵器 壺	底径 残存高 (3.8) 3.1	密	良好	内外 N6/0 灰色	内外面共に回転ナデ。底部回転系切り。
78	08B区 SD050下層	須恵器 壺	底径 残存高 4.0 3.0	密	良好	外(軸調) 10Y5/2 オリーブ灰 色、内外 N8/0 灰白色	内外面共に回転ナデ。底部回転系切り。外面一部に自然釉がかかる。
79	08B区 SD050下層	須恵器	底径 残存高 (3.5) 3.9	密	良好	内外 N7/0 灰白色	内外面共に回転ナデ。胴部外面下半部はヘラケズリ。底部回転系切り。
80	08B区 SD050下層	緑釉陶器 椀	残存高 0.8	密	良好	内外(軸調) 7.5Y8/3 淡黄色	全体的に摩滅するが、内外面の底部に緑釉が残る。
81	08A区SD200	土師器 皿	口径 残存高 (8.0) 1.2	密	良好	内 10YR6/2 灰黄褐色 外 10YR7/3 にぶい黄褐色	全体的に摩滅する。
82	08A区SD200	須恵器 壺	底径 残存高 3.8 7.0	密	良好	内外 N7/0 灰白色	内外面共に回転ナデ。底部回転系切り。
83	08A区SD200	須恵器 壺	底径 残存高 3.4 6.9	密	良好	内外 N7/0 灰白色	内外面共に回転ナデ。外面体部に「×」印のヘラ描き。底部回転系切り。
84	08A区SD200	須恵器 壺	口径 底径 器高 3.3 3.4 9.8	密	良好	内外 N7/0 灰白色	内外面共に回転ナデ。底部回転系切り。ほぼ完形品。
85	08A区SD200	須恵器 壺	底径 残存高 3.7 8.5	密	良好	内外 N6/0 灰色	内外面共に回転ナデ。底部回転系切り。外面に自然釉がかかる。
86	08A区 SD200 ベルト下層	須恵器 円面硯	陸部径 底径 器高 (5.9) (9.6) 4.5	密	良好	内外 N7/0 灰白色	内外面共に回転ナデ。長方形スカシ6方向と、間に貫通しない縦方向のラインあり。脚部付近に自然釉がかかる。陸部全面に使用痕。
87	09C区北端部 SD280 サブトレ	須恵器 壺	口径 残存高 (4.2) 2.7	密	良好	内外 N6/0 灰色	
88	09C区中央部 SD280下層	須恵器 壺	口径 残存高 4.0 3.15	密	良好	内外 N6/0 灰色	内外面共に回転ナデ。外面に鉄分が付着。
89	09C区SD280上層	須恵器 壺	底径 残存高 3.6 7.9	密	良好	内外 N7/0 灰白色	内外面共に回転ナデ。底部回転系切り。外面に自然釉がかかる。
90	C区中央部 SD280下層	須恵器 壺	底径 残存高 3.9 8.4	密	良好	内外 N7/0 灰白色	内外面共に回転ナデ。底部回転系切り。
91	09C区 SD280上層	須恵器 壺	口径 底径 器高 3.0 3.1 9.7	密	良好	内外 N6/0 灰色	内外面共に回転ナデ。底部回転系切り。ほぼ完形品。
92	09C区南部 NR503下層	須恵器 壺	底径 残存高 (4.2) 4.1	密	良好	内外 N6/0 灰色	内外面共に回転ナデ。貼り付け高台。

表8 出土土器観察表③

遺物番号	出土遺構・層位	器種・器形	法量(cm)	胎土	焼成	色調	成形・調整・文様などの特徴	
93	09C区南部 NR503上層(砂層)	須恵器 壺	底径 残存高	5.2 4.4	密	良好	内 10YR8/1 灰白色 外 2.5Y8/1 灰白色	内面回転ナデ。外面ヨコナデ。体部外面に沈線が3条あり。底部回転系切り。貼り付け高台。
94	09C区南部 NR503上層(砂層)	須恵器 壺	底径 残存高	(5.9) 6.4	密	良好	内 N6/0 灰色 外 N7/0 灰白色	内外面共に回転ナデ。外面に鉄分が付着。外面に漆?が付着する。底部回転系切り。貼り付け高台。
95	09C区南部 NR503下層	須恵器 壺	底径 残存高	(4.3) 6.0	密	良好	内外 N6/0 灰色	内外面共に回転ナデ。底部回転系切り。内面に鉄分が付着。
96	09D区溝2	須恵器 壺	底径 残存高	(4.0) 6.7	密	良好	内外 N3/0 暗灰色	内外面共に回転ナデ。底部回転系切り。
97	09C区中央部 SD280・ NR503合流点下層	須恵器 壺	底径 残存高	4.0 2.2	密	やや軟質	内 N7/0 灰白色 外 N8/0 灰白色	内外面共に回転ナデ。底部回転系切り。内面に鉄分が付着。
98	09C区中央部 SD280・ NR503合流点下層	須恵器 壺	底径 残存高	3.8 3.2	密	良好	内外 N6/0 灰色	内外面共に回転ナデ。底部回転系切り。
99	08A区精査	須恵器 壺	底径 残存高	(6.0) 4.9	密	良好	内 N6/0 灰色 外 N5/0 灰色	内外面共に回転ナデ。底部回転系切り。底部立ち上がり付近に火服れあり。
100	08A区整地土SX256	灰釉陶器 碗or皿	底径 残存高	(7.0) 1.7	密	良好	内 2.5Y7/2 灰黄色 外 2.5Y7/1 灰白色	内面に自然釉?が付着。外面は回転ヘラケズリ。貼り付け高台。
101	08C区整地土	土師器 皿	口径 底径 器高	(9.8) (7.6) 1.6	密	良好	内 10YR7/3 にぶい黄橙色 外 10YR7/4 にぶい黄橙色	全体的に摩滅するが、口縁部はヨコナデ。
102	08A区整地土	土師器 皿	口径 底径 器高	(14.4) (6.0) 2.05	密	良好	内外 10YR7/4 にぶい黄橙色	内面と口縁部はヨコナデ。体部外面は摩滅する。
103	08A区トレンチ	須恵器 盤	底径 残存高	(14.8) 1.6	密	良好	内外 5Y7/1 灰白色	内面と高台部分は回転ナデ。底部外面は回転ヘラケズリ。
104	08A区SX177	土師器 皿	口径 器高	14.8 2.6	密	良好	内 7.5YR8/4 浅黄橙色 外 7.5YR8/3 浅黄橙色	全体的に摩滅する。
105	08A区SX177	土師器 皿	口径 底径 器高	(13.0) (8.4) 2.5	密	良好	内 10YR7/2 にぶい黄橙色 外 10YR7/4 にぶい黄橙色	全体的に摩滅する。外面に赤色顔料が付着。
106	08A区SX177	土師器 皿	口径 底径 器高	(13.8) (9.4) 2.2	密	良好	内 10YR7/3 にぶい黄橙色 外 7.5YR7/6 橙色	内面はヨコナデ。口縁部は二段のヨコナデ。外面は摩滅するが底部にユビオサエ残る。
107	08A区SX177	土師器 皿	口径 底径 器高	(9.0) (6.0) 1.8	密	良好	内 10YR7/3 にぶい黄橙色 外 7.5YR7/4 にぶい橙色	口縁部内外面ヨコナデ。底部外面は未調整。
108	08A区SX177	瓦器 碗	底径 残存高	(4.0) 2.4	密	良好	内外 N4/0 灰色	内面はヨコ方向のヘラミガキ、底部見込部に連結輪状文。外面はユビオサエ。ヘラミガキを省略? 貼り付け高台。
109	包含層	土師器 皿	口径 底径 器高	(11.0) (6.8) 2.7	密	良好	内外 7.5YR6/6 橙色	口縁部内外面ヨコナデ。底部内面と外面にユビオサエ。
110	包含層	土師器 皿	口径 底径 器高	(8.9) (4.0) 1.8	密	良好	内外 5YR7/6 橙色	底部内外面にユビオサエ。全体的に摩滅する。
111	包含層	土師器 皿(ヘソ皿)	口径 底径 器高	(7.3) (3.2) 2.0	密	良好	内外 10YR7/4 にぶい黄橙色	口縁部内外面ヨコナデ。底部外面にユビオサエ。
112	包含層	土師器 台付皿	口径 底径 器高	(9.0) (7.2) 3.4	密	良好	内 10YR8/2 灰白色 外 2.5Y8/2 灰白色	全体的にヨコナデ。貼り付け高台。外面に接合痕とその下にユビオサエ。
113	08A区 セクションベルト	土師器 皿(灯明皿)	口径 底径 器高	(12.8) (5.0) 1.5	密	良好	内 10YR7/2 にぶい黄橙色 外 2.5Y7/2 灰黄色	内面は摩滅する。口縁部はヨコナデ。「て」の字状口縁。外面にはユビオサエ。残りが悪く法量・傾き共信頼性は低い。

表9 出土土器観察表④

遺物番号	出土遺構・層位	器種・器形	法量(cm)		胎土	焼成	色調	成形・調整・文様などの特徴
			底径	残存高				
114	包含層	陶器(肥前系) 碗	底径	(4.6)	密	良好	内(釉調) 2.5Y7/3 浅黄色 外(釉調) 2.5Y7/4 浅黄色 外 2.5Y7/3 浅黄色	全体に施釉。底部外面は貼り付け高台に釉ハギ。
115	包含層	磁器(伊万里) 碗	底径	(4.4)	密	良好	内(釉調) 10BG7/1 明青灰色 より明度が高い 外(釉調) 5Y8/1 灰白色	全体に施釉部残る。
116	包含層	古瀬戸 花瓶	底径	(11.0)	密	良好	内外(釉調) 2.5Y7/2 灰黄色 内外 2.5Y8/1 灰白色	内外面共に回転ナデ、一部に自然釉がかかる。貼り付け高台。
117	包含層	土師器 甕	口径	(18.8)	密	良好	内 10YR7/3 にぶい黄褐色 外 10YR8/3 浅黄褐色	内面は摩滅するが、頸部より少し下にユビオサエ。口縁部内外面ヨコナデ。
118	包含層	土師器 羽釜	残存高	4.8	密	良好	内 2.5Y8/2 灰白色 外 10YR8/2 灰白色	全体的に摩滅する。
119	包含層	土師器 羽釜	口径	(20.6)	密	良好	内外 7.5YR7/4 にぶい橙色	全体にヨコナデ。羽部の下部に煤が付着。
120	包含層	瓦質土器 深鉢	底径	(22.0)	密	良好	内 2.5Y7/2 灰黄色 外 10YR8/1 灰白色	内面は回転ナデ。外面は摩滅する。
121	08A区旧耕土	土師器 皿	口径	(13.8)	密	良好	内 10YR7/3 にぶい黄褐色 外 10YR8/2 灰白色	全体的に摩滅するが口縁部はヨコナデ、体部外面にユビオサエ。
122	08A区耕土	土師器 皿(灯明皿)	口径	(15.8)	密	良好	内 5YR6/6 橙色 外 5YR7/6 橙色	全体的に摩滅する。内面の口縁の一部に煤が付着。
123	耕土	灰釉陶器 段皿	底径	(7.3)	密	良好	内外 N8/0 灰白色	段上部外面と内面は回転ナデ。段下部と底部は回転ヘラケズリ。貼り付け高台。内面に施釉。
124	09D区中世耕作土層	須恵器 壺	底径	(3.4)	密	良好	内 N3/0 暗灰色 外 N7/0 灰白色	内外面共に回転ナデ。底部回転系切り。外面やや摩滅する。
125	09C区中央部耕作土	須恵器 壺	底径	(4.4)	密	良好	内外 N7/0 灰白色	内外面共に回転ナデ。外面一部に自然釉がかかる。貼り付け高台。
126	09C区南部(南側溝内)耕作土	須恵器 壺	底径	5.8	密	良好	内外 N7/0 灰白色	内外面共に回転ナデ。底部回転系切り。貼り付け高台。内外面立ち上がりから底部にかけてと高台に漆(黒)が付着。
127	08C区耕土	土師器 甕	口径	(24.0)	密	良好	内 5YR6/6 橙色 外 5YR7/6 橙色	全体的に摩滅する。
128	08C区耕土	土師器 鍋	残存高	1.9	密	良好	内外 10YR8/2 灰白色	全体的に摩滅する。
129	08A区SD021	土師器 皿(灯明皿)	口径	(7.8)	密	良好	内外 10YR7/4 にぶい黄褐色	内面はヨコナデ。外面は摩滅するが底部にユビオサエ。口縁部内面の一部に煤が付着。
130	08A区SD021	須恵器 壺?	底径	(6.0)	密	良好	内外 2.5Y7/1 灰白色	内外面共に回転ナデ。外面は自然釉がかかる。貼り付け高台。
131	08A区SD021	土師器 鍋	口径	(20.0)	密	良好	内 5YR7/6 橙色 外 5YR4/4 にぶい赤褐色	頸部外面にヨコナデ。磨滅が著しい。
132	08A区SD021	置物(不明)	縦横 厚み	(6.2) (10.5) (5.0)	密	良好	外 10YR8/2 灰白色 ~10YR3/1 黒褐色	
133	08A区レンガ積基壇内区画1柱穴	土師器 皿	口径	(9.0)	密	良好	内 7.5YR8/3 浅黄褐色 外 10YR8/3 浅黄褐色	全体的に摩滅する。
134	08A区レンガ積基壇内区画1柱穴	瓦器 皿	口径	(9.0)	密	良好	内 N5/0 灰色 外 N4/0 灰色	内面から口縁部にかけて回転ナデとヘラミガキ。外面は摩滅するがユビオサエ残る。
135	08A区北東斜行レンガ構内	置物(人形)	縦横 厚み	(11.6) 4.8 3.0	密	良好	外 10YR8/2 灰白色	旅装束の人形。

第IV章 自然科学的分析

第1節 新薬師寺旧境内出土瓦の熱ルミネッセンス年代測定

1. はじめに

09年度新薬師寺旧境内発掘調査において発掘調査C区から検出された瓦片の熱ルミネッセンス年代測定を実施した。本研究で熱ルミネッセンス(Thermoluminescence; TL)法を適用する主な目的は、瓦の焼成年代を評価して伽藍の成立過程を明らかにすることを試みる他、焼成後の被災などの可能性についても検討することである。史料からは西暦780年に少なくとも西塔が焼失し、西暦962年には大風により伽藍が倒壊したことがわかる¹⁾。具体的な記載はないが、西暦962年の倒壊時に火災を伴っていた可能性もある。TL法で評価される年代は試料が最終的に高温を被った年代であり、本研究目的に適した分析方法といえる。

今回分析を行う上でもっとも大きな課題となると想定されるのが、過去における年間線量の変化についてである。本研究の場合、分析対象が長期間利用されていた建築材である可能性が高い。通常、TL法の対象となる試料は被熱時から上中へ埋蔵されるまで時間は比較的短い場合が多いが、本研究の場合は創建期の瓦と仮定すれば、西暦750年ごろから西暦962年の大風による倒壊までの約210年間屋根瓦として用いられていた可能性がある。その場合、約210年間は屋根上にあり、倒壊後1050年程度は土中にあったことになり周辺環境由来の年間線量に大きな違いが生じることになる。大風に伴い火災が発生し瓦試料がゼロイングされていれば10世紀中頃を基準とした年代が評価されると予想されるが、火災を伴っていない場合は年間線量の変化に起因する年代値のズレが観測される可能性がある。その点も含めて分析結果を検討し、新薬師寺旧境内出土瓦のTL法による自然科学的分析を実施した。

2. 試料

TL法は、鉱物に蓄積した放射線量(蓄積線量)を測定し、その鉱物が一年間に吸収する放射線量(年間線量)を求めることで、蓄積線量を年間線量で除することにより年代値を評価する方法である²⁾。鉱物に蓄積された放射線量は、熱などの刺激により発光するとゼロの状態になる。これをゼロイングといい、TL法の場合は試料が焼成や火災などによる高温を被った時にゼロイングされることになる。

本研究で測定対象としたのは、09年6月に奈良教育大学構内新薬師寺旧境内発掘調査C区から出土した瓦片5試料である。発掘調査C区では、多くの瓦などの遺物を含む東西流路NR503と南北溝SD280が検出されている。分析対象の瓦試料は所謂「布目瓦」であり、瓦の焼成年代については考古学的には奈良時代中頃と考えられる。これらの瓦は、その出土状況などから大型基壇建物とは別の建築物に用いられていた瓦と考えられるが、その建築物の建造時期は判然としない。「正倉院文書」には西暦760年ごろには金堂以外の建物の名称が散見されるようになるため、分析対象の瓦もこの頃に用いられ始めた可能性もある。C区の東西流路NR503および南北溝SD280の出土遺物と堆積状況から10世紀に埋没したと考えられ、先述した「東大寺要録」に記される西暦962年の大風による倒壊と年代的に一致している。C区から検出される瓦は考古学的に奈良時代のものであり、奈良時代に焼成され建築材として用いられていた瓦が10世紀まで使用され、大風により金堂などが倒壊した時期と時を同じくして堆積したものと考えられる。

測定試料は東西流路NR503のものをNSY-01シリーズ、南北溝SD280のものをNSY-02シリーズとし、東西流路NR503出土瓦から3点、南北溝SD280出土瓦から2点を測定対象とした

3. 試料処理

3-1. 蓄積線量測定用試料

測定対象とした瓦試料は、いずれも胎土中に多

くの石英を含んでおり、また比較的潤沢な試料採取が可能であったため石英粗粒子法による測定を行った。蓄積線量評価用の試料採取は、以下の手順で行った。また、以下の作業はすべて暗室内(暗赤色灯下、照度 1 lx 以下)で行った。

- ① ダイヤモンドカッターを用いて数十 g 程度の断片を採取し、露光により蓄積線量が減少している表面部をミニター株式会社製の超硬カッターで除去した。この際、外部からのβ線の影響を受ける表面部(深さ 2 mm まで)を超硬カッターで除去した。
- ② アルミ板で挟み圧力を用いて徐々に圧力を加えながら粉碎した。採取時に過剰な摩擦および圧力を加えないように注意しながら作業を行った。また、標準篩で 50 ~ 500 μm の鉱物を選択した。
- ③ 10 % の過酸化水素水で 16 時間処理を行い有機物の除去を行った。
- ④ 炭酸塩鉱物を除去するために 20 % の塩酸で 60 分間処理した。
- ⑤ 標準篩で 50 ~ 250 μm の鉱物を選択し、フランチ型マグネティックセパレーターで非磁性鉱物と磁性鉱物に分離した。
- ⑥ 分離した非磁性鉱物を 20 % のフッ化水素酸で 90 分間処理し、長石等を融解し試料を石英のみとした。また、このフッ化水素酸処理で石英の表面を薄く溶かし(エッチング)、石英に対するα線の寄与をなくした。
- ⑦ 標準篩で石英を 50 ~ 75 μm の粒度にそろえ、石英粗粒子試料とした。

3-2. 年間線量測定用試料

本研究では発掘が比較的短期間であったことから、発掘調査現場での年間線量の直接測定が行えなかったため、年間線量評価は間接測定法に基づいて行った。間接測定法は、試料中の放射性元素含有量を評価し、Adamiec らの換算式³⁾を用いて年間線量を算出する方法である。

TL 法で評価する放射線にはα線、β線、γ線、そして宇宙線が存在するが、それぞれ飛程が異なっており年間線量を評価する際には注意を要する。概ね土壌中における各放射線の飛程は、α線が約 0.1 mm、β線が約 2 mm、γ線が約 300

mm 程度である。蓄積線量評価に際し、試料採取時に表面から約 2 mm の深さまで除去するため、α線とβ線に関しては試料胎土由来の年間線量を評価すればよいことになる。また、フッ化水素酸処理によって石英粒子の表面部をエッチングする石英粗粒子法では、外部由来のα線を考慮する必要はなく、内部被曝も起きないためβ線のみを評価すればよい。一方、γ線と宇宙線は飛程が長いため周辺環境由来の放射線量を評価しなければならない。よって、年間線量のうち、β線量は瓦試料胎土から、γ線量は埋蔵時の試料周辺土壌から評価した。また、宇宙線量については 0.15 mGy/a を評価した⁴⁾。測定手順は、以下の通りである。

- ① 持ち帰った試料(瓦、周辺土壌)の重量を測定し、恒温槽にて乾燥させた。
- ② 乾燥した試料の重量を測定し、採取時重量と比較して採取時における含水率を評価した。
- ③ 乾燥試料を 30g 秤量してプラスチックケースに封入し、ポリエチレン製の袋に入れた。
- ④ γ線スペクトロメータで試料からのγ線強度を測定し、独立行政法人産業技術総合研究所が提供している岩石標準試料(JG-1a、JR 1、JA-3、JB-2、JB 3)で作成した検量線を用いて、U、Th、K の含有量を評価した。
- ⑤ U、Th、K の含有量の含有量から、β線(瓦胎土由来)およびγ線(周辺土壌由来)の年間線量を求めた。

4. TL 測定結果

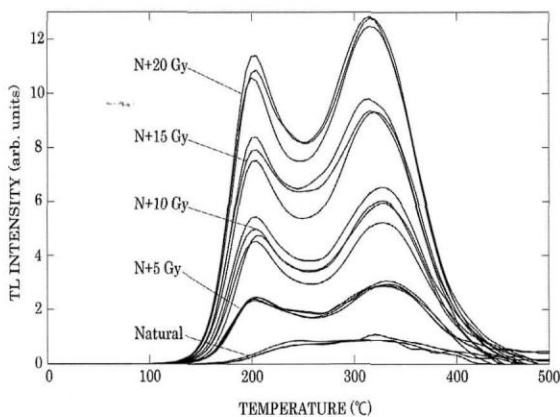
蓄積線量の測定には、DAYBREAK 社製の TL/OSI 自動測定装置「1150 TL SYSTEM」を使用した。昇温速度 10.0 °C/sec、最高温度 500 °C で測定した。用いた光学フィルタは Corning 7-59 および Schott BG 39 である(検出波長域は 350-470 nm)。

蓄積線量の評価には、石英粗粒子法による Multiple aliquot additive dose (MAAD) 法⁵⁾を適用した。MAAD 法は、Natural 試料と任意の線量の放射線を照射した付加線量試料を測定し、生長曲線を作成して等価線量 (equivalence dose ; ED) を評価する方法である。測定では⁶⁰Co のγ線の照射によって任意の放射線量を Natural 試料

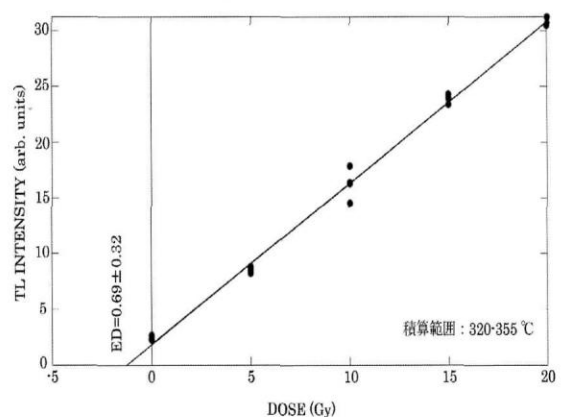
に付加した。また、蓄積線量を正確に評価するためスプラリニアリティ (supralinearity; SPR) 補正を行う必要がある。スプラリニアリティ補正値の測定は、アニールした試料に付加線量を照射して測定した。アニール条件は 350 °C で 60 分間とした。得られた補正値を等価線量に加えたものが蓄積線量である。また、等価線量評価のための積算温度領域はプラトーテストにより最適領域を求めた。TL 測定では、1 回の測定に試料 5 mg を用い、各線量で 5 回の測定を行った。等価線量およびスプラリニアリティ補正値は最小二

乗法による直線回帰により評価した。試料 NSY-01-R01 の ED 測定時のグローカーブと生長曲線を、第 45 図および第 46 図に例示した。

蓄積線量の評価結果は表 10 に、年間線量の評価結果は表 11、そして最終的に評価された TL 年代値は表 12 に示した。第 45 図と第 46 図に例示したように、TL グローカーブは個々の線量ごとに非常にまとまりが良く、生長曲線の線量依存性も良好であり、信頼性の高い蓄積線量評価が可能であった。



第 45 図 試料 NSY-01-R01 の TL グローカーブ (ED)



第 46 図 試料 NSY-01-R01 の TL 生長曲線 (ED)

表 10 蓄積線量の評価結果

Sample No	ED (Gy)	SPR (Gy)	PD (Gy)
NSY-01-R01	0.69±0.32	2.76±0.44	3.45±0.55
NSY-01-R02	1.37±0.32	3.48±0.61	4.85±0.69
NSY-01-R03	2.01±0.32	2.73±0.38	4.74±0.50
NSY-02-R01	1.84±0.23	2.28±0.59	4.12±0.63
NSY-02-R02	1.72±0.68	1.76±0.45	3.48±0.81

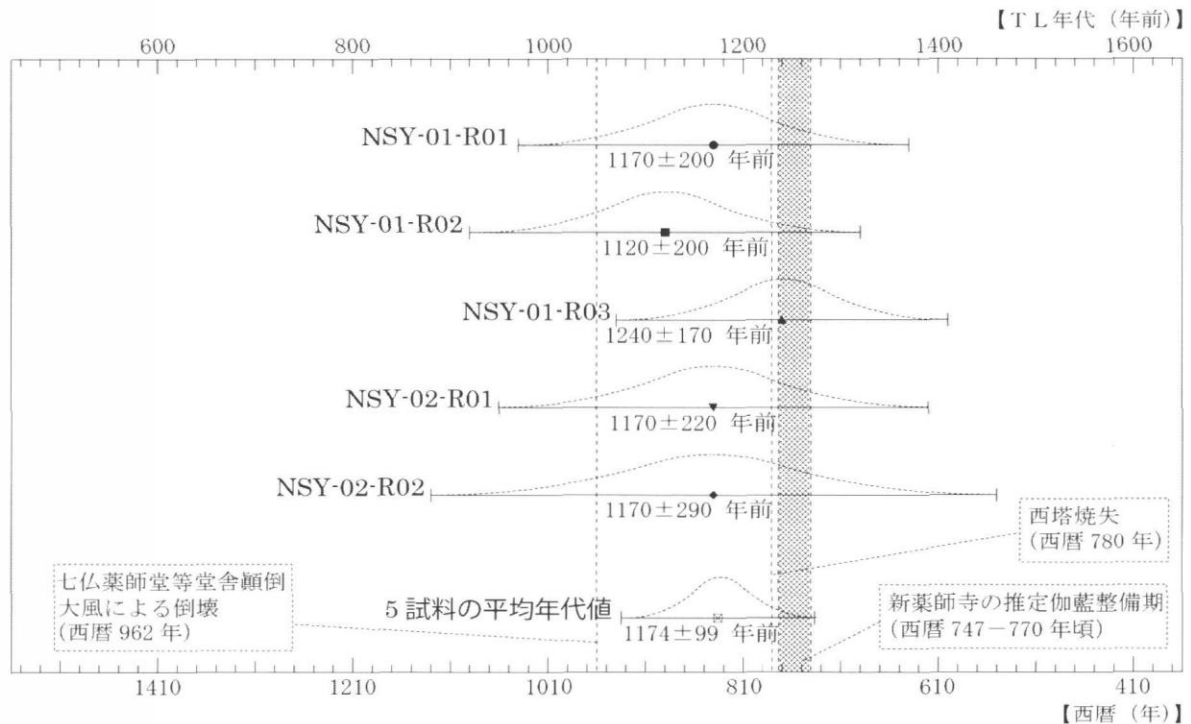
表 11 年間線量の評価結果

Sample No	年間β線量	年間γ線量	年間宇宙線量	総年間線量
NSY-01-R01	1.34±0.16	1.47±0.04	0.15	2.96±0.17
NSY-01-R02	2.70±0.48	1.47±0.04	0.15	4.32±0.48
NSY-01-R03	2.22±0.34	1.47±0.04	0.15	3.84±0.34
NSY-02-R01	2.01±0.36	1.35±0.04	0.15	3.52±0.36
NSY-02-R02	1.48±0.28	1.35±0.04	0.15	2.98±0.28

(単位:mGy/a)

表 12 TL年代測定結果

Sample No	PD (Gy)	AD (mGy/a)	TL年代 (2010年基準)
NSY-01-R01	3.45±0.55	2.96±0.17	1170±200
NSY-01-R02	4.85±0.69	4.32±0.48	1120±200
NSY-01-R03	4.74±0.50	3.84±0.34	1240±170
NSY-02-R01	4.12±0.63	3.52±0.36	1170±220
NSY-02-R02	3.48±0.81	2.98±0.28	1170±290



第 47 図 評価された TL 年代値と新薬師寺関連の文献記載上の年代観との比較

評価された TL 年代は、試料 NSY-01-R01 が 1170 ± 200 年前、NSY-01-R02 が 1120 ± 200 年前、NSY-01-R03 が 1240 ± 170 年前、NSY-02-R01 が 1170 ± 220 年前、NSY-02-R02 が 1170 ± 290 年前となり、TL 年代値の中央値は比較的近似した値を示している。また、5 試料の平均年代を評価すると 1174 ± 99 年前となり、各試料の中央値が 1 標準偏差内に入ることがわかる。このことから、測定対象の 5 試料は、同時期または比較的近い年代に焼成されたものである可能性が示唆される。しかしながら、筆者は新薬師寺の伽藍が整備された時期を文献資料などから西暦 747 年から 770 年頃までと考えており、評価された TL 年代値とは必ずしも一致しない。評価された TL 年代を測定年である 2010 年を基準として西暦年に換

算すると、それぞれ 840 ± 200 年、890 ± 200 年、770 ± 170 年、840 ± 220 年、840 ± 290 年と評価され、誤差範囲内には入るものの試料 NSY-01-R03 を除き中央値は数十年から百年程度考古学的な年代観に対して若く年代値が評価されている (第 47 図)。蓄積線量の評価に関しては、既に述べたようにグローカーブや生長曲線の信頼性は良好であり問題は見られない。加えて、埋蔵時の年間線量評価に関しても、発掘調査 C 区の状況からみて埋没後は大きな攪拌もなく、地下水状況も安定していたと考えられ同様に問題はない。また、西暦 962 年の倒壊時に大規模な火災を伴っていた痕跡も、中央値がまとまりよく得られている点や、中央値平均年代値の誤差範囲から西暦 962 年が外れている点から考えて、今回の分

析結果からは認めることはできない。さらに火災などで被熱した試料は感度変化などでグローカーブの攪乱や線量依存性の悪化が生じることが多いが、今回の分析結果からはその傾向は認められない。西暦 780 年に西塔が焼失した際に今回の分析対象に関連する建築物も被火した可能性も考えられたが、本研究からは金堂およびその近傍の建築物が火災に遭っている証左は認められなかった。よって、年代値が若く評価された原因は、火災などによる被熱とは別に存在すると考えるのが妥当であろう。

5. 瓦の年代測定結果と建物の存続時期に関する考察

TL 年代値が相対的に若く評価された原因は、建築材として長期間利用された後に土中に埋まったことによる年間線量の変化に求めることが可能である。先述したように、TL 法に寄与する放射線源はその飛程により種類が異なっている。飛程が短い β 線は試料胎土に由来し、飛程の長い γ 線はその大部分が試料の周辺環境に由来する。一般的に TL 法では測定時に評価した年間線量が現在まで不変であったという仮定に基づいて年代値を算出するが、今回はその仮定は成り立たない可能性が高い。分析の結果、火災などにより瓦の焼成後に高温による再加熱を受けた痕跡は認められず、8 世紀中頃に創建されてから大風で倒壊する西暦 962 年まで屋根瓦として利用されていたと考えられ、倒壊時を境とした年間 γ 線量の変化が生じたものと考えられる。瓦が屋根瓦として使用される場合、瓦本体と屋根面に連続するその他の瓦の胎土以外に大きな影響を与える γ 線源は存在しない。周囲に土壌という大きな γ 線源を有している土中埋蔵時に比べて、試料に入射する γ 線量は大幅に少なくなると考えられる。

過去における三次元的な γ 線の影響を考慮した年間線量を基に吸収放射線量を算出し、この結果を本研究で得られた試料の蓄積線量と比較した場合、もし推定吸収線量を評価する仮説が正しいならば蓄積線量と推定吸収線量は近似的な値をとるはずである。この仮説の検討のため、創建期の瓦である可能性が高い NSY-01-R01 を対象に、以下

の 10 の仮定を置いて、屋根瓦利用時と土中埋蔵時における γ 線量率の違いが蓄積線量に与える影響について検討した。

- 仮定① 試料 NSY-01-R01 が焼成されたのは西暦 750 年
- 仮定② 試料 NSY-01-R01 が埋没したのは西暦 962 年
- 仮定③ γ 線の影響範囲は半径 300 mm
- 仮定④ 自然放射線源から放射される γ 線の平均エネルギーは 0.8 MeV
- 仮定⑤ 屋根瓦および周辺土壌の密度は同一 (密度 2.00 kg/m³)
- 仮定⑥ 屋根瓦層の厚さは重なりも考慮して 50 mm
- 仮定⑦ 測定試料とした石英は瓦層の中央に位置
- 仮定⑧ 屋根瓦層の年間 γ 線量は本研究で評価した 5 試料の平均値
- 仮定⑨ β 線量および宇宙線量は不変
- 仮定⑩ 含水率は埋蔵時と同一

試料の周囲半径 300 mm 圏内の環境は、屋根瓦利用時と土中埋蔵時では大きく異なる。本来、両者の γ 線量率を比較する場合には様々な条件を考慮しなければならないが、ここでは、試料の幾何学的条件と γ 線の減衰率を考慮して近似させ、推定吸収線量を評価することとした。まず、試料を中心とした半径 300 mm の球を考慮すべき γ 線の影響範囲として設定した。その上で、石英試料が厚さ 50 mm の瓦の中央に層状に存在したと仮定し、石英試料が厚さ 25 mm の瓦胎土層に挟まれていた状態を想定する。そして、この厚さ 25 mm の瓦胎土層が半径 300 mm の球の体積に占める割合を算出した。瓦胎土が試料の上下に厚さ 25 mm 存在するため、密度 2.00 kg/m³ の物質中の γ 線減衰曲線から距離 25 mm 範囲の γ 線量の影響率を評価し、これを半径 300 mm の球における厚さ 25 mm の瓦胎土層の占める割合に係数として乗じ、これと瓦試料 5 点の胎土由来の年間 γ 線量の平均値の積を求め、2 倍して石英試料上下層の和を求めることで、屋根瓦使用時の

年間 γ 線量として評価した。試料を中心とする半径 300 mm の球の体積に対する厚さ 25 mm の瓦胎土層の占める割合は約 6 % である。また、 γ 線の減衰曲線における距離 25 mm 範囲の割合は約 38 % である。そして、瓦試料 5 点の胎土由来年間 γ 線量が中央値平均で 1.30 mGy/a である。 β 線量および宇宙線量は測定時と同じと仮定するため、西暦 750 年から西暦 962 年までの 212 年間の推定吸収線量はそれぞれ 0.28 Gy、0.03 Gy となる。上述の仮定のもと評価された屋根瓦利用時の推定吸収 γ 線量は 0.01 Gy となった。また、西暦 962 年から西暦 2010 年までの 1048 年間の推定される吸収 β 線量、吸収 γ 線量、吸収宇宙線量は、それぞれ 1.40 Gy、1.54 Gy、0.16 Gy である。これらすべての線量を合計すると 3.42 Gy となった。TL 測定により評価された試料 NSY-01-R01 の蓄積線量は 3.45 ± 0.55 Gy であり、本仮定に基づいて評価した推定吸収線量 3.42 Gy とよく近似する結果となった。

考古学的に同時期の瓦と考えられる試料 NSY-02-R01 および NSY-02-R02 でも同様の仮定に基づいた検討を行った。その結果、試料 NSY-02-R01 では、推定される吸収線量が、西暦 750 年から西暦 962 年までの間が 0.47 Gy、西暦 962 年から西暦 2010 年までの間が 3.68 Gy となり、合計で 4.15 Gy となった。この推定吸収線量も、TL 分析の結果求められた試料 NSY-02-R01 の蓄積線量 4.12 ± 0.63 Gy とよく近似する結果となった。試料 NSY-02-R02 も、西暦 750 年から西暦 962 年までの間が 0.35 Gy、西暦 962 年から西暦 2010 年までの間が 3.12 Gy となり、合計で 3.47 Gy、評価された蓄積線量 3.48 ± 0.81 Gy とよく近似する結果となった。

さらに、瓦の考古学的な推定年代が他の 3 試料よりも幾分下と考えられる試料 NSY-01-R02 および NSY-01-R03 についても同様の仮定のもとで検討を行った。その結果、推定吸収線量は NSY-01-R02 が 5.14 Gy、NSY-01-R03 は 4.54 Gy と評価された。測定により評価された両者の蓄積線量は、 4.85 ± 0.69 Gy および 4.74 ± 0.50 Gy であり、比較的近似しているものの他の 3 試

料に比べると近似性は悪い結果となった。これは、考古学的な年代が他の 3 試料よりも下る試料であることから、先述の 10 の仮定のうち仮定 1 および 2 が成り立たない為とも考えられる。また、他の 3 試料と異なった埋蔵過程を辿った可能性も考えられる。今後測定数を増やし、検討を重ねていく必要があるが、以上の検討結果から、新薬師寺旧境内発掘 C 区出土瓦が用いられていた建築物は、『東大寺要録』が伝える西暦 962 年に倒壊し埋没したものである可能性が強く示唆される。なお、この検討結果から表 10 に示した蓄積線量は実際の年代に対して過小評価されたものであり、表 11 に示した年間線量は過大評価されていると考えられる。従って、表 12 に示した TL 年代値を基に新薬師寺旧境内にあった伽藍の成立過程を検討することは適当ではない。

今回の測定により明らかとなったのは以下の 6 点である。

- 1) 測定対象とした 5 点の瓦は、新薬師寺旧境内の伽藍整備期に焼成されたものと考えられる。
- 2) 測定対象とした 5 点の瓦のうち、NSY-01-R01、NSY-02-R01、NSY-02-R02 の 3 試料は、同時期に焼成されたものである。
- 3) 試料 NSY-01-R02 および NSY-01-R03 は、他の 3 試料と焼成年代や埋没過程に違いがある可能性がある。
- 4) 西暦 780 年の西塔焼失の際の被火の痕跡は認められない。
- 5) 西暦 962 年の大風による倒壊時に大規模な火災が起きた証拠は認められない。
- 6) 分析試料が用いられていた建築物は 8 世紀中頃に建てられ 10 世紀中頃に倒壊・埋没したと考えられる。 青木 智史 (奈良教育大学)

《参考文献》

- 1) 高井英俊改訂「東大寺要録」全同朋房 1944
- 2) 長友和久「ルミネッセンス法」考古学のための年代測定入門 古今同朋 pp59-76 1999
- 3) Adamiec, G., Aitken, M., "Dose-rate conversion factors update," "Ancient TL," Vol 16-2 pp.37-50 1998
- 4) 長友和久「ルミネッセンス法」考古学のための年代測定入門 古今同朋 p73 1999
- 5) Aitken, M.J., "Thermoluminescence Dating Academic Press" 1985

第2節 新薬師寺旧境内出土 奈良三彩の蛍光X線分析

1. はじめに

奈良三彩は奈良時代に焼かれた特徴的な施釉陶器である。奈良三彩は緑釉陶とともに我が国で最初の施釉陶器であり、考古学的、陶磁史的に極めて重要な考古遺物である。奈良三彩は、日本で焼造された陶器であるが、その技術的源流は中国・唐の唐三彩であることはいうまでもない。唐三彩は、7世紀後半には日本にもたらせており、奈良三彩の出現に大きな役割を果たしたと考えられる。唐三彩は、中国以外では日本で特に多く出土するが、基本的に破片となって出土する。ある程度の大きさの破片であれば、唐三彩と奈良三彩の判別は難しいものではない。しかし、小さな破片である場合、肉眼ではその判別が困難な場合がある。また、奈良三彩には唐三彩と見紛う作例が一部有り、慎重な判断が必要になる場合がある。そこで、今回、奈良教育大学新薬師寺旧境内で奈良三彩片が複数検出されたことを契機に、蛍光X線法による胎土分析を試みた。また、これまでに測定の実績があった中国河南省の黄冶窯跡の唐三彩片の胎土分析結果とを比較し、両者が分析により判別可能か否かの検討を行った。

以降分析およびその結果について述べていくことになるが、未だすべての分析が完了したわけではなく、測定数も統計的に実効的な段階ではない。このため、本稿は速報的性格のものである点を予めお断りしておきたい。

2. 胎土分析による奈良三彩と唐三彩の判別

陶磁器の産地推定を行うならば、生産地である窯跡から得られた試料を分析対象とした研究が不可欠である。しかし、奈良三彩は平城京近傍で焼造されたと考えられるが、その窯跡は現在確認されておらず、生産地推定を行うことは困難である。

ただし、胎土分析により考古学的に有用な情報を抽出することは可能である。例えば、唐三彩なのか奈良三彩なのか、胎土分析から両者を判別できる可能性がある。これまでも、沢田正明らによって大安寺出土三彩陶枕を対象とした蛍光

X線を用いた胎土分析研究が行われており、Rb、Sr、Zrなどの元素の濃度を鍵として奈良三彩と唐三彩を科学的に判別しうる可能性が示唆されている¹⁾。また、七器の産地推定研究の第一人者である三辻利一は、西安近傍の黄堡鎮窯（耀州窯）と奈良市菅原東窯の埴輪を用いた蛍光X線分析を用いた胎土分析研究において、奈良三彩と唐三彩の判別がK-Ca、Rb-Sr、の2因子により判別が可能であることを明らかにしている²⁾。これらの研究では、奈良三彩および唐三彩が貴重な遺物であることを考慮して蛍光X線分析を用いた完全非破壊分析を行っている。本研究では、三辻の研究手法³⁾を参考とし、新薬師寺旧境内出土奈良三彩片の蛍光X線分析による完全非破壊での胎土分析を実施することにした。

3. 分析試料および比較試料

本研究で分析対象としたのは、新薬師寺旧境内で2008年から2009年にかけて出土した奈良三彩片11点である。これらの試料は、接合可能な陶片も複数含まれており、個体数でいえば8点となる。本報告書に掲載されている奈良三彩片のうち、奈良三彩51、52、53、54、55、58、59、60（写真図版27）に該当する。いずれの試料についても、釉薬の付着していない裏面などの露胎部分を十分にクリーニングした後に分析を行った。奈良三彩と比較した唐三彩試料は、本研究に先立ち、2008年に年代測定を行っていた中国河南省黄冶窯跡から出土した唐三彩片9点である。これらの試料は、2008年に実施した黄冶窯跡出土唐三彩片の熱ルミネッセンス年代測定⁴⁾に伴って年間線量評価に関連して胎土分析を行ったものであり、貴重な唐三彩胎土の分析結果として情報を蓄積していたものである。分析は、後述の今回行った奈良三彩の胎土分析と同様の条件と手順で行っている。

4. 分析方法

測定には奈良大学が所有するエネルギー分散型蛍光X線分析装置EDAX Japan EAGLE XXLを使用した。この装置のX線ターゲットはCrである。測定条件は、真空環境下で印加電圧を40kVとし、電流を380～500 μ Aの範囲でカウント

毎秒 (cps) が 1000 程度となるように調節した。また、完全非破壊分析のため、試料を粉末にするなどして均一にすることはできない。このため、鉱物粒子などによる分析値の偏りを極力なくすために以下の工夫を行った。まず、試料表面の平滑部分を選択し、3 × 2mm 程度の測定領域を設定し、8 × 8 のメッシュを作成してその交点 64 ポイントを測定点とした。測定点は径 0.1mm である。そして、各ポイントをそれぞれ 30 秒ずつ計 32 分間測定し、積算して測定値とした。測定時間を 32 分間と設定したのは、事前の基礎実験において 30 分以上測定を行えば Rb や Sr などの微量元素の測定が再現的に行えることを確認したためである。

定量分析においては、元素濃度が既知である独立行政法人産業技術総合研究所の提供する岩石標準試料 JG-1a、JA-3、JB-2、JB-3、JR-1 を用いて、Na (ナトリウム)、Mg (マグネシウム)、Al (アルミニウム)、Si (珪素)、K (カリウム)、Ca (カルシウム)、Ti (チタン)、Fe (鉄) の主要 8 元素および微量元素 Rb (ルビジウム)、Sr (ストロンチウム) についての検量線を作成し、奈良三彩片に含まれる元素濃度を評価した。その際、接合可能な試料については平均値を採用した。また、元素濃度による生産地判別においては三辻利一の研究法に従い、奈良三彩片の X 線強度を標準試料の X 線強度で除すること規格化値を求め、生産地判別に有効な K、Ca、Rb、Sr、の 4 因子について解析を行った。用いた標準試料は、産業技術

総合研究所の岩石標準試料 JG-1a である。また、日本の緑釉陶の胎土は唐三彩の胎土に比べて Al が少ない特徴を持つとの報告もあり⁵⁾、本研究では先述の先行研究なども参考に Al、Fe、Zr (ジルコニウム) も判別因子として注目し、奈良三彩と唐三彩の判別研究を行った。

5. 分析結果と考察

奈良三彩片胎土中の Na、Mg、Al、Si、K、Ca、Ti、Fe の 8 元素の評価の結果は酸化物濃度として、Rb、Sr の 2 元素は元素濃度として表 13 に示した。奈良三彩 51 は Fe および Mg が、奈良三彩 53 は Ti および K が特徴的に多く、他の奈良三彩片と異なった特徴を示している。その他の試料については、主要元素の濃度は比較的近似した値を示している。現状、測定数は 8 個体しかなく統計的に不十分な数であるため具体的な検討の段階にはないが、奈良三彩 51 および奈良三彩 53 はやや異質であり、測定時の鉱物粒子などによる異常値である可能性や、材料粘土の供給地が複数あった可能性についても留意すべきであろう。

これ以降、JG-1a による規格化値を用いた奈良三彩と唐三彩の胎土比較について述べていくことにする。新薬師寺旧境内で出土した奈良三彩と黄冶窯で出土した唐三彩の Rb - Sr 分布図を第 48 図に、K - Ca 分布図を第 49 図に、Al - Fe 分布図を第 50 図に示した。第 48 図を見ると、奈良三彩と唐三彩は明確に異なった分布を示していることがわかる。奈良三彩は唐三彩に比べて Sr が少なく、Rb もやや少ない傾向が認められる。両

表 13 新薬師寺旧境内出土奈良三彩片の胎土分析結果

試料名	SiO ₂	Al ₂ O ₃	Fe ₂ O ₃	TiO ₂	CaO	MgO	Na ₂ O	K ₂ O	Rb	Sr	Total
	(%)								(ppm)		(%)
奈良三彩 51	58.4	21.5	7.15	2.13	0.78	7.32	0.51	1.31	54	86	99.1
奈良三彩 52	67.6	24.0	4.01	1.88	0.80	1.28	nd	2.07	75	157	101.7
奈良三彩 53	72.4	19.7	3.69	3.22	0.90	0.57	0.85	3.38	88	133	104.7
奈良三彩 54	56.3	19.2	3.17	1.82	0.78	1.17	1.46	1.36	46	103	85.3
奈良三彩 55	66.1	23.2	3.27	1.93	0.77	2.56	1.58	2.16	79	130	101.6
奈良三彩 58	64.4	19.9	2.74	1.73	0.77	1.28	1.63	1.62	68	116	94.1
奈良三彩 59	60.9	19.2	2.59	1.65	0.77	1.17	1.16	1.43	65	95	88.8
奈良三彩 60	64.1	20.8	4.87	1.58	0.77	1.60	0.85	2.06	48	117	96.6

※ nd は不検出

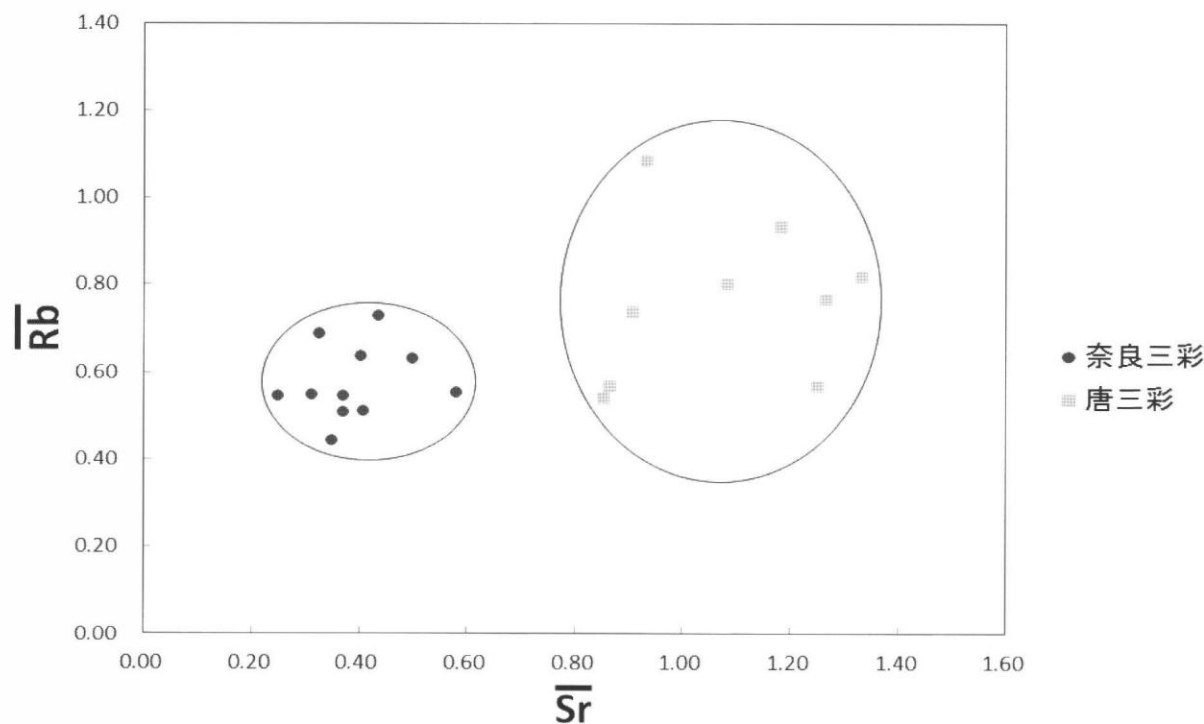
集団の間には明瞭な隔たりがあり、判別が可能である。特に、Sr は重複領域が無く、Sr はより有効な識別因子であるといえる。第 49 図では、奈良三彩 53 のみが唐三彩の分布域に位置しているものの、奈良三彩は唐三彩に比べて Ca および K が少ないことがわかる。特に Ca は有効である。奈良三彩 53 は Rb - Sr 分布図では奈良三彩の分布域に位置しており、唐三彩ではないことは明らかである。異常値、または特異な胎土である可能性がある。K と Rb、Ca と Sr は近似する科学的、物理的性質を持ち、Rb - Sr 分布図と K - Ca 分布図は正の相関関係が認められる。本研究の結果から、奈良三彩と唐三彩の判別においても双方とも有効な判別因子であることは疑いない。三辻は Rb - Sr 分布図の有効性をより強く指摘しており、本研究の場合でも Rb - Sr 分布図がより有効な因子であると評価できる。第 50 図では、奈良三彩は Fe が多いという特徴が認められる。また、唐三彩は明瞭ではないが相対的にやや Al が多いという特徴を読み取ることができる。両群は比較的明瞭に識別可能であり、Al および Fe も奈良三彩と唐三彩の判別に有用な因子であることが示唆される。Sr が特に有効な判別因子となりう

ることは既に指摘したが、単一元素規格化値で比較した場合に Zr が有効な差違を示したことから、Rb の代わりに Zr を識別因子として Sr - Zr 分布図を作成して検討を行った。第 51 図をみると、奈良三彩は Sr と Zr が共に唐三彩よりも少なく、Rb - Sr 分布図よりも明瞭に奈良三彩と唐三彩の判別が可能となっている。奈良三彩と唐三彩の判別に関しては、Sr - Zr 分布図の有効性が強く指摘できよう。ただし、本研究では黄冶窯産の唐三彩についての場合についてしかいえず、西安近傍の黄堡鎮窯やその他の窯の製品が日本に来ていた場合、必ずしもなり立たない可能性も残る。今後検討が必要であろう。

6. 今後の展望

本研究で分析した奈良三彩 11 点 (8 個体)、唐三彩 9 点は統計的に十分な分析数ではなく、今後測定数を増やすことができれば、今回の結果とは異なった結果を示す可能性もある。しかしながら、K - Ca、Rb - Sr、Al - Fe、Sr - Zr の各因子は、本研究で明瞭な差違を示しており、今後測定数が増加した場合でも同様の傾向を示す可能性が高いと考えられる。

今回の分析結果が考古学的に重要な意味を持つ



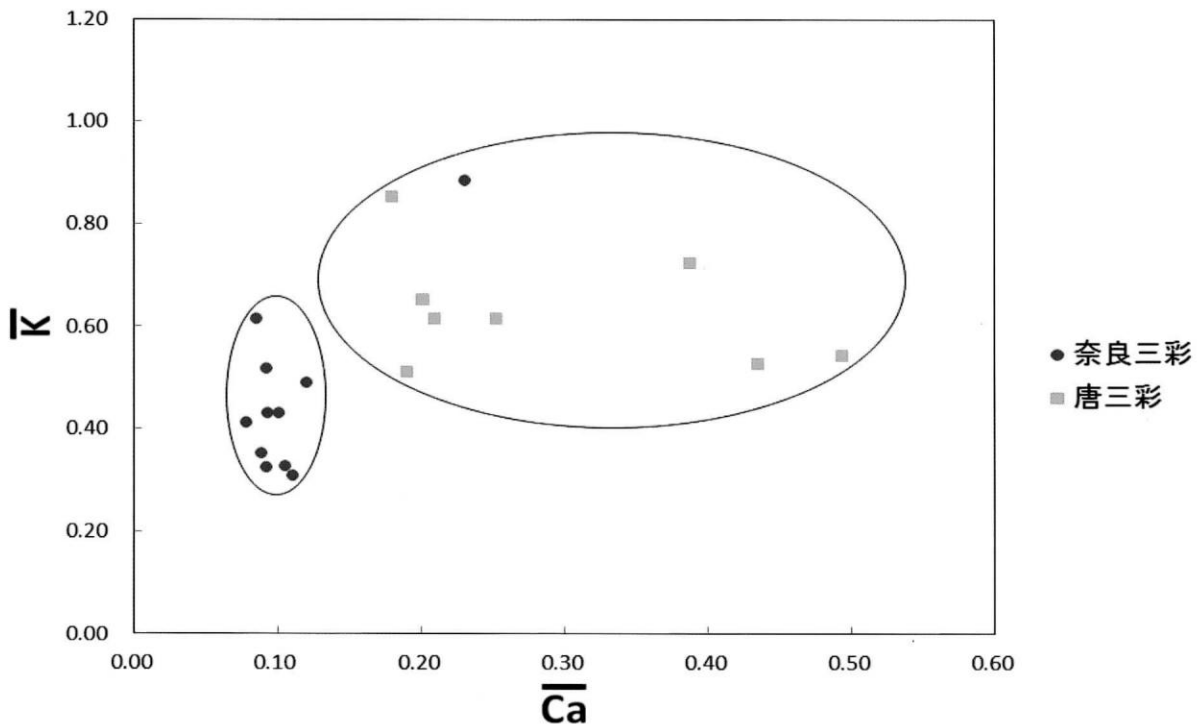
第 48 図 新薬師寺旧境内出土奈良三彩片と黄冶窯跡出土唐三彩の Rb - Sr 分布図

と考えられるのは、日本にもたらされた唐三彩はその殆どが鞏県窯の製品であるとの指摘もあるためである⁶⁾。筆者らは西安地域からも唐三彩がもたらされている可能性が高いと考えているが、その主体が鞏県窯、つまり黄冶窯の製品であることは明らかなだと考える。本研究で行った黄冶窯跡出土唐三彩と新薬師寺旧境内出土奈良三彩との胎土比較は、日本における唐三彩の伝播・流通の面からも非常に重要な意味を持っていると考えられる。また、本研究は蛍光X線分析を用いた完全非破壊分析であり、文化財保護の観点からも有用な方法である。今後、新薬師旧境内出土奈良三彩の分析をさらに進め、その他の遺跡出土の奈良三彩や唐三彩の分析も模索しながら測定点数を拡充していくことで、より明確な判別基準を導出することが可能であると確信している。

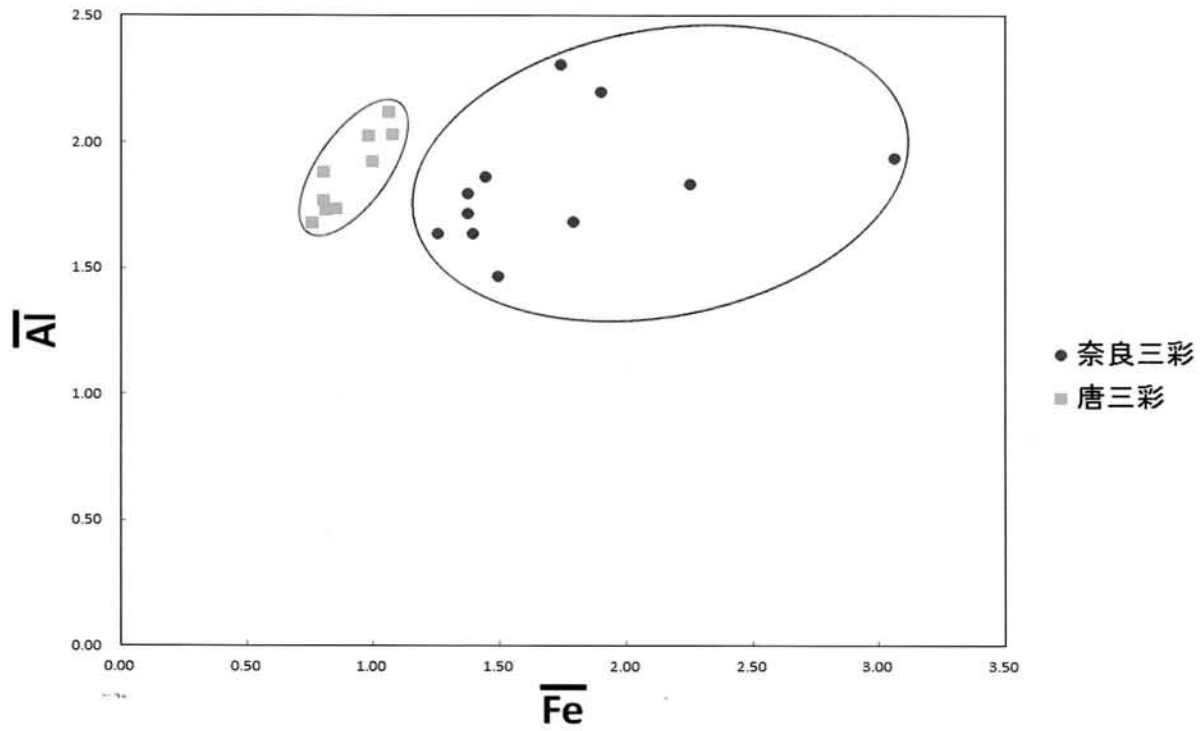
青木 智史・小倉 頌子 (奈良教育大学)

《参考文献》

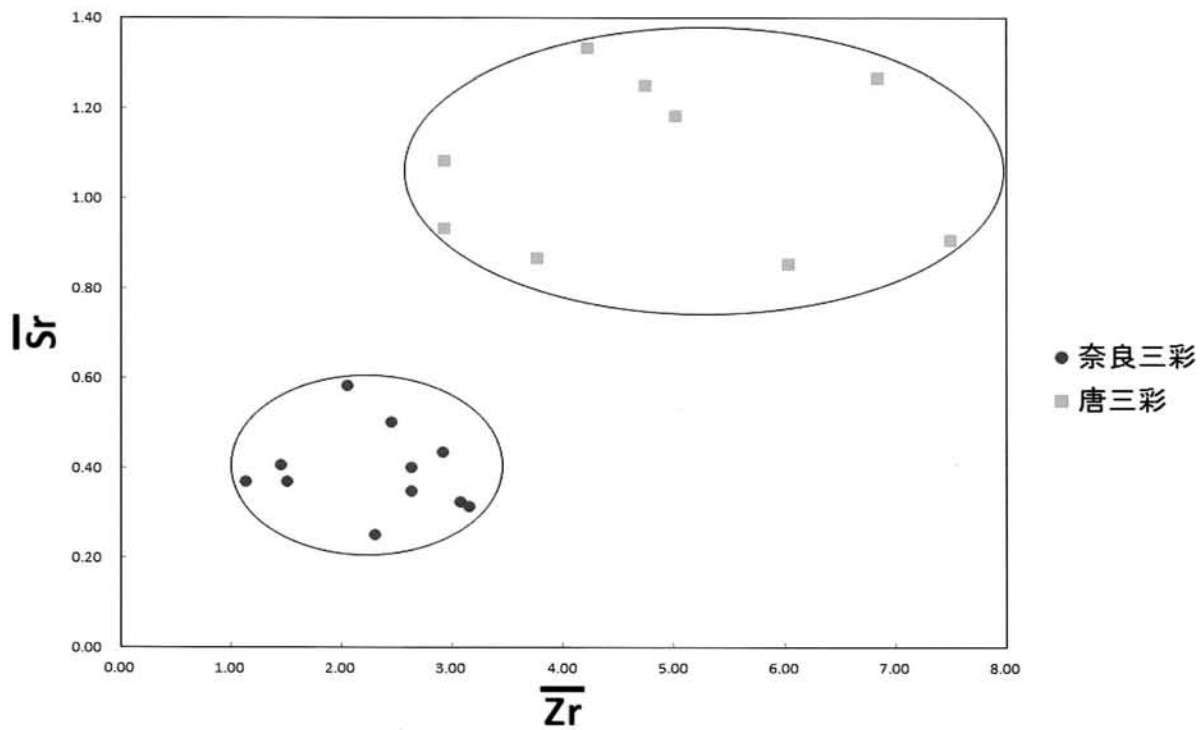
- 1) 沢田正明・巽 淳一郎「大安寺出土陶枕の製作技術と材質」『古文化財の自然科学的研究』古文化財編集委員会 pp.242-249 1984
- 2) 三辻利一「第3部 唐三彩の伝播・流通の研究 (第一報)」『東アジアにおける古代土器の伝播・流通に関する研究』平成1・2年度 科学研究費補助金(国際共同研究) 研究成果報告書 pp.71-80 1990
- 3) 三辻利一『考古学ライブラリー 14 古代土器の産地推定法』ニュー・サイエンス社 1983
- 4) Xinmin Sun・Musen Guo・Tetsuro Degaw・Satoshi Aoki・Tsuneto Nagatomo'Validity of TL Dating Method Applied to Tang Dynasty Three-Color-Glazed Pottery'"09 古陶磁科学技術7 国際討論会論文集" pp.86-94 2009
- 5) 山崎一雄・飯田忠三「陶片の化学組成・胎土ならびに釉」『古文化財の自然科学的研究』古文化財編集委員会 pp.193-197 1984
- 6) 樺崎彰一「日本における施釉陶器の成立と展開」『特別展 日本の三彩と緑釉—天平に咲いた華—』図録 五島美術館展覧会図録 No.121 愛知県陶磁資料館 五島美術館 pp.6-11 1998



第 49 図 新薬師寺旧境内出土奈良三彩片と黄冶窯跡出土唐三彩のK - C a 分布図



第 50 図 薬師寺旧境内出土奈良三彩片と黄冶窯跡出土唐三彩の Al - Fe 分布図



第 51 図 新薬師寺旧境内出土奈良三彩片と黄冶窯跡出土唐三彩の Sr - Zr 分布図

第3節 新薬師寺旧境内出土 の白色上塗り材の分析

1. 試料について

本試料は大型基壇建物跡（金堂）東端の羽目石
抜き溝から大量の瓦とともに出土したもので、
大型基壇建物を構成していた建築部材の一部だと
考えられる（第52・53図）。

試料は横幅が最大で約40mm、縦幅は最大で
25mm、厚みは約15mmで、試料側面からは白
色上塗り層と礫混じりの下地層の2層構造が観
察でき、上塗り層は厚さ約3～4mmほどである。
上塗り層は雲母混じりの、きめ細かい白色の上
によって構成され、下地層はチャート礫や砂を多く
含む。なお上塗り層・下地層のどちらからも、壁
体であれば含まれている可能性の高い藁などサ
に相当する植物繊維は確認できず、試料の裏面
には木舞の痕が見られなかった。よって大型基壇建
物の壁体であると断定は出来ないが、白色層と下
地層の2層に分かれている点や、羽目石抜き取
り跡から出土した点などを踏まえると、大型基壇
建物における壁体や建築部材の上塗りとして用い
られたものと考えられる。

この度は自然科学的手法を用いて本試料の白色
上塗り層の分析を行った。



第52図 白色上塗りの施された小片



第53図 同上（断面）

2. 分析方法

分析は蛍光X線分析装置とX線回折分析装置
を用いて白色上塗り層の定性分析を行った。

蛍光X線分析装置は奈良大学のEDAX Japan
EAGLE XXLを使用し、測定を行った。X線回折
分析装置は奈良教育大学のRigaku MiniFlex IIで、
走査範囲は3~90°、走査速度は1°/minで測定
を行った。

3. 結果と考察

蛍光X線回折分析の結果、白色上塗り層に含
まれる主要元素としてSi（ケイ素）、Al（アルミ
ニウム）、Fe（鉄）、K（カリウム）、Ti（チタン）
が検出された。X線回折分析からは主に石英の
ピークが検出され、その他に具体的な鉱物種は特
定できないが、長石類と粘土鉱物と思われるピー
クがそれぞれ検出された。

以上の結果より、本試料からは漆喰や鉛白に含
まれるCa（カルシウム）やPb（鉛）などの元素
はほとんど検出されず、またカルサイト等の鉱物
は含まれていないことが判明した。また、土壌由
来成分であるSi、K、Alなどの元素及び石英や長
石類などの鉱物が検出されたことから、本試料は
漆喰や鉛白ではなく、いわゆる白土とされる上塗
り材であると考えられる。

奈良時代を含め、古代に造営された寺院や宮殿
などの建築物には、壁体の上塗りとして白土が広
く使用されていたことが知られている。今回の分
析結果から、新薬師寺においても寺院を塗装する
素材として白土が用いられていたことが明らかにな
った。

鶴真美(奈良教育大学)

第4節 新薬師寺旧境内出土の金色薄片状遺物

08年度に新薬師寺旧境内A区PF整地土から出土した瓦に付着していた金色薄片状遺物の分析と検討を行った。およそ2.5×1.5mm程度の小さな薄片で、金箔状の遺物であったため蛍光X線分析による定性分析を行った。測定には奈良大学が所有するエネルギー分散型蛍光X線分析装置EDAX Japan EAGLE XXLを使用した。測定は大気雰囲気下で行った。測定の結果、明瞭なAu(金)のピークとやや強いS(硫黄)のピークが検出され、弱いMg、Al、Si、K、Ca、Ti、Feなど土壌成分のピークが検出された。定量分析は行っていないため正確な評価は困難であるが、Au(金)を主成分とする物質で構成されていると考えられる。よって、新薬師寺旧境内出土金色薄片状遺物は金箔であると考えられる。おそらく、仏像やその荘厳具、建物の装飾などに用いられた金箔の断片であろう。

青木智史(奈良教育大学)



第54図 金色薄片状遺物

第5節 新薬師寺旧境内出土の乾漆像の木屎漆片

破片のため図示しなかったが、雨落溝SD050と流路NR503から乾漆像の表面の破片が出土した。残存長さ3.1cm、厚さ1.5cmで、木屎漆の表面に黒漆が塗られる。波状の盛上がりがあり、衣の襞の部分である。他に表面に黒漆が塗られる木屎漆片の細片が2片、黒漆膜が2片検出された。

金原(奈良教育大学)



第55図 乾漆像表面破片(木屎漆片)

第6節 新薬師寺旧境内出土八角柱の墨線

09-1次D区SP502から出土した平面正八角形の柱根である。残存長0.75m、底面对辺長0.31m前後、正八角形の一辺の長さは平均0.13mで、ヒノキ材である。底面はヨキあるいは手斧による加工痕を残す。底面には円形中心部のコンパスの針跡と円形の墨線、また中央部に十字の墨線を残し、さらに一部八角形の辺部分の墨線を残す。面取りではなく、当初から八角柱として伐採されたものと考えられる¹⁾。

古代寺院で正八角柱の柱は、法隆寺東院夢殿(739)、奈良県五条市栄山寺八角堂(760年前後)にあり、いずれも八角平面の建物に限られるという。²⁾なおSP502に対応する柱はSP501で、正八角形の柱根がわずかに残存していたが、調査面積が狭く、どのような建物に復元できるかは、さらに周辺の調査を進めていく上で検討していく必要がある。金原(奈良教育大学)

1) 2) 箱崎和久「IV章どのような祈りの風景だったのか」『復元 幻の大寺院新薬師寺の謎に挑む』NHK出版 2011



第56図 SP502出土八角柱底面の墨線

第V章 総括

第1節 新薬師寺旧境内出土の軒瓦

今回出土した軒瓦は、軒丸瓦が51点、軒平瓦が70点で、中心伽藍域の調査にしては軒瓦の出土点数が少ない印象も受けるが、新薬師寺金堂とみられる大型基壇建物の所用瓦について一定の傾向が掴めたので、以下にまとめておく。

出土した軒瓦は、A. 大型基壇建物(金堂)創建期、B. 伽藍整備期、C. 伽藍補修期、D. 主要伽藍廃絶後の大きく四時期に区分できる。

A. 大型基壇建物(金堂)創建期

出土した軒瓦の多くは、雨落溝S D 050、南北溝S D 280、N R 503、堂舎倒壊後の掻き出しに伴う整地層から出土している。軒瓦の型式別出土割合は表5の通りで、このうち金堂創建期軒瓦と考えられるものとして、出土軒瓦で最も古式の興福寺式軒丸瓦6301Iが53% (20点)、同じく興福寺式軒平瓦6671Jが31% (15点)、また軒平瓦6663Aが2% (1点)あり、出土点数は少ないものの、興福寺式軒瓦が出土軒瓦の3割から5割以上を占める。またこれに組み合う丸瓦I類は61.7% (表4)、平瓦I類は63.6% (表3)で、出土丸・平瓦の実に6割以上を占めており、これらは胎土・焼成・色調も一致することから、同一瓦屋の製品とみて間違いない。したがって新薬師寺金堂創建期には、興福寺式軒丸瓦6301I-軒平瓦6671J、丸瓦I類と平瓦I類の組み合わせが主体的に用いられたと考えられる。この組み合わせが成立あるいは成立する可能性の高い遺跡は、現段階では新薬師寺と東大寺に限られるが、近年、新薬師寺に近い荒池瓦窯において、この興福寺式軒丸瓦6301I-軒平瓦6671Jを主体的に生産した窯跡の灰原が発見された¹⁾。

荒池瓦窯灰原出土の瓦は、上記新薬師寺出土軒瓦と同範関係にあるだけでなく、①軒丸瓦6301Iの丸瓦部門面広端側を片刃状に削る手法や、軒平瓦凸面の調整手法が一致すること、②軒平瓦6671Jの顎形態に段顎と曲線顎の2種が存在し、平瓦部は桶巻作りによること、③平瓦は粘土板桶

巻作りで、凸面の狭端側1/3から1/4程度を横ナデして縄目をスリ消すなどの特徴が一致しており、新薬師寺金堂所用瓦はこの荒池瓦窯で生産された可能性が極めて強いと言える。すでに指摘されているように東大寺出土品も荒池瓦窯で生産されたものであろう²⁾。

荒池瓦窯は、天平勝宝8年(756)の『東大寺山堺四至図』(第59図)の「山階寺東松林廿七町」南西隅に表記された「瓦屋」に相当すると考えられており³⁾、新薬師寺金堂から直線距離にしてわずか1kmの位置にある。すでに破壊された瓦窯も多いため供給先や操業時期は不明な点が多いが、東大寺前身寺院の金鐘寺比定地である丸山西遺跡採集軒瓦と同範の興福寺式軒瓦(6301B、6671B)や南都七代寺I式B1の鬼瓦なども出土しており⁴⁾、東大寺や興福寺以外にも複数の供給先をもつ瓦窯群と想定される。操業期間についても長期にわたるものであろう。新薬師寺への供給に際しては、奈良山丘陵における生産に比べて、運搬などの面で極めて有利な場所に立地しており、まさに光明皇后が聖武天皇病氣平癒のために急ピッチで造営を進めたとされる、七仏薬師金堂の創建瓦屋としてふさわしい。

ところで新薬師寺出土の軒平瓦6671Jの顎形態には、段顎と曲線顎の2種が存在することは述べたが、平城宮軒瓦編年では、曲線顎は第II期後半(729~744)に表れ、段顎と交替しながら、第III期(745~756)には段顎が見られなくなるとされており⁵⁾、この年代観を踏まえれば、出土した6671Jは曲線顎が主体であることから、第II期末から第III期前半(745~749)にかけての製品と想定される。なお軒平瓦6671Jの平瓦部がいずれも1枚作りに比べて古式の桶巻作りで作製されている点に注目すれば、第III期前半を大きく降るとは考えにくい。これと組む軒丸瓦6301Iも同時期であろう。なおIII期前半に属する軒瓦として他に軒平瓦6663Aが1点出土した。

さて新薬師寺の創建時期を伝える確かな記録は


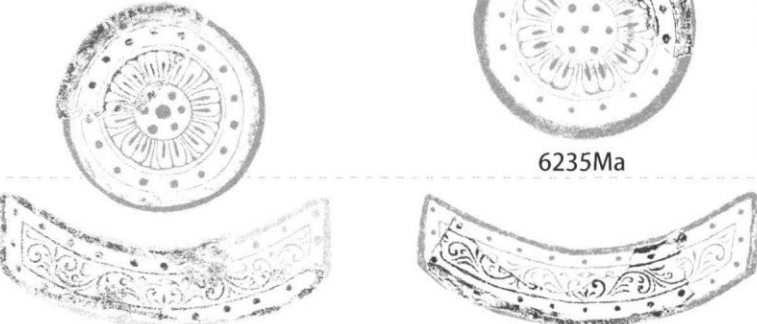

ないが、12世紀初頭に編纂された『東大寺要録』には、天平19年(747)に光明皇后が聖武天皇の病氣平癒を祈って、勅願により九間仏殿と七仏薬師像を造立したとあり、以後『続日本紀』や『正倉院文書』に新薬師寺の名が散見されるようになるため、天平19年頃に金堂は完成したとみられている。また天平勝宝3年(751)、病床に伏した聖武太上天皇のために、新薬師寺で賢僧による続命法が行われていることから、このころには堂・像ともに一応の完成をみたとされる。なお『東大寺山堺四至図』(第59図)には、南面した単層瓦葺の新薬師寺堂(七仏薬師金堂)が描かれており、絵画資料からみても金堂は天平勝宝8年(756)以前には完成していたと考えられる。上記文献・絵画資料からみた新薬師寺金堂の完成時期は、天平19年(747)頃から、天平勝宝3年(751)までの間に求められる可能性が高く、これは先述の金堂創建期所用軒瓦の製作時期とも概ね矛盾しない。

なお興福寺式軒丸瓦6301I-軒平瓦6671Jを生産した可能性が極めて強い荒池瓦窯群の瓦窯が、新薬師寺造営を契機に生産を開始したのか、あるいは東大寺のある堂舎の造営を契機に生産を開始したのかは現段階では不明であるが、東大寺出上6301Iには摩耗がほとんど見られない個体と、摩耗が著しく、製作技法上の退化傾向が見られる個体も存在するといいい、長期にわたり継続的に使用されたと考えられている⁶⁾、一方新薬師寺金堂地区出土品には、範傷が顕著なものや範が摩耗した段階のものは確認できず、初期の段階の製品が新薬師寺で使用されたと考えられる。現状で東大寺でこの組み合わせを主体的に使用した堂舎が確認できないのに対し、新薬師寺では丸・平瓦を含めて一括した組み合わせのもとに使用されていることからみれば、興福寺式軒丸瓦6301I-軒平瓦6671Jは、当初から新薬師寺金堂所用に製作された軒瓦であった可能性も考えられよう。これについては、今後新薬師寺出土品と東大寺出土品、荒池瓦窯出土品との製作技法を踏まえた詳細な比較検討を行った上で判断する必要がある。これについて今後の課題である。

B. 伽藍整備期

興福寺式軒丸瓦6301I-軒平瓦6671Jに続く軒丸瓦としては、東大寺式軒丸瓦6235G・6234Aa・6235Ma・6236E、型式不明の軒丸瓦SYM02があり、軒平瓦には東大寺式軒平瓦6732A・D・Fがある。内訳は軒丸瓦6235Gが13%(5点)、6236Eが16%(6点)、6234Aaが5%(2点)、6235Maが2%(1点)、SYM02が2%(1点)、軒平瓦は6732Fが51%(25点)、6732Aが2%(1点)、6732Dが4%(2点)である。出土点数は少ないものの、出土位置、胎土・焼成・色調、出土割合からみて、東大寺式軒丸瓦6235G-軒平瓦6732Fbが組み合わせる可能性が高い。これには丸瓦Ⅱ類が伴うが、平瓦については不明である。なお出土割合が16%に達する軒丸瓦6236Eは、外縁形態が第Ⅴ期以降に出現する直立縁Ⅱであることから、第Ⅳ期の伽藍整備期の軒瓦とは考えにくく、第Ⅴ期の伽藍補修期の軒瓦と考える。これについては後述する。軒丸瓦6234Ma・6234Aaは出土点数が少なく、現段階では組み合わせを想定し得る状況にないが、軒丸瓦6234Maを改範した6234Mbは、軒平瓦6732Faと組み合わせ、神護景雲元年(767)頃の創建とされる頭塔所用瓦である。また軒丸瓦6234Aは、東大寺僧房北辺の調査で6732D種と組み合わせることが判明しており(第Ⅳ期後半)、新薬師寺においても今後、軒瓦の出土点数が増えれば、あるいはこれらの組み合わせも成立するかもしれない。なお軒平瓦6732Aは曲線顎Ⅱで凸面に縄叩き目を残す平城宮系瓦工人の製作によるもので、第Ⅳ期前半に位置づけられる軒平瓦である。

さて伽藍整備期の東大寺式軒丸瓦6235G-軒平瓦6732Fのうち軒丸瓦6235Gは、丸瓦凹面先端部を片刃状に面取りしており、軒平瓦は凸面布目押圧技法で製作されることから、いずれも東大寺系瓦工人による製作と考えられる。現段階で軒丸瓦6235G-軒平瓦6732Fの組み合わせが成立するのは、新薬師寺と東大寺に限られる。軒平瓦6732Fは、Fa種(範傷進行第1~8段階)と改範後のFb種(範傷進行第9段階)に分類されており⁷⁾、今回出土したものはFa種に比べて

大型基壇建物（金堂） 創建期	第II—2期	 <p>金堂所用 6301 I - 6671 J</p>	《新薬師寺関連連略年表》 745（天平17年） ・747（天平19）年 新薬師寺と七仏薬師像を造立と伝える（『東大寺要録』） ・751（天平勝宝3）年 新薬師寺で続命法による設齋行道が修される。 ・756（天平勝宝8）年 七仏薬師金堂が描かれる『東大寺山堺四至図』成立	
	伽藍整備期	 <p>金堂所用 6235 G - 6732 Fb</p> <p>長期間使用？</p> <p>範割れ</p>	6235Ma 6732A 6234 Aa - 6732 D (推定)	757（天平宝字元年） ・762（天平宝字6）年 東大寺造営修理塔寺料千戸のうち百戸を新薬師寺の塔・仏殿・僧坊等の供養修造料に宛てる。 ・763（天平宝字7）年 この頃、新薬師寺の金堂、壇院、薬師悔過所、政所院、温室、造仏所の存在が記載される。
伽藍補修期	第IV期	 <p>6236 E SYM02 (新型式)</p> <p>SYH02 (新型式)</p>	6801 A 手彫り SYH01 (新型式)	770（宝亀元年） ・772（宝亀3）年 新薬師寺総供養 ・780（宝亀11）年 新薬師寺西塔焼失 ・781（宝亀12）年 新薬師寺修理
	平安時代初頭	平安時代前・中期	962（応和2）年 台風により金堂倒壊	

第57図 新薬師寺金堂地区の軒瓦変遷図

珠紋が一回り大きく、また唐草も太いことから Fb 種と考えられる。なお細片化した資料が多く、今回出土したもので確実に 6732Fa 種と判断できるものはなかったが、周辺の既往の調査等で Fa 種が数点出土している⁸⁾。

第 33 図の 6732Fb は、上外区界線から左脇区にかけて範割れが生じており、新薬師寺出土の 6732Fb の中でも最終段階の製品と考えられる。この段階のものは、当然ながら Fa 段階の頭塔、西大寺、東大寺西面大垣出土品には確認できず、Fb 段階の東大寺南辺、東大寺大仏殿西回廊、五領池東瓦窯出土品のものに近い⁹⁾。6732Fb は法華寺阿弥陀浄土院所用瓦を生産した五領池東瓦窯の焚口構築材に使用されており、阿弥陀浄土院に瓦が供給される天平宝字 4・5 年(760～761)以前に Fb に改範されたことが判明している。五領池東瓦窯及び東大寺出土品とは現物照合は行っていないが、拓本・写真照合では、五領池東瓦窯 1・2 号窯焚口出土品と東大寺出土品には第 33 図にみるような範割れは確認できず、新薬師寺の製品が最も範傷が進行した段階の可能性が高い。第Ⅲ期後半からⅣ期前半に位置づけられる。

ところで、天平宝字 6 年(762)には、東大寺造営修理塔寺料千戸のうち百戸が新薬師寺の塔・仏殿・僧房等の供養修造料に宛てられており、その 10 年後の宝亀 3 年(772)には新薬師寺総供養が行われている。すでに指摘されているように 6732F はこの天平宝字 6・7 年の修理に伴い使用された可能性が高いと言える¹⁰⁾。なお先述のように今回金堂地区で出土した 6732 型式は、ほぼ Fb 種に限られ、確実に Fa 種と判断できる製品は出土しなかった。これについては周辺の既往の調査でこれに先行する Fa 種が出土していることから、改範前後で軒瓦の供給堂舎が異なる可能性も考えられる。現在までのところ、金堂地区において 6732Fa が出土しない理由としては、金堂が第Ⅲ期前半頃に 6301I - 66671J の組み合わせを主体にすでに完成していたとみられるため、Ⅲ期後半に至るまで小規模な補修を行う程度で、Fa 段階の製品がほとんど使用されなかったことによるものと推測する。

C. 伽藍補修期

伽藍補修期に属する軒丸瓦としては、先述の軒丸瓦 6236E が 16% (6 点)、軒丸瓦 SYM01 が 8% (3 点) あり、軒平瓦には飛雲紋軒平瓦 6801A が 2% (1 点)、SYH01 が 2% (1 点)、SYH02 が 6% (3 点) ある。このうち唐招提寺、西隆寺出土例と同範の軒丸瓦 6236 E は、先述のように外縁形態が直立縁Ⅱで第Ⅴ期の製品と考えられる。また唐招提寺出土品に比べて範傷が進行していないことから¹¹⁾、唐招提寺供給前の段階の製品と考えられる。新形式軒丸瓦 SYM01 は、間弁を除く紋様構成が軒丸瓦 6316U に類似しており、6236E と同じく外縁形態は直立縁Ⅱであることから、第Ⅴ期から平安時代初頭にかけての製品と考える。軒平瓦 SYH01 は 6732 あるいは 6733 型式をモデルに手彫りで製作されたとみられる特異な軒平瓦で、6732Fb などの範型の破損に伴い、急速製作された軒平瓦であろう。第Ⅴ期から平安時代初頭の軒平瓦と推測する。SYH02 は下外区界線基部から派生する巻きの強い葺手状の唐草を左右に配した特異な軒平瓦で、類例が確認できないが、顎形態が曲線顎で外区珠紋が小振りである点を後出的要素と捉え、第Ⅴ期から平安時代初頭の製品と推察する。

各型式の軒瓦はいずれも出土点数が数点にとどまり、組み合わせ関係を想定し得る状況にないが、軒丸瓦 6236E・SYM01、軒平瓦 SYH02 は周辺の既往の調査でも出土・採集されており、各堂舎で広く使用された軒瓦の可能性がある。

さて、先述のように新薬師寺の総供養は宝亀 3 年(772)に行われたとみられるが、この総供養からわずか 8 年後の宝亀 11 年(780)に、落雷により西塔が焼失したとされ(『続日本紀』)、「東大寺要録」では、この際の雷火で新薬師寺の金堂・講堂・西塔も焼亡したと言う。しかしながら今回の金堂地区の調査では、火災の痕跡を示す焼土層や二次的に被熱を受けた瓦・土器は出土しておらず、また先述の理化学的分析でも同様の結果を得ていることから、少なくとも金堂が焼けたとする「東大寺要録」の記載内容と今回の調査結果とは符合しない。この点は従来からの指摘通り¹²⁾、

東大寺要録の編者が嵯峨寺の金堂・講堂焼亡の記事に引かれて、新薬師寺の金堂・講堂も焼けたと誤認して記載したと考えるのが妥当であろう。したがって、金堂は宝亀11年の落雷の際には罹災しておらず、金堂地区出土の第V期の軒瓦がこの際の修理瓦かどうか断定できない。ただし、この罹災後翌年の宝亀12年には、天平宝字6年に施入され、完成前に東大寺に返された東大寺塔寺料封一千戸のうちの百戸を再び新薬師寺修理料として宛てることを許されており¹³⁾、これに伴い塔以外の各堂舎の修理も行われた可能性は十分考えられよう。広範囲に出土する軒丸瓦6236E・SYM01、軒平瓦SYH02がこれに相当する可能性は高いと言える。

なおこの時期、壇院（壇所）とみられる現新薬師寺本堂も創建されたとみられ、その所用軒瓦についても興味があるが、宝亀11年の西塔補修瓦を含めて、その決定は今後の調査を待って行いたい。これ以降、応和2年（962）の金堂倒壊に至るまで、まとまった型式の軒瓦は出土しないことから、金堂に関しては大規模な補修は行われなかったと考えられる。

D. 主要伽藍廃絶後

大風による金堂倒壊の翌年、応和3年（963）三月二十五日条（『日本紀略』）に、新薬師寺が聖武天皇の御願寺であるとの決裁に基づき、参議橘好古が勅使となり、聖武天皇陵である佐保山南陵（第2図）に同寺修理の宣命が奏されたという。これは文献資料にみる金堂倒壊後の新薬師寺修理に関する記載であるが、今回の調査では金堂倒壊後に基壇外装を補修した跡は確認できず、また再建瓦に相当する時期の瓦や土器も出土していないことから、金堂は再建されなかったとみられる。この点に関してすでに西川新次氏は、金堂が再建されなかった可能性を指摘するとともに、「安置仏は塑像または乾漆造だったのだから、その殆どは堂と共に修復も不可能なくらい損壊してしまったのであろう」と指摘している¹⁴⁾。今回雨落溝SD050・NR503から出土した乾漆像の衣文とみられる木屎漆片（第55図）は、まさに堂内安置仏の1つが乾漆像であったことを考古学的に

裏付けるものであり、併せて安置仏が修理不能な状況であったことを示すものと言える。なお塑像は素材が粘土のため雨水で溶けてしまい、火災で被熱を受けない限り基本的に地中に残らない遺物のため、今回は出土しなかった可能性が高い。

金堂倒壊後の軒瓦としては、平安時代後期から鎌倉時代前期の宝相華唐草紋軒平瓦が1点、連珠紋軒平瓦が1点あり、また詳細な時期は不明だが巴紋軒丸瓦とみられるものが2点ある。このうち宝相華唐草紋軒平瓦は、大治五年（1130）に再建され、治承四年（1180）の南都焼打ちで焼亡した興福寺大湯屋、春日東西塔出土品と同紋の軒平瓦があり、概ね大治五年から治承焼亡頃までの年代が与えられる。

平安時代後期から鎌倉時代前期にかけては、現本堂を中心とした伽藍の修理・再整備が活発に行われた時期にあたり、調査地内でもこの時期の遺構・遺物が急激に増えることから、旧境内地を含めた伽藍の再整備が行われた可能性が高い。この後の鎌倉時代中期には、周辺が興福寺支配のいわゆる南都七郷の新薬師寺郷に含まれることが知られており、その前段階に興福寺で出土量の多い南都系の宝相華唐草紋軒平瓦が出土する点は興味深い。その背景については、軒瓦の同範関係の分析を含めて今後の課題としたい。（鳥軒）

第2節 大型基壇建物（金堂）の構造と調査のまとめ

1. 大型基壇建物の構造と復元

大型基壇建物 S B 001 の構造は、基壇建物の東側と西側の様相からほぼ明らかになった。通常、階段の端は身舎の端の南北の柱筋に一致することから、南面階段の幅は東西約 52 m に復元される。基壇西側で検出した礎石据付掘形の柱間は芯々で、桁行が 14 ～ 15 尺（4.2 ～ 4.5 m）前後あり、身舎は東西 11 間に復元できる。また、廂の柱列は東西に 1 間ずつ出るため、建物は桁行 13 間で幅約 60 m（200 尺）に復元できる。さらに軒が 1 間分、15 尺（4.5 m）出て、軒まで入れると幅は約 68 m になり、基壇の幅もほぼ同じ約 68 m になる。梁行は 13 尺（3.9 m）か 14 尺（4.2 m）になり、基壇西側の礎石据付掘形で南北 4 間分確認できるが、北西端の礎石据付掘形が北西隅の側柱の礎石据付掘形になるかどうかかわからないため、身舎の梁行が 2 間か 3 間かで、廂を含めた建物の梁行が 4 間か 5 間かわってくる。

以上から大型基壇建物 S B 001（第 58 図）は、基壇幅約 68 m に復元でき、身舎は桁行 11 間×梁行 2 間あるいは 3 間で、身舎四周に廂がつく、桁行 13 間（約 60 m）×梁行 4 間あるいは 5 間の礎石建物であったと推定できる。基壇外装は最も格式の高い壇正積基壇（二上山産凝灰岩切石）で、高さは 2 m 程に達し、基壇南辺に推定幅約 52 m、張出幅 1.8 m（6 尺）の階段が取付く特異な構造である。

この極めて巨大な大型基壇建物 S B 001 は、総国分寺東大寺の金堂である創建期大仏殿を除けば、平城宮の大極殿より大きく、異例の大きさを誇る建物規模となり、現存する江戸元禄期再建の大仏殿とほぼ同規模となる。この基壇規模と基壇高から、大型基壇建物は新薬師寺創建期の金堂と考えられ、新薬師寺旧境内にあったと記録される七仏薬師金堂にあたると思われる。

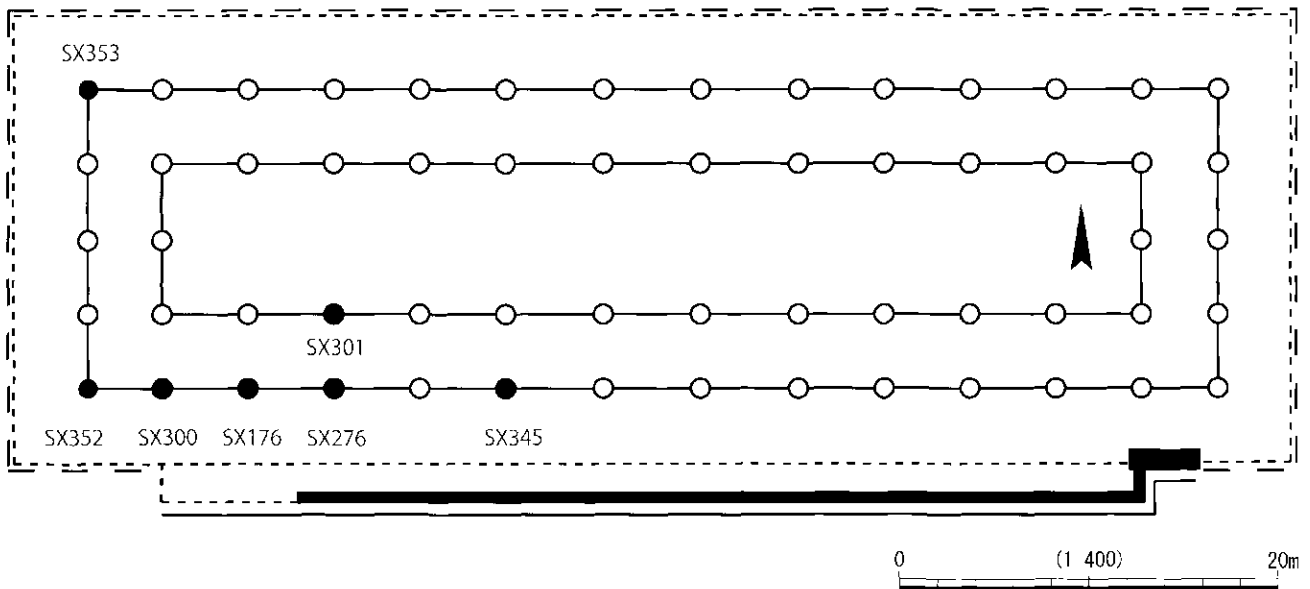
新薬師寺七仏薬師金堂は、天平勝宝 8 年（756）の『東大寺山堺四至図』（第 59 図）の下（南）端に近いところの網索堂（後に法華堂、三月堂と

も呼ばれる）の真南の位置に単層 7 間で「新薬師寺堂」として描かれている。本調査で検出された大型基壇建物は三月堂のほぼ真南に位置する。しかし、建物規模は必ずしも記録と一致しない。この絵図には創建期の大仏殿が 2 層 3 間で描かれているが、大仏殿の実際の柱間は 11 間あり、柱間 3 間は大仏とその脇侍の三体の主要仏像を示していると考えられる。「新薬師寺堂」の 7 間も 7 体の薬師如来像を示すと考えられ、必ずしも柱間が 7 間の建物であったわけではないとみなされる。また、『東大寺要録』には九間仏殿とあるが、たとえば建物の大きさではなく扉の間数や須弥壇の大きさを表していると解釈すれば、辻褄が合わないわけではない。なお雨落溝 S D 050 から出上った隅木蓋瓦の存在から、金堂は寄棟造あるいは人母屋造であったと考えられ、『東大寺山堺四至図』に単層で描かれている点からすれば、寄棟造であった可能性が強い。

建物や仏像、彩色の復元は、清水・箱崎・山岸・大山・金原（2011）によって行われており、特に仏像は 11 間の須弥壇の中央の 7 間に薬師如来像と 2 体の脇侍菩薩がそれぞれ配置され、東西外側の 1 間には十二神将像が 6 体ずつ配され、さらにその外側の東西端の 1 間には四天王が配されていたと推定されている。正倉院文書の記事から、複数の脇侍菩薩の製作や仏像の肉身に金箔が用いられたことが復元されており、今回わずかであるが、乾漆像（木屎漆）片や金箔片が出土しており、これを裏付ける。

2. 大型基壇建物の創建時期と軒瓦

大型基壇建物（金堂）の創建期軒瓦は、平城宮軒瓦編年第Ⅱ期末から第Ⅲ期前半の興福寺式軒瓦 63011 - 軒平瓦 66711 の組み合わせを用いており、天平 19 年（747）創建とされる文献資料にみる新薬師寺創建時期とも概ね矛盾しない。この金堂創建期軒瓦は、胎土・焼成・色調、製作技法などから、近隣の荒池瓦窯で生産された可能性が極めて強い。創建期以降ほぼ一貫して造東大寺司の造瓦所から軒瓦の供給を受けており、東大寺式軒瓦以外の型式の軒瓦は非常に少ないことから、造東大寺司管理下のもとに新薬師寺の造営が進め



第58図 大型基壇建物（金堂）推定復元図

らたことを裏付けるものと言えよう。

なお、応和2年（962）の台風による金堂倒壊以降の軒瓦は、平安時代後期から鎌倉時代前期のものが出土するに過ぎず、倒壊後に基壇外装を補修した跡も確認できないことから、倒壊後に金堂は再建されなかったとみられる。

3. 新薬師寺創建期の伽藍配置について

大型基壇建物 SB001 の南側 20 m には、大型基壇建物に併行する古代の東西溝 S D 200 が走り、一応の区画を有する。この溝から南に向かって南北溝 S D 280 が約 30 m 続く。N R 503 や N R 504 は応和 2 年（962）の大風による伽藍倒壊時の一次的な流路である可能性がある。その南側、大型基壇建物から 60 m 南には、東西に並ぶ八角形の柱根をもつ掘立柱 S B 505 を検出している。またその南側では東西方向の溝を数条検出したが、古代に遡る遺構はなく、大型基壇建物の南側 160 m までは、基壇建物は認められない。このため現段階では大型基壇建物の南側には回廊や中門に相当する遺構は確認できない。この状況は、『東大寺山堺四至図』（第 59 図）の新薬師寺堂周囲に回廊等が描かれていない状況と一応一致する。『正倉院文書』と『東大寺要録』からは、金堂、壇院（壇所）、薬師悔過所、政所院、温室、造仏所（造丈六像所）、西塔の存在が伺われるが、金堂とみられる大型基壇建物と壇院の可能性があ

る現新薬師寺本堂以外は、創建期の堂舎に関して具体的な位置や配置は不明である。ただし今回、金堂と考えられる大型基壇建物の検出によって、中心伽藍の中軸線が明らかになったことは、今後の伽藍配置を解明する上で非常に大きな成果と言えよう。

新薬師寺の寺域は遺跡地図等に復元されているが、これは『東大寺山堺四至図』に描かれる絹索堂から真南に軸線を延ばし、現在の新薬師寺の伽藍の東端を東縁として、西側に反転した線を西縁として引かれたもので、東西幅三町（約 330 m）になる。北側の現存する道路を北端とし、南に四町（約 440 m）分とって引かれている。本大学構内の北西に位置する古墳塚古墳を 2003 年度に調査した際、古墳の東側が南北方向に段状に切られていることが判明し、段の下から奈良時代の瓦が比較的多く出土し、「度このラインが西に一町の地点にあたることから、寺域の西辺がここまで伸び四町四方になる可能性が考えられる。

4・遺構の変遷（古代～近代）

今回の調査で明らかとなった遺構の概要を年代ごとに述べ、当該地の土地利用についてまとめておく。まず 08 年度調査地北西部において円筒埴輪片が採集され、また新薬師寺創建期整地土内から T K 217 段階の須恵器杯が出土した。これらは古墳時代後期に至る年代を示しており、構内北

西部に位置する古墳時代中期の吉備塚古墳とともに、この地の土地利用の嚆矢として、古墳が築かれたものと推測される。

次に今回の調査で主体を占める新薬師寺の遺構は「東大寺山塚四至図」に描かれた「新薬師寺堂」とみられる8世紀中頃の大型基壇建物（金堂）とそれに伴う長大な階段及び雨落溝 S D 050、また大型基壇南 20 m に位置し大型基壇建物に併走する東西溝 S D 200、それと交わる南北溝 S D 280 が挙げられる。これらは出土土器から10世紀中頃に廃絶したことが明らかとなった。この廃絶時期は、文献資料にみる応和2年（962）の台風による金堂倒壊の時期に一致し、また第IV章の熱ルミネッセンス年代測定結果においても同様の結果を得ている。なお新薬師寺造営の際に、先に触れた古墳が削平を受けたと思われる。

10世紀中頃の主要伽藍廃絶後は13世紀前半の掘立柱建物 S B 002・003 と土坑 S K 177 がみつかり、倒壊後の片付けに伴う整地や大型基壇建物の基壇外装の抜取りもこの時期と思われる。12世紀後半から13世紀前半にかけては、現新薬師寺本堂周辺の再整備が活発に行なわれた時期にあたり、この遺構もそれに関連する可能性がある。このほか15世紀代の土坑が1基みつかり、これ以降は居住域に関わる遺構はみつかりおらず、詳細な時期は不明だが、15世紀以降に耕地化が進むようである。この後、明治42年に現奈良教育大学構内が陸軍歩兵第53聯隊の駐屯地となり、この際に耕作地を大規模に造成・盛上して現在のように周辺が平坦地化したようである。さらに戦後、米軍のキャンプ地となり、昭和33年に奈良学芸大学（現奈良教育大学）が当地に移転して現在に至る。

5. 遺構の保存と調査の課題

遺構の保存としては、大型基壇建物を含む08年度調査区の約1800m²を2011年3月に遺構保存地として整備した。埋め戻した遺構位置の上部に芝を貼り、基壇本体の延石列と南面階段延石列、雨落溝および礎石据付掘形を碎石で表示し、保存地を側溝で区切るとともに表示板を設置した。なお遺構保存地は、附属小学校および特別支援学級

校舎に隣接するため、一般公開はしていない。

調査の課題としては、大型基壇建物の北端が未だ不明であり、詳細な規模を考える上では、調査区北側の解明が必須であり、今後の調査に期待したい。また東西溝 S D 200 が大型基壇建物とどのような関係になるのかその走向を把握する必要がある。大型基壇建物以外の伽藍配置は、壇所（壇院）の可能性のある現新薬師寺本堂が創建期の位置を保っていると思われるが、他の創建期建物の配置は全くわかっておらず、寺域も推定の域を出ない。今後の調査による解明が待たれる。

（金原・西村・鳥軒）

《註》

- 1) 渡辺和仁「名勝奈良公園・荒池瓦窯跡の発掘調査成果と出土品」『第12回シンポジウム、8世紀の瓦づくり―大官大寺式・興福寺式・湯島窯跡（新瓦の展開）発表要旨』奈良文化財研究所 2012
- 2) 1) に同じ。
- 3) 藪中五百樹「興福寺と荒池瓦窯の瓦」『MUSEUM』593号 東京国立博物館 2004
奥村茂樹「造東大寺造瓦所と瓦屋」『MUSEUM』593号 東京国立博物館 2004
- 4) 1) に同じ。
- 5) 奈良国立文化財研究所「平城宮発掘調査報告XIII」1991
- 6) 平松良雄「東大寺境内の63011・66711の出土傾向について―東大寺成立過程の研究―（平成10年度・平成11年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））研究成果報告書）2001
- 7) 奈良国立文化財研究所「発掘調査報告書」奈良国立文化財研究所学報 第62冊 2001
- 8) 森郁夫「新薬師寺の瓦」『古代研究』22（財）元興寺文化財研究所 1981
- 9) 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター「五箇地区瓦窯跡群、京都府発掘調査概報」第79冊 1997
- 10) 奈良国立文化財研究所「平城宮発掘調査報告XIII」1991
- 11) 棚田提督出土資料との対比・写真照合による。
- 12) 西川新次「新薬師寺」『大和古寺大観 第四巻』1977
- 13) 12) に同じ。
- 14) 12) に同じ。

《参考文献》

- ・NHK「復元&の大寺院」プロジェクト「復元 幻の大寺院―新薬師寺の謎に挑む」NHK出版 2011
- ・西川新次「新薬師寺の歴史」『日本彫刻史論集』岩波書店 1977
- ・西川新次「新薬師寺」『大和古寺大観 第四巻』1977
- ・吉田貞司「東大寺丸山西遺跡の軒瓦について」『南都仏教』第78号 南都仏教研究会 2000
- ・窪田哲郎「東大寺の古瓦―東大寺丸山西遺跡考―」『南都仏教』第78号 南都仏教研究会 2000



第59図 東大寺山堺四至図(模写本)

(奈良女子大学所蔵資料電子画像集より転載・加筆)

写真図版



1 08年度調査区 遠景（画面奥に東大寺大仏殿 南から）



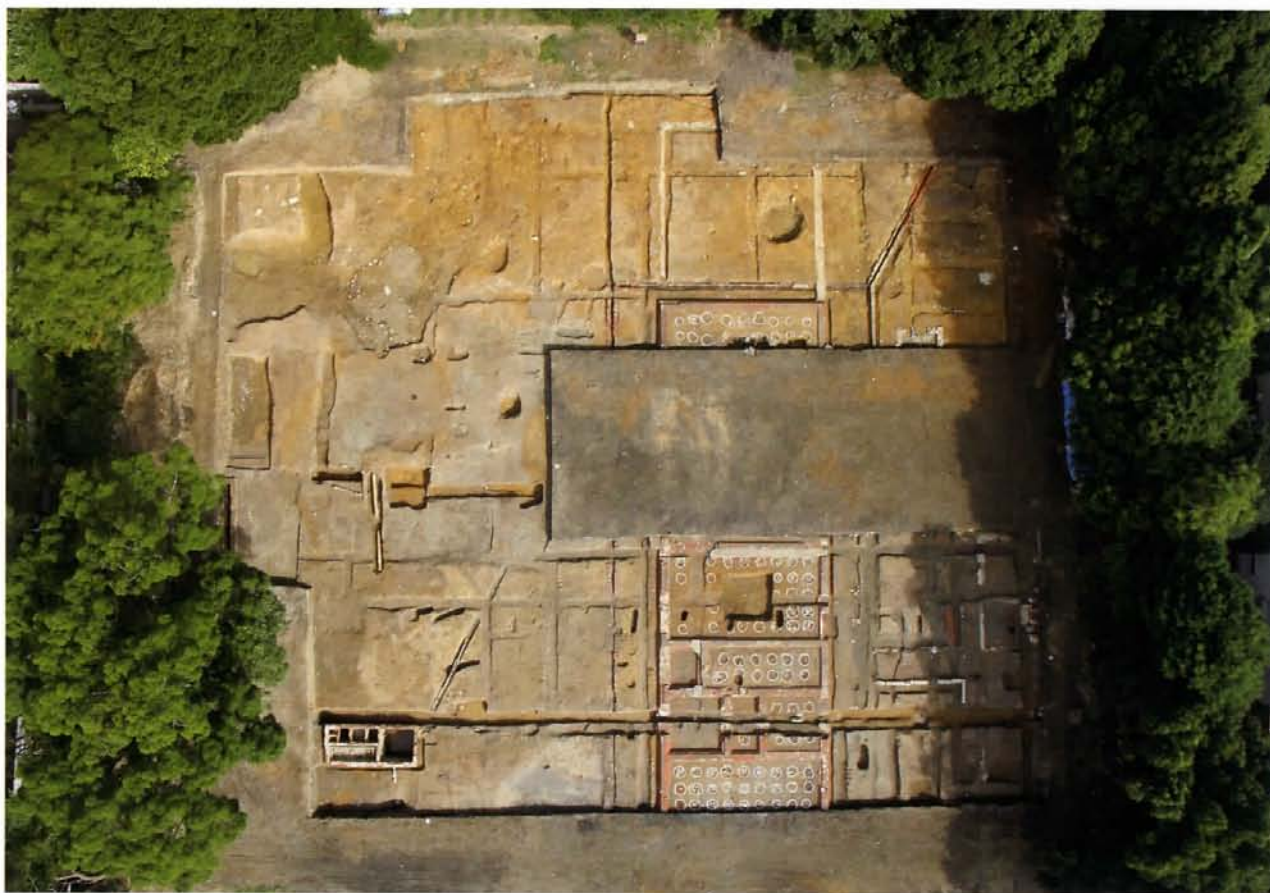
2 08年度調査区 全景（真上から）



1 08年度調査区 遠景（南西から）



2 08年度調査区 遠景（東から）



1 08年度調査区 第1面全景（真上から）



2 08年度調査区 第3面全景（真上から）



1 08年度調査区 全景（南から）



2 08 A区 基壇建物S B 001 全景（南西から）



1 基壇建物S B 001 (南東から)



2 基壇建物S B 001 南面階段取付部 (南から)



1 基壇建物S B 001 南面階段取付部 (東から)



2 基壇延石・地覆石列S X 011 (西から)



3 基壇建物S B 001 南面階段取付部 (南から)



4 基壇延石・地覆石列S X 011 (南から)



1 南面階段延石列S X 010 (西から)



2 南面階段延石列S X 010 (東から)



3 南面階段取付部 (南から)



4 南面階段築成土 (西から)



5 南面階段南東隅延石 (東から)



6 基壇地覆石背面の加工 (北から)



7 基壇地覆石背面の工具痕 (北西から)



1 雨落溝S D 050 遺物出土状況 (東から)



2 雨落溝S D 050 遺物出土状況 (南東から)



3 南面階段築成土・延石裏込土 (北西から)



4 雨落溝S D 050・南面階段延石列 (東から)



1 基壇西半部の礎石据付掘形（北東から）



2 基壇西半部の礎石据付掘形（西から）



3 礎石据付掘形S X 300 壺掘地業（北東から）



4 礎石据付掘形S X 353 壺掘地業（南西から）



1 東西溝 S D 200 遺物出土状況 (南から)



2 東西溝 S D 200 遺物出土状況 (東から)



3 東西溝 S D 200 断面 (西から)



4 東西溝 S D 200 断面 (東から)



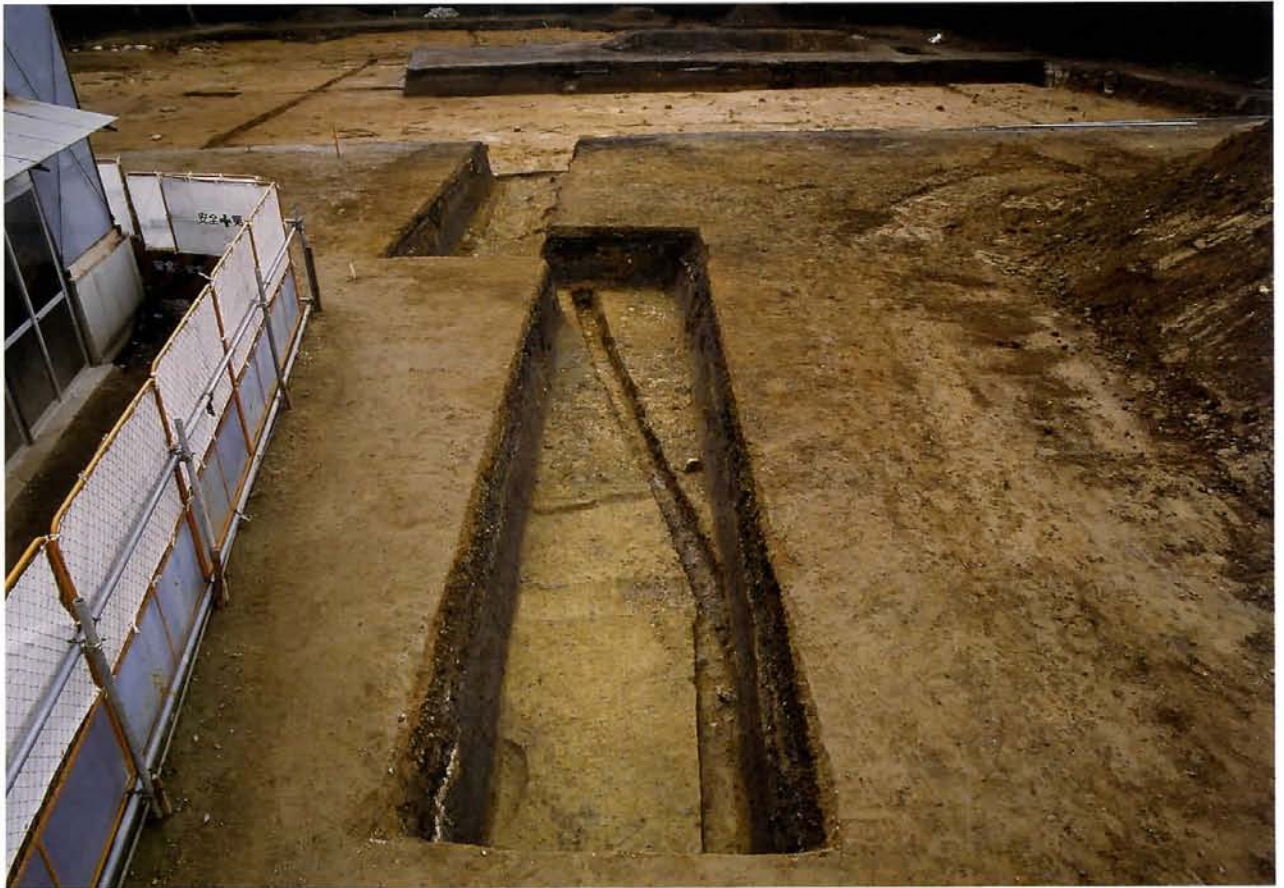
1 東西溝SD 200 完掘状況 (西から)



2 08 A区 南壁土層 (北東から)



3 08 A区 南壁土層 (北西から)



1 08 F区 全景 (南から)



2 08 F区 南北溝SD 280 遺物出土状況 (北から)



3 08 F区 南北溝SD 280 遺物出土状況 (北西から)



4 08 F区 南北溝SD 280 遺物出土状況 (北から)



1 掘立柱建物S B 002・003 (南から)



2 掘立柱建物S B 002 S P 210 断面 (東から)



3 掘立柱建物S B 002 S P 204 断面 (東から)



4 瓦溜S X 256 (北東から)



5 S P 245 出土軒平瓦 (南から)



1 08 A区 第1面全景 (南西から)



2 08 A区 将校集会所レンガ積建物基礎 (東から)



3 08 A区 レンガ積地下通信ケーブル坑 (南東から)



4 08 A区 将校集会所レンガ積暗渠排水溝 (北東から)



5 08 A区 戦後米軍接収時トイレ浄化槽施設 (南から)



1 09-1 次C区 NR 503 遺物出土状況 (南西から)



2 09-1 次C区 SD 280・NR 503 遺物出土 (北から)



3 09-1 次C区 NR 503 銭貨出土状況 (南東から)



4 09-1 次D区 NR 504 奈良三彩出土状況 (西から)



1 09-1 次D区 全景 (東から)



2 09-1 次D区 SP 502 柱根出土状況 (西から)



3 09-1 次D区 SP 502 柱根出土状況 (南から)



4 09-1 次D区 SP 501 柱根出土状況 (南から)



1 09- 2次E区 全景 (南から)



2 09-1 次E区 断面 (南西から)



3 09- 2次F区 断面 (南から)



4 09- 2次B区 全景 (西から)



5 09- 2次D区 SK 530 遺物出土状況 (北から)



6 09- 2次D区 SK 530 遺物出土状況 (南から)



1 11-B区 全景 (南から)



2 11-C区 SP 775 断面 (南東から)



3 11-B区 井戸SE 773 断面 (西から)



4 11-B区 井戸SE 773 遺物出土状況 (南から)



1 (6301I)



2 (6301I)



3 (6235G)



4 (6235M)



5 (6234A)



6 (6236E)



7(SYM01)



154(6236E)



10-1(6671J)



9(6671J)



11(6671J)



10-2(6671J)



12(6732A)



12 (凸面の縄タタキ目)



13(6732D)



14(6732D)



15(6732Fb)



17 (6732Fb 凸面の朱線)



16(6732Fb)



21(6663 型式)



63(6732Fb)



22(6801A)



18(SYH01)



20(SYH02)



19(SYH02)



23(連珠紋)



24(宝相華唐草)



15 (6732 F b 凸面)



15 (同凹面)





31



32



36



34



33



35



45



47



48



46



39



155



41



142(神功開寶)



42



43



143(隆平永寶)



145



146



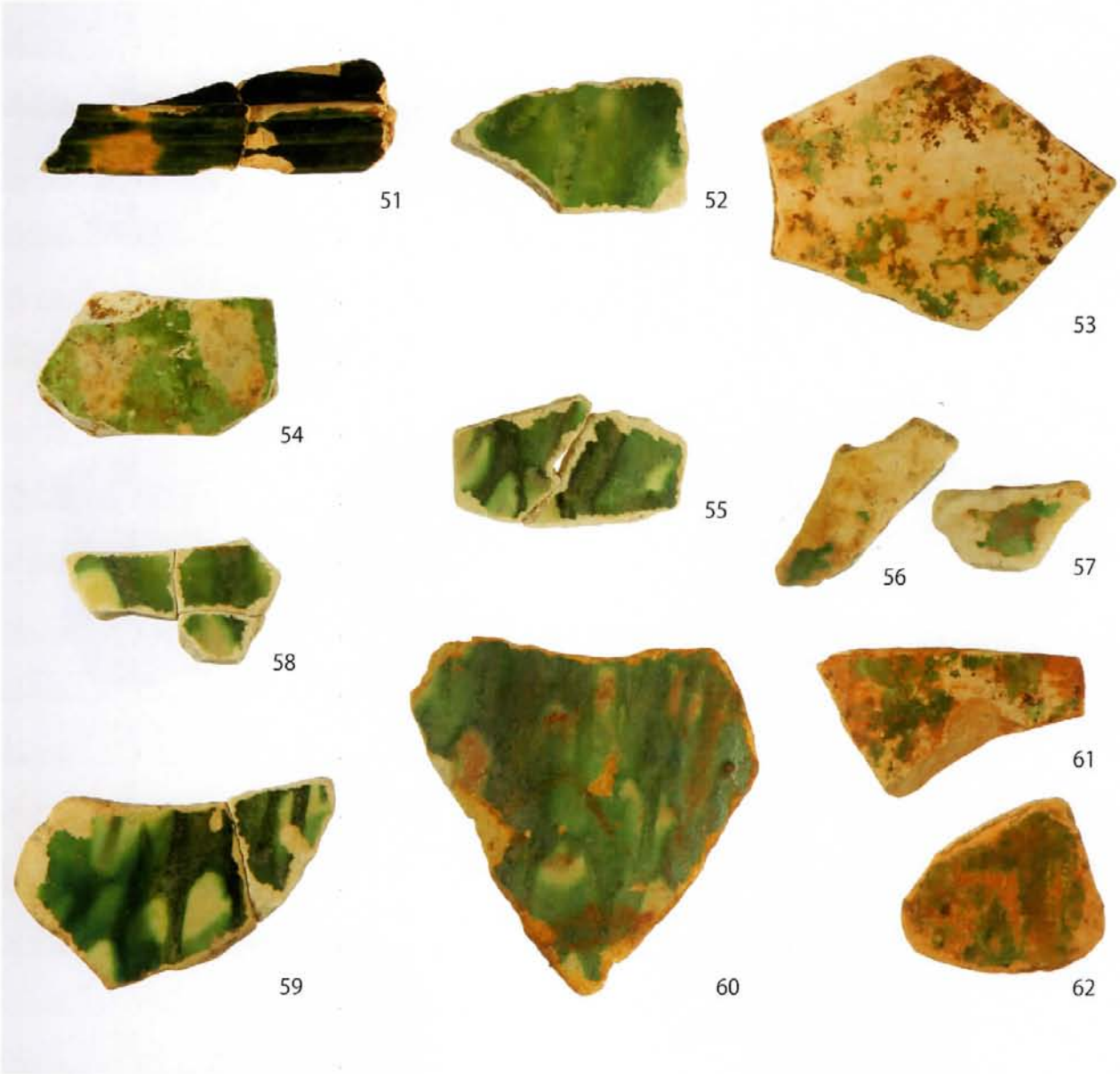
144



須恵器瓶子・円面碗（奈良時代～平安時代）



井戸SE 773 出土土器（鎌倉時代）



施釉陶器① (奈良三彩 奈良時代)



施釉陶器② (緑釉陶器・灰釉陶器 平安時代)



67



64



65



141



69



63



73

雨落溝S D 050 出土土器



105



106

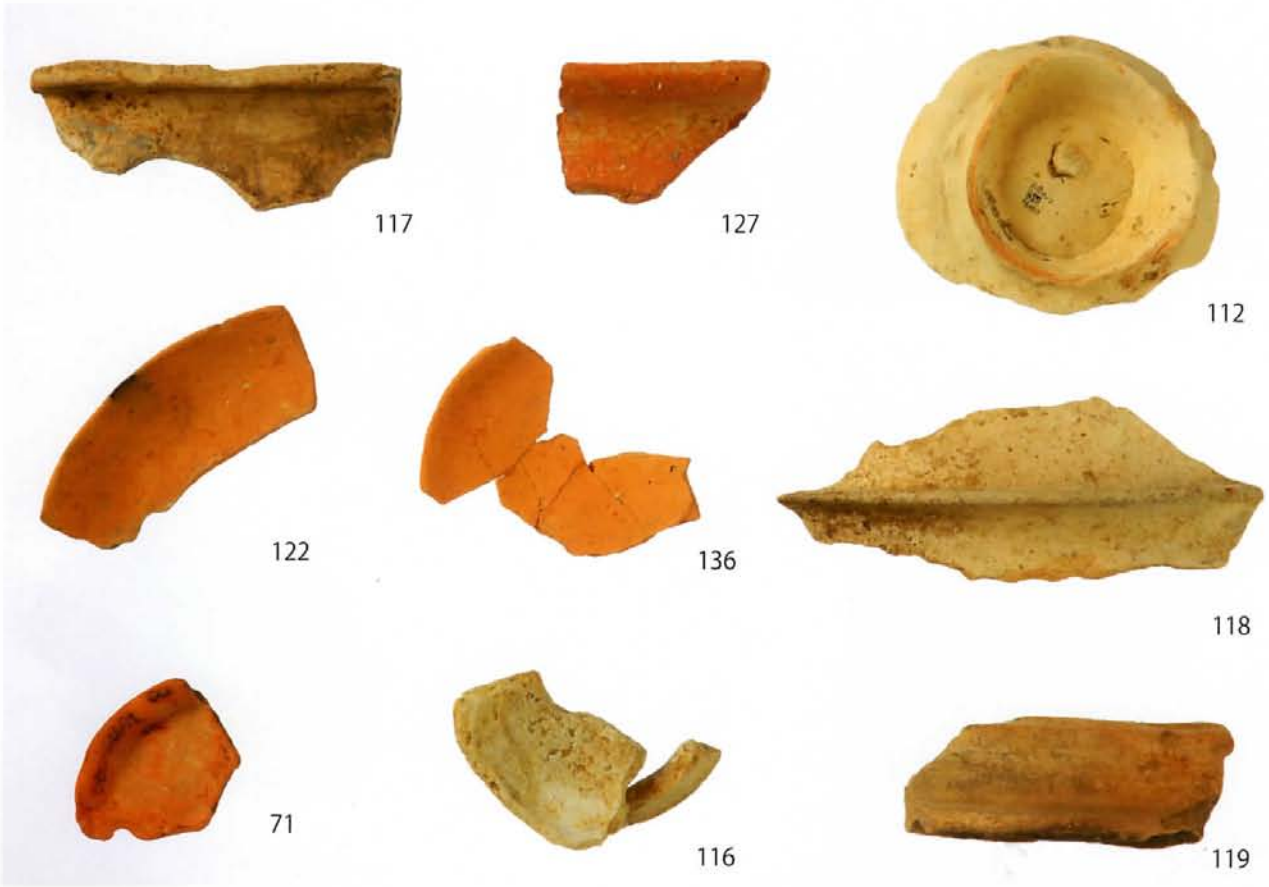


107

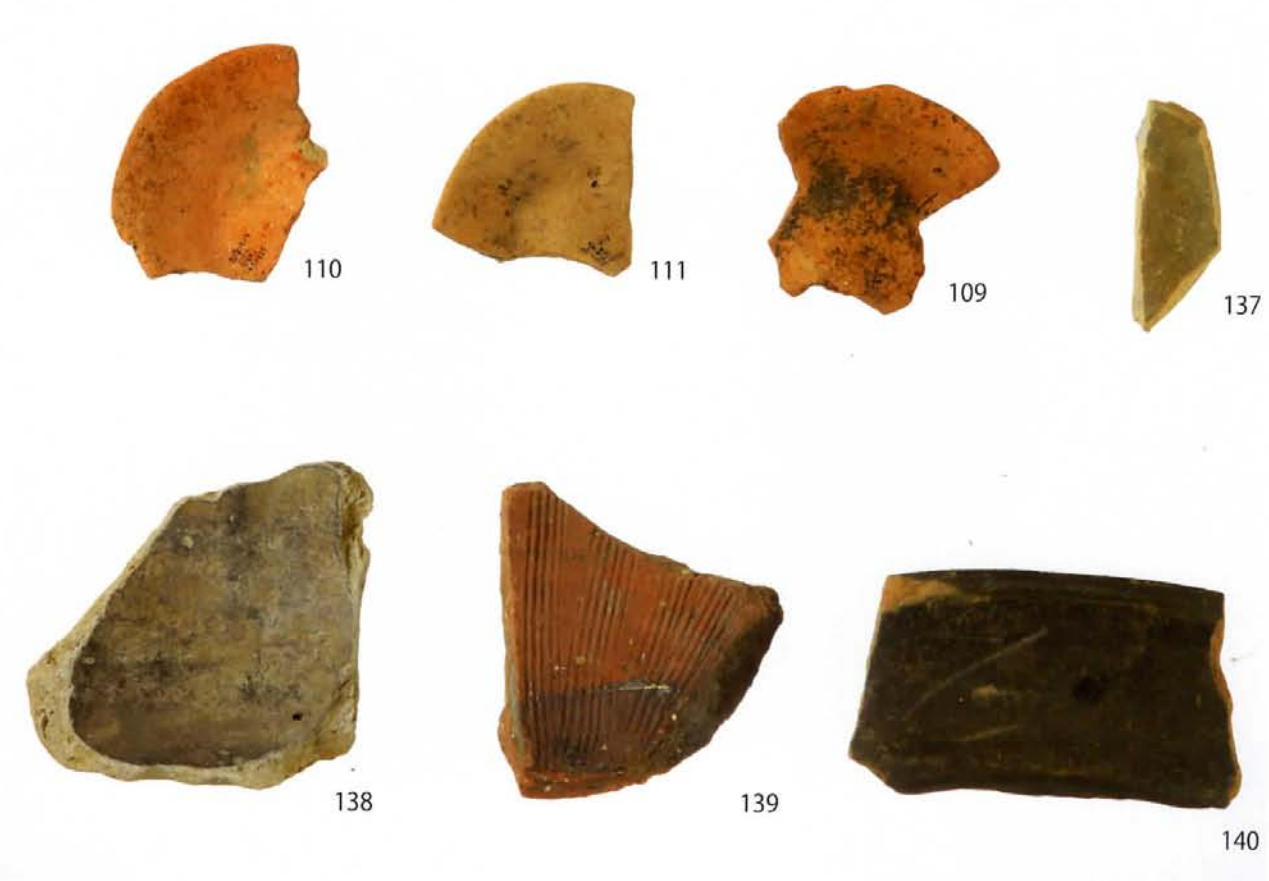


108

土坑S X 177 出土土器



出土土器①



出土土器②



149



148



147



152



151



150

金属製品②・石製品



153

S P 502 出土八角柱

報 告 書 抄 録

ふりがな	しんやくしじきゅうけいだい							
書 名	新薬師寺旧境内							
副 書 名	奈良教育大学構内遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	金原正明・青木智史・鶴 真美・島軒 満・西村匡広							
編集機関	国立大学法人 奈良教育大学							
所 在 地	〒630-8528 奈良市高畑町 TEL 0742-27-9118 FAX 0742-27-9144							
発行年月日	西暦2012年(平成24年)3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	調査面積 m ²	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
しんやくしじきゅうけいだい 新薬師寺旧境内 (2008年度)	ならしたかばたけちよう もとやくし・たかぎし・なかいで 奈良市高畑町 本薬師・高岸・中井出	29201	458	34° 40' 31"	135° 50' 40"	20080828 ～ 20081128	1983.5	記録保存 調査
しんやくしじきゅうけいだい 新薬師寺旧境内 (2009年度第1次)	ならしたかばたけちよう もとやくし・たかぎし・なかいで 奈良市高畑町 本薬師・高岸・中井出	29201	458	34° 40' 30"	135° 50' 40"	20090601 ～ 20090806	185	記録保存 調査
しんやくしじきゅうけいだい 新薬師寺旧境内 (2009年度第2次)	ならしたかばたけちよう もとやくし・なかいで 奈良市高畑町 本薬師中井出	29201	458	34° 40' 31"	135° 50' 40"	20100215 ～ 20100225	59	記録保存 調査
しんやくしじきゅうけいだい 新薬師寺旧境内 (2010年)	ならしたかばたけちよう もとやくし・たかぎし・きびづか 奈良市高畑町 本薬師・高岸・吉備塚	29201	458	34° 40' 28"	135° 50' 40"	20100804 ～ 20100828	82	記録保存 調査
しんやくしじきゅうけいだい 新薬師寺旧境内 (2011年)	ならしたかばたけちようもとやくし 奈良市高畑町本薬師	29201	458	34° 40' 31"	135° 50' 40"	20110112 ～ 20110205	86	記録保存 調査
所収遺跡名	種 別	主な時期		主な遺構		主な遺物		特記事項
新薬師寺旧境内	寺院跡 集落 田畠 その他	奈良時代中期 平安時代 鎌倉時代前期 近代		大型基壇建物 溝 掘立柱建物 土坑 自然流路 レンガ積建物基礎		軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、 平瓦、鬼瓦、埴、 土師器、須恵器、 奈良三彩、緑釉陶器、 灰釉陶器、瓦器、 瓦質土器、陶磁器、銭貨、 建築部材、木屎漆片、 金属製品、石製品		新薬師寺金堂 に相当する大 型基壇建物を 検出
要 約	<p>今回の新薬師寺旧境内の発掘調査で、はじめて奈良時代創建当初の主要堂舎（大型基壇建物）を検出した。その規模から金堂に相当する可能性が高いと考えられる。また同時期と考える東西溝や南北溝、自然流路の跡などを検出した。大型基壇建物は前例のない規模を有するもので、南面にこれも前例のない長大な階段を有することが判明した。廃絶時期は、記録に残る平安時代の台風による倒壊の時期と一致することが判明した。このことは考古学的な成果が文献記録を裏付けたということにおいても意義深い。またこの年代については自然科学分析結果とも一致する。主要伽藍廃絶後の土地利用としては、文献記録にある鎌倉時代に行なわれた補修工事の時期と一致する遺構も検出された。その後、室町時代以降に耕地化し、明治期に入り陸軍奈良聯隊の駐屯地として大きく土地の改変がなされたことがわかった。今回の調査では新薬師寺の伽藍配置を考える上で貴重な資料を得ることができ、今後は大型基壇建物の規模ならびに構造の解明・活用を含めた保存整備事業なども推進していく必要があると考える。</p>							

平成 24 年 (2012 年) 3 月 30 日 発行

新薬師寺旧境内

奈良教育大学構内遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書

発行 2012 年 3 月 30 日

編集・発行 国立大学法人 奈良教育大学
奈良市高畑町

印刷 株式会社 明新社
奈良市南京終町 3 丁目 464 番地